
冥姫

大雪

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冥姫

【Nコード】

N5459T

【作者名】

大雪

【あらすじ】

重要！！

第三十九話を修正致しました。内容が一部変わっております。変更点は活動報告、または第三十九話の前書きにて記載しておりますので、どうぞご覧下さいませ。

神無 香奈は冥界の支配者——冥界大帝の数多く居る孫達の一人。冥界大帝の末息子と人間の母の大恋愛？の末に産まれたが、ただの人間として両親と共に現代の日本に住む中学生。

半神だけど、冥界の姫だけど、父親が冥界の公子だけど、そんな事は一切知らない。

知らないまま、人として生きる彼女は、その後も人として平凡に生きるはず——だったにも関わらず、ある事件に巻き込まれ、それが香奈の人生を変えていく事となる。

（作者本人による自サイトからの転載）

（自サイトに置いてある『冥姫』の改訂版）

気晴らしに、書いてるので更新は不定期です。

冥姫 用語集（ネタバレ注意）

●場所名

地名・建築物

東京郊外：（香奈達が住んでいる）

大きな川を挟んで一般住宅街と高級住宅街に分れており、後者には長者番付に載るほどの金持ちや名家が意外に多く住む。

駅からすぐ近くに高級店が立ち並ぶショッピング街があり、学区内には三校の中学が存在する。

駅：

山中中学の通学バスの出発・終着地点である。

香奈が家族で利用する花屋が駅舎近くにある。

フラワーガーデン・May：

駅前にある花屋。香奈の家族がよく利用している。

店長はやくざ風だが他の店員も皆美少年、美青年で女性客が多い。

ショッピング街：

駅からすぐ近くにあり、高級店が立ち並ぶ数年前に出来たばかりの場所。

高級住宅街が近い事と、超名門校の学生達が多く訪れる事もあり客足も多い。

図書館：

駅から歩いて三十分ほどの所にある森林公園の中に建っている。

香奈の家からも近いが、勉強する為に利用する事はあまりないらしい……。

学校名

山中中学：（香奈、美鈴、梓、理佳、椿の通う学校）

東京郊外の学区内にある三つの中学の一つ。

本当に山中と言う名だが、実際には山の上に存在する。

通学は専用の通学バスが必要なほど遠い。全校生徒は五十名ほど。

マンモス校：

東京郊外の学区内にある三つの中学の一つ。

学区内にある小学校の卒業生の殆どが通う学校な為規模が大きい。理佳を虐めた生徒達の殆どがこの学校に入学している。

超名門校：（柚緋、理人、夕霧、桜子の通う学校）

東京郊外の学区内にある三つの中学の一つ。

都内でも有数の難関校で幼稚園→大学院まであるエスカレーター式。

この学校に通う事が一種のステータスとされ、通うだけでエリート扱いされる。

学区外からの入学者も居る。

特殊

冥界：

全ての世界の死者達が向かう場所。

人間達からは「死」を司る場所として認識されているが、実際には次の転生までの魂の休息所で、死者と呼ばれる存在を裁く事はあ

つても、死そのものに関わるわけではない。
連理の父——冥界大帝により統治されている。

●機関名

『ISPM』：

正式名称は『国際超常現象機構』International
supernatural phenomenon mechan-
ism』。

国際社会公認の独立組織だが、表向きには知られていない古くか
ら存在する歴史ある能力者を統括する組織。

『ASP』の解決を目的とし、世界の能力者達の殆どが加入し、
別世界の者達とも協定関係を結んでいる。

加入は強制的ではないが、能力者の保護、仕事の斡旋、物資の提
供、教育、情報交換なども請け負っている為、加入傾向が強い。ま
た、脱退する事も可能。

神有家：

香奈の母の実家。日本でも有数の大財閥。

『ISPM』の重鎮にも多くの人材を輩出しているらしく、逆ら
ったら日本どころか組織にも居られなくなるらしい……。

●用語

能力：

サイキック能力、霊力、その他物理的になしえない事象を発揮する超常の力を総称して「能力」とよぶ。

能力者：

「能力者」とは、「能力」を操る力を持つ者を指す。「能力者」には先天的タイプと後天的タイプがいるとされている。

ASP：

超常現象の中でも、人ならざる者達が悪意の元に介入した結果、常人の手には終えなくなった特殊超常現象事件を指す。

人ならざる者達：

一言で人外の者達を指す。神や精霊、妖精、魔族などの伝説上の存在。

人間に協力する者達と、害を為す者達、また関わりを持とうとしない傍観者達の三タイプに分れる。

死の女神：

死を司る女神だが、その能力故に転生する度に迫害、虐殺されているらしい。

現在は行方知れず。

第一章 主要登場人物紹介（前書き）

キャラが増えてきたので、作ってみました。

第一章 主要登場人物紹介

第一章 主要登場人物

●主人公

名前：神無^{かみなし} 香奈^{かな} ♀

年齢：12歳（中学一年生）

容姿：ポニーテールの黒髪と一重の黒瞳。平凡な日本人顔。

その他：オカルトや超常現象に興味がないが、実は神の父と人間の母の間に産まれた半神という自身が超常現象の一種。しかし本人は全く知らないので問題ない。

●準主人公（ヒロイン側） ♀

名前：榎木^{えのき あずさ} 梓 ♀

年齢：12歳

容姿：緩やかなウェーブの黒髪とつり目の黒瞳。気の強さが全面に出ている。

その他：香奈の友人。気が強く我儘だが、情には厚い。お金持ちの娘。

名前：野宮^{のみや りか} 理佳 ♀

年齢：12歳

容姿：背中中央まである三つ編みの黒髪と垂れ目がちの黒瞳。整った大人しめの風貌。

その他：香奈の友人。学校一の秀才で、両親は有名な科学者。いつもオドオドとしている。

名前：大島 美鈴 おおしま みすず ♀

年齢：12歳

容姿：左右二本に縛ったふわふわの背中までの黒髪に、くりっとした二重の黒目。

その他：香奈の友人。梓とは良く言い合いをするが、別に嫌っていないわけではない。

名前：鷺崎 椿 わしざき つばき ♀

年齢：12歳

容姿：ショートカットの黒髪に黒瞳。母に似て、年齢に似合わぬ儂げな色香を漂わす。

その他：香奈の友人。偶然殺害現場を目撃し、次のターゲットになれる？

●準主人公（ヒーロー側） ♂

名前：神有 柚緋 かみあり ゆずひ ♂

年齢：12歳

容姿：腰まである黒髪と黒瞳。嫺やかで清廉な巫女又は和風美少女的外見。

その他：神有本家の次期当主の息子。香奈の従兄弟。

名前：篠宮 理人 しのみや りひと ♂

年齢：12歳

容姿：ミディアムヘアの黒髪と黒瞳。清楚可憐で儂げな白牡丹の様な美少女的外見。

その他：篠宮財閥の総帥子息。梓とは幼馴染み。桜子と婚約した。

名前：四杜^{しもり ゆづきり} 夕霧 男

年齢：12歳

容姿：肩より少し長めの栗毛色とつり目の黒瞳。性別を超越した美少女的外見。

その他：名家の子息。理佳が初恋だが、天敵認定されている。美鈴と幼馴染み。

● 準々主人公（またの名を脇役）

香奈の両親（父：連理 母：清奈）

年齢：共に30歳

その他：父親は冥界の統治者——冥界大帝の末息子。母親は神有本家の長女という過去を持つ。しかし夫婦となった現在では、共に家から離れて一般人として生活し娘を育てている。

花屋の店長

その他：神無家が良く使う花屋の店長。美形っぽいが、いつも黒のサングラスをかけていて香奈からヤクザっぽいと思われる。

章子 しやうこ
♀

年齢：高校生

能力：雷（電位操作）

その他：『IPSM』の能力者。『殲滅の雷姫』という二つ名を持つ。香奈達に比較的協力的。

重樹 しげき
♂

年齢：高校生

能力：不明

その他：『IPSM』の能力者。友人を失っている。

●第一章キーキャラ

名前：秋月 響子 あきづき きやうこ

享年：中学一年生

容姿：少し面長の輪郭。左右に三つ編みにした黒髪と一重の黒い瞳。

その他：三十年前に起きた事件の最後の被害者。

第一話 事件（前書き）

自サイトに置いてある『冥姫』の改訂版です。
気晴らしに、書いてるので更新は不定期です。

第一話 事件

死とは一体何なのか？

生命活動が停止する事？

肉体が減びる事？

それとも――

忘れられる事？

ワスレナイデ

ワタシヲ

ただ、それだけだった。

だが、そこに一つの悪意が介入する事で、それは大きく変貌する事となる。

20××年――東京某所。

夜も灯火が絶えない不夜城にも確かに存在する闇の中を、幾つもの影が駆け抜ける。

「おいっ！ 見付かったか？！」

「まだだっ」

短くも鬼気迫る会話が緊急事態を示す。

最初こそ、久しぶりの『ASP』だと、共に仕事を受けた者同士で沸き立っていたが、すぐにそれは焦りに、そして恐怖へと変わる。何時のまにか、狩る方が狩られる方へと変わりゆく恐怖に、影達は完全に冷静さを失っていた。

定期連絡を取っていたインカムの通信にすら気付かない。

「――っ！！ 後ろだ！！」

仲間の言葉に、背後を振り返った男の目が極限まで見開かれる。
「レベル6?! だが依頼書には――」
そこで、声は途切れた。

ザー――、ザザザー――。

地面に転がるインカムから必死の呼びかけが響く。

『おい、おい応答しろ――!』

呼びかけに応じない相手に、声は苛立ちから焦りに変わる。

だが、応えるものは終に現れず、ほどなくインカムだった金属片が地面に散らばった。

『緊急ニュースをお伝えします。今日未明、東京都某所で身元不明の遺体が複数発見されました。現在地元当局が調査中ですが、遺体の状態から先月から続く連続無差別殺人事件と同一犯と思われる……』
蝉の音が響く暑い朝の事だった。

八畳程の洋間リビングのテレビから流れるニュースは、からりと晴れた空とは正反対に重苦しく、神無家団欒の食卓に影を落とす。

「また犠牲者が出たのね」

「みたいだな」

若い夫婦の呟きに、朝食の載った座卓を挟んで黒髪のパニーテールを揺らしながら顔を上げたのは、今年中学一年になる二人の娘――
――香奈。

食べていたのがジャムトーストだった為か、丸顔の平均的な日本人顔の頬や鼻に、べったりと苺ジャムがついている。

思わず笑い出す両親に、香奈は頬を膨らませつつ台所からタオルを取りに行く。

戻ってくれば、両親は再びテレビに視線を戻しており、香奈は面白くない気持ちでテレビに目を向けた。

現在巷を騒がせている連続無差別殺人事件で、新たな犠牲者が出たらしい。

事件の共通点は発生時刻と殺害方法。

深夜二時～四時に発生し、遺体は全て四肢がバラバラ。

しかし犠牲者に共通する点はなく、連続無差別事件として騒がれていた。

学校でも、教師から夜歩きしないように再三注意された。

昨今では夜遅くまで出歩く子供達も増え、それにより犯罪に巻き込まれる機会も多くなっているのは確かだから、当然の事と言える。
「香奈も気をつけなさいね」

「ふわ～い」

ただ、自分には関係ないが。

夜十時には床に就く香奈にとっては完全に人事。

現時点では、家で寝ているところを襲われたという話は聞かない。生返事に眉を顰める母を気にせず、二枚目のトーストを口に押し込む。

その耳に、事件について都民へ注意を促すキャスターの声が聞こえてきた。

既に興味を無くしていたが、真剣にニュースを眺める両親の手前、勝手にチャンネルを変える事は出来ない。

どうせ、いつもの様に専門家が出て来て、事件の原因追及や犯人像について好き勝手に話し合うお決まりのパターンな事は分かっているのに。

香奈は冷めた目で、ニュースを見つめた。

最初の頃は確かに恐ろしく思ったが、加熱していく報道特集、連日組まれる特番が毎日のように続けば、感覚も次第に麻痺していく。事件発生現場自体が、香奈の住む郊外から距離がある事も一因だろう。

それに香奈はまだ中学生。

事件の重大性を完全に理解するにはまだ幼く、しかもテレビを通

して見ているせいか、どこか絵空事の様な感覚しか持てなかった。
だから、こうして両親が熱心に事件のニュースを見るのが理解出来ない。

とはいえ、もしもだ。

もし、この世界の裏にあるものを香奈が知っていたならば。

もし、人ならざる者達によって起こされる事件がある事を香奈が知っていたならば。

もし——自分がそちら側に属する特殊な産まれだと知っていたならば。

全ては仮定に過ぎないが、幼くともこの事件がもたらす危機に気づく事は出来ただろう。

そう——彼女の両親のように。

トーストの残りを口の中に押し込み、牛乳を流し込む。

「香奈、またそんな食べ方して」

母の小言も右から左。

ゴクリと音を立てて口の中のものを飲込むと、香奈は椅子から立ち上がった。

「時間だから、学校行ってくるね」

食堂を後にする娘に、母が慌てる。

「も、もう行くの？」

「今日は朝一でテストがあるから」

「テストって、昨日は何も勉強——って、待って香奈！」

「なに？」

「今週の土曜日だけど、お祖父様の所に行くから空けておきなさい」

お祖父様——それが意味する相手は、母方の祖父しかない。

父は天涯孤独だから身内なんて存在しない。

だが、香奈にとっては母の実家に行くのは苦痛でしかなかった。

あの家は香奈にとっては敷居が高すぎるのだ。

それに、集まる従姉妹達の事を考えると、更に気が滅入る。

けれど、月に一回行われる親族会議は、末端の分家に至まで絶対

出席が義務づけられている。

拒否出来るのは、身内に不幸があつた時か、自身が大病を患つた時のみという鉄の掟。

十六歳以下は会議不参加だが、別室で待つていなければならない。昔からの名家だかなんだか知らないが、出来るならばあまり関わりたくなかつた。

半ば投げやりに分かつたと返し、香奈はいそいそと玄関へ向かつた。

「全く、あの子は……」

最近反抗期なのか、ちつとも自分の言う事を聞きはしない。

「しかも、事件の事も軽く考えているし……」

連続無差別殺人事件ともなれば、普通なら怯えたり恐ろしく思つたりするものだ。

なのに、娘は何処か別の世界で起きている様な感覚しか持つていない。

だが、それが今を生きる者達の間感覚なのかもしれない。

どんなに凶悪な事件が起きても、時間と共に忘れ去られていくのが世の常だ。

事件は、毎日のように起きていく。

特に、事件の当事者でもなければ、忘れるのはあつという間だ。

「まあまあ——大丈夫だよ、香奈は」

顔にかけた直線と曲線を組み合わせたラインの眼鏡を光らせ呟く夫に、妻がギロリと睨み付ける。

互いに三十を数え、夫もようやく落ち着いてきたと思つたのに、昔と同じ軽い口調。

確かに外見は多く見積もつても互いに二十代前半で、年齢相応で良いという評価もあるが、妻からすれば溜息しか出なかつた。

若々しいどころか、十代の若者だ、これでは。

「何を根拠に」

苛立つ口調に、夫は二重の瞳に悪戯っぽい光を宿して苦笑する。

娘にそっくりな妻の顔。

いや、娘が妻にそっくりなのか。

違つとすれば、娘の方が気が強そうな印象を受けるといふくらいだ。

夫はもう何度も見てきた妻の顔をまじまじと見る。

ショートカットの黒髪と黒い瞳。

細眉と一重瞼、薄唇で丸顔の平坦な日本人顔は、意識しなければすぐに埋没する程特徴がない。

けれど、自分にとっては妻の何もかもが愛しい。

そつと、癖の無い妻の髪に触れる。

「根拠ならあるよ。俺が居るからさ」

「……」

「ね？」

夫の言葉に、妻はしばし隣にあるその顔を見つめる。

銀フレームの眼鏡の下に隠された造形を知る者は、限られた者だけ。

気付けば、手を伸ばして夫の顔を触っていた。

華奢でシャープな輪郭を辿り、整った鼻筋、形良い艶やかな紅唇を指でなぞる。

誰が信じるだろう。

この眼鏡の下にあるのが、美の神すら敵わない秀麗過ぎる美貌が隠されているなど。

夫は己の女性的な美貌を嫌っているが、美貌を隠す眼鏡を外せば即座に多くの者達が群がる筈だ。

ミディアムレアの黒髪が揺れ、ふわりと麝香の香りが漂う。

夫の甘い体臭を間近に感じ、妻はハツと我に返った。

「……そうね」

確かに、この夫が居れば、大抵の事は何とかなるだろう。

妻は初めて夫と出会った時から今までの事を思い返して頷く。

但し、何とかなる分、とんでもない事態に巻き込まれた事も多々

あつたが。

「にしても……今回の犠牲者って」

「ああ。たぶん……な」

眼鏡下の涼やかな切れ長の目が、すつと細まる。

「……暫くは騒がしくなるわね」

「そうだな——ここも、向こうも」

最初は何気ない普通の『仕事』だったのだろう。

結婚して、その世界からは遠のいたが、あの機関から人員が派遣されていた事は聞いている。

しかし、その人員が今度の犠牲者となった。

となれば、彼らは黙ってはいない。

各国上層部に多大な影響力を持つが、どの国にも属さない国際秘密独立機関。

『国際超常現象機構』International supernatural phenomenon mechanism——
通称『ISPM』。

決して表舞台に立たず、知る者はごく僅かの、遙か昔から続く歴史ある組織。

二度の世界大戦中には、絶対的な中立を守り続けたほどの力を持つ国際社会公認の独立組織。

だが、各国政府公認とはいえ科学文明が発達した現在では、祈祷が治療の一環として認められていた時代に比べてその存在を知る者達はごく一部だ。

この機関が扱うのは、その名の通り超常現象。

それも、特殊能力者関係のもの、偶然では説明がつかないものと同種類を問わずに、人ならざる者達が悪意の下に介入する、常人の手には終えない特殊超常現象事件——『ASP』である。

サイキック現象、心霊現象、不可思議な未解決事件等々なものが

あるが、それらを影から解決するのが最大の目的とする。

そして――超常現象が故意に、しかも自分達側の存在の介入によって起こされる事を良しとしない、人外の者達とも協定関係を結び協力し合う特殊機関。

各国の能力者と呼ばれる者達の大半も所属する機構としても有名な――『ISPM』が動く。

「やれやれ、だな」

その機構に少なからず縁のある夫の横顔に、いつもの笑みはなかった。

第二話 山の学校（前書き）

話はのんびり進みます

第二話 山の学校

香奈が通う山の上にある公立中学は、東京都郊外の中では最も生徒数の少ない学校だった。

生徒数は三学年合わせて四十五名、教師も七名しか居ない。

もともとの学校は、高度経済成長による急激な人口増加により、郊外にあった城山の一つを切り開いて造成した住宅団地の子供達のために建てられた。

それは、今から五十年以上も前の事だ。

最盛期では三百名の子供達が通っていたらしい。

通学路の坂には、今でこそ通学用の小型バスがあるが、当時は路線バスさえ通らなかつた事を思えば登下校はかなりきつかつただろう。

なにせ、麓から歩いて二時間半。

バスでも、急斜面の坂とカーブの多さから、その半分はかかる。

因みに、自転車通いは自殺行為なので、入学して間もなく誰も居なくなるという。

それでも、道がきちんと整備されただけでもマシだろう。

住宅団地は老朽化と住む者達の減少から二十年以上も前に取り壊されたが、学校はその後生徒達を育む事となる。

檜をふんだんに使って五十年前に建てられた二階建ての木造校舎は、当時のまま。

遊具が殆ど無い校庭には、学校が建設される以前から聳える神依木——ナギの大樹が葉を付け、ここに通う生徒達を長年見守り続けてきた。

教室に入ると、何時もの様に先に来ていた同級生二、三人が、木の匂いと共に出迎えてくれる。

「香奈、おはよう」

「おはよう」

香奈のクラスは、男子五名、女子五名の合計十名。

全校生徒の四分の一しか居ない。

小学校の時はもう少し多かったが、殆どが麓にある中学に通ってしまった。

香奈の家が含まれる学区内に中学は三つ。

一つは麓の中学で、それこそ一学年十クラスのマンモス学校。

一つは、この山の中の中学だ。

だから、学区内の小学校の生徒達はこの二つから通う中学を選ぶのだが、大抵は麓の大きな中学に行ってしまう。

因みにもう一つは、最初から選択肢にはいれない。

なぜなら、その中学は幼稚部から大学院までのエスカレーター式の名門校。

途中入学出来るのは、ごく一部の限られた秀才達だけという超難関だからだ。

しかも、良家の子女が多く通っているせいか、学区外の学生達にとっても憧れの対象となっていた。

そこに通っている事が、一種のブランドであり、ステータスなのだ。

だが、自分の通う『山中中学』も中々のものだと言は思っている。

元々自然豊かな場所が好きだった香奈は、周囲の予想を覆し、自分の意思でこの学校に通う事を決めた。

なんというか——一目惚れしたのだ、この学校に。

だから、毎日の登下校も香奈には苦にならなかった。

因みに此処に通っている生徒達は、みんな香奈と同じようにこの学校に一目惚れして入ってきた者達が多い。

そんな事もあって、生徒数が少なくても何とか学校は運営されていた。

だが、それに加えて、ここの卒業生達がこの学校を残す事を強く望み、各方面に働きかけているのが大きな要因となっていると聞く。

壁や天井も木製なら、机と椅子も同様。

まるで歴史から取り残された様な、昭和の面影があちこちに色濃く残る。

香奈は今年の春から使い始めた自分の机に鞆を置くと、手招きする友人達へと駆け寄った。

「今日も暑いね」

すると隣に居た、背中中央まであるゆるやかなウェーブの髪をした友人――榎木 梓がうんうんと頷く。

「うん。でも、もう少して夏休みだから、我慢我慢」

今年の夏は少し早く訪れたと言われている。

まだ七月なのに、うだるような暑さに熱中症や日射病で病院に運ばれる者達も多いという。

去年は冷夏だった分、暑さに倒れる者達は余計に多く、電気店ではエアコンどころか扇風機まで姿を消していた。

香奈の家には十年以上前に買った古い扇風機が一つあるが、涼風どころか熱風をかき回している状態という火に油を注いでいる始末。今年こそはエアコンが欲しいと父に願ったが、今年のボーナスは別の壊れた家電の修理代金となる為、期待は出来ない。

「エアコン、欲しい」

教室には、天井に備え付けられた扇風機が風を送っているが、暑い。

家の扇風機に比べれば涼しいが、暑くて香奈はとろけそうになった。

ダラダラと流れ落ちる汗が、木の床に染み込んでいく。

いつそのこと、打ち水でもしてやろうか。

「何でも、都心は三十六度だって」

そこに、梓がいららない情報を提供する。

緩やかなウェーブの髪を揺らし、つり目を和らげて笑う姿がより憎らしい。

なんてことを。

温度を聞いたら余計に実感してしまうではないか。

「ってか、七月初めでその温度って……」

八月になったらどうなってしまうのか。

しかも、この前クリーニングに出した下ろし立ての夏制服には、汗の大きな染みが出来ている。

紺色のセーラー服に膝丈のプリーツスカート。

胸元には大きなリボンが飾られ、香奈は麓の中学のブレザーの制服よりも可愛いと思っている。

まあ——超名門校のエスカレーター式学校には敵わないが。

あそこは学校専属のブランドがあるし、お抱えの会社だってある。ちくしょう……お金持ちは敵だ。

しかし今の敵はこの暑さだ。

香奈はふらふらと近くの椅子に腰を下ろすと、ペタリと机に頭を付けた。

が、当然暑くなった木の板は香奈に安らぎをもたらすどころか、暑さに飛び退かせた。

「今ジュウって言った!!」

頬をつけた瞬間、ジュウと肉の焼ける様な音が聞こえた。

しかも、机から白い湯気が立っているようにも見えるのは目の錯覚だろうか。

「あははは！　香奈ってば、何当たり前の事してるのよ」
爆笑する梓。

もう一人の友人もクスクスと笑っている。

「暑いよ」

暑い。

暑くてたまらない。

きつとこのまま腐敗出来る。

やっぱり、季節は春と秋が最高なのだ。

冬は寒くて炬燵から動きたくないし、夏など論外だ。

「で、今朝のニュースだけど」

梓の言葉に、香奈は椅子から落ちかけた。

よりにもよってその話か。

しかも、自分が来る前まで、連続無差別殺人事件の事でかなり盛り上がっていた事が、梓達の様子から分かってしまった。

それに、教室の引き戸を開ける前に「わゝ」とか「きゃゝ」とか声が聞こえていた気がする。

第三話 友人

東京某所で騒がれている、連続無差別殺人事件。

最初の事件は、先月の六月初めの火曜日に発生した。

最初の被害者は夜遊び中だった男子高校生五名で、人気の少ない高架下で発見された。

四肢をバラバラにするという残虐な殺し方から、報道は過熱し、新聞もテレビも『現代の切り裂きジャック』と大々的に書き立て、多くの者達の恐怖を煽った。

しかし、本当に恐ろしいのはそこからだった。

最初の事件から一週間後の火曜日の朝、ＯＬ一名が、やはり人気の無い場所で遺体となって発見された。

これが第二の事件である。

何でも、前日に飲み会にあつたらしく、殆どの者達が数人で帰宅する中、被害者だけは一人で帰ると言って何時のまにか姿を消していたらしい。

すぐに捜査が行われた結果、捜査陣は先週の火曜日に行われた殺人事件とのある共通点を見いだした。

被害者や殺害場所に共通点はなんらなかったが、殺害方法、殺害の日時——最初と同じ火曜日、それも同じ時間帯に殺害されている事から、これは先週起きた殺人事件と関連しているとの予測が立てられた。

だが、最初の事件は午前三時で二回目は午前二時で一時間の差がある。

また、模倣犯の可能性もあるとして、断定までは行かなかった。それから間もなく、連続無差別殺人事件である事をはっきりと決定づける第三の事件が、次の火曜日に発生した。

今度は家族連れ。

たまたま県外から遊びに来た親子連れが、車中泊していた人気の

無い駐車場で、火曜日の午前二時〜午前四時の間に殺された。

やはり、同じ殺害方法だった。

ここでようやく殺害に使われた凶器が同じでは——という鑑定結果も出る事となる。

だが、その凶器が何かまでは分からなかった。

一瞬にして肉と骨を断ちきれぬ凶器など、果たしてこの世に存在するのかという疑問が出たからだ。

しかも、当然相手は逃げようとするのに縛った後もしなければ、睡眠薬の類も発見されない。

なのに、傷は四肢を切断したそれだけ。

捜査はすぐに行き詰まってしまった。

目撃者も証拠も何もなかったのだ。

その上、殺害場所に共通点が一切無いことから、何処を張り込んでいいのかさえ分からないという有様だった。

ただ、火曜日の午前二時〜午前四時の間に殺害が行われているとして、その時間には出歩かない事、また警察達がパトロールをする事になったが、後者は何とかなっても前者を完全に封じることが出来ない。

事件を恐れて外出を控える者達も居るが、逆におもしろがって外出する者達も居た。

その結果、先週には第四の事件が起き、今日の火曜日の朝には、第五の事件が報道される始末。

報道は『火曜日の切り裂きジャック』とか『火曜日の悪魔』とか騒ぎ色々と犯人像を好き勝手に予測するが、有益な情報は何一つ掴めていないのが現状だった。

「でさ、実は私気付いたんだけど」

それまで熱心に事件の概要を語っていた梓の言葉に、香奈は首を

傾げる。

「何が？」

すると、梓が楽しげな光を宿したつり目で香奈を見つめ、ニヤリと悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「この事件、実は犯行現場が少しずつ郊外に近づいて来てるって話よ」

一瞬、香奈は固まった。

「……は？」

「だ〜から！！ 現場が少しずつ、都心から離れて郊外に近付いてるの！！」

最初の事件は都心で起きたけれど、少しずつ距離が此方に近付いて来ると梓が騒ぐ。

「まあ、近付いているっていつでも、本当に少しずつだけど」

「けど、そ、それって、このままだと私達の住む場所もあ、あ危ないって事？」

気弱だが、クラス一の秀才と言われる眼鏡をかけた友人——野宮

理佳の言葉に、梓が笑う。

「その通りよ！！ 流石は我が校一の秀才！！」

「そ、そそ、そんな事ないよ」

「理佳、過ぎたる謙虚は寧ろ嫌味よ」

理佳の決死の突っ込みに、梓がビシリと突っ込み返す。

一応この中学は、学区内にある三校中では一番下だが、それでも東京都全ての中学の中では一般的な学力レベルである。

他の学校からは、たった十人で正確な学力を測るも何もないだろうという侮蔑を受ける事も多いが、所詮は負け犬の遠吠えだと梓は断言する。

まあ、平凡な香奈には特に関係ないが。

四月に受けた三校合同学区テストの順位は、460人中300位だった。

因みに、理佳の順位は460人中25位だから、その凄さが分か

るというものだ。

「けど、恐いよね」

「そう？」

「香奈、反応薄い」

梓がぶーぶー文句を言う中、香奈ははつきりと言った。

「確かに恐いけど、犯行時刻が決まってるなら、その時刻は出歩かなければいいじゃない」

「そ、それは……」

「それに、普通の中学生ならまず出歩かない時刻だよ」

「けど、お父さんとかお母さんとか出歩くよ。飲み会とかあるし」

「でも、ここまで被害者が出てるなら、飲み会とかも自粛するか、別の日程にするんじゃない？」

火曜日の午前二時～四時の間に起きているというなら、それ以外の日にすれば良い。

「もう！！ 香奈ってばノリが悪いんだから」

梓の言葉に、香奈は溜息をつく。

「ノリとか言う問題じゃ無い」

面白可笑しく話し、むやみに恐怖心を煽り立てようとする梓に、香奈は不快感を覚える。

いくら子供だとはいえ、人が沢山死んでいる事件に対してこの様な事をして言い訳では無い。

「何よ！！ 別に嘘は言ってないじゃない！！ 犯行場所だって、本当に近付いてるもの！！」

「それは別にいいよ。だから、気をつける。それでいいじゃない」

「それじゃ面白くないわよ」

「面白い面白くないの話じゃないじゃない」

「何よ！！ 自分だけイイ子ぶって！！ 香奈のイイ子ちゃんって本当ムカツク」

梓の酷い言い草に、香奈は力チンと来る。

「イイ子とか関係ないと思うけど」

「煩いよ！！　そういう所が腹が立つのよ！！　何よっ、いつもいつも私は特別みたいな空気出してっ！！」

「いつ私が特別って言ったのよ」

「言ってるわよ！！　何さっ！　あんたの何処が特別なのよ！！」

「この学校に通ってるくせに！！」

「この学校が好きだからね」

「好き？！　こんな学校が？！」

その言葉に、香奈は梓の顔を見る。

そういえば、この梓だけは違ったっけ。

他の友人達がこの学校に一目惚れして入学した中、この梓だけははつきりと言ったのだ。

『こんなところ、来なくなかった！！』

確かに、本来行きたかった学校に入れなかった梓にとって、ここに入学する事は本意だっただろう。

彼女を心配した祖母が、自分や息子が入ったこの学校に入れたが、それは梓の心を余計に傷付ける事にしかなかった。

「あ、梓ちゃん」

理佳が、激しく罵倒し続ける梓を止めようとするが、一度壊れた堰は中々戻らない。

「香奈なんて大嫌い！！」

「梓……」

肩を怒らせて自分の席に戻る梓に、香奈は溜息をつく。

一度こうなると梓は絶対に他人の言う事を聞かない。

それが梓の短所である。

普段はクラスを中心となるリーダー格。

性格は気の強さが全面的に出ているが、明るくハキハキとし、どんな相手であってもきちんと意見する所に頼もしさを感じている同級生達が多い。

しかし反対に、その気の強さが災いして自分の意見に口出しされるとすぐに癇癪を起こして手が付けられなくなる。

元々、お金持の娘で、言い方は悪いが、梓は我が儘に育てられていた。

仕事で忙しい両親は殆ど家に居らず、祖父母にベタベタに甘やかされた梓は、良く言えば明るく元気で積極的。

悪く言えば、気の強い我が儘娘。

去年まで通っていた小学校でも、その性格から色々と問題を起こしていた。

特に、現在は別の中学に通っている、小学校時代に学校一の才媛として多くの男達の憧れだった桜子には、何かにつけて一方的にライバル視し、喧嘩をふっかけていた。

そもそも、梓と桜子は学校の二大美少女と言われていたが、実際には桜子の方が断然可愛かった。

しかも、桜子の方が梓よりもお金持で、頭も良く運動神経も抜群。一方、梓は成績はそこそこで、運動神経もごく平均。

ただ、金持ちの娘で、それなりに可愛いという事実だけが光る――そんな少女だった。

その一方でプライドはエベレスト級で、それが桜子への異常な嫉妬心を生み出した。

だが、桜子の方は全く相手にせず、それが余計に梓の気に障り、結果として二人の仲――というか、梓の桜子へのライバル心は卒業まで続き、卒業後は更に酷くなった。

桜子が、梓の落ちた学区内の三つの中学の一つ――エスカレーター式の超名門校に中学受験で合格したからである。

おかげで、梓からは毎日のように桜子への罵倒を聞かされ、香奈はうんざりしていた。

香奈としては、別に梓を嫌いでは無い。

流行チェックに余念がなく、話し上手で色々と楽しい話題を教えてくれたり、クラスの中心となって動く姿は好感が持てる。

梓も梓なのだ。

何でも桜子桜子と敵視するが、梓にだって良いところはある。

だから、いい加減諦めて自分の良いところを伸ばしていけば、十分可愛い女の子になれるだろう。

しかし、余りにも桜子が凄すぎて、そう思う余裕すらなくなっているらしい。

そうして、自分の良い所まで消していく梓に、香奈はもったいないと思う。

梓だって、沢山良いところがあるのに。

だが、今は自分が何を言っても無駄だろう。

心配して梓の下に向かった理佳にまで怒鳴り散らす梓に、香奈は額に手を当てた。

と、チャイムが鳴った。

五十年毎日の様に時を知らせてきた鐘の音は、ずんっと体に染み渡る。

木の床を歩く足音が聞こえ、生徒達が慌てて席に着いていく。

何時のまにか、香奈が来た時には居なかった友人達も来ていたらしい。

がらりと教室の引き戸が開けられ、担任が入ってきた。

出席簿を教卓の上に置き、黒板を背にして自分達を見回す。

「はい、皆さんおはようー!!」

今年教員試験に合格し、教師になったばかりの新人教師。

元気だけが取り柄というオーラを全面に出した23歳の綺麗系女性。

カジュアルなベージュのパンツスーツに身を包み、背中まである

髪をアップにして清潔感もばっちりの担任は、そこでようやく梓の

様子に気付く。

「梓さん？ どうしたの？」

「何でもありません」

とげとげしい声と態度に、担任の方が気圧される。

何時もは穏やかな眼差しの瞳が戸惑い気味に瞬き、口紅で染まる唇が震えるのが見えた。

素颜でも十分綺麗な顔に、みるみる内にオドオドとした色が浮かぶ。

「そ、そう？」

「そうです！ それより、さっさと始めて下さい」

「は、はい」

自分の半分の年齢の少女の言葉に、担任は慌てて出席簿を開く。

出席が取られて行く中、教室に入ってきた当初の元気さはすっかり担任からそげ落ちていた。

これではどちらが教師か分かりやしないと、香奈は再度溜息をついた。

第四話 給食

「神無 香奈さん」

「はい」

自分の名前が呼ばれ、教室の一番後ろの席から返事をする。

「次ぎ、野宮 理佳さん」

「は、はははいっ」

相変わらずの理佳の返事に、あちこちで苦笑する声が聞こえる。
気が酷く弱い理佳。

幼稚園時代はそうでもなかったが、一度大勢の前で大失敗をしてから、性格は一変したらしい。

とにかくオドオドとして、小学校ではいつも苛められていた。

そればかりか、天敵と呼ぶ相手も居た。

だからこそ、理佳はこの学校に来たといってもいい。

理佳の学力からすれば、あの超名門エスカレーター式学校にも余裕で入学出来るレベルだったが、そこに理佳の天敵が入学した結果、理佳はその学校に行くのを止めた。

香奈が卒業した小学校からその学校に入れたのは、桜子と理佳の天敵、そしてやはり同級生だった少年の三人だけだった。

その他のいじめっ子達に関しては、マンモス校の中学に入学した事から、理佳にとっては余計に行きたくなくなっただろう。

その点でいえば、理佳もこの学校への入学は、一目惚れ以外の理由を持っていると言える。

しかし梓とは違い、理佳はこの学校に毎日元気に通っており、その点からすれば寧ろここで良かったのでは——と周囲の者達は考えて居る。

と、三列前の席に座っていた理佳が香奈を見る。

何処か申し訳なさそうな顔に、香奈は気にしていないと手を横に振る。

すると、ホツとした様に理佳の顔が和らいだ。

梓と理佳は、幼稚園の頃からの幼馴染みで、いつも理佳は梓に振り回されていた。

しかし、理佳は梓を慕っている。

なぜなら、梓は理佳が苛められているとすぐに助けに来ていたからだ。

気が強く、我が儘。

でも、自分の友人が苛められていたら、相手と戦ってでも助けようとする正義感を持っている子なのだ。

そんな事、普通は中々出来ない。

下手に助けたら、自分が苛められると躊躇する。

それは理佳だって分かっている。

だからこそ、理佳は梓を慕い、どれだけ癪癢を起こしても離れて行かないのだ。

だから、香奈は思う。

梓には良いところが沢山ある。

香奈も苛められていた理佳を助けた事は何度かあるが、梓は例え相手が大人数でもかみついていた。

そんな梓の事を、好きな子が居たことも、香奈は知っている。

でも、梓は気付かない。

桜子への嫉妬に苛まれて、他の全てが見えにくくなっている。

『梓よりも桜子の方が優しくて綺麗だよ。梓なんていつも怒ってばかりで嫌いだ』

ふと、あの元同級生の言葉が蘇る。

桜子と理佳の天敵の他に、あの超名門校に行った最後の一人――。

梓の幼馴染みだった少年。

「理佳、何してるの？」

「え？」

梓の不機嫌な声が聞こえてくる。

「や、な、何でも無い」

「そう？ 何かするなら堂々とやりなさいよ」

「あ、梓ちゃん……」

ふいつと顔を逸らす梓に理佳の哀しげな声が聞こえてくる。自分も頑固だと香奈は思うが、梓も負けてはいないだろう。そこに担任の声が聞こえてくる。

「鷺崎 椿さん？ 椿さんは居ないの？」

担任の言葉に、生徒達が一斉に椿の席を見るが、そこに椿の姿はなかった。

「遅刻かしら？」

「連絡来てないの？ 先生」

男子生徒の言葉に、担任が出席簿から顔を上げる。

「ええ。何にも」

しかし遅刻となれば厄介だ。

通学バスは本数が決まっており、この時間には走っていない。

だから遅刻となれば、山道を二時間半かけて歩いてくるか、家族の車で送って貰うしかない。

だが、安全面から前者は極力避けられており、遅刻した場合は家族に送って貰うように生徒達は日々言い聞かせられている。

だから、自家用車のない香奈の場合は、遅刻すれば死活問題となる。

「風邪で休みとか」

「そうかな」

男子生徒の言葉に、担任が不安げに首を傾げる。

だが、二時限目開始直後に、担任自ら椿が風邪で休みだと教えられ、生徒達は一様にホッとした。

担任が不安そうにするから、何かあったのかと心配してしまったではないか。

それから数時間後。

午前中最後の授業がチャイムの鐘と共に終わる。

一斉に生徒達が騒ぎ出す。

何といつても、この後は昼ご飯。

しかも、今日は午前授業だから、お昼ご飯を食べた後はそのまま帰る事が出来る。

教師も含めて全員で机をくつつけて、給食の準備をする。

「今日は何かな？」

給食当番の一人である大島 美鈴が、メニュー表に駆け寄る。

が、その前に立つ香奈に気付き啞然とした。

「香奈、はやっ！」

「今日のメニューはコッペパンとポークシチュー、野菜サラダにヨーグルトと牛乳……」

最後に、ズジュルルと零れ落ちそうになった唾を嚙り飲み、香奈はメニュー表をガン見する。

「か、香奈」

「ん？ ああ、美鈴みすずか」

自分を含めて五名の女子が居るこのクラス。

自分、梓、理佳、椿、そして美鈴だ。

左右二本に縛ったふわふわの背中までの黒髪に、くりつとした二重の黒目。

このクラスでは男女合わせて二番目に身長が小さい美鈴だが、それがよりその愛らしい容姿を可憐なものにしている。

因みに、一番女子で身長が高いのは梓と椿で、理佳と香奈はそれよりも少し低い。

「香奈は相変わらず食いしん坊だね」

「食べるのは人間の三大欲望の一つ」

「……中学生らしからぬ知識だね、相変わらず」
呆れる美鈴を無視し、香奈は教室から飛び出す。

「あー！！ 香奈、何処行くのっ」

「ポークシチュー」

「凄い食欲……」

美鈴の言葉に、他の生徒達が頷いた。

その後、給食当番でもない香奈の頑張りもあって、いつもより早く準備された昼食が始まった。

「先生、コッペパンが一つ余ったんですけど」

「あと牛乳も」

給食当番の言葉に、担任が口を開く。

「確か、椿さんのね。どうしよう？ コッペパンと牛乳だけでも届け」

「食べましょう」

「香奈！！」

美鈴と理佳が慌てて止めにかかる。

「衛生基準法により、食中毒の恐れがあるので、今すぐ食べましょう」

流石は食欲魔神だ。

今も、食事が始まって十分しか経ってないのに、もう八割を食い尽くしている。

特に香奈はパン好きで、大きなコッペパンの八割がなくなっていた。

「椿に持って行ってあげようよ」

「でも、具合が悪いなら食べられないし」

「それでも！！」

香奈の目が光る。

既に、コッペパンに向けてロックオン済み。

担任が守るようにコッペパンを胸に抱く。

「先生……」

「み、美鈴さんの言うとおり、持って行ってあげて欲しいな〜って」
既に教師の威厳は何処かに飛んでいったらしく、香奈の食欲が発する気迫に怯えている。

「香奈、諦めなよ」

「む〜」

仕方ない。

家に帰ったら、母が隠しているパンを食べるか。

と、斜め向かいに座る梓と目が合った。

「ふんっ！ そのうち、ブクブクに肥え太るんじゃないの？」

嫌味ったらしく馬鹿にする梓の様子に、まだ今朝の事が尾を引いているのが分かった。

だが、その程度の嫌味など香奈には通じない。

小学校時代には、いつも給食の残りをかけて戦ってきたのだから。例え、醜く肥った豚と言われたって構わない。

成長期の大切な食料は自分で確保する——その思いを胸に、香奈は残った給食をガツガツと食べた。

そんな香奈を見て、周囲は改めて不思議に思う。

香奈の食欲の凄まじさを小学生の時から見てきたが、香奈の体型は標準よりもやや痩せている。

あれだけ食べているのに、一体何処にその栄養が貯蓄されているのか。

もしかしたら、お腹に寄生虫でも飼っているのではないか。

「じゃあ、椿さんに届けて下さいね」

担任が一番無難と思われる美鈴にパンと牛乳を手渡す。

「はい。香奈、盗み食いしないでね」

「その言い方だと、私も同行決定らしいね」

「当たり前じゃん」

何故か椿の家に行く事が決まっていた。

「ちよつと、その子も行くの？」

「梓」

梓が腹立たしげに香奈に指を突きつけて美鈴に迫る。

「行くも何も、香奈の家から椿の家は近いもの」

その次ぐらいが、美鈴の家だ。

だから、別に担任は無難さだけで選んだのではない。

「梓達も行くの？」

「当たり前じゃ無い。私達が行かなくてどうするのよ」

「私達？」

「私と理佳よ」

「え、わわわ私も？」

「椿の分のノート取ってあるんでしょう？」

「う、うん」

流石は理佳。

香奈は最後のシチューを口の中に流し込みながら、心の中で褒め称える。

「け、けど、大勢で行くのは」

「なら、香奈が行かなきゃいいじゃない」

「ちよつと！ 梓、その言い方はないよ！」

美鈴が怒りを露わにすれば、梓の顔が激しく歪む。

あゝあ、悪鬼だよ、それ。

香奈は牛乳パックを折りたたみながら、梓の表情に溜息をついた。

「とにかく！ 香奈は行かなくていいのよ！！」

「どうしてそれを梓が決めるのよ！！」

「ふ、二人とも、おおお落ち着いて」

理佳が二人を止めながら、担任を見るも既に凍り付いていて使えず、ならば男子と視線で助けを求めるが、皆一様に視線を机の上に向けて完全無視を決め込んでいた。

「梓はどうしていつもそうなのよ！！」

「煩いわね！！ 美鈴のくせに生意気よ！！」

「うう……か、かか香奈ちゃん」

「あゝ」

助けを求められ、香奈は梓達に視線を向ける。

「で、私はどうしたらいいの」

「一緒に行くのよ！！」

「香奈は来なくていいっ」

「だそうです」

すると、理佳が涙を浮かべて縋り付いてくる。

「そ、そそ、そんな事言わないで」

「仕方ないな……なら、勝負で決めよう」

火花を散らしていた梓と美鈴が「え？」とこつちを向く。

「勝負？」

「何のよ」

「じゃんけん一本勝負。はい、じゃんけんはい!!」

「え？」

「あ？」

香奈の勢いに飲まれるようにして、二人がじゃんけんさせられる。
そして――。

美鈴がパーで、梓がグー。

「はい、美鈴の勝ち。一緒について行くね」

「ちよっ！ こんな勝負無効よ!!」

梓が騒ぎだし、それに美鈴が力チンとくる。

「何よ！ 負けたのに煩い女ね」

「あんた、何よその言い草！」

と、その時だった。

「うっさい!! いい加減にしてよ!!」

流石に香奈も怒りのメーターが吹っ切れた。

その怒声に、梓と美鈴が「ひっ」と悲鳴をあげ、他の生徒達も怯えて縮こまる。

「女子四人で行く!! これで決定!! それ以上グダグダ言うなら私も怒るわよ!!」

香奈の怒りに、梓と美鈴がぶんぶんと首を縦に振る。

その様は、遙か昔に居た名奉行も驚きの光景だったと、後に担任は語った。

第五話 花屋

放課後、学校正面玄関前に通学バスが待っていた。

一度に二十五人が乗れるバスは、教員含めても二往復もすれば全員を運ぶ事が出来る重宝品。

運転手は校長先生。

何時ものスーツを脱ぎ捨て作業服に身を包んだ姿は、もう少しで六十に届くというのに、お腹の出ていない長身痩躯の体型をより魅力的に見せる。

頭の方は白髪混じりだが、以外と筋肉質な体である事を生徒達は知っていた。

よく、朝礼でその隠れマツチヨを披露してくれるし。

優しい眼差しを浮かべ、校長が生徒達一人一人を確認していく。「はい、みんな乗ったかい？」

校長の言葉に乗り込んだ生徒達が元氣よく返事する。

今回は午前授業の一年生だけが乗っているのでも、運転手を除けば十人だけだった。

「じゃあ出発〜」

のんびりとした声と共にバスのエンジンがかけられ、大きな車体がゆっくりと学校の敷地の外に向けて進みだす。

すぐその正門を出ると、整備されたアスファルトの道に入る。

ここから麓までは、途中砂利道が幾つかあるが、基本的にはアスファルトの道が続く。

だが、決して走りやすくはなく、急勾配の坂とカーブが幾重も続くことになる。

運転手からすればヒヤヒヤものだが、乗車しているだけの気楽な生徒達からすれば、両側を深い木々が生い茂る山道をバスの窓から眺めるのが楽しみでもあった。

「それでは、一時間あまりのドライブをお楽しみ下さい」

氣を利かした校長のアナウンスに、生徒達の歓声が上がる。

バスのスピードが上がり、時速三十キロほどのスピードで走り出す。

「やっぱり天気が良いと、眺めも良いよね」

「だね」

隣の座席に座った美鈴の言葉に、香奈も頷いた。

実際、眺めはとても良かった。

太陽の光に照らされた木々の緑は美しく、まだ幼い子供達の心にもしっかりと刻み込まれる。

暇潰しのテレビも設置されていたが、それは終点の麓の駅まで点けられる事はなかった。

麓にある駅に辿り着き、生徒達は一斉にバスから降りていく。

バスをリターンさせ発車させる校長に手を振り、その姿が見えなくなった後、生徒達はそれぞれ解散した。

この後の遊びの予定を立てる者もいれば、用事があると帰る者達も居た。

帰る者達の中には、歩きで帰る者や、バスターミナルに向かう者、ここまで列車で来ている者は駅の中へと入っていった。

そんな中、香奈、梓、理佳、美鈴の四人が駅前に残る。

「じゃあ、椿の所に行こうか」

美鈴の言葉に、香奈が頷いた。

駅から椿の家までは歩いても十五分だから、すぐに着くだろう。

「渡すものは、パンと牛乳と理佳がとってくれた授業のノートだけ」

「他にお見舞持ってく？」

「当たり前じゃ無い。それが見舞いの礼儀ってものよ」

以外に礼儀関係に厳しい梓だった。

「そうか……なら、花とかどう？そこに花屋さんあるし」

駅舎に隣接する花屋を香奈が指さす。

自分の両親が良く利用している店で、その店長とは家族揃って

顔馴染みだった。

「そうね。それがいいわ」

「椿の好きな花ってなんだっけ」

「そりゃあゝ、椿？」

梓の言葉に、香奈達が固まる。

確かに椿の名前はあの「花の椿」だが、それは本人が好きというより、両親が好きな花の名前をつけただけだろう。

「いや、椿って綺麗だけど、なんだかねゝ」

「何よ！ 私の選択に文句つけるの？！」

「だって、椿って花が落ちる時はボトンって落ちるじゃない。まるで首が落ちるような感じで、うちのおばあちゃんが恐いって言うてたし」

美鈴の話に、香奈は椿の花を思い浮かべる。

椿の花は花弁が一枚ずつ散るのではなく、丸ごと落ちる。

それはもう見事なまでに、ボトンと落ちる。

それが美鈴の祖母の言うように、首が落ちる様子を連想させるのだ。

確か母も言ってたっけ。

椿は首落ちを連想させるから、入院中の人のお見舞いに持って行く事はタブーだと。

「梓」

「何よ」

どうやら、まだ朝の事を引き摺っているらしい。

刺々しい梓の反応に溜息をつきつつ、香奈は椿について自分の意見を告げた。

「美鈴の言うとおり、椿って花ごと落ちて、それが首が落ちるのを連想させるから入院中の人には持っていったら駄目って聞いた事あるけど」

「……」

「お見舞どころか、トドメ刺しかねないよ？」

「……つ、椿の場合は自宅療養で入院じゃないわ……」

一気にそう言い切るが、やはり梓もそれは不味いと思っているのだろう。

単純に、退けないだけだ。

しかし、退けないからといって、実際に椿の花を持っていかれたら困る。

「……お店の人に聞こうよ」

香奈の提案に、一同は頷いた。

二階建ての大きな駅舎隣にある花屋は、今風のお洒落なお店だった。

開放的なオープンスペースに、白い石づくりの外観。

青い屋根から垂れ下がる青い幕には、白い文字で『フラワーガーデン・May』と書かれている。

お店前には、沢山の季節の花や鉢植え、ブーケが置かれており、道行く人達の足を止めている。

店内にも沢山の人で賑わっているのが遠目からでも一目で分かった。

話では、全国へ花の配送、インターネットでの受付など各方面での商売も行っており、実は左団扇なのだと父から聞いた事がある。何しろ、ここは本店だが、他に支店が二十軒ほどあるらしいし。というか、何処からそんな儲かっているなんていう情報を得たのだろう、あの父は。

「とにかく、早く入ろうよ」

美鈴に促され、香奈は花屋へと歩き出す。

梓と理佳は既に中に入っており、店員と話している姿が見えた。

「あ、いらっしや——って、香奈ちゃんじゃないかい」

「店長さん、こんにちわ」

黒いTシャツとジーパンの上に花屋のロゴが入った赤いエプロンを身につけた、三十代前半ぐらいの男性が香奈を見てにかっと笑った。

「つてか、相変わらず花屋さんらしくないですね」

「な、何を――!!」

肩より少し長めの茶髪を首筋で一本に縛っているのはまだいい。

花屋店長にしては、良い体をし過ぎているのも別にいい。

Tシャツとジーパンが長身の鍛えられた体の線を露わにし、その肉体美を盗み見ては顔を赤らめる女性客が多いのを香奈は知っている。

まるで獣の様にしなやかな体は、動く度に日に焼けた筋肉が波打ちフェロモンを垂れ流していると母が言っていた。

だが、これも気にしない。

だってそのフェロモンにひっかかる人が多ければ、より店の売り上げに繋がるだろうから。

しかし、その顔にかけた黒い大きなサングラスと無精髭はどうだろう。

本人はカッコイイと断言するが、香奈からすれば何処のヤンキー、いや、ヤクザだと言いたい。

つまり、恐いのだ――花屋の店長としては。

客商売は清潔感、いや人当たりが一番大事だ。

話して見るとあっけに取られるほど今風の若者で、しかも気さくで明るい、見た目でまず無理だ。

しかし一般の女性客達からすれば、寧ろそれはワイルドで野性的に見えるらしく、店長目当てで来る客達はかなり多かった。

しかもこの花屋。

店長の後輩とかで、やはり顔の良い美青年、美少年系の店員が他にも数人居る。

おかげで、客の八割は女性客で、残り二割は美しい男が大好きな男達だやはり母が言っていた。

後者はよく分からないが、前者はまあ当然だろう。

「で、今日は何の用なんだ？」

「友達のお見舞用の花が欲しいの。で、あそこに居る子達が先に相

談してと思うけど」

美形店員の一人を捕まえ、自分の要望を述べていく梓。

他の女性客の場合は、目を合わせただけで腰砕けになっていたのに、流石だな梓。

「ああ、あそこの肝っ玉の強い子か」

「確かに強いね」

「香奈、それ梓に聞かれたら余計に怒らせるよ」

美鈴がこそつと忠告するが、店長はしっかりと聞き取っていた。

「ん？ 喧嘩でもしたのか？」

「うん。ちよつとね」

「なんだ？ 恋バナか？」

ニヤニヤと笑う店長に、大人の威厳を見出そうとするが無理だった。

「別に……そんなんじゃないよ」

「ふゝん？」

「本当だつて。ほら、先月から起きてる連続無差別殺人事件の事でちよつとね」

「え？」

その時、店長の口調が固さを増したが、香奈は気付かなかった。

「梓の言い方があまりにも気に障ったから、ちよつと強く言ったら怒らせちゃつて」

「香奈の事だから、理論整然と言いつたんでしょ」

「別に理論整然じゃないよ、美鈴」

しかし美鈴は納得しなかった。

「気付いてないのは香奈だけだよ」

「何が」

「だゝかゝら！！ 香奈の言い方は淡々とし過ぎてるつて事！！

そういうのつて、好ましい時もあるけど、場合によっては馬鹿にされてるつて思う事もあるんだから」

「はゝ」

あんまり分かっていない香奈に、美鈴がくりつとした目をつり上げて頬を膨らませる。

怒りのオーラが全身が沸き立てているのに、可愛い顔は相変わらず。

小学校一の美少女と謳われ、超名門校では三大美女の一人として数えられる桜子には負けるが——いや、あれは最早人間じゃない。人外級の美少女だ。

それに比べれば、美鈴の方が人間らしい可愛らしさでホツとする。もし自分が男の子なら、美鈴と付き合いたい。

「……ごめん、なんか不穏な事考えてない？」

「いや、何にも」

以外に勘の鋭い美鈴の指摘をごまかし、香奈は鼻歌を歌う。

「香奈……まさか、桜子」

「知らない、私は知らない」

そう、知らない。

何にも私は知らないのだ。

なのに——。

「あ、桜子ちゃんなら、今日もう少ししたら来る予定だけど」
店長の爆弾発言に、香奈は凍り付いた。

第六話 椿

桜子が来る。

桜子が来る。

桜子が来る。

香奈は決めた。

「よし、逃げよう」

逃げるのか！！

美鈴と店長が同時に心の中で叫ぶが、それに気付かず香奈は梓達
に駆け寄る。

「じゃあ、これで」

「決まったの？」

「は？ って、香奈」

梓がギツと睨み付けるのも忘れるほど、香奈の無表情が恐かった。
その表情の前には、怒りさえ吹っ飛んでしまう。

「か、香奈？」

「あの、花束が出来ましたが」

ホスト風イケメン店員が出来た花束を抱えてやってきた。
と、その時だ。

じゃり……じゃり……。

アスファルトを踏み締める音が、香奈の耳に聞こえる。

「あ、じゃあ代金——きやつー！」

梓が代金をホスト風イケメン店員に渡した途端、香奈が梓と理佳
の手を掴む。

そしてそのまま裏口に向かって走る。

「香奈——！」

美鈴が慌てて茫然とするホスト店員の手から花束とお釣りを受け
取ると、三人を追い掛けた。

そうして消えた四人の少女に、店長だけでなく店員達も啞然とし

た。

「ど、どうしたんだ？」

「さ、さあ？」

一様に首を傾げる中、彼らはその音を聞く。
じやりつと、一際強く地面を踏みつける音。

聞こえてくるのは、天の歌姫にも優る玉響の響き。

「こんにちわ——」

入り口から響くその音を聞いた瞬間、店長だけは気付いた。
そして、店員達や客達が魅入られ言葉を無くす中、短く呟く。
「すげえっ」

自分でさえ気付かなかった気配に、香奈は気付いたのだ。

「流石は、あの方のご息女——いや、姫君だ」

それは小さな小さな呟き。

だが、しっかりと聞き取ったその存在は、ゆらりと水が流れる様な動きでそつと店長の後ろに忍び寄る。

「そつ……居たの……ここに」

「っ?!」

まるで、柳の木の下に出る女性の幽霊の様なオドロドロシイ声に、店長の動きが止まったのを彼らは確かに見た。

と同時に、幾ら恐ろしく美しいとはいえ、たった十二歳の少女に怯える店長の姿も、彼らは見てしまった。

一方、すんでの所で逃げた香奈は、梓と理佳の手を掴んだまま引き摺るようにして椿の家までの道を爆走していた。

「ちよっ!! 香奈! 止まりなさいってば!!」

「かかかか香奈ちゃんっ!!」

「ってか、香奈ああ!! 花束忘れてるってばああ!!」

三者三様の口調だが、とりあえず目的は香奈を止める事。

梓は罵り、理佳は怯え、美鈴はひたすら制止の声を上げ続けた。

だが、終に止める事が出来ないまま、気付けば椿の家——赤い屋根をした二階建ての一軒家の前に立っていた。

と、そこでようやく梓と理佳の手を離し、香奈は膝を突いた。

「はあ……はあ……し、死ぬかと思った」

「何がよー!!」

梓の言葉に、香奈ははつとした。

そうだ。

もしあの時捕まっていたら、自分だけの被害では済まなかっただろう。

徹底的に桜子をライバル視している梓の事だ。

不意打ちにばったり出会えば、どんな騒ぎになっていたか分からない。

それこそ、梓が大暴れするという事態にもなり得た筈だ。

流石、自分。

この時だけは、香奈は自分を褒め称えた。

「はあはあ……香奈、突然走り出さないでよ」

「あと一秒でも遅かったら鉢合わせしてた」

美鈴に告げる香奈の顔は無表情。

しかし、その裏に怯えの色があるのを確かに美鈴は見た。

どれだけ恐いんだ。

とはいえ、今までの桜子の香奈への態度を見ていれば、納得も出来る。

小学校時代から同級生だった美鈴は、香奈と桜子の関係を間近で見してきた。

そして大抵香奈が厄介事に巻き込まれる時は、桜子が原因だったりする。

彼女は自分の存在が引き起こす事態を理解していないとさえ美鈴は思ったほどだった。

そうして、香奈の六年間は波乱に満ちていた。

いや、幼稚園の時も入ればも、八年間か。

それでも何とか中学に行き、桜子と離れたが——実際完全に縁を切れたわけではない事を美鈴は知っている。

「香奈……」

今もキヨロキヨロと辺りを見回す香奈の姿は、どうみても不審者を警戒する域だ。

よほど心の傷になっているんだろう。

「とりあえず、椿の家に入ろうよ」

梓と理佳も香奈の姿が気になるのか、チラチラと見ている。

というか、以外と人通りが多い場所に立つ椿の家。

何せ、通りを一つ挟めばそこは沢山の店が建ち並ぶ大通り。

ひそひそとこの光景を目撃した道行く人達に噂される前に、さつさと香奈を家の中に入れてしまおう。

とりあえず、今日ここに来る事は、担任の方から連絡がいつてるので、今頃は待ち兼ねているだろう。

香奈を梓と理佳に任せると、美鈴はチャイムを鳴らした。

ほどなく、「はい」と声が聞こえ、扉が開き女性が顔を出した。

「あらまあ……いらつしやい、みんな」

椿によく似た妙齡の女性が現れ、香奈達を家へと招き入れた。

玄関の扉が閉まると、代表として梓が挨拶する。

「突然お邪魔してすいません」

「いいえ、それよりどうもありがとう」

今年で三十二になる椿の母は、到底十二歳の子供を持つとは思えないほど若々しい。

着物の先生という職業柄か、いつも着物を身に纏い、白い肌に生える癖の無い艶やかな長い黒髪を上品に纏めてシンプルなシニョンを作り、真珠の髪飾りで留めている。

今日の着物は水色の上品なものだった。

華奢な垂れ目の瞳に加えて、ふつくらとした唇と口元の黒子がいかに色っぽい。

正に、日本が誇る和風美人そのものである。

今も歩く音をさせず、楚々と進む姿に、少女達が溜息をつく。

それは、年頃の少女が持つ、嫋やかで美しい大人の女性に抱く憧

れのようなものだった。

だからこそ、香奈達は椿の母が独り身なのが不思議でたまらない。そう――椿には父は居ない。

いや、居たらしいが、椿は父を憶えていない。

何でも、さる名家の家柄だったらしいが、椿がまだ赤ん坊の頃に椿の母が娘を連れて家を飛び出たという。

その後、父親とは没交渉。

椿は父を知らずに育った。

「はい、ここですよ」

椿の母がふわりと微笑み、娘の部屋まで案内する。

「椿、椿」

コンコンとドアを叩き、娘の名を呼ぶ。

しかし、反応がない。

「あ、あの……」

重たい空気に居たたまれなくなった美鈴が声をかける。

「ごめんなさい。起きているとは思っただけど……椿、お友達が来て下さったわよ」

しかし反応はない。

「あの、後は私達が」

梓の申し出に、椿の母がそんなんと声を上げるが、何処かその瞳には安堵の色が浮かんでいた。

「でも……」

「いいんです」

「……」

迷う様に視線を彷徨わせるが、ついに決心したのか椿の母が不安そうな顔を浮かべた。

「あの、娘の事を頼みますね」

「はい」

その後、椿の母に持ってきた給食のパンと牛乳を託すと、残りのノートを手渡すために香奈達は扉の前で椿を呼び続けた。

それから、どれだけ時間が経った頃か。

ようやく、中でコトンと音が聞こえたかと思うと、ガチャツと鍵が開く音が聞こえた。

ギギギと扉が開き、扉の間からそれが見えた。

「きやああああ?！」

薄暗い部屋にぼくと白く光る、もの。

幽霊と、理佳が叫び梓にしがみつく。

美鈴が、後ろの壁にバンッと体をぶつけた。

まだ日も高いというのに、幽霊が現れるなんて!!

「――椿、何してるの」

そこに、香奈ののんびりとした声が響く。

恐怖に戦き、一種の恐慌状態に陥っていた三人が、ハッと我に返った。

「え?」

「つ、つつつ、椿ちゃん?」

「椿なの?」

更に、扉がギギギと開き、のそつと白いものが出てくる。

そのシートから覗く、見覚えのある鼻から下の顔。

「……来て、くれたんだ……」

ぼそりと呟く姿が、また見事に幽霊っぽかった。

第七話 怯え

椿の部屋には、小学生の頃から香奈達は来ていた。もともと、この五人は小学校の時から同じクラス。

二クラスしかない学校だったから、同じクラスになるかどうかは二分の一の確率で、見事にその確率に当たったというわけだ。

部屋に招き入れられた香奈達は、床に敷かれたカーペットを踏み締め、緊張した面持ちで中に入る。

六畳一間の洋間の部屋。

白い壁に囲まれた部屋には、入ってすぐの左側に木のフレームで囲われた大きな姿見がある。

入り口向かいの壁には、現在カーテンで締め切られているが大きな窓があり、右側には椿が小学校入学時から使用している学習机があった。

左側には、壁に密着するようにして、パイプベッドがある。

部屋の中央には、小さな机があり、クッションが転がっていた。

カーテンが閉まっているせいだろうか。

重苦しい雰囲気が漂っている。

まるで、粘着質の高い液体の中を漂うような——重たい圧迫感が漂う。

換気していないせいなのか？

それとも、電気がついてないせいなのか？

香奈は、無意識に入り口横の電気スイッチに手を伸ばす。

「駄目……！」

「っ」

それに気付いた椿の鋭い制止に、香奈の指に反射的に力が入る。パチンとスイッチが入る音が響き、天井の照明に明かりが灯る。その途端、響く絶叫が部屋を揺るがす。

「いやあああああ……！」

「椿?!」

「消して!! 消して消して消してえええ!!」

被るシーツをかき抱き、布団の中に飛び込み絶叫する椿。

その声が聞こえたのか、椿の母が飛び込んで来た。

「椿!!」

「いやああああ!!」

「椿、どうしたの?!」

何時もの嫋やかで楚々とした佇まいは消え、椿の母は暴れる娘に
縋り付く。

娘の手が母の髪を乱し、拳が頬を掠めても母親は娘から離れない。

「椿、何があつたの?」

「っ! で、電気っ」

美鈴が香奈を押しつけ、電気のスイッチを切り替える。

再び暗闇に支配された部屋に、ようやく悲鳴が収まった。

だが、椿がガタガタと震えるのが布団の上からでも分かり、香奈
達は言葉を失う。

「椿、椿」

「うあ……あああ……」

「椿……」

椿の母が布団の上から娘を抱き締める。

「あ、……ごめんなさい、私が電気を点けたから」

香奈が謝ると、椿の母がうつんと首を横に振る。

「いえ、私も言わなかったから……。今日はずっとこの調子なのよ」

「え?」

「昨日、私の職場のお得意先の懇親会があつて……椿も連れて行つたの。実は泊まりで……本当なら、今日は休ませるつもりだったのよ」

椿の母は着物の先生。

その世界では知る人達にとっては有名で、あちこちで出張授業を
請われるほどだ。

人付き合いも多く、こうして何処かのパーティーやら懇親会に参加する事も多かった。

だが、大抵は椿が居るため、参加してもその日のうちに帰ってくるが、夜遅くまで行われたり、遠くで行われるものに参加する場合は椿も一緒につれていく。

断れば良いのだが、そう毎回は無理なのだろう。

その点でいえば、梓の両親や有名な科学者である理佳の両親も同様である。

反対に、美鈴と香奈の両親には関係ないが。

美鈴の両親は郊外で農業を営む農家。

香奈の父は地方公務員でも下っ端で、母は専業主婦。

新年会や忘年会、職場での飲み会が関の山である。

まあ――仮に泊まりがけがあつたところで、香奈達の場合は父か母かどちらかが必ず子供の側に居るだろう。

しかし椿の家は、母一人子一人の母子家庭だ。

幼い頃から母が子供一人を置いて泊まりがけに行く事は出来ず、かといって気軽に預ける家もない。

香奈達の家泊る事も何度かあつたが、椿の母からすれば毎回ともなればどうしたって遠慮の気持ちが出てくる。

それに、椿の母は非常に愛情深い人で、できる限り娘と一緒に居てやりたいという人だ。

だからこそ、どうしても無理な場合は、椿の母は娘を連れて一緒にパーティーの類に参加しているのだ。

ただ、椿の母は所謂日本古来の和風美人。

媚やかな美しさと漂う妖艶な色香に惚れ込み、何とか近付きたい、結婚したいという者達は跡を絶たない。

そんな男達だから、娘である椿に対する態度は二つに分かれた。娘の存在を邪魔だと思ふ男達と、母親をものにする為に娘に取入ろうとする男達。

椿からすれば、母についてパーティーに参加する度に、そういう

男達の視線に晒される事となり、元は活発だった性格は、今ではすっかり大人しく人目を気にする性格になってしまった。

母もそれに気付いているのだろっが、このご時世だ。

母子家庭の生活は厳しく、椿の家も母が必死に働き何とか維持している。

公務員とは違い、ある意味自営業でもある為、周囲の機嫌を損ねる事は廃業に繋がりがねない。

「けど、椿は風邪だつて」

香奈の言葉に、椿の母が頷く。

「実は、風邪は本当なの。昨日の夜遅くに椿が体調を崩してしまつて……。本当は都心近辺のホテルに宿泊する筈だったのだけど、家の方が落ち着くつて戻つて来たのよ。確か……深夜二時頃だったかしら……ホテルを出たのは」

「深夜二時？」

その時刻に、反応したのは香奈だけではなかった。

しかも今日は火曜日。

つまり、火曜日の深夜二時頃に椿と椿の母は此処に戻ってきたのだろっ。

「ただ、中々タクシーが来なくて……で、ようやく来た時には、今度は椿の姿がなくて……。ああ、でもすぐに戻つて来たのよ。ただ、それからなの。こんな風にガタガタ震えていたのは」

「な、何かあつたんでしょっか？」

「分からないの。ただ、タクシーを待っている間に、近くのコンビニに一人で薬を買いに行ったのよ。私が着いていけば良かったんだけど……そういう所、この子にはあるから」

人に頼らず、自分の事は自分でする。

それが椿の長所でもあり、短所でもある。

「コンビニはどのくらい離れていたんですか？」

「えつと……ホテルから五十メートルもなかったと思っわ。それに、ホテルと同じ大通りに面していたから、街灯の灯りもあつたし。た

だ……時間帯が時間帯だから、人通りはあまり無かったと思うわ」
「姿が見えなかったのはどのくらいです？」

香奈の質問に、椿の母が答える。

「そうね……気付いてから戻ってくるまで十分ぐらいだったけど……でも、体調が悪かったし、風邪薬を選んで買っただけでも時間がかったと思うから、長くても三十分ぐらいは私の傍から離れていたと思うのだけど」

「椿、それでいい？」

香奈が聞けば、布団が微かに揺れた。

「三十分……その間に、何かあったって事ね」

「不良に絡まれたとか」

美鈴の予想に、理佳がヒツと叫ぶ。

どうやら、自分が苛められていた時の事を思い出させたらしい。

「後は、酔っ払いとかね」

梓の予想に、美鈴が頷いた。

「怪我とかはしてなかったんですよね？」

「ええ」

香奈の質問に、椿の母が頷いた。

「でも……よっぽど悪い思いをしたみたいで……ああ、私のせいね。私が椿から目を離れたから」

「椿、何か怖い目にあっただけなら、話してよ」

梓が椿のベッド横に腰を下ろすと、その布団を軽く叩く。

「話したら、恐くなくなると思うわ」

それは夢の話だ。

話せば、夢は夢のままで終わる。

しかし、もう一つの説もある。

怖い夢を見た時、誰かに話したらそれが真実になると。

どちらが正しいのかは分からない。

だが、今の場合はこのままでは何も進まない気がする。

梓に追従するというよりは、椿を心配し、理佳と美鈴も声をかけ

る。

すると……どれだけ時間が経った頃か。

布団の中から声が聞こえてきた。

「お母さんは……」

「え？」

「お母さんは……出てって」

「椿……」

娘の拒絶に、哀しげに声を震わせる椿の母。

「椿……」

美鈴が嗜める様に名を呼べば、布団が大きく震える。

「ごめんなさい……でも、今は……」

「椿、私は」

「じゃあ、私達には話してくれるの？」

「香奈？！」

驚く美鈴達を余所に、香奈は話を続ける。

「お母さんは——って言ったよね？　じゃあ、私達には話してくれるの？」

「……」

「なら、お母さんには出て行ってもらおう」

「香奈！！　何を勝手な」

「今は、椿に話を聞く方が大事だから。でも、だからって椿のお母さんに何も言わないままにはしないよ。私達に話す事で、椿も少し落ち着くかもしれない。そうしたら、話そう」

「や、確かにそれは一利あるけど……」

しかし、幾ら友達といっても所詮は他人の自分達が勝手に事を進めていいものなのか。

だが、真っ先にそれに応じたのは椿の母だった。

「分かりました」

「椿のお母さん？！」

梓が声を上げて見れば、優しい笑みが浮かんでいた。

「香奈さん達に頼みます」

「でも……」

「私では無理でした。ですから、どうかお願いします」

娘のことが心配で、仕事も休み側についていた。

しかし自分ではどうする事も出来なかった。

こんな時、どれほど夫が居ればとも思ったが、それは不可能だった。

そこに来てくれた娘の友人達。

彼女達は、いつも椿を心配してくれた。

だから、娘が山の上の中学に行きたいと言った時、彼女達が行くならと受け入れたのだ。

「宜しく願いますね」

普通なら、親を差し置いてと憤る者もいるだろう。

しかし、椿の母は娘をその友人達に任せることにした。

「では、何かありましたらその時はすぐに呼んで下さい」

一度下に居り、お盆に人数分のお茶とお菓子を持ってきた椿の母はそう告げると、部屋の外に出た。

静かに扉が閉まるのを確認し、足音が階段に向かい降りていく音が聞こえた頃。

布団の中に居た椿が、やはりシーツを被ったまま頭を出した。

その様子がまるで亀の様だと思ったが、口にすれば梓に睨まれるので香奈は我慢した。

そして、ポツポツと語られる話に、香奈達は驚く事となる。

第八話 昨夜の事（前書き）

警告）最後に、残酷な表現がありますので、ご注意ください。

第八話 昨夜の事

「私……殺されるかもしれない」

シーツを身に纏い、震えたままベッドの上で話す椿に、床に座って聞いていた香奈達は衝撃を受けた。

殺される？！

まさか、そんな言葉が出てくとは思わなかった。

「け、け警察！」

「理佳、落ち着きなさい」

梓が慌てる理佳を落ち着かせる。

美鈴は驚きすぎて声が出ず、代わりに香奈が質問した。

「殺されるって、誰に？」

「ああ……あ……殺される、絶対に殺される！」

再びガタガタと体を震わせ怯えが強くなった椿に、香奈は小さく舌打ちする。

このままではまた何も聞けなくなる。

「椿、落ち着いて。殺されるなら、殺されないようにしなきゃ。大丈夫だよ。もし昨日何か見て、それで殺される様な事があるとすれば、きちんと警察にいけば何とかなるよ。だから、そこできちんと事情を話せるように」

「無理よ……！」

椿の怒声に香奈は宥めようとして伸ばした手を止めた。

「椿？」

「無理よ……！ 絶対、絶対に殺される……！ 私、殺される……いや、死にたくない、死にたくない……！」

「殺されるって、何があつたの？」

普通にしていれば殺される様な事態はまず起きないだろう。

何か、とんでもないものを見たのか。

椿がおかしくなったのは、コンビニから戻って来た時だと椿の母

が言っていた。

だから、そこで何かしたか、見たかしたに違いない。
だが、椿が自分からわざわざ何かするわけではない。

となれば、十中八九巻き込まれたパターンだろう。

もしかして、恐い不良がコンビニか、そこまでの間にたむろして
いて椿にちよつかいでもかけたのだろうか。

それで逃げた椿に、殺すぞとでも脅したのか。

それとも——サスペンスドラマみたいに、麻薬の取引とか、誰か
が殺される現場でも目撃したのか。

「……馬鹿らしい」

香奈は小さく口の中で呟く。

麻薬の取引？

誰かが殺される？

そんなドラマみたいな話はテレビの中だけでの事だ。

普通に生きていれば、そんな現場に遭遇する事はまず有り得ない。
だが……火曜日の午前二時頃か……。

それは、あの連続無差別殺人事件が起こなわれる犯行時刻である。

そして、今日の午前二時〜午前四時の間にも、確か事件が起きて
被害者が出た。

都心近隣で……確か、場所は……。

あれ？ホテルからその場所って近くなかっただろうか？

香奈は今朝見たニュースを思い出す。

ニュースキャスターが煩く事件について報道する中、犯行現場が
映し出されていた。

その場所は……。

「……椿、もしかして」

まさか。

「あなた」

まさか、まさか。

「連続」

その途端、椿が「ひいひい」と喉が引きつる様な悲鳴をあげる。
「ちよつ！　椿！！」

「いやあ！！　私は何も見てない！！　何も見てないの！！」
「椿！！」

暴れる椿を抑えつけるが、もの凄い力にすぐに突き飛ばされる。
そのまま、後ろによろめいて尻餅をつき、テーブルに背中をぶつけた。

「っ……」

「椿、落ち着きなさい！！」

梓と理佳が二人がかりで押え付け、美鈴が香奈を引き起こす。

「ちよつと、大丈夫？！」

「油断したわ」

「油断したとかの話じゃないでしょ！！　当たり所が悪かったら死んだたのよ？！」

美鈴の怒りを前に、香奈は首を傾げた。

「けど、今まで何度もぶつけても大丈夫だったよ」

香奈は十二年の歴史を思い出す。

最初は赤ん坊の時だ。

お腹が空いて母の下に向かった際に、電子レンジのコードを引っぱり頭の上を通過していき母の度肝を抜かせた。

一歳の頃は二階の階段から転がり落ちて、母を泣かせた。

二歳の時は、成長ホルモンの過多でジツとしておられず、走り回って網戸ごと窓の外へと落下した。

三歳の頃は、スーパーマンごっここの途中、マント代わりにした風呂敷でジャングルジムから飛び落ちた。

四歳の時は、映画に出て来た傘を持って空を散歩する人に憧れて、母の友人が住むマンションの八階で実行しようとして、下に居た通行人達に悲鳴をあげられた。

そしてその後も色々ある。

一度は、首の骨を折って死にかけた事もあるが、これは殆ど記憶

に無い。

「でも死ななかったよ」

「香奈の人生って、ある意味奇跡だよ」

いつも死と隣り合わせに生きている。

まあ、人間誰しもが死と隣り合わせに生きているが、香奈ほど生死の境界線がもあやふやな子は居ないと美鈴は思ってた止まない。

「とにかく、人間ってちょっとした事で死ぬんだから、気をつけてね」

「おお、美鈴って哲学者」

心配したのに、何だろう？この苛立ち感。

美鈴は怒りの発散をかねて、香奈の頬を思い切りつねった。

だが、悠長にしている暇はなかった。

椿の事を思いだして二人がベッドを見れば、梓が椿を抱き締めて落ち着かせていた。

「う……つく……ひつく……」

「大丈夫、大丈夫だから」

「うう……」

「梓は凄いね」

と、自分では褒め称えたのだが、口調が意外にもものんびりしていたせいか、梓にキツと睨まれた。

「それより、さっき何を言いかけたの？」

「え？」

「香奈が言った言葉で椿がこうなったのよ。何を言おうとしたの？」

「いや、それは……って、言ってもいいの？」

最後まで言い切る前に椿が暴れ出した。

それから見ても、あの事件に関係しているのは明白だった。

だが、さっきであれほど暴れたのだ。

もう一度言えば、椿の恐慌は更に酷くなるだろう。

「聞かなきゃ分からないじゃ無い」

「まあ、ね」

「椿、貴方が話してくれるなら別だけど」

「……」

「……じゃあ、香奈から」

「話す」

「え？」

小さくポツリとした呟きが、椿の口から漏れる。

「香奈の……言っとおり……私……」

「香奈のって」

「……私、見ちゃったの……あの」

連続無差別殺人事件が行われた瞬間を――。

沈黙が、落ちた。

暫く、誰も口を開かなかった。

瞬きすら、しなかったかもしれない。

痛いほどの静寂が、部屋の中に満ちる。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……やっぱり」

香奈の言葉が、静寂を打ち破った。

「や、やっぱりって?!」

驚く美鈴に、香奈は順番に説明していく。

「あのホテルとコンビニの途中なんだ。今回の事件が起きた現場」

「今回のって……け、今朝の、れれ、れ連続無差別殺人事件の、現場?」

「そう。今朝のニュースでやってたし、その時に近くにあのコンビニとかホテルとかも映ってた」

椿の母が話してくれたホテルも、コンビニも映っていたのだ。

「ただ、実際の現場はホテルやコンビニのある大通りから一本脇道に入った裏路地だけだね。普通は、まず行かない。それこそ、何か

の騒ぎでも聞きつけないと」

「……椿……」

梓が椿を見る。

「行ったのね？」

「……うん」

そう……それが全てを変えてしまったのだ。

「ぐ、具合が悪くて……お母さんがタクシーを呼んでくれたけど……で、でも、本当に気持ち悪くて……」

それは、タクシーを呼んでから十分後の事だった。

とにかく早く家に帰りたくて、玄関を出てすぐの所でタクシーを待っていた。

母は、トイレに行くからと行ってホテル内に戻り、自分もついて行こうとした。

しかしその時、突然吐き気がこみ上げてきて、到底トイレまで持たないと、そのまま外のホテルの花壇で吐いてしまった。

「それで、コンビ二に向かったの」

吐いたものをそのままにしておけない。

だから、ゴミ袋を買おうと思った。

他にも、風邪薬を買って飲もうと思った。

「コンビ二までは走って帰って来ても十分かからないし」

それに、熱があった頭で、しかもホテルの敷地内で吐くということが椿の判断を誤らせた。

その間にタクシーが来るかもという考えも、母が誰かに言付けていくという考えも、全て吹き飛びコンビ二へと走った。

自分の行ってしまった失敗を隠したいという気持ちもあったし、どうせすぐ近くだしという安心感も大きかった。

「それで……コンビ二に行く途中で……」

ふと、何かの音を聞きつけて右を向けば、建物と建物の間に細い道があった。

その奥に、ちらりと見えた幾つかの人影。

だが、それ以前に声が聞こえたのだ。

「呻くような……声で……助けてって……」

何故あの時、その道を歩いていったのか今でも分からない。

しかし、気付けば椿はその道を誘われるようにして歩いて行った。
いや——実際に誘われていたのかも知れない。

そうして、二、三十メートルも進んだ頃だった。

背後の通りは遠く、街灯もない裏路地は酷く暗かった。

ハッと気付いた瞬間、椿は自分の居る場所を理解して慌てた。

自分みたいな子供がこんな暗い場所に居る危険性に、ようやく思い当たったのだ。

慌てて戻ろうと踵を返した時だ。

ゴトリと、何かが椿の足下に転がったのだ。

「さ、最初は何か分からなかったの」

飛び上がるほど驚いた。

と、その時だ。

曇の隙間から差し込む月の光が、それを照らしたのだ。

「ひ、人の、てて、手だったの」

千切れた、人の腕。

肘から下のそれは、赤い血に塗れていた。

玩具だと、最初は思った。

じゃなきゃ、こんなもの、ある筈が無いと。

一瞬にして切り替わった非日常を、椿の頭は徹底的に拒絶した。
いや、拒絶した事すら気付かなかった。

茫然と、その腕を見続けた。

いつ、座り込んだのかも分からない。

悲鳴すら上げられず、視線すら外せずそれを見続けた。

「こ、声が聞こえたの」

どれだけ見ていたのか分からない。

だが、突如顔にむわっと生臭い臭いを感じ、椿は無意識に顔を上げた。

それを認識するまで、しばらく時間がかかった。

「で、私に言ったの……そ、それ」

「……なんて？」

椿は、地獄の底から這い上がってくる様な声が呟いた言葉を口に
した。

「ワスレナイデ」

「え？」

「ワスレナイデって」

それは、言い続けていた。

何時のまにか月は隠れ、その姿は闇に包まれて見えなかった。
けれど、何とも形容しがたい禍々しい声で告げるのだ。

「ワスレナイデ……ワタシヲ」

「忘れないでって……」

「アナタヲコロシニイクカラ」

「っ?!」

「い、言ったの……私を、殺すって」

キョウハコレデオシマイ。

モウ、オワツタカラ。

ダカラ、マタコンド。

マツテイテ。

マツテイテ。

アナタノモトニイクノヲ。

ワスレナイデ。

ワタシヲ。

「こ、殺すって……」

その後、気付いた時には椿はコンビニに居た。

あれは夢だったのかとも思った時、その声が頭の中に響いてきた
のだ。

ワスレナイデ。

ワスレナイデ。

あれは現実起きたことなのだ。

だが、それでも必死に微かな可能性に縋り付いた椿は、朝のニュースで知る事になる。

あのコンビニ近くで、自分が居た場所で、新たな事件が起きていたことを。

「わ、私……殺される……」

自分は殺害現場を目撃してしまったのだ。

だから、口封じに殺される。

「なら、警察に事情を話して」

「無理よ……」

「え？」

「警察だってどうにもならない!!」

椿の叫びに香奈達が後退る。

「あんな、あんなの……」

「椿、何か見たの？」

梓の言葉に、椿がポツリと呟く。

「……化け物」

「え？」

思い出したのは、事件を知らせるニュースがきつかけだった。

見ていないと思い込み、忘れ去った筈のそれが。

自分にワスレナイデと告げたものが立ち去る姿が、一気に蘇った。手に握られた、血塗れの大きな肉切り包丁。

それを持つ相手が、まるで闇の中に溶け込むようにして消えた光景。

そして――。

「あ、あんな、消え方……絶対に普通じゃない」

「……け、けど、つ、つつ、椿は、ねね熱があつたんだし」

もしかして、幻覚を見たのではと理佳が告げる。

その殺人事件を見たのは確かで、犯人と鉢合わせしたのも椿の証言を信じるなら確かだろう。

しかし普通の人間が、溶ける様に消えるなんて……ある筈が無い。ただ、そう見えただけではないのか。

「違う！！ あれは本当だった！！」

しかも、その相手はただの相手じゃない。

「それに、その人の姿——全身が切り刻まれ血塗れだった……」

しかも、片目がなく、首に大きな傷口があり、包丁を持った腕とは反対の片腕がなかった。

到底、生きていられる筈のない、大怪我だった。

ああ…… どうして見てしまったのだろう。

いや、思い出してしまったのだろう。

月の光が隠れて、見えなかった筈なのに。

あれが消えるその一瞬——見えてしまった。

闇の中でぼんやりと青白く光る、ケラケラと笑う、その姿を。

「ずっと、笑いながら消えていった……」

自分と同じぐらいの……セーラー服を着た血塗れの少女が。

沈黙が部屋に落ちた。

第九話 喧嘩別れ

椿から聞いた有り得ない話。

連続無差別殺人事件の犯行現場を目撃しただけでも、信じがたいのに。

犯人は、生きている筈のない血塗れの少女。

有り得ない。

有り得ない。

有り得ない。

香奈は心の中で何度も唱えた。

片腕を失って、首に大怪我をしていて、片目もなくて。

しかも血塗れで。

生きているどころか、動けるわけもない。

それこそ、完全なホラーだ。

そう——ホラー映画なら、有り得る。

幽霊とか化け物とか、日常には有り得ないものが人を襲うのが、

定番の一つだからだ。

でも、現在にはないのだ。

そんな事は、有り得ないのだ。

椿の話では、化け物か幽霊が事件の犯人だという。

ならば、化け物や幽霊が人を殺したというのか？

いや、実際に肉切り包丁を持っていたらしい。

いかにも、今殺したばかりですと言わんばかりに血に濡れた状態で。

確かに、ニュースでは四肢を切断した手際の良さとか、殺害方法とか不思議なことが沢山あると叫ばれている。

しかし……。

化け物？

幽霊？

心霊特集などで、悪霊が呪いをかける話とか、心霊写真とかよく話題になる。

けど、香奈はそれらは全て作り物だと思っている。

そもそも、この科学技術の発展した現代日本で、幽霊？

恐い話は嫌いではないが、所詮はただのお話だ。

そんなものが、本当にいる筈が無い。

カッパの死体とか、宇宙人の死体とかも、オカルト雑誌で一つの読み物として見るのはいいけれど、実際には信じていない。

だって、いる筈が無いのだ。

心霊現象とか、超能力とか、この世とは別の世界とか。

占いぐらいは楽しみで見ているが、それだけだ。

それに、呪いだって蓋を開けてみれば簡単だ。

呪われていると本人に知らせる事で、本人が心筋梗塞を起こして自滅する。

そう——説明出来るのだ。

だから、有り得ない。

化け物も幽霊も、いる筈が無い。

椿の見間違い。

それだけなのだ。

しかし、椿はガタガタと震えていて、下手にそれを告げればまた大騒ぎするのは分かり切っていた。

だが、このままにしておけないだろう。

相手がなんであれ、椿は殺害現場を見たという。

もし、相手がただの人間であつたならば、目撃者である椿の口を塞ごうとするのは間違いない。

この前見たミステリードラマでも、犯人が目撃者の家に出向いて……というのがあつた。

となれば、一刻も早く警察に出向いて助けを求めなければ。

しかし……そこで問題がある。

椿の証言だ。

椿は、化け物を見たと言っている。

まさか、警察に犯人は化け物でしたなんて言えば、保護どころか頭のおかしい人として相手にすらされないだろう。

もしかしたら、犯人を見たが記憶の混乱で化け物を見た勘違いし、記憶の書き換えとかいうものが起きているのかもしれない。

どうすればいいのか……。

だが、そこに香奈を更に困惑させる事態が起きる。

「椿、安心してー!!」

「梓ちゃん？」

「そんな化け物に椿を殺させたりしない!!」

「梓ちゃん……」

梓が力強く宣言すれば、椿が瞳を潤ませる。

「む、無理だよ……だって、来るって……絶対に来るっていったものの」

「そうね。でも、寧ろそれはチャンスじゃない？」

「あ、ああ、梓ちゃん？」

理佳が梓に声をかける。

「どういう事よ」

美鈴も聞いた。

「だから、椿の所に来るって事は、逆にいえば今まで逃げ回っていた犯人を捕まえるチャンスにもなるんじゃない？　って事よ」

「え？」

「捕まえ……って、警察にはどう言うのよ!!　犯人は化け物って言った所で動いてくれないよ」

美鈴の言葉に、香奈も頷く。

「確かに警察は動いてくれないわね」

梓も同意する。

しかし、その物言いに美鈴はひっかかった。

「警察は——って」

「はなから警察なんて頼りにしてないわよ」

「はあ?!」

「ど、どどど、どういう事?」

「だ、から、私達でどうにかするって事よ」

梓の言葉にぶっ飛んだのは、美鈴だけではなかった。

「ちよっ!　なんで私も入ってるのよ」

「何よ!!　椿の危機を見捨てる気?!」

怒りを露わにする椿に、美鈴がムツとした。

「違うわよ!!　椿の事は心配だけど、私達じゃ無理って事よ!!
ってか、梓の思考回路が分からない!」

美鈴は強い口調で続ける。

「もし、仮に本当に椿が犯人を見ていて、犯人が来るとする。けど、それをただの中学生の私達が捕まえられる筈がないじゃない!!
頑張れば何とかなるもんじゃないのよ!!　それにもし失敗したら
どうするのよ!!」

椿は殺され、自分達も死ぬ。

「まだ一週間あるもの。考えればいいのよ」

「バツカじゃないの?!　考えてどうにかなるわけじゃない!」

!　素人の、ただの中学生に!!　相手は今まで何人も殺して、しかも警察の搜索を潜り抜けてるような知能犯なんだよ!!」

実はミステリー小説好きの美鈴は、大人でさえ舌を巻くような単語を幾つも使う。

「無理無理!!　出来るわけじゃない!!」

「最初から諦めてどうするのよ!!」

「だから諦める諦めないの問題じゃない!!　私は客観的に言ってるのよ!　よく考えてよ!!　私達はただの中学生で、スーパーマンでも凄い能力の持ち主でもないのよ!!」

うんうんと、香奈が頷く。

そうだ。

自分達はただの中学生。

映画やテレビに出てくる様なアニメのヒーローでもなければ、超

能力や魔法なんていう不思議なものも持っていない。

というか、超能力も魔法も、俗に言う不思議な力というものは、全て物語やアニメの中での話である。

実際に使える相手が居たらそれこそお目にかかりたいし、そんなものが使えたら科学文明でなく魔法文明が発展している筈だ。

「確かに、テレビでは主婦探偵とか、女子高生探偵とか出てくるけど、あれはただのお話！！ 実際の主婦や女子高生にそんな事が出来るわけじゃない！！」

美鈴は更に畳み掛けるように言う。

「私達に出来る事は、椿を警察に守ってもらう事よ！！」

「ならどうやってよ！！」

梓が怒鳴る。

「椿が見た犯人をそのまま伝えて、警察が本当に守ってくれると思ってるの？！ んなわけないじゃない！！ 馬鹿にされて終りよ！！」

梓の言う事も正しい。

「それに警察なんて、何か事件が起きてからじゃないと動いてなんてくれない！！ それこそ、椿が殺されない限り、動くものですか！！」

殺されるという言葉に、椿から悲鳴が漏れる。

再び震え出す椿を、理佳が慌てて宥める。

「梓……」

美鈴の呼びかけに、梓は叫ぶ。

「もし椿が殺されたらどうするの？ 警察に行つて、馬鹿にされて殺されたら——責任とれるの？！」

「っ！！」

「何よ！！ いいわよ！！ 美鈴みたいな薄情者の助けなんていらない！！」

吐き捨てる様な梓の言葉に、美鈴が今にも泣きそうな顔をする。

「美鈴は椿が殺されても良いのよ！！ そっという冷たい人なのよっ」

「ち、違」

「違わない!!」

梓が美鈴を睨み付ける。

「理佳！」

「は、ははは、はいっ」

「あんたはどうするの？ 手伝うの？ 手伝わないの？」

「あ、わ、わわ、私」

オドオドとしながら、視線を彷徨わせる理佳に、梓が怒鳴る。

「早くしてよ!!」

「わ、わわわかった！ て、手伝うつ」

「香奈は?!」

「え？」

矛先がこっちに来た。

「手伝うの？ それとも、美鈴みたいに友人を見捨てるの？」

どうしてそうなる。

手伝わなければ人間失格みたいな言い方に、香奈はふつつつと怒りが湧いてくる。

そこに十人いれば十通りの考え方がある。

なのに、梓は自分の言う事が正しくて、それ以外の考えは全て間違っていると言い切る。

自分はまだ十二年間しか生きていない。

何が正しくて、何が正しくないか、なんていう確固たる基準が出来るほど人生経験など積んでいない。

しかし——これだけは分かる。

自分の考えを、押し付けて、それ以外の考えは全て駄目と言い切るのは、間違っている。

「椿は見捨てない」

「じゃあ」

「でも、私達だけでどうにかするのは、得策じゃない」

水を打ったような静けさが支配する。

「……そう、つまり、香奈も薄情者って事ね」

「そう言われてもいいよ。今の梓には何を言っても駄目そうだし」
「っ……」

「か、香奈」

美鈴が慌てて香奈の口を塞ごうとする。

だが、間に合わなかった。

パンつと、何かを破裂させた様な音が部屋に響く。

ジンジンと、左の頬が熱と痛みを持つ。

「あ、梓……！　なんて事を」

「煩い……」

美鈴を睨みつけると、梓が香奈へと怒鳴り散らす。

「あんたの言い方、腹が立つのよ……」

「ごめんね。でも、こういう言い方なの、私」

「ええそうよ……！　あんたの言い方はいつもいつも人を見下した言い方よ……！　いかにも私達の事を馬鹿にしたようなね……」

そんなつもりはない。

けれど、言っても無駄だろう。

「そんなに自分は特別とでも言いたいのか？　あんたが？　小学校時代、いつも桜子の引き立て役って言われていたあんたが？」

「梓……」

美鈴が梓に掴み掛かるが、強い力で押しのけられる。

「あんたなんて特別じゃない……！　あんたはただの何処にでもいる中学生よ！　特別なのは、あんたの側に居た桜子よ……」

「……」

「なのに、お高くとまって……！　馬鹿にするのもいい加減にしてよ……」

「……」

「もういい。手伝わない薄情者なんて必要ない……！　さっさと出てって」

梓が言い捨てる。

しかし、香奈は中々動こうとしない。

「っ！！ 出てけって言ってるのよ！！」

そう言つと、美鈴と一緒に香奈を部屋の外へと押し出してしまふ。ボタンと、目の前で勢いよく締まった扉から漏れる拒絶に、香奈は暫く扉を見つめた。

だが、再び開く事のない扉に終には溜息をついた。

「か、香奈……」

「……帰ろつ。このまま、ここでこうしていてもどうしようもないし」

警察に行くにしろ、どうするにしろ。

此処に居ても、どうにもならない。

「でも……椿が」

「うん。でも……私の考えが正しいなら、まだ時間はあるよ」

「え？」

「……とりあえず、外に出ようよ」

香奈は、ちらりと階段の方を見た。

一階部分に一瞬だけ見えたあの水色の布は、たぶん椿の母の着物だ。

どうやら騒ぎすぎたので、隠れて様子をうかがっていたのだろう。

ここで話せば、椿の母にも聞かれてしまふ。

「椿のお母さんに言わなくていいの？」

「今の状態では、やめた方が良いと思う」

混乱しか、引き起こさない。

香奈と美鈴は、階段を降りていく。

そうして、いかにも今通りかかったと言わんばかりの椿の母に先に帰る事を告げる。

「まあ……何のもてなしも出来ずに」

「いえ……騒がしくして、すいませんでした」

「また来ますね」

そう言つて、玄関へと向かい靴を履く。

最後にもう一度挨拶をして、ドアを開けようとした時だった。

「あの」

「え？」

椿の母の呼びかけに、香奈が振り向く。

そこには、心配そうな顔をした椿の母が縋るような眼差しを向けていた。

「つ、椿は……椿は、大丈夫ですよね？」

「……もちろん」

香奈は笑って返す。

本当なら、こんな他人の、しかも年下の小娘にこんな事を聞きたくはないだろう。

しかし、今は何かに縋り付きたくてたまらないのだ。
誰にだってそういう時はある。

本当なら、こういう時は頼れる夫が居ればいいが、椿の母には夫は居ない。

「また、遊びに来ますね」

そう言って、椿の家を後にした。

辺りは夕日で緋色に染まっていた。

歩道には帰宅途中のサラリーマンや学生の姿が多く、横の車道も帰宅する車で交通量が増す。

それでも、一つ横道にすれば一気に人気は減り、何時のまにか香奈と美鈴の二人だけになっていた。

「それで、さ」

「ん？」

「さっきの話だけど」

美鈴の問いかけに、香奈はああと声を上げる。

「そうだったね」

「まだ大丈夫って、どういう事？」

「言葉通り。まだ、椿は大丈夫だと思うの」

「どうして？ 根拠は？」

「根拠は……犯行日と時刻だよ」

「え？」

キョトンとする美鈴に、香奈は歩きながら続ける。

「椿が言ってたでしょ？ その犯人らしき人が、言ってた言葉を。それを聞いた時、思ったの」

「何を？」

「普通さ、目撃者なんていれば、その場でどうにかしようとするじゃない。なのに、その場でどうにかしようとせず、わざわざ見逃した」

「椿が逃げたんじゃなくて？」

「確かに逃げた。でも、それはその犯人が居なくなっただけでしょう？ 犯人が目の前に来て、色々と呟いて……普通なら、口封じをする。ミステリー小説とかドラマだってそうじゃない。何もせずに、立ち去るなんてしない」

「そりゃあ……そうね」

「だから、椿をその場で殺さずに生かしたまま帰す事が目的だったんだと思うの」

「な、なんで？」

「……美鈴つてば、察しが悪いよね。いつものミステリー魂はどうしたのよ」

「ご、ごめん——って、あれはただのお話だから！！ 椿のは今現実起きてる事だもの！！」

美鈴の反論も一利ある。

「まあ……そうだね」

「で、どうして生きて帰す事が目的だったの？」

「次のターゲットにする為」

「へ？」

「だから、次のターゲットにする為よ」

「ええ?!」

「じゃないと、考えられないもの」

「いや、だってその前に警察に駆け込まれたらどうするのよ!!
それこそ一気に指名手配よ!!」

そう——そんな事になれば、一気に動きにくくなる。

しかし、実際にはそんな事にはなっていない。

「でも、なっていないわよ、指名手配に」

「そ、それは、椿が訴えないから」

「そうよ。訴えてないの。だって、化け物が犯人だって訴えたところで、警察が相手にしてくれないから」

「香奈……」

「私の予想としては、何か化け物みたいな被り物をしていたんじゃないかな? で、恐慌状態に陥っている椿に、更に意味不明な言葉を呟き、絶対に行くと言って脅しをかける」

「それなら、話したら殺すと言った方が良くない?」

「犯人なりの拘りがあるんじゃない?」

ミステリー小説とかでの連続殺人鬼には、必ず花を置くとか意味の分からない事をするのも居た。

まあ、読み込めばそれは大事なキーワードだが、香奈にはあまり興味はない。

「じゃあ、今までの被害者達もそれ?」

「うん、それは分からないよ。ただ、椿の場合は犯人にとっても思いがけない事だったんじゃないかな?」

「つまり……たまたま見られたって事?」

「うん」

そうそう、目撃されて居てはたまったものではないだろう。

だから、椿のもたまたまな気がする。

たまたま、目撃してしまった。

そう考えれば、椿の運の悪さが余計に哀しくなる。

「で、たまたま目撃してしまった椿が、次のターゲットにされたと」

「うん。このまま殺しても良いけど、何か犯人の心を刺激するような事があって、次のターゲットにしたんじゃないかな」

「そうか……って、ちょっとまって。次のターゲットって事は、次の被害者って事だね？　で、今までの被害者達は全員火曜日の午前二時〜午前四時までに」

「うん。だから、すぐには危険はないと思う」

青ざめていく美鈴に頷きながら、香奈は椿の顔を思い出す。

痛ましいほど震えていた椿。

殺されると、死にたくないと言っていた。

「犯人は、次の火曜日の午前二時〜午前四時までの間に来る。だから、それまでにどうにかしないと」

「でも、どうやって？」

「う〜ん。それが問題」

「って、そんなのきな!!」

「のんきって、私は普通の女子中学生。女子中学生探偵じゃないの」
「ここが大事。」

香奈は普通の女子中学生で、探偵ではない。

「けどさ、よくよく考えたら警察って来るんじゃない？」

「え？」

「ほら！　よく殺人現場とかでは、鑑識の人達が情報収集の為に色々調査するでしょ？　靴後とか、遺留品とか。なら、椿の所にも来ないかな」

だって、そこに行ったのだから。

靴跡とか、髪の毛とか色々残ってるのではないか。

「あゝ、駄目駄目」

「なんで？」

「知らないの？　今日の明け方に大雨が降ったの」

「へ？　降ってた？」

眠っていたから分からないが……いや、その前に起きた時には地面は濡れていなかった。

「うん。雨が降ったのは、その現場周辺や都心の方だから。こっちは曇り」

「で、どうして雨が降ると駄目なの？」

「流れちゃうからよ、雨で。足跡とか、遺留品とかね」

「髪の毛も？」

「場合によっては。朝の四時頃からだいたい一時間ぐらいかな？」

「凄い集中豪雨！　知らない？」

「……知らない」

「そういえば……ニュースの中の現場って……濡れていたような気もしてならない。」

「というか、そこまで見ていなかった。」

「私、朝は毎日六時起きだけど、バタバタしてるし」

「学校は朝の八時五十分から始まる。」

「学校行きのバスは二台あって、一台目は朝の七時に、二台目は七時半に駅前を出発する。」

「因みに、一台目は校長先生が運転手で、二台目は教頭先生が運転していた。」

「香奈は今日は一台目に乗って学校に行った。」

「まあ、確かに……家の近辺にでも降らない限り、遠くで雨が降ってたって言われてもね……」

「美鈴の言葉に、香奈はその通りと頷く。」

「連続無差別殺人事件ではないが、所詮はテレビの中の映像は対岸の火事なのである。」

「と、気付けば香奈の家の前まで来ていた。」

「とりあえず、家に帰ろう」

「うん……そうだね。こんな事、私達の手には到底負えない」
「椿を見捨てるつもりはない。」

「けれど、今は混乱し過ぎていて、何も良い考えが浮かばなかった。」

「あ、でも、さっきのターゲットの話は椿達には」

「うゝん、梓なら気付いてるんじゃない？」

「え？」

「躊躇う様な美鈴に香奈はパタパタと手を振る。」

「気付かなかった？ 美鈴」

「何が？」

「美鈴が梓と言いつつた時、梓はこう言ったわ。『まだ一週間あるもの。考えればいいのよ』って」

思い当たり、美鈴の目が見開かれる。

「つまり、梓の頭には椿が次のターゲットっていう考えがあったのよ。それを本人が認識しているかどうかは別として」

「香奈……」

「そう。事件は火曜日に起きる。今日は火曜日。厳密には一週間もないけど、それでも次の火曜日までには、大雑把に見ても一週間近くの時間がある」

それは、何よりも梓の中で、犯人によって椿が次のターゲットとして見られたと気付いている事に他ならない。

「でも、認識してないかもって言うのは？」

「言葉の通りだよ」

頭が良い相手が時々良くやる事で、答えは一瞬にして分かっててもそこまでの解答方法が分からないという現象がある。

「梓って、時々そういうの、あるんだよね」

みんなが困り果てている問題で、一瞬にして答えを出す時が。

「でも、なんでそうなるかをあの子は言わないのよ」

だから、そこで問題が起きるのだが。

「けど、そういうのって頭が良い子の場合でしょう？」

「まあね。でも、時々生まれつきの才能として持っている事があるのよ」

梓の場合はそのパターンだと、香奈は踏んでいる。

しかし美鈴はまだ不安げだ。

「でもさ……答えが分かっても、何故そうなっているのかが分からないと困らない？」

「ん？」

「今回みたいな場合は、特にそうだと思う。なんで、どうしてそう

なるか——ただ、椿は次のターゲットになった、だけだと」

それこそ、香奈のように、一つずつ順序立ててその答えに行き着く必要があるのではないか。

特に、誰かを動かす時には、説明というものが必要になる。

何故？どうして？どうやって？何の為に？

それらを説明し、相手を納得させなければ、助けは得られない。

周囲は動かない。

それは、今の自分達のように、自分達の力だけではどうしようもならない時には、絶対的な死活問題になる。

現に、警察に対して犯人の正体を上手く説明出来なくて困り果てているのだから。

「大丈夫だよ。梓はああ見えて、勘の鋭い子だもの。冷静になったら、しっかりと思いつくって。何故、どうしてそうなっていくのかって」

「そ、そうかしら」

「心配なら、明日話して見るよ」

「き、聞いてくれるかな？」

「難しいけど、聞いて貰うしかないよ。いざとなったら、椿を守るって事をつついて」

「……香奈」

「椿を守るんなら、知っておいたって損は無いよって」

「以外と、策士だね」

「そう？」

梓の正義感と友情を上手く利用した方法である。

「香奈らしいよ」

「でも——」

香奈が、ポツリと呟いた。

「私の説明が全部正しいわけじゃないよ」

「え？」

「私の説明も、所詮は推測に過ぎない。今まで得た情報をつなぎ合

わせて推測した結果の一つ。限りなく正しく思えても、それが真実かどうかは分からない」

だから。

「あらゆる可能性を考えて動く事——ってのが、お父さんの口癖なんだ」

「香奈……」

「だから、私が言う事全てが正しいとは美鈴も思わないで。間違っていると思ったら、言って。でないと、見失ってしまうかもしれないから」

「……わかった」

いつも淡々とした物言いが、時には他人を怒らせる事もある香奈。けれど、今はその物言いが好ましいと思えた。

「……あ、そうだ」

「何？」

「その頬だよ。そのまま帰ったらやばくない？」

指摘されて、香奈はようやく自分の頬が腫れている事が分かったと、認識した途端に痛みと熱を感じる。

ズキンズキンと脈打ち、かなりの力で叩かれたのかプツクリと腫れ上がっていた。

「冷やした方がいいよ」

「うん」

「けど、娘がそんな顔で帰ったら、お父さんとお母さんが心配しない？」

「体育のバスケットでボールがぶつかった事にするよ」

ケラケラと笑う香奈に、美鈴が頬をひくつかせる。

親というものは子供の事をよく見ている。

そんな見え透いた嘘など、すぐにばれてしまうだろう。

「……まあ、頑張って」

そう言って美鈴と別れて家に入った香奈は、丁度玄関に入って横のドアから出て来た父と鉢合わせした。

そして――。

「香奈？！ どうしたんだその類はっ！！ 痴情のもつれかつっ！！」
十二歳の娘に痴情のもつれを考えるなんて、娘に対して父は一体
どんな考えを抱いているのか。

しかし、すぐにそんな考えは吹っ飛ぶこととなる。

「娘が！！ 僕の香奈が、僕の娘を傷付ける相手なんてええ！！」
髪を振り乱し叫ぶ姿に、香奈は全力でひいた。

「潰す！！ 世界潰す！！」

「ちよっ！！ やめなさい連理！！ あんたが言つとマジで洒落に
ならないっ！！」

母に後ろから羽交い締めになれながらも、凄まじい黒いものを放
出しながら玄関へと移動していく父。

「洒落じゃない！ 本気だ！！」

「堕ちる気？！」

なんだか、話が凄い事になっている。

「ってか父よ……世界を潰すなんて、そんな事、一介の地方公務員、
それも下っ端に出来るわけがないではないか。」

そして母。

おちるって、父は何か試験でも受けているのか？

まあ、確かに試験を受けているのに何か問題を起こせば、簡単に
不合格にはなるだろう。

「香奈、手伝って！！」

「う、うんっ！！」

「止めるな！！ 娘を傷付けられて黙っていられるかああ！ 何処
の男だこんちくしょう！！」

なんで男限定なんだ。

だから、一体どういう評価を娘に抱いてるのだ。

とにかく、このままでは本気で相手の身が危険だとして、香奈は
母と共に父に縋り付くこと一時間。

ようやく父が落ち着いた――と思ったが、そこに今度は母のいら

ない一言が落ちた。

「はあ……夫に持つなら、もっと落ち着いた大人の余裕がある人がいいわ」

第二の暴走が勃発した。

第十話 父

神無家の夕食は午後六時半から始まる。

しかし、父の暴走で母の調理が中断された事から、ようやく料理が食卓に並んだ時には、香奈は空腹のあまりリビングのソファに倒れていた。

隣で、機嫌良く母の手料理を待つ父が憎らしく頬を膨らませれば、ズキンと梓に打たれた頬が痛む。

何時のまにか湿布が温くなり、香奈は側に転がっていた湿布の箱から新しいのを取り出して頬に張り直した。

「さて、ご飯にしましょう」

母の言葉に、香奈は勢いよく起き上がり食卓へと四つん這いで這い寄る。

短時間で作ったにも関わらず、食卓は豪華だった。

油淋鶏のかかった鳥の唐揚げに筑前煮、オクラのゴマ和えに胡瓜と茄子のぬか漬、蜆のお味噌汁にご飯。

「いただきます!!」

今日はご飯か——なんて文句はつけない。

パン好きの香奈だが、今はとにかく空腹を満たすべく箸を動かす。ちゃんとつけ込むところから始めた油淋鶏の唐揚げを口に放り込んで噛めば、じゅわりと肉汁が口いっぱいに広がった。

母はタレに凝っていて、甘酸っぱいとりとしたタレの美味しさは秀逸だった。

オクラに箸を付ければ、ぐにゅりとした歯触りの後に小さな種が飛び出て、それをまた噛みしめればその感触が心地良かった。

またゴマの味が良く利いており、唐揚げ同様ご飯が進む。

箸休めに漬け物を噛みしめ、味噌汁を含めばしっかりと砂抜きされた蜆の美味しさだけが喉を通っていく。

筑前煮は言わずもがなで、しっかりと味の染みた煮物に香奈はす

ぐにご飯をお代わりする事となった。

その横では、父がキンキンに冷えたビールをコップに注いで飲んでいた。

ビールは一日一本。

お酒代だけでも馬鹿にならないからと母が厳重に管理しているが、香奈からすれば父はそれほどお酒が好きなようには見えなかった。

ただ、父はどれだけ飲んでも酔わないらしく、飲み会から帰ってきてても本当に飲んだのかと疑いたくなるほど素面なのである。

だが、騙されて近付きその酒臭い息の餌食になった事が多々ある。香奈は、飲み会後の父には決して近付かない。

将来は、お酒もタバコも呑まない人と結婚するつもりだ。

父はお酒を飲み干すと、蜆の味噌汁に手をつける。

味噌汁の白い湯気で眼鏡が曇った。

「ととつ」

熱々の汁を冷まそうと息を吹きかけた際に眼鏡に汁が飛んだ。

「何してるのよ」

呆れた様な母の声が聞こえ、ティッシュが父に渡されると、くりと後ろへと向き直る。

それから眼鏡を外していそいそと汚れを拭き取る父の姿に、香奈は唐揚げを飲み込み口を開いた。

「なんで一々そうするの」

と、何気なく呟けば、母がキョトンとした。

「なんでって、香奈がそうしろって前に言ったからでしょ？」

「え？」

言ったっけ？

首を傾げていると、父がずっとこちらを見た。

香奈が固まった。

視線も体も、呼吸すらも止まった。

「か、香奈？」

眼鏡を外した父が、香奈の前で白い手をパタパタと振る。

「連理！！ 眼鏡かけなさい！！」

「は？——あっ」

そういえば眼鏡を外したままだったと、慌てて眼鏡をかける。カチンと、時計の針が動くような音が頭に響いた瞬間、香奈はようやく壊れた人形のように動き出した。

今まで止まっていた時が再び刻まれ、大きく息を吐き出す。

それと共に、出た言葉はただ一つ。

「お父さんの、馬鹿」

「っ？！」

眼鏡をかけていても歪む父の顔から、香奈はふいつと目をそらした。

思い出した。

というか、忘れていた。

そうだ……自分が、言ったのだ。

父に、自分の前で眼鏡を取るな！——と。

普段は顔を隠す様に、曲線と直線の合わさったラインの銀フレーム眼鏡をかけている父。

しかし、その眼鏡を取ったが最後、そこに現れるのは美の女神さえ恥じらい全力逃走する顔。

綺麗どころが多い芸能人やモデルにさえ、父より綺麗な人は居ない。

そもそも、初対面の相手は、父の素顔を見て固まる。

悪ければ、倒れる。

それは初対面でなくなった後もずっと続く。

たぶん、傾国の美姫というのは父のような顔を言うのだろう。

しかも、長身で服を脱げば隠れマッチョという完璧な肉体からは、大人の色香がダダ漏れ状態。

首から上の性別を超越した様な美の女神顔と合わされば、もはや兵器だと香奈は思う。

娘の香奈でも、父の素顔を直視出来ない。

速攻で、父の素顔が見えず、更に父が出す濃厚なフェロモンが届かない場所へと逃げ出す。

十二年間一緒に居たけど、無理、慣れない。

だから、眼鏡をかけていなかった頃——香奈が幼稚園の時は、全力で父を避けていた。

そうして徹底的に自分の素顔を避けている娘に、父も考えたのだから。

香奈が小学生に入る前に、父は眼鏡をかけたのだ。
するとどうだろう。

眼鏡が隠すのは目元部分だけで、相変わらずシャープな輪郭や赤い唇などの造形美は晒したまま。

しかし、眼鏡をかけてからの父は、誰にも相手にされなくなった。それこそ、そこらに転がる石ころの様に、目立たなくなったのだ。そればかりか、今まで父の美貌に騒いでいた者達も、一切目もくれない。

それは何時も父に言寄る女性達に碧易していた母を思えば万々歳だが、アニメや漫画でもないのに、眼鏡一つでここまで変わるものなのだろうかという疑問を香奈に残した。

それに、あれほどダダ漏れだったフェロモンは欠片も感じられない。

酷い時は、父の後ろを男性女性問わず長蛇の列で連なっていたほどなのに。

だが、香奈も目元しか隠していない眼鏡一つで父と普通に接する事が出来るようになったのだから、実はあの眼鏡はアニメなどで出てくる魔法道具みたいなものではないかと考える。

基本的に、魔法とか不思議な力を持った道具とかは物語の中だけの事だと思っているが、父の眼鏡だけは別だと思ってもいい。

というか、あの眼鏡こそが香奈と父の良好な親子関係を築く道具で、それがなければとっくに関係は破局している。

というか、まずこんな危険物体がいる家からは、出る、自立する。

親子といえど、香奈はドライだった。

しかし、父の方は違った。

「か、香奈、お父さんの事が嫌いなのか?!」

「眼鏡をしてないなら」

ガン!と、ハンマーで殴られた様にふらつく父。

別に苛めたいわけではないが、香奈としては父の心より自分の身の安全を取る。

眼鏡を外した父の側で暮して、平凡な結婚生活を得られるとは思わない。

寧ろ、父のせいで嫁に行けない確率が高すぎる。

「じゃ、じゃあ香奈の前で眼鏡を外さないから!」

「うん、外さないで」

今にも泣き出しそうにする父を相手にせず、香奈は味噌汁をすすった。

酷い娘だと思われそうだが、父の素顔で苦労させれ、神経をすり減らされてきた自分にだって言い分はある。

幾ら父のせいでも、父の美貌に血迷った者達に酷い目に遭わされた——香奈は溜息をついた。

「うう……香奈」

「はいはい、泣かないの」

それまで、やれやれとした面持ちで見守っていた妻が夫を慰めるが、頭を撫でる手から伝わる髪感触に、少しイラツとした。

ミディアムヘアの黒髪は相変わらず艶やかで柔らかく、一撫でしたが最後、その心地良い感触から離れられずずっと撫で続けてしまう。

「イタッ!」

ついつい、夫の髪を腹立たしげに引っぱれば、眼鏡の下——けぶる様な睫に縁取られた黒い瞳が哀しげに自分を見詰める。

「ど、どうしたんだ?」

「……別に」

「いや、別につて顔じゃないけど」

機嫌を取ろうと伸ばされる夫の手を避けながら、溜息をつく。

夫の顔に慣れた自分でさえも、時折我を忘れて手を伸ばしてしまうその美貌。

逆に、自分の顔はごく平凡の丸顔だ。

別に肥っているわけではなく、中肉中背。

平均な顔といっても、別に二目と見られぬ顔でもない。

しかし夫の顔を一度でも目にすれば、当然審美眼は鰻登りで上昇し、逆になけなしのプライドはズタボロになる。

とはいえ、自分はまだいい。

問題は娘だ。

赤ん坊の頃から父の顔を見てきた娘の審美眼は、実は何気に鋭い。いや、鋭すぎて、幸せな結婚という未来が遠のいている。

このままでいいのだろうか。

いや、良くない。

娘には幸せな結婚をして貰いたいのだ。

間違っても、自分の様な結婚ではなく。

そう——幸せな娘の結婚。

その為にはまずやる事は——。

「夫との離婚？」

「いやだあああああつ！！」

父の反応は早かったが、それ以上に香奈の反応は早かった。

速攻で隠し持っていたお盆に自分の分の食事を確保すると、逃げるように廊下へと飛び出した。

背後から、聞こえてくる両親の声なんて全てシャットアウト。

「ちよっ！ 何するのよ連理っ」

「俺を捨てるのか清奈ああ！！ 許さない、捨てられるぐらいなら——」

「やめっ！！ 馬鹿、触るなああ！！」

どったんバツタン大騒ぎ。

隣近所から苦情が来そうだが、何故か今まで一度も来た事がない。両隣を他の家々に囲まれているというのに。

そう考えてみると、実は結構不思議なことは多いのかもしれない。「まあ……超能力とか、幽霊とかよりは説明がつくだろうけど」

隣近所に住む人達がもの凄く忍耐強いとか。

……後で菓子折を持って行くべきか。

「さうて、ご飯ご飯」

主婦の様な事を思いながら、香奈はお盆を持ってスタスタと二階の自分の部屋へと向かった。

夜も更けた午前二時。

闇夜に紛れて立ち並ぶ建物の屋根を飛ぶように駆け抜ける者達が居た。

その動きは野生の獣の様に俊敏で、屋根に殆ど振動を与えぬように軽やかだった。

屋根の上で誰かが動けば、大抵下に居る者達はすぐに気付く。

しかし、まるで滑る様に音を立てない動きは、例えそこが水面でも波紋が殆ど起こらぬ程の力しか屋根に伝えず、下で眠る者達を眠りの世界から引き戻す事はなかった。

彼らの目的地はただ一つ。

幾つもの建物を越え、闇に紛れて近付くのは、大通りから道一本入った先の通りにある一軒家。

すぐ前の歩道を挟めば、車道に面するという実は一等地。

申し訳程度の小さな庭を持った、二階建ての一般的な4LDK。その庭に降り立った彼らは、顔を上げた瞬間驚きに喉を鳴らす。

と、風を切る音と共に、彼らの中でもリーダー格の男は顔に強い衝撃を受けた。

「ぐはっ!!」

思わず、出た悲鳴。

それが蹴りだと分かった時には、二撃目を食らって地面に倒れ込んだ。

「ひっ！！ 長官！！」

突然の事に対処出来なかった配下の一人があっさりと身分をばらす。

それを呆れた様子で一瞥した彼は、はっと鼻で笑った。

「それが今年の新人か？ 基準が下がったな」

物体が震える事でハッせられる音。

ただそれだけの事なのに、これだけ耳に残るのは何故なのか。

その心地良い美声に、彼らは一瞬にして夢見心地となる。

「何を呆けているんだ」

呆れた口調と共に、地べたに座り込んだまま茫然と自分を見詰めるリーダー格の脳天に踵落としを食らわす。

「ぐぼっ！！」

「お前は何しに来たんだ？ ああ？ 地べたに這い蹲りたいならとつとと帰れ。邪魔だ、消えろ」

「も、申し訳あります……我が君」

げしつと、リーダー格の男が殴られる。

「俺は機嫌が悪いんだよ」

心臓がすくみ上がる様な声が告げる。

「つてか、消えろ」

「ま、また奥様と喧嘩ですぐはあ！！」

「死ね、マジ死んじまえ」

ボコボコにされていく、リーダー格。

配下達は涙ぐむ。

そこにいつもの長官の勇姿は微塵も無かった。

が、同時に思うのは、自分も痛めつけられたいという、ドM根性。他の者ならば決して許さないが、今長官を痛めつけるかの方になら、苛められてもいい。

いや、苛められたい！！

「こ、公子」

二度目の脳天踵落としを食らう。

「次言ったら殺すぞ」

「も、ももも申し訳ありません！ 連理様！！」

どんな人外の生き物だろうと、一睨みで殺せそうな視線を受けたリーダー格が土下座する。

彼に習い、配下の者達も土下座した。

そんな彼らを見下ろすのは、この家の主であり、ここに住む神無家の大黒柱——連理だった。

だが、今の彼は家族に対する優しい仮面を外しているばかりか、自分の美貌を覆い隠す眼鏡も外している。

白皙の美貌が月の光に照らされ、優婉な美しさが更に際立っていた。

闇夜でも仄かに燐光する白い肌のなまめかしさに、ゴクリと生唾を飲込む者達が多数。

そんな彼らを、連理はジロリと不機嫌そうに睨み付けた。

「ご、ご尊顔拝謁出来光栄にございます」

リーダー格の男は、冴え渡る美貌を前に頭を下げる。

一度顔を上げれば、そこには息をする事すら忘れ去る美貌があるだろう。

美形揃いの兄弟達の中でも、一際美しかった彼の美貌は、此方に来てから更に磨かれている。

最初にこの世界に降りた時には十代後半の美貌は、多く見積もっても二十代半ば頃。

だが、外見が年齢を経た事で強さを増した大人の色香は、美形に見慣れたリーダー格でさえも、思わず血迷いそうになる。

血が集まりそそり立つ股間のものを押え付け、リーダー格の男は口を開いた。

「あ……その、眼鏡を外しても宜しいので？」

その眼鏡は、この世界では強力過ぎる美貌と色香を隠すものだ。どんなものでも、過ぎれば毒にしかならず、それが時としてんでもない事態を引き起こす事にもなる。

特に、連理の様に『完末』と呼ばれる存在なら、尚更だ。

『完末』は完全。

『完末』は完璧。

『完末』は孤独で不幸。

この世の創世と共に、出現した三つの存在。

『枷』、『完末』、『それ以外の者達』。

その中の、一柱を担う希少たる存在。

そうして、『完末』は本人が望まずとも、ただ存在するだけで『完末』を得ようと争い、滅びを引き起こす魔性の存在。

しかし、それでも『完末』を憎む者はなく、ただ愛し欲する者達だけが世界を占める。

ただ、『完末』だけが自分の存在を忌避し、絶望する。

そんな……哀しい完璧で美しい『完末』の一人である連理。

『完末』としての美貌と才能、能力を制御出来るのは、『枷』という存在だけ。

だが、『枷』によつて『完末』である部分を制御しても、それで全てが丸く収まるわけではない。

仮に連理がただの人間であれば、この世界で暮す為には『完末』の部分だけを制御してもらえばそれですむ。

しかし、連理はただの人間ではない。

だからこそ、あらゆる処置が必要であり、連理がいつもかけている眼鏡は重要なものだった。

そう——その眼鏡は、美貌と色香を隠すが、それ以外のものに関しても制御する道具だから。

だが、連理はあつけらかんとした口調で告げる。

「ああ——この眼鏡の効果なんてたいしたものじゃないさ」

幾つもの強力な封印を別にかけた状態で、それでも漏れる微々た

る影響を抑える為の代物でしかない。

連理からすれば、全く気付かないほどの、小さなそれ。

リーダー格の男がホツとする。

もし、眼鏡が連理の身に潜む強大で凶悪な力すらも抑えているとすれば、眼鏡を外すのがいかに恐ろしい事か。

「まあ、このピアスを外せば力が出るけどな」

「っ！」

髪をかき上げ見せたピアスに、リーダー格の男の顔が青ざめる。

「はは！ 大丈夫だっていつてるだろう？ このピアス一つ外したところで、人間界に居る強い能力者ぐらいだ」

左右とも外せば、強い能力者すら敵わない力を出すが。

しかし、それは自分の本来の力の一パーセントにも満たないものである。

「どうか、自重くださいませ」

「お前がそれを言うのか？」

力を封じている筈なのに、ぐにやりと場が歪んだ気がした。

「ぎよ、御意」

「ふ〜ん」

「お願いします。貴方様はただのお方ではありません」

「では、なんだ？」

連理の問いかけに、リーダー格の男が土下座したまま、カラカラの喉で告げる。

「偉大なる冥界の支配者——冥界大帝の末公子様です」

この世には、幾つもの世界がある。

人間達の住むこの人間界の他に、神々の住まう天界十三世界、精霊達の住まう精霊界、仙人達の仙人界、魔物達の魔界——それこそ、数え切れない世界がある。

その中で、全ての世界の者達が死んだ後に向かう世界がある。

その名を——冥界。

基本住人は、神々の楽園と謳われる天界十三世界と同じく神々。

そんな神々によつて維持されし、冥府とも呼ばれる全ての魂達の安息の場所たる冥界は、その住人である神々と共に、冥界大帝と呼ばれる偉大なる統治者によつて統治されていた。

連理は、その冥界大帝と冥界大帝后の間に数多く居る子供達の一にして末息子。

そして冥界に住まう神々の一人だった。

本来であれば、公子として冥界で仕事をし、妃を娶り暮している筈の彼は、人間界で人間の娘を娶っただけではなく、人に化けて暮していた。

それは、今から十五年近く前に起きた一つの出会いから始まっていた。

天才であるが故に、全てに絶望し、全てに興味が持てずにグズグズと腐つていた彼の前にもたらされた偶然の出会い。

幾つもの困難を乗り越え、彼は人間の少女を自分の妻とした。

それは、今も冥界では有名な恋物語である。

男として、愛する妻を得る。

『完末』として、『枷』を得る。

全てを諦めながら、幸せを手にした彼は、自分の地位も身分も全て捨てて一人の人間として家庭を築き上げている。

別に誰一人として彼と彼の妻の仲を反対したわけではない。

確かに反対した事や、反対した者達も居たが、それでも最後には受け入れようとした。

しかし、公子の身分を嫌った連理が、これ幸いにと公子の座を捨てたのである。

それどころか、産まれた娘にも自分の親族を会わせない徹底ぶり。おかげで、孫に、姪に、主の娘に会いたい者達は本気で泣いた。夢枕にも立ちまくったのに、連理は完全無視である。

流石は冥界一の鬼畜と影で囁かれていた末公子である。

冥界一の美貌を持ち、天才と謳われ、出来ない事は何もないとされていた末公子は、冥界一の実力者である父の手すらひよいひよい

とかわし続けた。

とはいえ、それでも神である証——神籍を抜くことは出来なかった。

そもそも、人間界では神はおるか人外にあたる存在は、あらゆる制約と制限が課せられる。

唯一の例外として、元々人間界で生まれ育った地神と呼ばれる人間界を支え司る神々だけが、その力を制約と制限無しに振るう事が出来る。

なぜなら、それが神々の仕事だからだ。

しかし、別世界の存在——特に神や魔物と名の付く存在は、その強大な力と身体能力から人間界という他の世界に比べて未熟な世界のバランスを崩すとして、本来の力を制限するものを身につけて制約を受け入れなければ人間界に降りる事、住むことは不可能だった。他の世界から、仕事で人間界に在住する場合も、この制約と制限を受ける。

それも考え、冥界で生きるつもりがなかった連理はきっぱりと神を捨てて事にしたのだ。

神として生きる事も出来たし、妻を神にする事も出来たが、彼はそれを望まなかった。

だが、周囲はそれを許さなかった。

いつか、嫁と孫も神となって家族揃って移住して来て欲しいと願う冥界側が、意地でも神籍を抜かせなかったのだ。

そんなわけで、冥界の神のままの連理は、人間として生活する為に自分の力と美貌を封印し、更には年と共に外見年齢を変化させるというめんどくさい事態に追われているのである。

しかし連理もタダでは起きず、徹底して娘を冥界の者達には会わせなかった。

それこそ、接触出来るのは自分達の様な限られた者達だけである。それを誉れに思いつつも、大帝達の事を思えば哀しくなる。

『孫と、孫と、孫と楽しく戯れたいだけなんだあああ』

『クタバレジジイ』

つい一月前も、輝く笑顔で父たる大帝の心をえぐった連理の姿が
思い出された。

第十一話 指標

「それで」

ついに来たか――。

彼らは、ぐつと腹に力を入れる。

「なんで俺の娘の頬に傷が？」

え?! そっち?!

パカンと顎が開ききった彼らに、連理は吐き捨てる。

「娘の事よりも重要なことがあるのか？」

ある――なんて言ったら、ぶっ飛ばされる。

「え、えつと、その」

冷や汗をダラダラと流す彼らを暫し見つめた連理は、ふつと殺気を和らげた。

「まあいい。で、報告は？」

ようやく、本題に入った。

「『ISPM』からの報告をお伝えします」

『国際超常現象機構』International supernatural phenomenon mechanism――
――『ISPM』。

多くの能力者が登録されているその機関は、人ならざる者達とも協定関係を結び、連理の故郷である冥界も協定関係に入っていた。

他に、天界十三世界、魔界、精霊界、仙人界などが有名な協定先である。

そして各世界は、決められた人数と人材を人間界に派遣し、『ISPM』にあらゆる方法で協力する事になっていた。

全ては、人ならざる者達の介入で故意に引き起こされる特殊超常現象事件――『ASP』の解決の為に。

「現在の連続無差別事件についての新たな情報ですが、どうやら一番濃厚なのは冥界だそうです」

「うちがか？　――根拠は？」

「実は、犯人と思われる存在が一人の少女に接触。その少女の記憶を探ったところ、人ならざる存在――それも、『死者』である事が確認された模様です。現在、その素性を調査中です」

「『死者』か……」

「それも、外見からかなり昔の存在らしいです」

「取りこぼしか……それとも、わざとか、か」

「『冥界』は常に人手不足ではありますが……」

リーダー格の言葉に、連理は鼻を鳴らす。

「ま、どちらにしろ、『狩る』だけだ」

「御意」

深々と頭を下げる彼らに、連理は空を見上げた。

「で……今回被害者を出した『ISPM』の動向は？」

「若い者達の間では弔い合戦と騒ぐ者達も出たそうですが、上層部が抑えました」

「そうか……あそこも、色々と厄介ことを抱えているが……まあ、何とかなっただけなら良い」

しかし……それもいつまで持つか。

「だが、妙だな。今回の件は、低レベルの『魔物』によるものだと聞いたが」

だからこそ、今回犠牲になった者達が派遣されたのだろう。

彼らは、『ISPM』の能力者達の中では比較的経験が浅く、今回の出動は経験値を稼ぐ為のものだった。

だが実際には、犠牲者まで出し、完全なる『ISPM』側の不手際だった。

連理は、手に入れた依頼書を見る。

そこには、しっかりと対象者『魔物レベル3』と書かれている。

レベル―それは、事件の元凶となる対象者の凶悪性を表わす指標だ。

『ISPM』が『ASP』の元凶となる対象者を、それぞれの殺

傷力、性格気質、種族を三大柱とした総合的評価に基づいて、レベル1～10の十段階に分けている。

依頼書の表記例では、『魔物レベル6』、『霊レベル3』、『堕神レベル5』等という記載が一般的であり、『ISPM』に協力している人ならざる者達にも大抵これで伝わる。

また、レベルは数が大きいほど、対象者の凶悪性が大きくなり、対処するのが難しくなる。

通常、人間が単独で相手に出来るのは種族問わずレベル4までで、その上のレベル5～8は、人ならざる者達と契約した人間か、人ならざる者でなければ相手に出来ないとされている。

レベル9、10に関しては、既に人の手には負えず、人ならざる者にしか相手に出来ない。

また、このレベルとは別に、依頼の難易度というものが存在する。これは、ランクで分けられており、上からSS、S、A、B、C、Dとなっており、対象者以外の外部的要因や依頼者側の事情など様々な事情を加味されての仕分けとなっている。

一般的に、SSが超上級依頼、SとAが上級依頼、B、Cが中級依頼、Dが下級依頼だ。

因みに、SSは滅多に無いとされ、多いのはA、B、C、Dの四つとされている。

今回の仕事は、依頼書を信じればCー普通ランクの仕事だった。ですが、現場に残された気配は、到底レベル3の相手ではありません」

「となると、評価ミスか……」
それとも……。

「引き続き調査を行います。『ISPM』側も、既に被害者を出している為、更に慎重に動くと思いますが……」

「とりあえず、向こうも調査の仕直しか」

「せめて一人でも生き残ってくれていれば、事態はもう少し簡単だったのではうがね」

相手が、どのレベルに相当するか位は分かった筈だ。

能力者はある程度の強さと経験を積んでいれば、一目見ただけで大体のレベル分けが出来る。

今回の能力者は、経験はそうでもないが、能力的にはそれが可能だった。

だが、今更言っても仕方ない事だろう。

「しかし、今回犯人と接触した少女が問題だな。次のターゲットか？」

「可能性は高いです。ただ、その相手が問題なのですが……」

「は？」

「実は、その相手は香奈姫様の――」

夜の闇に解ける様な声音が、その真実を告げた。

明くる朝、香奈は何時ものように学校に向かった。

何時ものように通学バスに乗り込み、何時ものように生徒達と挨拶する。

それだけを見れば、いつもと変わらない日常だった。

ただ、何時もは一台目に乗るバスが二台目になっていたりしたが、ただそれだけ。

帰りと違って朝はバスに乗るとすぐに眠るのもいつもの事で、大抵他の者達が降りてから運転手の先生に起こされるのも毎度の事だった。

しかし、教室に入った瞬間、いつもの日常は簡単に消えさった。

「おはよう」

「……」

ツンツと、顔を逸らす梓に香奈はポリポリと頬を指でかく。

どうやら、まだ怒っているらしい。

何時もなら、どんなに怒っても一晩経てば大抵元に戻るのだが。

確かに椿の事では色々やりあつたし、その前から下地は出来ていた。

とはいえ——なんか、いつもと違う気がする。

何か……こう、ひっかかるのだ。

本来であれば、ドロドロのものが少しずつ綺麗に戻っていくのを遮る何かがある気がする。

——って、考えていても始まらない。

基本的に、香奈はあまり物事を深く考える性質ではなかった。

「あのさ、梓」

香奈は、梓に話しかける。

目も合わせてくれないが、聞いてないわけではない。

「椿のことだけど——ここで言ってもいい？」

すると、梓がこちらを睨み付ける。

が、すぐに教室の外へと出て行った。

それを見て、香奈が後を追いつけ、その後を理佳と美鈴も付いていく。

辿り着いたのは、人気の無い階段下だった。

傍でハラハラと見守る理佳を余所に、香奈は昨日美鈴と話した事を説明した。

「……そんな事、分かってるわ」

「あ、そう。なら、大丈夫か」

流石は梓。

だが、また言い方が梓の気に障ったらしい。

思い切り睨まれてしまう。

「ちよつと、そんなに睨まなくてもいいじゃない」

「美鈴は黙ってて」

美鈴に対してもギリギリと強く睨み付けると、梓が腰に手を当てて香奈を見つめる。

「椿の事は私達でどうにかする。香奈はもう関わらないで」

「なんで？」

「先に椿を見捨てたのはあんたじゃない」

別に見捨てたわけではない。

ただ、梓のやり方に同意出来なかったただけだ。

「だから、もう椿の事は言わないで」

「分かった。勝手にこっちで動くから」

「分かってくれたなら——は？」

「ちよつと香奈——！」

茫然とする梓と理佳を余所に、香奈はさつさと教室に戻る。

その後を追い掛けてきた美鈴が何か言っていたが、特技の右から左に聞き流す事にした。

第十二話 噂話

今日も椿は休んでいた。

まあ仕方がないのだが……と、事情を知る香奈達だけはそう思った筈だ。

しかし十人しか居ない教室は、一人欠けただけでも広く感じられる。

基本的にクラス仲が良い事もあり、二日続けての欠席に生徒達は椿を心配して見舞いに行こうかと提案する者も居たが、梓によって全て却下された。

確かに、今のこの状態で会うのは色々と問題があるだろう。

椿の方としても、遠慮願いたい筈だ。

「椿は具合が悪いんだから」

「けどよ」

「心配したっていいじゃん」

「女子だけずるいよ」

「うっさいわね!!」

梓の怒りの沸点は、昨日から下がりっぱなしだ。

梓の性格を知り尽くしている男子達が、一斉に後退った。

「椿の事は心配しなくても大丈夫よ。それより、椿がきちんと授業について行けるように、サポートするのが私達の役目でしょう?」

「それは……」

「まあ、そうだな」

「って事で、あんたは椿の数学のノート、あんたは国語のノートをとる事」

「げっ!!」

「理佳がもうとってるじゃんっ」

「何よあんた達! 理佳一人に負担を負わせる気?!」

「そ、それは……けどよ」

「香奈とか美鈴もいるじゃん」

「あの二人はいいのよ。薄情者だから」

梓の言葉に、男子生徒達がキョトンとする。

「は？」

「何それ？」

だが、詳しく聞こうとした瞬間、梓に睨まれて黙る。

中には香奈達に視線を向ける者も居たが、それだけだった。

「香奈……」

「気にしない気にしない」

今は放っておくしかないのだ。

その後、香奈達は梓達と完全に没交渉のまま、バスで麓の駅まで戻ってくる事となる。

昨日とは違い、梓は理佳だけを連れてさっさと椿の家に向かい、

香奈と美鈴の二人が駅前に残された。

「梓……完全に頭に血が上ってるね」

「いつもの事だよ」

にしても、暑いな。

香奈は、今日も蕩けそうな暑さに頭が茹だっていた。

「で、好きに動くんて言ってたけど、どうする気なの？」

「んゝ、どうしよう」

「どうしよう？ ……って!!」

「いやゝ、何にも考えつかなくてさ」

「香奈に期待した私が馬鹿だったわ……」

項垂れる美鈴に、香奈は手提げの鞆からハンカチを取り出して汗を拭う。

「たつて、ただの中学生だし、子供だし、出来る事なんて限られてるじゃん」

「香奈の言うとおりだけど、今言われるとムカつくわ」

「こういう時は、基本は情報収集だろうけど……そもそも事件がこの近辺で起きてるわけじゃないし」

「なら、近辺まで行くって事が
なるほど。」

確かにミステリー小説でも、犯人は現場に戻ると言われているし。
「って、ちよっと待って。それって、私達で犯人調査するって事？
！」

「どうだろう？」

「どうだろうってー！」

その事については、美鈴と梓で散々言い争った事だ。

「いや、梓と美鈴が言い争ったのは捕まえる事に関してで、調査に
関してじゃないよ」

「調査だって同じだよ！ 確かに調査したら何か分かるかも知れな
いけど、真相に近付くって事は犯人に近付く事でもあって、犯人側
からすれば凄い目障りでしかないのよ？！ 下手したら、私達が殺
されるわっ」

「そうなんだよね」

気の抜ける様な口調に、美鈴は段々苛立つてくる。

「香奈！！」

「怒鳴らないでよ。私だって、何もかも知ってるわけじゃない。犯
人を捕まえるのだって出来ない。でも、何もしないわけには行かな
いじゃない」

香奈が美鈴をしつかりと見据える。

「椿の事は放っておけない。でも、犯人は捕まえられない。なら、
犯人の手がかりとなるものを捜して警察に駆け込む。そうすれば、
犯人が逮捕される確率が高くなるんじゃない？」

「……それ、犯人を待ち伏せして捕まえるより大変じゃない？」

今回の場合は、椿の所に犯人が来ると宣言しているから、待つて
いれば必ず来るだろう。

だから、待ち伏せするには絶好のチャンスであり、警察さえ協力
してくれば囹捜査だってできるはず。

問題は、椿が犯人を化け物としている所だけであって……はっ！！

「犯人の容姿とか嘘付いて、警察に張ってもらえばいいんじゃない」

改めて考えても、椿の件は警察側にとっては絶好の囹捜査の機会だ。

「美鈴……警察を騙す自信があるの？」

失敗したら、二度と警察からの協力は得られないんだよ？

「……煩いわね」

自分でも、警察を協力させるまでが難問だと思ったようだ。

「けど、化け物かあ」

それがひっかかる。

それさえなければ、何とかなったのに。

「ねえ……もしかしたら、本当に化け物かもしれないよ」

「は？」

美鈴の言葉に香奈が眉を顰める。

「だってさ、ニュースで流れてる殺害方法だって、不思議なことばかりじゃない。もしかしたら、さ。本当に人間以外が関わってるのかも」

「美鈴……それ、本気で言ってるの？」

「半分ぐらいは」

美鈴も、ただ無駄に昨日の夜を過ごしたわけではない。

椿の事を助けたくて、精一杯得た情報から考えたのだ。

確かに、犯人が化け物なんて有り得ない。

けど、もしかしたら……。

何度も考えるうちに、何となくそう思うようになってきたのだ。

「あのね……それで考えれば、この世の未解決事件は全て幽霊とか化け物のせいになるじゃない」

「でも、人間じゃ出来ないような事だっけ起きてるよ」

「暑さで疲れてきたんだね、美鈴も」

んな事がある筈がないではないか。

呆れる香奈だが、美鈴はまだ何かを考えているようだ。

とうとう暑さで頭の思考回路が歪んできたらしい。

「とにかく、何処かお店にでも入ろうよ」

「え？ 事件現場に行かないの？」

さつき、そんな事を言っていたではないか。

「行かないよ」

「へ？」

「お金無いもん」

香奈の今月のお小遣いは既に消えて無くなっている。

「……」

「美鈴が出してくれるなら、別だけど」

「……私も、ないわ」

だって、読みたかったミステリー小説を買ってしまったし。

「……現実はこのまんだよ」

お金がなければ何にも出来ない。

所詮中学生の財力で出来る事なんてごく僅かなのだ。

「出だしから壁にぶち当たるなんて…… ってか、これじゃあ何にも出来ないわよ」

と、くらりと目眩が美鈴を襲う。

「八方塞がりで気が遠くなったみたい」

「いや、それ熱中症間近だって」

香奈が美鈴の腕を掴み、昨日花を買った花屋へと歩き出した。

「で、此処に來たと」

「うん」

出迎えてくれた店長に事情を話し、店員の控え室で美鈴を休ませた香奈は、出してくれたジュースを飲みながら頷いた。

そんな香奈に、机を挟んで座る店長が苦笑する。

美鈴はアイスノンを枕にしてすぐ横のソファで休んでいた。

冷房が効いている控え室は心地良く、ようやく心地つけた気分だった。

「水分補給はきちんとしなよ」

「金欠なんで無理です」

ジュースのストローを咥えたまま香奈が答える。

空になったグラスを下げると、店長は新しいグラスに今度はお茶を入れて香奈の前へと出した。

「ジュース」

「駄目。二杯目はお茶にしときなさい」

「店長の意地悪」

ここで母がいれば、人の世話になっておきながら何を言つと怒られただろう。

「あと、塩分もとっておいた方がいいから、その煎餅をつまみなよ。本当は梅干しとかあればいいんだけど」

「梅干しは苦手だからヤダ」

「あはははは」

ふてくされた香奈に思わず声を上げて笑った店長だったが、一頻り笑った所で表情を改める。

「そういえば仲直りはしたのか？」

「は？」

「だから、梓って子とだよ。昨日喧嘩したんだろ？」

「その頬の傷も、その子と？」

「うん。私の言い方が悪くて怒らせちゃった」

「何が原因だったんだ？」

店長の質問に、香奈はお茶を飲もうとしていた手を止めた。

店長とは小さい頃からの付き合いだ。

それなりに気心だつて知れているし、実は悩みとかも相談した事はある。

しかし、幾ら店長だつて、椿が話した事を伝えれば戸惑う筈だ。自分だつて、信じられないのだから。

香奈は考えた。

考えて、考えて、結論を出した。

「別に、何でもない」

店長には内緒にしておく事にした。

証拠が何もないのだから、言った所で夢を見ていたのだと言われればそれで終りだ。

わざわざ、困らせなくてもいいだろう。

誰かに助けて欲しいという気持ちもあるが、今の時点では助けどころか鼻で笑われて終りだと、香奈は分かっていた。

「……まあ、何か相談したくなったら、すぐに話しなよ」
「はい」

それから数時間。

夕方近くなつて、ようやく美鈴が起き出してきた。

「なんか凄く寝ちゃった」

「疲れてたんだよ」

結局、今日一日花屋で過ごしてしまった。

「あゝ、もう！！ 今日を除けばもう五日もないのに」
「だよな」

そこに仕事に戻っていた店長が控え室に入ってきた。

「あ、起きたんだ」

「すいません、お世話になりました」

「いいよ。それより、熱中症で倒れる人が多いから気をつけなよ」
店長の注意に美鈴が恐縮しながら頷いた。

「で、香奈ちゃん」

「何？ 店長」

「さっきお母さんから花の注文が入ったんだ。で、丁度香奈ちゃん此処に居るし、持って帰ってくれと嬉しいんだけど」

「いいよ」

「んじゃ頼むね。ちょっと今込んで花束作るのに時間がかかるから、もう少し待って欲しいんだけど」

「じゃあ外で待ってる——って、代金は」

「あ、それは後で貰うから大丈夫」

そう言つと、店長が再び店へと戻っていった。

「美鈴、歩ける？」

「うん。外に行こう」

そうして二人で連れ立って控え室を出た。

店内は、エアコンが効いていてひんやりとしていた。

寧ろ、少し寒いぐらいで、香奈と美鈴は店の外へと出る。

すると、昼間に比べて涼しい風が二人を包み込む。

「涼しい」

「この位が丁度良いね」

控え室よりも、少し暖かいぐらいの温度に香奈達はホッと息をはく。

駅の直ぐ近くという事もあって、人通りは多かった。

しかも、帰宅時間と重なり、多くの人達が家へと向かって歩いて行く。

それをぼんやりと見ていると、こちらに向かってくる者達が見えた。

どうやら、花屋に用があるらしい。

「うわー、綺麗!!」

「ここが有名な『フラワーガーデン・May』なんだ」

「一度来たいと思ってたのよね」

カジュアルな服を華麗に着こなす、二十代中頃の女性三人。

手には、東京都の有名花屋が載っている雑誌が握られていた。

「しかも、この店員は全部イケメンだって話だし」

「嘘!! 見たい見たい!!」

「けど中混んでるみたいよ」

「もうちよつとしてから入ろうか。外の花も見たいし」

そう言うのと、外においてある鉢植えや花束を手取る。

きゃあきゃあど騒ぐ彼女達に、美鈴は苦笑し、香奈は少しうんざりとした表情を浮かべる。

こういつ甲高い声は……なんというか、耳に酷くこたえる。

だが、ふとその耳がある会話を聞き取った。

「そつえばさ、都心で起きてる事件の事なんだけどさ」

「ちよつと、今話さないでよ」

「楽しい気分ぶち壊しじゃない！」

「ごめん。でさあ」

一応謝りはするが、話は続けるようだ。

「実はさ、今回の事件でうちのおばあちゃんが言ってたのよね」

「何がよ」

食いついてきた友人に気をよくした話し手でしたり顔で笑う。

「昔の事件を思い出すって」

「はあ？ 昔の事件？」

「うん。昔にも、似たような事件があつたんだって」

「似たようなって、今回の？」

「らしいよ。やっぱり、殺された人はバラバラだったって話」

「ふん。でも、死体をバラバラにする事件は結構起きてると思うけど」

「いやいやいや。殺し方だけじゃなくて、決まった日に犯行を行う部分とか」

「嘘！！ じゃあ、まさかその時の」

怯えた様子の友人に、話し手の女性がパタパタと手を横に振った。
「んなわけないじゃない。事件は三十年以上も昔だよ？ 犯人は捕まつてないらしいけど、もうおじいちゃんだよ」

「そ、そうだよね…… あ、びっくりした！ けど、なんていう事件？」

「そこまでは知らない。けど、やっぱり東京で起きたらしいよ」

「へ、でもそんな事件があつたんだ」

「おばあちゃんもすっかり忘れてたって言ってたけどね。当時は凄く騒がれたらしいよ」

と、そこで花屋に居た客達の半数が買い物を終えて出て来た。

「あ！！ 中に入ろう！！」

一人が促し、三人はさっさと店内へと入ってしまった。

「……今のって」

「うん……」

似た事件？

香奈と美鈴は顔を見合わせる。

「……まさかね」

「そんなわけ、ないよ」

あの三人の一人ではないが、似た事件など起きている。

その時の犯人は捕まっていないらしいが、三十年も経過している。
だが……ひっかかる。

何かが……。

『おばあちゃんもすっかり忘れてたらしいよ』

「忘れてた……」

ワ ス レ ナ イ デ

「っ?!」

「香奈?!」

ズキンと、頭が痛む。

今の……は。

すぐ近くで、耳元で囁かれた様な声は酷く弱々しく、けれど強い
懇願に満ちていて……。

「香奈、大丈夫?!」

「う……うん」

頭を振り、額を流れる汗を拭く。

もう、聞こえない。

何だったのだろう……今のは。

「けど、なんかイヤだね」

「え？」

イヤだと呟く美鈴を見れば、何処か不安げな視線とぶつかった。

「だって、同じような事件なんて……」

「……」

「あれかな？　もしかしたら、模倣犯とかかも」

何かの拍子に昔の事件を知って、誰かが同じ事をしているのでは

ないか。

ミステリー小説好きの美鈴らしい予想だった。

「……あのさ、美鈴」

「ん？」

「その事件、調べられるかな？」

「え……う、うん。出来るんじゃない？ ネットとか……図書館とか」

「……じゃあ、調べようか」

「調べるって……図書館はもう閉まってるよ?!」

「じゃあ、ネット」

「ネットって……香奈持ってるの？」

「ううん」

「……明日にしよう。明日は祝日だから学校も休みだし」

次の火曜日まで、今日を除けば五日と少し。

余り時間はないから、急がなくては。

「って、時間がないなら徹夜で調査するもんだよね、普通」

「やったが最後、親に怒られて明日は一日部屋で説教よ」

香奈は自分の両親を思い出すこと数秒。

「だね」

母がツノを出して怒る姿が思い浮かび、素直に頷いたのだった。

第十三話 図書館

次の日、香奈は美鈴と駅前で待ち合わせして図書館へと向かった。図書館は駅から歩いて三十分ほどの所にある森林公園の中に建っていた。

土日祝日は、朝の八時半から開いている事もあり、香奈達は朝一番に着くように早起きした。

特に、図書館にあるインターネットは人気が高く、すぐに席が埋まってしまう。

しかも、一度に三十分しか使用出来ないなんて短すぎる。

というか、家のパソコンを使えばいいのにと香奈は毎回思う。

「どっちかの家にネットがあれば良かったんだけどね」

パソコン、ネットが一般家庭にも普及したこのご時世。

殆どの者達がネットに繋いでいる。

しかし、香奈と美鈴はネットどころか携帯電話すら持っていないかった。

香奈の所の理由は、給料が薄給だからで、余計な所にお金を割いていられないそう。

美鈴の家の場合は、単純に父親がネット嫌いだからである。

別に、父親が嫌っていても娘が携帯を持ったりネットをしたする分には構わないではないか——と思うのだが、色々と事情があるらしい。

前にも、美鈴がネットをつけて欲しい、携帯電話が欲しいと頼んだら、怒って怒って凄じ事になったという。

それ以来、美鈴は携帯電話の類を欲しがる事はなくなったから、その怒りっぷりは本当に凄かったのだらう。

「まあ、無いものは仕方ないよね」

「そうだね」

無いものを今更言っても仕方が無い。

そして今日も酷く暑く、香奈はハンカチで汗を拭う。

最近ではハンカチが手放せなくなっている気がする。

しかも、なんだかアスファルトが余りの暑さでぐやりぐやりと揺れている様に見える。

絶対、線路も暑さの余りぐんにやり歪んでいるに違いない。

……線路曲がったら脱線するって!!

その時、カンカンと踏切が締まる音が聞こえて、ビクリと香奈は体を震わした。

しかし、列車は何事もなく横のフェンスを挟んだ横を通過していった。

……だよね、そう簡単に脱線するほど線路が歪んでたまるか。

「にしても……美鈴、なんか凄く気合い入ってない？」

「はあ？」

キョトンとする美鈴に、香奈は口を開く。

「その格好だよ」

香奈の服装は、花の絵柄がプリントされた白いＴシャツと膝までの薄紫色のフレアスカートにサンダルと言う姿だ。

髪型は、いつも通りのポニーテールで、化粧なんて全くしていない。

一方、美鈴と言えば、膝丈まであるピンクの花柄シフォンのシヤリングキャミワンピを身に纏い、靴は白いミュール。

頭は、ふわふわの髪を綺麗に巻いてアップにし、可愛い容姿を何時もと違う大人びた姿へと変えている。

そしてうつすらと化粧までしていた。

香奈もスカートははいているが、美鈴の女の子らしさとは比べものにもならない。

今もこうして歩いているだけで、ちらちらと美鈴の方を見る男達がなんと多い事が。

と同時に、美鈴に声をかけたい男達が香奈に邪険な眼差しを向けてくる。

ってか、中にはサラリーマン風の男まで……。

年齢差を考えてくれ。

美鈴はまだ中学生、しかも中一だぞ。

いや、でも美鈴は本当に可愛いし、何よりも肌も白くて羨ましい。どんな日焼け止め使ってるんだろ。

農家の家の娘だから、生半可な日焼け止めではない筈。

って、周囲の視線が痛すぎる……。

「あ、着いたよ」

周囲の視線にげんなりしつつも、美鈴の声に我に返れば何時のまにか図書館が目の前に迫っていた。

「大丈夫？」

「うん、まあ、うん」

なんだかもの凄く疲れている香奈に、美鈴は首を傾げつつ、図書館へと目を向けた。

赤煉瓦造りの二階建ての外観は、以外に開放感のある造りをしていた。

入り口から見える壁一面の硝子張りのそこは、太陽の光を反射させ強い照返しを作り出している。

だが、実はその硝子張りの前は噴水と花畑のあるちょっとした休憩場所となっており、傍においてあるベンチに寝っ転がっている強者の姿も居た。

絶対に、熱射病で救急車が来ると予測しつつ、香奈は自動ドアへと向かった。

二重の自動ドアを潜り抜けると、右側に受付がありそこでパソコンを借りる手続きをする。

「はい。一回三十分ね」

「はい」

「また使いたい時は、受付まで来てね」

手際よくパソコンの使用許可証を手渡す受付の女性に香奈と美鈴は返事をする。

「それと、お昼ご飯は決められたスペースで食べることに。パソコンのある場所からすぐ近くだから。はい、地図ね」

図書館の決まり事が書かれた紙と一緒に渡される。

「じゃあ、行つてらっしゃい」

「あの、昔の新聞とか事件とか調べられる場所つてありますか？」

美鈴の質問に、受付の女性が一瞬目を丸くする。

「あるけど……学校での授業が何か？——って、ごめんなさい。

プライバシー侵害ね、これって」

「いえ。ちよつと歴史の勉強で」

「そうなの。なら、地図のこの部分に」

快活に笑う受付の女性が丁寧に教えてくれた。

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

二人で頭を下げ、受付女性の朗らかな声を聞きながらパソコンスペースへと向かった。

パソコンスペースは一階の奥。

ガラリと音を立てて引き戸を開ければ、他のスペースよりもひんやりとした空気を感じる。

大量の機械が置いてあるせいだろう。

三十台ほどのパソコンがあるが、朝一番にも関わらず、既に幾つかの席は埋まっていた。

指定された席に座り、パソコンを起動させる。

「へー、他のスペースからの本の持ち込みも可なのか」

たぶん、パソコンと一緒に資料集めする場合に限るだろうが。

「パソコンが立ち上がったよ」

美鈴の言葉に、香奈は画面を覗き込んだ。

「香奈、打つ？」

「いんや、やめておく」

小学校の時にパソコンの授業はあったが、どうにも苦手でいつも補習をさせられていた。

時間内に決められたエクセルとワードの課題を作るなんて、小学生には難しすぎる。

しかし、他の同級生達はみんなすんなり合格していたから余計に腹立たしい。

「で、検索ワードだけど、どうする？」

「うーんと」

昨日の女性達の話思い出す。

「確か……三十年前」

「三十年前」

パチパチと、美鈴がワードを打つ。

「死体バラバラ、未解決、東京」

香奈の言葉を美鈴は次々と打ち込んでいく。

「で、エンターっと」

ポンっと、美鈴がマウスでクリックする。

「うわっ！ 結構ヒットしたよ」

「結構って……そんだけ未解決が多いって……」

問題では無いだろうか。

「香奈、呆けてる暇なんてないよ！！ あと、二十分しかないんだから」

「はいはい」

とりあえず、色々とクリックしてみる。

「これも違う、これも違う」

確か決まった日に犯行を行うのも同じだったと言っていたが……その条件には当てはまらない。

「検索ワード増やしてみる？」

「うーん……じゃあ、犯行日が決まってるって打って」

美鈴がパチパチと打ち、エンターを押す。

が、今度は一気に検索結果が一つもなくなった。

「ワードが不的確だったみたい」

「……仕方ない。もう一度戻そう」

「はいよ」

それから、また何度か試してようやく、一つの事件に辿り着いた。
「……え」と……うん、これだ」

開いたページは、未解決事件を集めたものだった。

時が経ち、幾つもの新しい事件が起こる中で古い事件が人々の記憶から風化し忘れ去られていく中、それでもこのような悲惨な事件が起きた、絶対に犯人を見つけるのだという有志達の悲痛な思いによって作られたHPだった。

見れば、警察関係者や被害者遺族の団体などもリンクしている。

香奈が、書かれている概要を読み上げていく。

「最初の事件発生は、今から三十年前の19××年の6月×日の火曜日。被害者は都心部に住む事務職の女性で、人気の無い河川敷に遺体が放置されていた。殺害方法は殺してから四肢をバラバラにするという残酷なもの……すぐに捜査は開始されたが、その次の火曜日には第二の事件が」

そこまで読んで、ポンッと後ろから肩を叩かれた。

「きゃっ！」

悲鳴を上げて後ろを振り返った香奈は、口元に指を当てる若い男の図書職員に気付き口を手で覆った。

「時間だよ」

「え？」

「パソコン。次の人達が待ってるから。まだ使いたいなら、受付でもう一度許可証を貰ってきてね」

時計を見れば、既に十分も過ぎていた。

そして、職員の後ろには次の使用者が申し訳なさそうに立っていた。

第十四話　好き好み

パソコンという便利道具を奪われた香奈達は、その後急いで受付と向かう。

だが――無情にも。

「ごめんなさい、後二時間待ちなんですよ」

受付の女性の笑顔が、落胆した心をいっそう刺激した。

「二時間待ち……」

「それでいいなら、許可証を出すけど」

「美鈴、どうする？」

「一応貰っておこう」

「じゃあ、これね。時間まで、他の場所で調べてみたら？　歴史関係のエリアは今空いてるし。それに、昼食時間になったらパソコンを使う人も減るわよ？」

「うーん」

確かに、受付の人の言うとおりだ。

「とりあえず、一時間ぐらい歴史関係の場所で調べて見ようか」

「そうだね」

お昼ご飯は持ってきているし、急いで食べて戻ってくればいい。

「あ、歴史関係ですけど、昔の刑事事件ものとかもありますか？」

「え？　そんなの調べてるの？」

受付の女性がギョツとした顔をする。

確かに中学生が調べるようなものではない。

「えー、その、学校で警察の事に関して調べてて」

「そ、そうなんです。その、警察の仕事とか、実際の事件も絡めて発表するんですよ」

「……なんか、凄い事してるのね、学校って」

「あはははは」

「あはははは」

驚く受付の女性に、香奈と美鈴は乾いた笑みを浮かべた。

「そうね……事件史とか……昔の事件が書かれた新聞の切り抜きのファイリングとかはあったと思うけど……あ、確か、戦後の未解決事件ファイルとかもあったかな……。でも、それはオカルト関係の所においてあった気がする」

「オカルト……」

「って、未解決事件がオカルト関係の場所においてあるってどんだけ？！」

「借りられてませんか？」

美鈴の質問に、受付の女性がパソコンに向き直る。

「ちよつと待ってね……え」と

パチパチと、もの凄い速さでタイピングして貸し出しをチェックする。

「あ、大丈夫みたい。誰も借りてないわ」

「ありがとうございます」

ペコリと、美鈴が頭を下げ、香奈も遅れて頭を下げる。

「行こうか、香奈」

「うん」

そうして二人で、まずはオカルト関係の場所へと向かった。

辿り着いた先は、パソコンスペースと同じぐらい図書館の奥にあるスペースだった。

但し、パソコンスペースからは少し離れている。

「って、流石はオカルト関係置き場」

なんだか、どんよりとした空気が流れている。

しかも人気がないから、余計に嫌な感じがする。

やっぱり、そういうものがおいてある場所には集まりやすいのだろうか。

そうして躊躇する美鈴を余所に、香奈はスタスタと進んでいく。

「か、香奈、凄いな……」

「は？」

とりあえず置いて行かれたらまずいと、美鈴は走り出し香奈の隣に並んだ。

「ここ、気持ち悪くない？ 暗くて、なんだかどんよりしてて」

「そう？」

そんな気は全くしない。

「……鈍い？ それとも、鈍感？」

「いや、それ一緒だし。しかも、鈍いつて酷い事言うよね」

酷いというか、この空気の中でとっと動ける香奈が凄い。

美鈴には靈感の類はないが、それでもあんまりここは良い感じがしない。

ふと視線を横にそらせば、呪い関係の本があった。

しかも、何度も読み込まれた感がある所が恐ろしい。

というか、ここにある本の全てがくたびれた感がある。

ここまで読み込んだって事は……。

「は、呪いに心霊特集、サイキック現象、他にも沢山あるね」

というか、ぎっしりと本棚に詰まっている光景に、何処からこんなに集めて来たのかが不思議でならない。

「未解決ファイル、未解決ファイル」

と、その時バサリと後ろで何かが落ちる音と、美鈴の悲鳴が聞こえてきた。

「何っ！」

「い、今、この本が落ちてきて」

それは、心霊特集の本だった。

開いたページには、でかかどと心霊写真が載っている。

そこに映っている女性の霊が自分を睨んでいるようで、美鈴はまた悲鳴をあげた。

「詰め方が悪かったんじゃない？」

「詰め方って、しっかりと——」

パラパラと、風もないのにページがめくれていく。

新たなページはやはり心霊写真で、心霊スポットで取ったものら

しい。

「ひっ！」

そこには、やはり霊が映っていて美鈴をしつかりと見ていた。

「い、いやぁ！」

「美鈴、ここ騒ぐの禁止」

友人の事より図書館の決まりを取った香奈が腹立たしい。

「香奈……」

「ってか、偶然だよ。冷房も効いてるし、その風じゃない？」

それにしても、一枚ずつ見せつけるようにめくれているが。

と、香奈がその雑誌を手取る。

持ち上げられていく雑誌から目を離せなかった美鈴は、その女性霊を見つめた。

また、こつちを見つめて――。

ドスツと、女性霊が映る場所に拳がめり込んだ。

「ひっ！」

美鈴の恐慌などなんのその。

心霊写真に一撃を食らわした香奈は、その後も何度も殴っていく。そうして五分ほど経ったか。

「これで良い？」

「……」

「ってか、こんなのは所詮造り物なんだから怖がるだけ無駄だよ」
だよね。

あんたの方が怖いよ。

心霊写真をボコボコ殴るなんて考えも及ばなかったよ。

しかも、図書館の本なのに。

香奈はさっさと手の中の雑誌を本棚に戻す。

ってか、呪われないだろうか。

「……恐くないの？」

「造り物でどうして怖がるのよ」

再び目的の本を捜し始める友人に問えば、不機嫌そうに答えが返

ってきた。

「私、そういうの信じないの」

信じない……というよりは、なんだか信じていた恋人に裏切られた女性の様な口調だ。

「……香奈、オカルト関係って嫌いだったけ？」

意を決して聞いてみれば、予想外の答えが返ってきた。

「別に嫌いじゃないよ」

「へ？」

「純粹な読み物としては面白いのもあるし——って、不謹慎か」

「じゃあ、なんで」

「だから、所詮はフィクションとしか思っていないだけだよ」

「……フィクションって……」

「ああ、でもお化け屋敷とか、そういうのは嫌いじゃ無いよ」

小学生の修学旅行で訪れた遊園地では、桜子に付き合わされて何回か入った。

「凄くドキドキハラハラしたし」

「そ、そう……」

「なんて言うか……心霊スポットよりもハラハラしたわ」

「ふ、ふゝん……って、何それ。香奈は心霊スポット行った事あるの？」

信じてないのに、そんなオカルト大好きな者達の聖地に？！

すると、香奈がコクリと頷いた。

「あるよ。行った事」

それも、一度や二度ではない。

「い、意外だわ」

「なんでさ。私だって小さい頃は幽霊とか信じてた可愛い頃があるんだよ？」

自分で可愛いって言ったらわけない。

「けど、その期待は全て裏切られたわ」

最初に心霊スポットに行ったのは、小学校一年生の時。

悪ガキ達の誘いで、何時のまにか香奈も参加する事になっていた。そこは地元では、最凶の心霊スポットと言われていたが……。

「な——んにも、起こらなかったの」

それから、二度目、三度目と心霊スポットに行ったが、結局何も起こらなかった。

そうして二桁を数える頃には、心霊スポットなんてただの廃墟だ、とは思わなくなった。

「なのに、他のみんなの時は違うって言うのよ」

香奈と一緒に行った後に、別の子供達が一緒に行くと香奈抜きで再びその場所に行った時だ。

幽霊に出会ったどころか、呪われて除霊やらの大騒ぎになったという。

それも、一度や二度では無い。

しかし、香奈と一緒にいって行くと何も起こらないのだ。

「そして何時のまにか、私は外されるようになったわ……」

「香奈……」

いや、その前にそんなやんちゃな事をしていたなんて……。

そもそも、心霊スポットは遊び半分の気持ちで行く事は絶対に駄目な場所だ。

有名なお坊さんの話では、そういう事をするというのは霊を冒瀆する事で呪われても仕方が無い事だと言う。

「香奈……巡りはやめなよ。心霊スポット巡りは。いや、その前に遊びで行っちゃ駄目だし」

「……」

「ってか、なんでそう何度も何度も行ったのさ」

「だって……東雲君に誘われたし……」

「東雲……って」

顔良し、頭良し、運動神経良しの三拍子揃った小学校時代の同級生。

女子生徒達の多くが王子様と憧れていた。

しかし——彼は桜子にぞっこんだった。
それに、確かに顔も頭も運動神経も良いが、性格はあんまり良くなかったぞ？

二股とかもかけてたし、遊んでたし。

桜子もそれを知っていたから、絶対に告白を受け入れなかった。

……香奈、東雲が好きだったんだ。

ってか、意外と趣味が悪いな。

いや、それよりもだ。

「それ、絶対に利用されてる」

東雲の狙いは桜子。

しかし、桜子は東雲の悪癖を警戒して絶対に近付かなかった。

だが東雲が諦める事はなく、あの手この手を利用して近付こうとした。

当時、香奈と桜子がいつも一緒に居るのは誰もが知っていた。

小学校前からの付き合いで幼馴染みでもあった為か、桜子は何かと香奈の世話を焼き一緒に居た。

平凡な香奈と、学校の才媛の桜子。

よく、『月とすっぽん』の組み合わせと揶揄されていたが、ようは桜子に近付きたい者達のやつかみによるものだった。

幼馴染みというのを利用して桜子を束縛していると言うのが、もっぱら周囲の言い分だったが、美鈴からすれば桜子が一方的に香奈に纏わり付いていた事に気付いていた。

つまり、香奈の行くところに美鈴も同行していた。

たぶん、香奈はそれを東雲に利用されていたのだろう。

自分の誘いは絶対に受けない。

ならば、香奈をダシにして桜子に近付く。

男の風上にもおけない最悪な男だ。

そんなんだから、桜子を追い掛けて受けた超名門校に落ちるのだ。彼は今、マンモス校の方に通っている。

しかし……香奈をダシにするとして、なんでその行き先が心霊ス

ポットだったのだろう。

選択からして色々と間違っている気がする……。

まあ、あの頃は心霊ブームだったし……って、今も同じか。以前よりも更に加熱している気がする。

「ってか……東雲もなんだって、心霊スポットに誘うんだか」

「時代を先取りしてたのよ」

目を輝かせる香奈に、美鈴は後退った。

まさかとは思うが……いや、今も東雲に恋してる。

だって、心霊スポットに誘うを男の事を時代の先取りって……ど
んだけ恋は盲目なのよ!!

騙されてる、騙されてるんだって!!

「実は、先月も遊ぼうって誘われたんだ」

「へ？」

「でも、一緒に行くはずだった桜子が行けなくなつて……そうしたら、東雲君も用事が入つてさ……」

美鈴はあまりの不憫さに泣きたくなつた。

香奈の男を見る目の無さはもとより、この友人を騙す東雲に憎悪を抱く。

その時、呪い関係の本が目に入り、それをそつと手に取る。

『女を手玉に取る憎き男を消す百の呪い』

「あれ？ 美鈴、何持ってるの？」

「うつん……ちよつとね」

人を呪わば穴二つ。

呪いに頼るのはいけない事だが、どうにかして奴に天誅を下した
かった。

と、良い考えが浮かんだ。

「桜子に告げ口してやろう」

そう——桜子に自分で始末して貰えば良い。

以前、あまりにしつこい告白者を笑顔でボコボコにしていた絶世
の美少女を思い出し、美鈴は一人ほくそ笑んだのだった。

第十四話 好き好み（後書き）

香奈を利用する東雲君。

後に、香奈の相手役にボコボコにされる哀しいキャラです。

第十五話 被害者Ⅱ加害者？

「あ、これだね」

香奈が未解決事件ファイルを取り出す。

それは、数百ページからなるA4雑誌だった。

目次をチェックすると、パラパラとページを捲る。

「……うん、あった」

「香奈」

「うん？」

「それ見るの、向こうの読書スペースにしない？」

「え？」

「いや、だってここ……あんまり空気が良くないし」

なんだか、さっきから冷たい空気が強くなっている気がする。

確か、霊が居る場所は温度が下がると聞いた事がある。

冷房のせいだと思いたいが、それにしても重苦しいねっとりとした感じもある。

まるで、底なし沼の中にずぶずぶと沈んでいく様で……肌を見ると、しっかりと鳥肌が立っていた。

「うーん、でも本を返す時に面倒だし」

そうだ。

本を返すという、手続きがあった。

しかし……とにかく、今は早く此処から出た――。

「……」

「美鈴？」

香奈が自分の顔の前でパタパタと手を振るのも気付かない。

美鈴の視線は、香奈の背後の壁に釘付けとなる。

「あ……あ……」

薄暗さが、増した気がする。

と同時に、異常な寒さが美鈴を包み込む。

だが、それすら気付かない。

オカルトエリアの最奥の壁から視線が外せない。

その壁から生える……黒い腕から。

おいで……おいで……と、手招きする手から。

と——その手が、ゆっくりと伸びて香奈の背後に迫る。

「か、香奈！ 後ろっ」

「——！！」

香奈の目が光り、凄まじい勢いで後ろを振り向き持っていた雑誌を丸めて右から左へと勢いよく、薙ぐ。

だが、香奈はスカツとした手応えにキョトンとした。

「逃がしたみたい。美鈴、蚊は何処行つたの？ ……美鈴？」

蚊……蚊と言ったのか？

美鈴は、今日の前で起きた事を一部始終目撃したまま固まっていた。

自分には靈感などない。

ない筈なのに、有り得ない場所から生えた手を見た。

まるで、自分の所に招くようにして手招きする手が、香奈へと伸びた。

それを見た瞬間、もしあの手に捕まればそのまま壁の中へと引きずり込まれていく様な気がした。

駄目だ。

あの手に捕まってはいけない。

靈感などない筈なのに、激しく警告する本能が自分に叫び声を上げさせた。

と同時に、香奈はくるりと後ろを振り向き丸めた雑誌を横に薙いだ。

と、それは見事に黒い手に当たった——だけではなく、雑誌に弾かれた手は霧散して消えてしまった。

と同時に、あれほど場を支配していた禍々しい圧迫感が消え、驚くほど体が軽くなった。

しかも、先程の薄暗さが嘘のように、周囲が明るくなっている。どうやら、さっきの黒い手が原因していたようだ。

「美鈴？ どうしたの？ もしかして、蚊に食われたの？」

だが、一番美鈴を驚愕させたのは、香奈には黒い手が全く見えず、しかも自分が倒したとも知らず、自分の叫びを完全に勘違いしている事だ。

蚊って、何だ。

蚊って！

蚊如きでそんな叫びを出すわけがない！！

しかし、説明するだけの気力もなく、美鈴は香奈の手を引っぱりオカルトエリアのそこから逃げ出した。

本を返すのは、図書職員の人にも押し付けてしまえばいい！！にしても、どうして自分まで変なものが見えるのだ。

今までこんな事、なかった筈なのに。

まあ……嫌な気配を感じることはあったが、それだって気のせいで済ませられたレベルだ。

一体なんでこんな事に……。

いや、きつとこれはただの偶然だ。

霊とか、そういうのは波長が合うと簡単に見えてしまうと聞く。だから、もう見えませんようにと願いまくれば大丈夫。

ようは、気の持ちよう。

自分の意思で何とかなるものなのだ！！

「美鈴、ちよつと腕が痛いっ」

「え、あ、ごめんっ！」

「ってか、どこまで行くの？ ここ、ご飯食べるスペースだよ」

「え？」

気付けば、そこはカフェテラスのような造りをした硝子張りのエリアだった。

白いテーブルが十数個あり、既に食事を取っている人達の姿があった。

幾つか自販機も設置されており、飲み物だけでなく食べ物も買えるようになってる。

「もしかして、先にご飯食べるつもりだった？」

「え……と」

「別に、ここでも本を読んで良いみたいだし……先に食べちゃおうか」

香奈の提案に、美鈴は促されるままに頷いた。

そして二人は窓際のテーブルを確保した。

四人がけのテーブルは二人で使うには少し大きかったが、荷物を置いたりすると、丁度良い感じになる。

「ご飯、ご飯」

にこにこ笑いながら、香奈が自分の手提げからお弁当を取り出す。

大きな巾着袋から出て来たのは、ベーコンとレタス、チーズと卵を挟んだ大きなコッペパンが三つ。

更に、空揚げと野菜サラダ、リンゴが入ったタッパに、烏龍茶のペットボトルだった。

「美鈴は？」

「あ、うん」

美鈴も、母が作ってくれたお握り二つにおかずの入ったタッパとお茶のペットボトルを取り出す。

「うーん！ やっぱりパンは美味しいな」

コッペパンを口に押し込む姿は、どう見てもハムスターが頬袋に餌を入れる姿そのものだった。

思わず笑みがこぼれる美鈴は、香奈の手元に気付いた。パラパラと未解決事件ファイルを捲っている。

「美鈴、あつたよ」

一つ目のパンを平らげて香奈は指を指した。

そこには、先程ネットで見つけた事件が書かれていた。

と、香奈が周囲に配慮してか小さな声で事件を読み始める。

が、別にそんな事をせずとも、周囲は聞こえていないだろう。

ウォークマンで大音量の音楽を聴いている者や、熱心に恋人と話している者、また食事より自分の勉強に集中しているものと、とにかく此方には無関心な者達が殆どだった。

自分達が入ってきた時ですら、全くこちらを見なかったほどだから、よほど集中しているのだろう。

「ネットと同じ——今から三十年前の19××年の6月×日の火曜日。被害者は都心部に住む事務職の女性で、人気の無い河川敷に遺体が放置されていた。殺害方法は殺してから四肢をバラバラにするという残虐なもの……すぐに捜査は開始されたが、その次の火曜日には第二の事件が起きた」

そこまでは、ネットで見た。

「第二の事件は、親子連れが被害にあった。やはり、人気の無い所に遺体が遺棄され四肢をバラバラに切断されていた。第三の事件は、第二の事件の一週間後で……サラリーマン三名が遺体となって発見される。そして第四の事件は、夜遊びをしていた女子高生二人が被害者となり……第五の事件——」

香奈は、そこで言葉を句切る。

「……第五の事件の被害者は……女子中学生一名。全身に幾つもの切り傷と首の大きな傷、片目を失い、左腕を切断された状態で見付かった」

「……それって」

傷だけなら……いや、女子中学生というのと同じだ。

「か、香奈」

「ま、まさか……」

香奈は美鈴に引きつった笑みを見せると、続きを読み進める。

傷の場所とか、女子中学生とか、似ている部分には香奈も気付いていた。

だが、そんなわけない。

顔写真があればまだしも……って、あったとしても顔を見ていな

い自分には分からないが。

しかし、絶対に有り得ないと否定しようとする思いを、自分の中の何かがグイッと押留める。

「えっと、事件は全て午後七時〜午後八時の間に起きており、犯人は『昭和の切り裂きジャック』として世間に恐怖をもたらした」

だが、そこで香奈は読むのを止めてしまった。

「……続きは？」

「……ないわ」

「え？」

「第五の事件後、第六の事件を予測して警察が動いた。しかし、次の火曜日、同時刻、事件は起きなかった」

「起きなかった？」

「その後、更に次の火曜日を迎えるが、やはり事件は起こらず、第五の事件を最後に犯人は犯行を止めてしまった。これは一体どういう事なのか。犯人はまるで『切り裂きジャック』と同じように、その姿を消してしまったのである。しかし、この様な凄惨な事件を引き起こした犯人を許せぬとして、警察は更に調査に力を入れ……」

そして、現在まで迷宮入りとなつたままだという。

既に、時効も過ぎてしまい、捜査本部も解散されてしまった事だけが最後に小さく書き添えられていた。

「香奈……」

「……後は、ネットで探すしかないね」

香奈と美鈴は、第五の事件が書かれている場所を読み返す。

そして読み返していくうちに、香奈の中で否定した筈の考えが少しずつ膨らんでいく。

遺体の状態といい、女子中学生といい、美鈴が言わんとした椿の見た犯人との共通点が多い。

だが、椿の見た犯人はまだしも、第五の被害者は既に死者だ。

犯人である筈がない——と、普通なら言えるだろう。

しかし——そう断言するには、椿の言葉がひっかかる。

椿が犯人の姿を説明した時の――傷の位置、血みどろの姿。生きている筈がないその姿。

それこそ、死者と言い表せる様なその風貌。

いや……もしかしたら、死者だったのかも知れない。

殺されて死んだ、その事件の被害者の女子中学生が恨んで……。

「いや、まさかね」

香奈はその考えを打ち消した。

確かに似ている部分はあるが、現段階では椿が見た相手と本当に同一人物とは限らない。

それに、だ。

香奈は犯人が化け物だという説はどうしても納得出来ない。

確かに、殺された相手が悪霊となって……という話はあるが、あれはお話の中での事だ。

それに、幾ら恨んでいたとしても犯人を手にかけるのではなく、こうして三十年経ってから全然知らない相手を手にかけるなんておかしいではないか。

もしかして、今回の被害者達に何か共通点でもあるのだろうか？

「あのさ、香奈」

「美鈴？」

「なんかさ……この事件と、今回の事件の被害者……似てない？」
「……」

どうやら、美鈴も自分と同じ事を思っているらしい。

だが、香奈と違い否定までいかず、逆に似ている部分を次々とあげていく。

「三十年前の第一の事件の事務員と今回の第二の事件のOL。三十年前の第二の事件の親子連れと、今回の第三の事件の親子連れ……」
美鈴は次々と似ている所をあげていく。

「いや、似ているのは当然じゃない？」

「え？」

「だって、今回の事件は三十年前の事件を知った模倣犯によるもの

かもつていう事で調べに来たんだし」

昨日話していた三人組の女性。

彼女達が、今回の件によく似ていたと話していた三十年前の事件。その話を聞き、模倣犯ではないかと推論を立て、その裏付けを取る為に探しに来たのだ。

だから、似ていても不思議ではないし、寧ろあの女性達の言葉通りなら似ていなければならなかった。

そう——だから、似ていても何らおかしくはないのだ。

しかし、美鈴は違うと首を横に振る。

「美鈴？」

「違う。そうじゃなくて」

「何が違うの？」

似ているという事は、誰かが三十年前の事件を知り、同じような事をしようとして今回の事件が起きた模倣犯によるものという仮定が出来る。

となれば、犯人だって化け物ではなく、悪趣味な人間という事に――。

「違うつ」

美鈴の叫びに、香奈はギョツと友人を見る。

「確かに、それだけなら模倣犯の可能性もある」

美鈴は何を言おうとしてしているのだろう。

しかし、香奈は美鈴の言いたい事が分かった。

「問題は、最後に起きた第五の事件の被害者と……椿」

「や、やめてよ！」

思わず叫べば、周囲で食事を取っていた者達が一斉にこちらを向く。

「す、すいません……」

謝り座った香奈に、美鈴が真剣な眼差しを向けてくる。

「本当の事じゃない。特に、第五の事件の被害者は女子中学生……椿も女子中学生……」

「美鈴は何が言いたいの？」

「だから、共通点が多すぎるの。それに、犯行日時とか、殺害方法も同じだし」

「それは三十年前の事件を今回の犯人が模倣したなら当然の事だよ」
「でなければ、模倣とは言えない。」

「それだけならね」

「それだけ……って、つまり第五の事件の被害者と椿の見た相手は同じだと言いたいの？」

「そんな事、有り得るわけがない。」

「それ以前に、第五の事件の被害者はとくに死んでいるのだ。」
「という事はなんだ？」

「犯人は幽霊だとしても言いたいのか？」

「そうよ」

「美鈴」

「別に私だつて根拠もなしに言ってるわけじゃない」

「犯人は幽霊ですって言う事になんの根拠があるの？」

「……」

「美鈴は黙ったまま答えず、代わりに香奈が畳み掛けるように言った。」

「確かにこんな酷い殺され方をしたら、化けて出て来たっておかしくないかもしれない。でも、それならどうして三十年も経ってから？ 普通なら、速攻で化けて出てくる筈よ」

「それをしなかったとすれば、何か理由があるのか——それとも、そもそも今回の犯人ではないという事だ。」

「つまり、今を生きている何処かの人間が、ここ最近の間に三十年前の事件に影響を受けて今回の事件を起こしたという可能性だ。」

「というか、そっちの方がよほど辻褄が合う。」

「幽霊が犯人なんて、ある筈がないよ。模倣犯だよ」

「確かに似ている事は多いわ」

「でしょう？」

「でも……違う部分もある」

「へ？」

「殺害方法」

「……」

「三十年前は殺してから、四肢をバラバラにした」

美鈴は一言一言を噛みしめるように言う。

「でも、今回は四肢をバラバラにして殺害し、それが直接の死因でそれ以外の傷は何もない」

つまり、一瞬にして四肢を切断して殺害したのだ。

「そんな事……普通の人間に、出来ると思う？」

「……」

香奈は、言葉に詰まった。

確かに……美鈴の言うとおりだ。

睡眠薬を使われた形跡もなければ、体を縛り付けた形跡もない。

いや、その前に幾ら切れ味の良い刃物でも、人間の力で一撃で四肢を切断する事など殆ど不可能だ。

そんな事は、少し考えれば分かる事だ。

到底、人間の仕業とは思えない——そう、マスコミは報道していた。

また機械で行えば出来るかもしれないが、それには大きな装置が必要となるだろうし、そんなものが道端においてあったらまず不審がられるだろう。

それに、何処か別の場所で殺したわけでもなく、現場の状況から遺体の発見現場が殺害現場だと言われている。

では、そんな人間業では到底不可能な殺し方が出来る人間とは誰なのか？

いや、そもそも相手は人間なのか？

香奈の中に、ゾクリと嫌なものが込みあげる。

そんな事はない。

化け物が……幽霊が犯人なんて……お話の中での事なのだ。

しかし、そんな香奈の懇願にも似た思いを余所に、美鈴が口を開いた。

「それに……怪しいのよ」

「何が？」

「この、第五の事件以降に事件が終わった事が」

「え？」

「どうして、犯人が犯行を止めたのになって」

「それは……捕まる恐れがあるからとか」

「本当にそうなのかな……」

「美鈴？」

美鈴が、雑誌を見つめる。

「私……この人が怪しいと思うの」

「第五の事件の被害者？」

「そうよ。だって、その人を最後に事件がなくなった。別に、それだけの理由じゃないのよ」

「じゃあ、なんだって言うのよ」

「椿の見た犯人」

「……犯人？」

「椿の見た犯人は、まだ写真とか確かめてないけど、この第五の事件の被害者と同じ傷を持っている」

「だから、それは」

「もしかしたら、第五の事件の被害者が三十年前の犯人だったのかも」

美鈴の推理に、香奈はぶっ飛んだ。

「はあ?!」

「だって、そう考えられない?!」

「いや、ぶっ飛びすぎでしょ!」

「でも、一利あると思わない? 椿の見た今回の事件の犯人の話を思い出せば、考えられるのよ」

「……美鈴はどう考えてるの?」

「……私は、三十年前の事件自体が、この第五の被害者が犯人なんじゃないかと思うの」

「でも、この人も被害者だけど」

「もしかしたら、別の人に殺されたんじゃないのかな？」

「別の人？」

「模倣犯とか。で、たまたま犯人だったこの人が殺されて……」

「……」

「で、事件は終わった。で、模倣犯は捕まらず。でも……もし、この人には犯行を止めるつもりはなかったとしたら？」

「え？」

「椿から聞いた犯人は……殺す事を楽しんでる感じだった」

「そこまで、読み取っていたのか美鈴は。」

「だから、もしこの殺された人が、本当はまだまだ犯行を続けようとしていたとしたら？ 志半ばで殺されて、悔しかったんじゃない？」

「悔しいって……」

「端からみれば許せない事だけど、それを抜きにしてみても、自分がやりたかった楽しみを断たれた。となれば、心残りは凄いと思う」

「……で、今になって化けて出て、その心残りを晴らしている？」

「ようやく、香奈にも分かってきた。」

「うん……三十年前の事件が第五の事件以降終わった事、三十年前の事件と今回の事件が似すぎている事、椿の見た犯人の事……」

「けど、もし万が一化けて出ているとしても、犯人とは限らないんじゃない？ 殺された被害者が、誰でも良いから恨みを晴らしているだけかもしれない」

「それもあるかもしれないけど……」

「それに……中学生が遺体をバラバラに出来る？」

「複数犯とか」

「……ってか、中学生の頭でそこまで出来るかがまず疑問だよ。絶対に、捕まるって」

「……」

「まあ、でも美鈴の話も筋は通っている事は確かだよね。とりあえず、後でもう一度パソコンでチェックしよう」

筋は通ってはいるが、それは第五の被害者と椿が見た犯人が同一人物であって初めて通用する推理だ。

「う、うん」

そうして、話を中断すると、二人はいそいそと食事を再開したのだった。

第十六話 残酷な時（前書き）

警告）かなり、重たい展開となります。

お話、と割り切れる方のみ、ご覧くださいませ。

感受性の強い方は、控えた方が宜しいと思います。

警告を無視して読まれて不快に思われたとしても、自己責任となりますのでご注意くださいませ。

第十六話 残酷な時

起動音と共に、パソコンが立ち上がる。

再び、検索ワードを打ち込み、先程のサイトへと辿り着いた。

「ここだわ」

被害者ページを美鈴がクリックする。

すると、そこに出て来た被害者の。

顔。

顔。

顔。

「……………」

「……………」

その下には、被害者の生前の経歴などが残されている。

プライバシー保護法など、現在では顔写真を載せるだけでも煩く
なってきたのに、それでも載せている意味は……。

皆、幸せそうに微笑んでいる。

幸せだったのだろう……この写真を撮った時は。

美鈴は、一つ一つの顔をじっくりと見る。

そして……その視線が、第五の事件の被害者へと向けられる。

「……私達と同じぐらいだね」

香奈は、ぽつりと呟いた。

少し面長の輪郭を縁取るのは、左右に三つ編みにした黒髪。

一重の黒い瞳が優しく微笑み、涼やかな目鼻立ちの下には形良
い唇があった。

制服は、セーラー服を着て、学校の校門前に佇んでいる。

学校名は見えなかった。

しばらく、二人で写真を見つめていた。

この少女の笑顔からは、到底想像すら出来ない。

この写真をとった数ヶ月後に、凄惨な事件に巻き込まれた事など。

何処にでも居る、ごく平凡な少女だった筈だ。

香奈や美鈴と同じように、普通に暮らしていた……どこにでもいる……。

——ナイデ

「か、香奈？」

「え？」

「な、泣いているの？」

美鈴の指摘にはっと頬に触れると、涙が伝っていた。

「……なんで……」

——ナイデ

「っ?!」

声が……聞こえた気がして、香奈はパソコンの画面を見つめた。じつくりと……しっかりと見る。

まるで、その少女を目に焼き付けるように。

「……香奈？」

「……」

もう……声は聞こえない。

今のはなんだったのだろうか？

「香奈、大丈夫？」

「……うつん、気にしないで」

だが、ふらりと目眩がして、香奈は椅子に体重をかける。

と、椅子のバランスが崩れて……後ろに倒れそうになった。

「香奈！」

「あ——」

後ろにひっくり返る——。

だが、強い力に香奈は支えられて傾きが止まった。

「……え？」

天井を向いたまま、足は床から離れていた。

でも、椅子に座ったまま。

そんな有り得ない状態で、香奈は呆けたように天井を見つめた。

「——つと」

「きゃっ！」

いきなり後ろから突き上げる力と共に、体が前へと倒される。そのまま、ぐいつと倒れる前の状態に戻された。

「香奈！ 大丈夫？！ あ、すいませんありがとうございますっ」

「あ、いえいえ」

美鈴の視線に香奈は自分の後ろを振り返った。

そこには――。

「あ、貴方は……」

「ははは、これで二度目ですね」

一回目のパソコン使用時に時間が過ぎていると教えに来てくれた、図書職員の若い男性が立っていた。

「香奈も御礼を言って！ この人が支えてくれたから、香奈はひっくり返らずにすんだんだよ！」

「……」

「貧血なら、外のベンチで休んだ方がいいですよ」

「香奈は休んでたら？ 後は私がやるよ。もう時間もないし」

「う、うん……」

「このページを印刷すればいいんだね」

「うん。あと、事件の概要とか一通りお願い」

「了解」

「じゃあ行きましょうか」

そうして図書職員の男性に連れられて、香奈はパソコン室外にある休憩所のソファ―へと横たわった。

なんだか、この前熱射病で倒れた美鈴と同じな気がする。

「大丈夫ですか？」

「はい。ありがとうございます」

「いえ。女性職員にも声をかけておきますから」

「す、すいません」

何から何までお世話になっている気がする。

「それにしても……貴女方だったんですね」

職員の言葉に、え？ と香奈は職員を見上げた。

「いえ——受付の同僚が、昔の事件の事を調べている子達がいるって言ってたもので」

「あ——」

って、プライバシー保護はどうした。

「あ、別に変な意味とかはなくて——その、調べるのを手伝ってあげたら？ って事だったんですよ」

「……手伝う？」

首を傾げる香奈に、職員が微笑む。

「はは——実は私、こう見えても法学部を出てるんですよ」

「……へ？」

「それで、昔の事件に関しても色々調べたりしてまして……」

「そ、そうなんですか？ え、でも図書館職員って……」

「警察官になりたかったんですけど……試験に落ちてしまって」

「は、はあ……」

「まあ……血とか色々苦手だから、なれなくて正解だったかもしれない
ませんね」

別に、警察全てが血に関係するわけではないが。

「それが……殺人事件などを担当する警察官になりたかったんですよ」

「そ、そうなんですか……」

意外だと香奈は思う。

というのも、それぐらい相手はほんわかした青年だったからだ。

見たところ、年齢は二十代後半ぐらいだろうか？

「いえ、三十ですよ、これでも」

「嘘！ 見えないですっ——あ」

失言だった気付くも、既に遅い。

ほんわかした図書職員——自称三十歳がくすくすと笑う。

「いえいえ。で、まあそういう経歴なので、昔の事件とかは詳しい

んですよ」

「は、はあ……」

「もし良ければ——と、捜していた事件ってさっきパソコンに出ていたものですか？」

「あ——」

よく見ていると香奈は思った。

「は、はい……」

「そうですか……そう……あの、事件」

「あ、あの？」

「昔は……当時はかなり騒がれた事件なんですよ、あれ。殺害した後に四肢をバラバラにするという惨い方法。被害者の数の多さ。そして捕まらなかった犯人」

「……」

「沢山……騒がれたそうです。といっても、当時は私もまだ赤ん坊でしたが」

どこか、哀しげに微笑む職員に香奈は口を開く。

「詳しいんですね……」

「——ええ。なんといってもあの事件は……私の、人生の根幹に関わるものですから」

「人生の？」

「はい……忘れられない……大事な、事件なんです」

その横顔が、どこか悲痛なものを帯びる。

ふと、香奈はそれに思い当たる。

「もしか……遺族の」

「いえ——違います」

そう告げた時だった。

休憩所の奥から聞こえて来た会話に、香奈は耳を奪われた。

「なあ、知ってるか？」

「あん？」

「今回起きてる連続無差別殺人事件の事だけど」

休憩所奥のベンチに座りながら、高校生ぐらいの男達が話している。

「あの事件、昔に起きた事件に結構似てるって噂」

「あゝゝ、知ってる！　なんか、昔都心の方で起きた事件！　確か火曜日に起きてたって話だろ？　でも、今回とは発生時刻は大幅に違ったっけ」

「まあ時刻はな。けど、実は被害者も似たようなのが殺されてるみたいだしさ。で、事件を知ってる俺のじいちゃんが言うんだ。似すぎて気味が悪いって」

「確かになあ」

「当ても凄く騒がれたらしいよ、その事件。けど、犯人も捕まらなくて何時のまにかみんな忘れていって……じいちゃんも、今回の事件が起きるまですっかり忘れてたって話だよ」

「うわゝっ！　最悪！　しかも、似たような事件なんて、昔の事件の遺族の神経を逆なでするんじゃないのか？」

「だよなゝ」

「で、いつごろ起きた事件なんだ？」

「確か、三十年前の今頃だったって話だ」

と、そこまで話した所で、男子学生達は話題を変えた。

「……多いんですよ」

「え？」

「昔の事件が、こうやって話題になるのは」

図書職員の男性が哀しげに笑う。

「あ、あの」

「誰もが忘れていく」

「……」

「毎日、沢山の事件が起きていて……大きな事件が起きれば、みんなは鬼の首でも取ったかのように騒ぎます。連日、報道で特番が組まれ、多くの捜査員が派遣されます」

その、通りだ……。

「でも、例えどんなに騒いだとしても……一日、一週間、一ヶ月と日経つにされて、日々起こる新しい事件に押し出されるようにして、古い事件は記憶の奥底に消えていく」

「……」

「でも、仕方ないんです。人間なんてそんなものです。いや、人間は忘れる生き物なんですから」

「職員さん……」

「いつまでも、昔の事だけに囚われていては生きてはいけない。だからこそ……でも、事件の関係者にとっては、いつまでもその事件は忘れる事なんて出来ない。警察、遺族、関係者達にとっては、時間が止まっているも同然なんです」

哀しい呟くような声に、香奈はただ聞き入る。

「だから……あのサイトは作られた」

それが、自分達が見ていたサイトだと、香奈は悟った。

「いつかは忘れてしまう。でも、それでも誰かに覚えていて貰いたい……そう、願って。あそこに掲載されている事件の中には、もう時効の成立した事件だってあります。時効が成立すれば、法律的には犯人を見つけても罪には問えない。捜査本部は解散するしかない」

「……」

「時効は廃止された現在ではそれはありませんが……三十年前の事件には、それは適用されていないのが現状です」

その通り……なのだろう。

「でも、遺族にとつては時効なんて関係ないんです。時効なんて……。そして永遠に事件は終わらない。たとえ、犯人が捕まっても」

「……」

「……けれど、世間は残酷なものです」

「……」

「新しい事件がどんどん発生する中で、どんな凄惨な事件でも、まるでそんな事件などなかったように時が過ぎていく。十年一昔——十年も経てば、それは遙か昔の話とされ、当時を知る者達の記憶か

「でも、その事件が忘れられていく」

「……そうですね」

「でも……三十年前の事件は……それで言えば、珍しいんでしょうね」

「え？」

「ここ数日の間ですかね。少しずつ、人々の口に上るようになっていくんですよ。昔にも似た事件が起きている、三十年前の事件と、似ていると」

「そう……なんですか？」

「貴女方もそうではないですか？」

「っ……！」

「ふふ……いいんですよ。それに、貴女方は違うと思いましたが「違う？」」

「……昔の事件が思い出されるのは、必ずしも良いことばかりではありません。中には……いるんですよ。昔の事件を面白可笑しく話す輩が。たとえ、それがごく一部の者達だと言っても……中には、聞くに堪えない話もある」

「幾ら、人事だとはいえ……と、図書職員の拳が震えている。

「遺族や関係者の事など考えていない、軽口を叩く」

「……確かに、います」

「それは、きつと否定出来ない。

「しゅんつと項垂れる香奈に、図書職員はハツと我に返った。

「あ、す、すいません！　こんな話」

「いえ、大丈夫です。でも……そうですね……遺族や関係者にとつては……事件は永遠に終わらないですよね……」

「……」

「私は、そういう方は幸い——と言ったらいいか分からないですけど、不幸にも事件に巻き込まれた方はいません。でも、もしそういう方が……遺族の方が居た時には……どうしたらいいんでしょうか？」

香奈の質問に、図書職員は苦笑する。

「難しい、質問ですね」

「すいません、気になるとすぐに質問してしまう性格なので」

「いえ……でも、良い質問です。そして……私にとってもずっと考え続けている質問です」

「……職員さんも？」

「はい。そして、まだ答えは出てません」

「……そうなんですか……」

「それでも、いつかは答えを出したいと思います。まあ……もっとずつとずつと後のことになると思いますが」

「……私も、そう思います」

「でも……これだけは言えますね」

「え？」

「あのサイトを見たら、きつと貴方には分かって貰えると思います。あの様に、サイトが更新され続けて……そして、被害者達の詳しい情報が残されている、その意味を」

「……」

意味……か。

と、図書職員の男性が慌て出す。

「す、すいません。休むために此处に連れて来たのに」

「いえ——その、凄くタメになりました。本当に遺族の方ではないんですか？」

真摯な態度に、香奈はポロリとその言葉が漏れた。

すると、図書職員の男性が苦笑する。

「えーと、いや、遺族ではないんですよ。遺族では」

哀しげに笑い、再び口を開いた男の顔が酷く印象的だった。

第十七話 母の実家

「でね——職員さんがそう言ってたの」

夕食を食べながら話す娘に、父である連理はにこにここと笑う。

「その職員さんは凄い人だね」

「うん、私もそう思う」

今日出会った職員との会話を、香奈は夕食で話題にした。といつても、椿の件や今調べている事件については内緒の上で話している。

つまり、未解決事件について図書職員とした会話だけを伝えた。普段であれば、両親に一々今日あった事を話さないが、何故か今回だけは香奈から話し出した。

未解決事件の関係者の思いについて話し合った時に抱いた、いまだ燻り続ける幾つもの思いがそうさせたのだ。

一人でも多くの人と、この事について話し合いたい。

それは、楽しい事や哀しい事があった時に、子供がそれを周囲に話したがるのとはちよつと違うが……。

しかし、両親——特に父は香奈の話を熱心に聞いてくれた。

「サイトが更新され続けて……そして、被害者達の詳しい情報が残されている、その意味を——か」

図書職員が言った言葉を父が反芻する。

「お父さんは、分かる？」

「ん？」

「その意味が」

「……そうだねえ」

たぶん、これだろうと言う考えはあるが……。

「でも、言わないよ」

「なんで？」

不満げな顔をする娘に、父は笑う。

「だって、これはお父さんの考えであって香奈の答えじゃないから」
「え？」

「その人は言ってたんだろ？ 貴方なら、分かる筈だと」
「う、うん」

「なら、自分で考えて答えを出してみないと」

「けど、参考にするぐらいなら良いじゃん」

「確かに参考程度ならね。でも、そういう難しい問題は、結構他人の意見に引き摺られやすいからねえ。やっぱり先に自分の答えを出した方がいいと思う」

「お父さんの意地悪」

「はは！ 別に大丈夫だよ。こういう問題の答えに決まったものはない。たとえどんな答えだろうと、香奈の出した答えが香奈にとつての真実だよ」

「でも、それだと私の考えであって、関係者の人達の思いじゃないよ」

「ふふふ……それはどうかかな？」

くすくすと笑う父に、香奈はまた頬を膨らませる。

今度は母が口を開いた。

「なんだか図書館では有意義な時間を過ごしたようね。で、ついでに勉強とかは」

思い切り視線を逸らした娘に、母が溜息をつく。

「はあ……全く」

「しゅ、宿題はきちんとしてるし」

「……まあいいわ。で、今日はずっと図書館に居たの？」

「ううん。図書館はお昼過ぎぐらいには出たよ。その後は椿の家に行ったの」

「椿ちゃんって、鷺崎さんの所の？ 確か火曜日からずっと休んでいるのよね」

「ずっとと言っても、今日は祝日だから実質は、一昨日と昨日の二日ぐらいだ。」

「明日は出てこれるかしらねえ」

「うん」

その可能性は低いだろう。

今日も椿の家に行ったが、椿の母から体調が優れず、もしかしたら今週いっぱい休ませるかもと告げられた。

だから椿に印刷した第五の被害者の写真も見せられずにいた。

ならば、椿の所に毎日通っている梓達にも思ってたが、その日は来ていないらしく、梓や理佳の家まで行ったが留守だと言われた。

まあ——会えたところで、素直に見てくれたかは謎だが。

椿を見捨てたと、梓は怒り心頭だったし。

「明日は金曜日か……」

ポツリと、口から漏れる。

来週の火曜日の午前二時～午前四時までが勝負だ。

だが、もう残り四日ほどしかない。

今考えてみれば、強引にでも写真を見せるべきだっただろうか？
しかし慎重に行わないと、初日の時みたいに椿が恐慌状態に陥って話どころではなくなる。

はつきりいつて、自分と美鈴だけでは難しい気がする。

梓達にも協力を頼んだ方がいいかもしれない。

と言つても、昨日までの梓の様子からすれば、完全に香奈の事を拒否していて難しいだろう。

理佳に間に入って貰おうにも、あの子の性格では酷く厳しい。

それに——、他にも問題はある。

「あのさ、お母さん」

「ん？」

「土曜日の親族会議……出なきゃ駄目だよな？ やっぱり」

月に一回。

香奈の母の実家で行われる親族会議——分家筋全てが一同に本家本邸にて介する会議が、二日後の土曜日に迫っていた。

一族の者にとってどんな用事よりも優先するべきものとされてい

るそれは、香奈にとっては朝から晩まで自由を拘束する厄介なものでしかない。

だが、母の実家の分家は全部で百余りあるのだから、挨拶だけで時間がかかるのだろう。

因みに分家は日本各地に散らばっているが、親族会議や本家である母の実家の鶴の一声で集合するほど本家に忠誠を誓っており、例え外国に居ようと即座に帰国する。

香奈からすれば、毎回毎回集まるのは良いが、交通費はどうなっているのかと聞きたい。

が、他の分家にその心配はいらないらしい。

何せ、母の実家は古くから続く名家というだけではなく、日本、いや世界でも有数の大財閥の総帥一族なのだから。

大財閥総帥一族——神有家。

各世界でその名を知らぬ者は居ないとされ、本家はおるか分家筋に至まで、各世界で有能な人材を輩出し続けている名門一族。

香奈の母は、その本家長女として生まれ育った。

つまり、香奈は神有家本家直系の孫の一人。

いわば大金持ちを母方の実家に持つ令嬢であり、時代が時代ならお姫さまである。

——が、香奈からすればそれは遠い話でしかなかった。

というのも、香奈の母は確かに本家の長女だが既に家を出ている。同じく結婚して家を出た次女もいるが、そちらとは違い、香奈の父と結婚するにあたり全ての権利と恩恵を返上したのだ。

つまり、家を捨てたようなものである。

何故そんな事をしたのか——それは簡単な事だった。

香奈の父は、天涯孤独で身分も地位も財力もないしがたい地方公務員。

一方母は、地味で平凡かつ神有家の醜いアヒルの子と周囲から蔑

まされていても、本家の姫。

誰が見ても不釣り合いだった。

当然、普通に考えれば反対される仲。

だから、家を捨てて駆け落ちしたのだろうと周囲は見る。

香奈も話を聞いた時にはそう思った。

というのも、生活レベルなどを考えたら、到底普通の一般家庭にしか思えない生活をしていたからだ。

だが、母と実家の間で完全に縁が切れたわけではない事も香奈は理解していた。

証拠に、香奈の一家は実家本邸からそれほど遠くない場所に住んでいるし、月一の親族会議には一家揃ってきちんと出席している。

これが母だけならまだしも、父も呼ばれているという事は、分家として認められているという事だ。

そして香奈も、孫と認められているらしい。

他の従姉妹達と同じ扱いをされているし、本家の屋敷に出入りする事も自由だったから。

それは家を捨てて完全に縁を切った娘の一家に対する本家の態度としては、明らかにおかしい。

しかし——それだけだった。

母は実家の財力に頼らず、父の給料だけで生活し、お金が足りなければパートに勤しむ。

スーパーのチラシを毎日チェックし、大安売りの時には夫と娘を荷物持ちにして突撃する。

それどころか、他の従姉妹達は小さい頃から社交界に出ているが、香奈は一度も出た事がない。

寧ろ、大金持ちの孫を思わせる様なイベントもなければ生活もした事がなかった。

だから、母の実家が名家だという事は何となくわかってても、あの有名な大財閥だという事は全く現実味がない。

まあ——今の暮らしの方が気が楽だから、香奈にとってはどうで

もいいが。

それに、他の分家とは違い、平々凡々すぎる香奈は間違っても有能な人材として輩出される事はないだろう。

幼い頃から社交界の華としてもて囃されている従姉妹達を見ても、そんなに羨ましさは感じないし、今の生活で満足している。

ようは、香奈は根っからの庶民なのだ。

そして出来るなら、分家に至まで有名どころが一同に揃う親族会議には出たくない。

それに今は椿の事もあるから、余計に出たくなかった。

そう――先に挙げた他の問題が、これである。

椿の事で時間がないというのに、朝から晩まで拘束される親族会議など香奈にとっては邪魔な行事でしかなかった。

これで一族の恩恵を受けているならまだしも、そんな様子は殆どないのだから、出る意味すらよく分からない。

ってか母、家を出たんだよね？！

なのになんで行くの？！

更に親族会議に出席出来ない香奈は、他の従姉妹達と一緒にいなければならぬ。

が、分家筋の親族の子はまだしも、本家筋の従姉妹達との気のあわなさと言ったらどうしようもない。

特に、柚緋とか、綾乃とか、柚緋とか、綾乃とか。

いや、今はそれは関係なくて、大事なのは椿だ。

椿の件で、もうあまり時間がない。

だから、無理だと分かっているけど、期待を込めて母に親族会議の欠席を願ったのだが……。

「無理ね」

「むうゝ！」

「お父様の命令は絶対ですもの」

現在も、神有家本家当主として一族を纏める祖父は、一族の王として君臨している。

逆らう事などんでもないと言わんばかりの母。

だが、その祖父に逆らって家を出たのが母だろう。

当時は、その事で凄い騒ぎとなつたらしい。

「それに、香奈も孫の一人だから顔を見せなければ」

「それは優秀な孫の場合。他に沢山いるじゃん」

特に優秀な孫では、柚緋や綾乃だっている。

別に、自分一人いなくても問題はない。

筈なのに――。

どれだけお願いしても母は頷いてくれず、香奈はふて腐れたまま布団に潜り込む事となった。

その日、香奈は一つの夢を見た。

第十八話 夢

ザアザアと雨が降り注ぐ。

だが、その雨にさえ消せない煙が、空を割く様な大きく高い煙突からもうもうと吹き出ていた。

まるで死者が空へと上がっていくようだと、それを見た者達は思うだろう。

他の遺族達が室内で休んでいる中、少女は父と二人で外からその煙を見上げていた。

傘を差した父が娘を抱き上げながら、そつと呟く。

「父さん……」

哀しげな囁きに、少女は父を見る。

「おとうさん、どうしてないているの？」

少女は、ようやく物心が付いたぐらいの年齢だった。

だから、今の状況もよく分からない。

いつもの様に朝起きると、母が忙しそうに動き回っていた。

それは何時もの事だが、母は娘を見つけるとすぐに何処からか取り出してきた黒い服を着せた。

そして自分も黒い服を身に纏う。

少女はピンク色の服が好きだった。

だから、黒なんて嫌いだと脱ごうとしたら、母に今日だけは我慢してと言われた。

そして母は、少女が通う幼稚園に休む事を告げた。

その中で、少女はその言葉を聞いた。

「はい……父方の祖父が亡くなって」

父方の祖父？

亡くなる？

よく分からなくて——でも、なんだか凄く胸がグルグルした。

ふと、少女は自分のおじいちゃんの事を思い出す。

父の家に行くと、いつも優しい笑顔で少女を迎えて抱き締めてくれた…… たった一人のおじいちゃん。

そういえば、いつだったか父がおじいちゃんの事を祖父と言っていた気がする。

でも……。

小さな頭で考えれば考えるほど落ち着かなくて…… 少女は父を捜した。

居間には、父が仕事で持つて行く鞆があったから、家に居る事は分かっていた。

いつもなら、とつくに仕事に行くはずの父が居る。

それもまた、少女の小さな心を焦らせていた。

父は居た。

「おとうさん……」

庭に面した縁側に座り、静かに灰色の空を眺めていた。その横にちょこんと座ると、父がようやく娘に気付く。

「ああ……— か」

「おとうさん…… おじいちゃん、どうかしたの？」

望んでいた答えはなんだったのか。

けれど、そう聞いたという事は、少女も何処かで予感していたのかもしれない。

ただ、それが理解出来なかっただけで。

その時の父の顔を、少女は一生忘れられない。

「…… おじいちゃん…… そうだな……— は、おじいちゃんの事が大好きだったな」

「……」

「父さんも……— が小学校に入るのを凄く楽しみにしていたっけ……— なんて、こんなに早く」

嫌な気持ちがどんどん大きくなっていく。

そしてもう一度、父を呼んだ時だった。

「おじいちゃん……— 死んじゃったんだよ」

父が、涙を流して娘を抱き締めた。
それから——あつという間だった。

父が運転する車で連れて行かれたのは、祖父の家。
前に会った時よりもやせ細った祖母が、息子夫婦を出迎える。
部屋には既に沢山の人達が居た。

みんな、黒い服を着て、泣いていた。

祖父は部屋で寝ていた。

いや——実際には、祖父の亡骸が布団の上に横たえられていたのだが、少女からすれば何時ものように寝ているようにしか見えなかった。

花とか色々飾られている場所の前で、白い服を着せられていて、顔にも白い布がかけられてるとか、いつもと違う事も沢山あったけど。

最後によく見てねと言われて、祖父の顔を見れば、いつもの祖父の寝顔だった。

寝ているならきつと起きる。

少女は単純にそう思った。

なのにみんなはもう祖父と会えないと泣く。

どうして？

どうして？

祖父はここに居るではないか。

起きれば、またいつもの様に笑いかけてくれるではないか。

だから、少女は何度も祖父を揺さぶった。

起きて——。

起きて——と。

それが、よりいっそう周囲の哀しみをそそるとも知らずに、何度も何度も揺さぶった。

止めたのは母だった。

「やめて……——。もう、おじいちゃんは起きないのよ」
「どうして？」

「……死んじやったからよ」

「……」

しぬって、何？

何か、違うの？

そんなに哀しい事なの？

少女には祖父は寝ているようにしか見えない。

何処か怪我をしたわけでもない。

ただ、寝ているだけなのに……。

「おきて！ おきておじいちゃん！」

少女は必死に揺さぶる。

何度も何度も揺さぶる。

その姿に、周囲の泣き声が更に大きくなる。

死というものを理解出来ない少女の幼さと、純粹に祖父を慕う姿に涙が止まらなかった。

「みんなないてるよ！ おじいちゃん！」

祖父は、みんなが笑っているのを見るのが好きな人だった。

だから、率先して楽しい事をしては周囲を笑わせていた。

少女もよく笑わせられた。

祖父は言っていた。

泣いているより、笑っている方が好きだと。

だから、きつと今みたいにみんなが泣いている姿を見るのは哀しいだろう。

しかし祖父は起きない。

寝ている事でみんなが泣いているのなら、起きなきゃいけないのに。

祖父は、いつまでたっても起きなかった。

それは、お坊さんと呼ばれる人が来て、なんだか難しい事を告げている時も同じ。

祖父の体が木の箱に入れられてからも。

お寺と呼ばれる呼ばれる大きな建物へと移り、広い部屋に木の箱

が置かれても。

夜が来て、殆どの客達が帰り、親族だけが祖父の寝ている場所に残っても。

少女は、いつまで経っても起きない祖父の側に居た。

起きて、起きて。

日が沈み夜が来て。

窓の外の暗闇に怯えながら、少女は祖父の顔を撫で続けた。

いつもは温かい祖父の頬が冷たい。

次第に焦り出す気持ち。

早く起きて。

でないと。

でないと、何？

よく分からない気持ちを抱え、それでも早く起きなければと焦る。

「おきて、おじいちゃん」

その度に、周りの大人達が言う。

「おじいちゃんは……もう起きないの」

「そうだよ……おじいちゃんは死んじゃったんだ」

「ほら。もう冷たいでしょう？ もう——ちゃんが声をかけても起きてくれないでしょう？」

なら、温めればいい。

他の人が呼びかければ良い。

けれど、周囲は泣くだけだった。

ねえ、しぬって何？

わからない。

冷たくなる事がしぬって事？

呼びかけても起きてくれなくなる事がしぬって事？

それとも——。

次の日、またお坊さんと呼ばれる人が来て、沢山の人達が来て。そして祖父が入った木の箱に沢山のお花が入れられて、木の蓋がされた。

「なんでしめるの？ おじいちゃん、でられないよ？」

釘が打たれ、小さな窓から祖父の顔を見ながら少女が聞く。死を理解出来ない少女。

けれど、本当に理解出来なかったただけなのだろうか。

そうして祖父は、また別の場所に移されて、パカリと開いた大きな扉の中へと入れられた。

焼くのだと、聞いた。

だから、焼いて骨になる前の最後のお別れがされた。

でも、少女はよく分からなかった。

焼くって何？

お魚みたいに焼くの？

骨って何？

痛いことするの？

分からなくて……でも、祖父が心配でいつまで経っても祖父が入れられた扉の前から離れなかった。

そんな少女を父が外に連れ出した。

雨が降っていた。

それが、まるで空が泣いているように見えた。

自分を抱き上げる父も泣いていた。

「おとうさん、なかないで」

泣かないでと父の頬を撫でる。

「おじいちゃん、つかれてるの」

この前会った祖父は、曲がった腰を撫でては疲れたと笑っていた。

「でも、やすんだらきつとおきるよ」

——って、また自分の名前を呼んでくれる。

父の顔を見て、良く来たなと笑ってくれる。

しかし、父は泣きながら頭を横に振った。

「もう、起きないんだよ」

「どうして？」

「死んじゃったから……お別れなんだよ」

「しぬとおわかれなの？」

「そうだよ。そしてもう二度と、会えない」

「どうして？」

「——達とは、違う場所に行っちゃうからなんだよ」

「そうなの？ でも、かえってくるよね？」

「そう言つと、父が嗚咽を漏らした。」

「いや……帰つてこれないんだよ」

「なら、わたしがいく」

「……できないんだ」

「どうして?!」

「それが、死ぬつて事なんだよ。もう二度と会えない。もう……死んじやったら、会えないんだ」

父の泣く声に、少女は空へと上がっていく煙を見上げる。

「おじいちゃん！ おじいちゃんっ！」

あの煙が祖父に見えた。

そして、自分の手の届かない場所に行くように見えた。

何度も叫び、終には泣いてしまった。

そうして他の人達に呼ばれて、扉から祖父の入った木箱が載せられた台が出て来た時——そこには、白いものしか残っていなかった。祖父の骨なのだと教えられたけど、少女は理解出来ずひたすら祖父を求めて泣いた。

しぬつて何？

冷たくなる事？

呼びかけても起きなくなる事？

目の前から居なくなる事？

でも、少女は祖父を覚えている。

遊んでくれた沢山の記憶を持っている。

少女は写真の祖父に語りかけた。

「おじいちゃん、あのね」

いつもいつも、語りかけた。

すると、なんだか心が温くなる気がした。

祖父の骨はもうお墓と呼ばれる場所に入れられたけど、そんなのは関係ない。

写真の中の祖父は変わらずほえんでいる。

「おじいちゃん、今日はこんな事があつたんだよ」

小学校に入っても、少女は語りかける。

最初は他の人達もそんな少女に習い、祖父の事を思い出しては話題に上らせていた。

けれど、いつしか年月を経ると共に少しずつ祖父の事が話題に上ることはなくなっていく。

それは、少女にとっても同じ。

成長すると共に少しずつ死を理解していった少女。

死は、実に少女の周りに溢れていた。

テレビで言っていた。

死ぬって事は、もう動かなくなること――すなわち、心臓が停止する事。

本に書いていた。

死ぬって事は、肉体が滅ぶ事。

お坊さんが言っていた。

死ぬって事は、あの世に行く事。

死ぬって事は――。

事故で死んだ親族もいれば、病気で逝った友人も居た。

そして、人はちよつとした事で死ぬ。

今この時は笑っていても、数分後にはどうなるか分からない。

少女は、祖父の写真に語りかける事はなくなった。

そうして祖父の写真は、少女の記憶と共に筆笥の奥底へと仕舞われていった。

「香奈？」

目覚めれば、母に抱かれていた。

父も、側に居た。

「恐い夢でも見たのかい？」

時計を見れば、まだ午前四時。

いつも一人で寝ている筈のベッドに両親がいる事実は、普通なら驚く事だろう。

しかし……香奈は何も言わず母の胸に顔を埋めた。

「香奈……」

何も言わず、母の腕に抱かれて目を閉じる。

大丈夫だと告げるべきだ。

けれど疲れ切った心は、ただこの温もりだけを望む。

そんな香奈に、両親は何も言わずに娘を抱き締めてくれた。

そして二度目の眠りに落ちた香奈が再び目覚めたのは、何時もの起床時刻頃だった。

第十九話 死の女神

「香奈、今日は休まなくていいの？」

母の心配そうな言葉に、香奈は笑顔を浮かべる。

「うん、大丈夫」

「具合が悪くなったら、すぐに連絡するんだよ」

父の言葉に、香奈は心配しすぎだと笑う。

だが、その顔色は余り良くない。

「じゃあ、行つてきます」

「あ、香奈！ お父さんと——」

しかし、娘の姿はもう玄関になかった。

「あの子ったら……」

「清奈にそっくりだね」

そう言いつつも、夫——連理が指を鳴らせば、家の外にあった幾つかの気配がその場から消えた。

「追い掛けさせたの？」

「うん。そのぐらいにしか——」

ふっと、連理が笑う。

「役に立たないし？」

「連理……」

何時もは穏やかな眼鏡下の涼やかな瞳に、鬼畜の光が宿ったのを、妻——清奈は見逃さなかった。

「娘が生まれても変わらないわね、あんた」

「酷いね、清奈は。こんなに優しくなったのに」

夫の笑顔が胡散臭く感じられる。

とはいえ、昔はもつと酷かった。

そもそも、召喚相手を間違えましたと言ってるのに、「僕、人の嫌がる事するのが大好きなんだ」とか「気に入ったから、契約してやる」と強引に迫ってきたこの男。

顔が良いからと許される事ではない。

そもそも、今までイタしてましたと言う様な気だるげで扇情的な色香を漂わせ、しかも半裸で召喚されてきたこいつ。

白い胸元には赤い華が沢山散らばり、昔は長かった黒髪をかきあげる動作だけでも鼻血が出そうなほど色っぽかった。

だが、その後に起きた事は今でも思い出したくない。

変な化け物に襲われて、それから友人を助けようとして、必要に迫って超高等術と呼ばれた家に伝わる召喚陣で呼んでしまったのが、この男。

神？

冥界の？

ってか、もの凄く強い？

んな事どうでも良い。

命よりも貞操の危機を感じた十四歳の夏。

同じく、十四歳のこいつに食われた。

しかも、あんな所で！！

あの時は二度とこいつに会いたくないと思ったが、その後も連理はここに残り続けた。

何でも、女遊びはほどほどにと言われていたのに、自分が呼び出す直前まで何処かの女性に手を付けたとかで、反省するまで帰ってくるなと人間界に追放されたのだ。

おかげで、その被害はこちらに来た。

イヤだイヤだと騒いでいるのに、連理は強引に人の家に住み込み、しかも清奈と契約まで交わしてしまった。

「ふ……あの頃はまさか結婚するとは思わなかったけど」

「あはははは！ 粘り勝ち？」

連理はニヤリと笑う。

一目惚れだった。

でも、上手く自分の気持ちを表わす事が出来なかった。

けど、自分を誘惑してくる者達が体を繋げるのは愛しているから

と言っていたのを思いだし、その様にした。

愛してるならば当然だと、煩くつきまとう者達は言っていた。

愛しているから、抱くのだ。

愛しているから、抱いて欲しいのだ。

貴方ほど美しい方なら、誰だつて一目で愛する筈だと。

なのに、清奈は愛してくれるところか思い切り拒否してきて、でもどうしても諦めきれなくて強引に居座った。

本当だつたら即座に冥界に連れ帰ってたが、事情を知った兄弟達に怒られた。

人にとって冥界は死んだ後に行く場所であつて、死ぬ前に軽々しく来て良い場所ではない。

妻にするとと言っても同じで、仕方なく人間界で口説くことにした。神にするにしても、清奈が受け入れてくれなければ絶対に駄目だと両親にも口を酸っぱくして言われた。

まあ——結局は、自分が人間に化けて生活している現在だが。

「でも……香奈、本当に大丈夫かしら？」

清奈の心配そうな顔に、連理はすつと娘が出て行つた玄関の扉を見つめた。

いつもの時間に目覚めた香奈は、「夢を見た」と言った。

「哀しくて……寂しい夢だった」

それは、火葬場の夢。

そこに小さな少女と父が居て、火葬場の煙突から流れる煙を見上げていたという。

少女の祖父が亡くなつたらしい。

けど、少女は死というもの分らず、葬式の間ずっと祖父を起こそうとしていた。

「その子ね、ずっと考えてたの。死ぬって、何？——って」

死とは何か？

どのようになれば死ぬのか？

少女はひたすら考えた。

「でも、結局その子は分からなかったの」

それでも祖父の写真にいつも話しかけていた。

しかし、いつしか時が経つにつれて、少女は少しずつ死を理解していった。

それは、テレビや本等の色々な情報から、そして色々な経験をして……。

「でもね……その子は死を理解していくに連れて……しなくなったの」

祖父の写真に語りかける事もなくなり、祖父の事を思い出す事もなくなっていた。

「……とても寂しい夢だった」

まるで、セピア色の昔の写真を見せられた時の……ああ、そういうばこんな事もあったな——今まですっかり忘れていたけど。

そんな……気持ちだった。

「ねえ、お父さん、お母さん……死ぬって」

一体、どういう事を言うんだろうね？

娘の言葉に、連理と清奈は言葉を詰まらせた。

「まさか……十二歳の娘にそんな事を聞かれるなんて思わなかった」

「はは……だねえ」

「で、どう答えるの？」

「ん？」

「死を司る冥界出身者さん」

出身者どころか、連理は冥界の統治者の末公子だ。

「ん、そうだね」

「あら？ 答えられないの？」

「だって難しい問題だしね——死の定義って。人間なんて特にそうでしょう？ 文化圏、時代、分野などにより様々だし」

ある国では、人は死によって魂が一旦肉体を離れるものの、再び同一の肉体に戻ってくるとされていた。

ある国では、天国に行くことであり、人は死んで永遠の生命を得

るとされていた。

ある国では、人間の肉体は死とともに滅ぶが、その魂は不滅だとされていた。

ある国では黄泉の国に行き、ある国では輪廻の一過程とされ、ある国では死んだら終りと言われていた。

「で、これが医療になるとまた細かく定義される。脳が死んだら死亡とするか、心臓が止まった時が死亡なのか、では植物人間は？

脳死とは？ 肉体が滅んだら死ぬって事なのか？ —— ってね」

「連理の言う通りね。で、その答えは？」

「だから、分からないって。答えなんてないんだ」

「……それ、冥界の公子の言う言葉？」

「あのね、冥界なんて所詮は魂の休息所で、死者と呼ばれる存在を裁いたりする事もあるけど、死そのものには関わらないんだよ」

「死神は？」

「ああ。あれはお迎えの死者だよ」

「魂を狩る鎌持つてるじゃん」

前に見た死神は、おっきな鎌を背負っていた。

しかし見た目はご老体のせいか、はつきりいつてよろよろとした歩き方に清奈は胸が痛くなった。

「ああ、あれ。ただの武器だから」

「何の為の」

「ひ・み・つ」

ウインクをされ、清奈は思わず目をそらす。

別に気持ち悪いとか思わない。

寧ろ似合い過ぎる。

でも、こいつがやるというのが問題なのだ。

「じゃあ、死は誰が司ってるの。寿命の神？」

「いや、寿命の神は違うよ。あれはただ、貴方はこのぐらいの寿命ですとか、決められたリスト通りに寿命を与えているだけだから。で、そのリスト作りも—— って、話がそれるから省略」

「おい」

「で、死は『死』を司る女神がいるんだ」
「いるの？」

「うん。でも、誰かは知らないよ」

「なんで？」

すると、連理は少し哀しげに微笑んだ。

「誰だって——死にたくはないだろう？」

「……」

「死の神は、全ての存在の死を司る。例外はない。だから、全ての者達にとって畏怖なんだ」

「畏怖……」

「特に、今の生に満足している者、幸せな者にとっては……ね。でも、死は同時に救いでもある」

「どういう事？」

「本当に恐ろしいのは……滅びない事なんだよ」
連理の言う事がよく分からない。

「滅びない事……」

滅びる事だったら分かる。

誰もが忌避する事だから。

しかし、連理はその逆が恐ろしいと言う。

「……なんか、分からない事ばかりね」

「だね。だからこそ、死は尊い。いや——」

『終わり』は、掛け替えのないものなのだ。

しかし、その意味を誤認し、必要以上に恐れてそれを回避しようとする者達が居る。

だからこそ、『終わりの女神』は自分の眷属神達の存在を隠した。生の終わりを司る眷属神——『死の女神』もまた、『終わりの女神』によって隠されてしまった。

もし『死の女神』だと知られれば、殺されてしまうから。

女神はそうやって、見付かると同時に殺されていった。

『終わりの女神』ほどではなくとも、何度も、何度も。いや、『死』そのものを消し去りたい者達にとっては、殺すだけでは飽き足らず、何度もその魂ごと消滅させようとした。

それが叶わなかったのは、ひとえに『死の女神』を守ろうとした少数の者達や冥界の尽力ゆえである。

しかし、『死』を恐れる者達の暴挙は止まず、『死の女神』はその存在すら否定された。

『死』さえないければ。

『死』などいらない。

『死』など消えてしまえ。

見付かれば、惨たらしく殺されていく。

たとえ、冥界で隠す様に育てられても、必ず密告者が現れては殺されていく。

女神が『枷』だった事も大きな原因の一つだった。

女神が『枷』として制御する『完末』達に人知れず懸想し、横恋慕し、募る憎悪と殺意を哀れな少女に向けるのだ。

どれだけ防ごうとしても、次から次へと現れる殺戮者。

それは『それ以外の者達』にとって悲劇とも言える、本能的なもの。

完璧で完全。

恐ろしいまでに美しい『完末』に心酔し虜になるがゆえの、『枷』への嫉妬だった。

嫉妬は暴走すれば簡単に変質し、下手すれば殺意へと変わっていく。

『枷』と呼ばれる者達が周囲に苛められたり、酷い目に遭わされやすいのは、一重にこのせいだと言われている。

だが、『枷』を殺す事は結局は自分達の首を絞める事になりかねない。

『枷』たる女神が死ぬ事で、女神が制御してきた『完末』達は何度も狂い死ぬ事となるからだ。

しかし、それでもなお、その『完末』達を求め欲した者達は自分の罪に全く気付かず、女神が殺したのだと好き勝手に罵り憎むのだ。

もちろん、『それ以外の者達』が全てそうではない。

『枷』を守り、手を取り合って生きる者達も居る。

連理も、清奈と出会い共に生きていく中で、そういう『それ以外の者達』を見てきた。

『枷』と結ばれたり、『完末』と結ばれる『それ以外の者達』だ
って居た。

しかし——それは、ごく一部の者達にしか過ぎず、いつしか『死の女神』は冥界の者達からもその姿を消していく。

今はもう、『死の女神』が何処に居るのかは分からない。

ただ、それでも『死』が存在していると言う事は、何処かで転生を繰り返しているのだ。

冥界でさえその所在を明らかにすることが出来ない『幻の存在』
たる『死の女神』。

遙か昔に『終わりの女神』と当時の冥界大帝との間に結ばれた協
定。

彼女の眷属神の転生先を知るのは、冥界大帝とその後のみ。

冥界側はそれを受け入れた。

『死の女神』は冥界にとっては柱とも言うべき存在。

その存在がなくなる事は、冥界の存亡をも左右する。

「『死』か……」

「……清奈はどうする？」

「え？」

「もし、『死の女神』が君の前に来て、貴方は死ぬのって言われたら」

「……そうね。どうしようかな？」

「まだ香奈が小さいんだから死にたくないって言うのかと思った」

「そりゃあ死にたくないわよ。でも、死にたくないからですむ話し

やないでしょう?」

「まあ……ね」

「とりあえず、少しでも可能性があるなら、死なない努力はするわよ」

「それが『死の女神』を殺す事でも?」

連理の眼差しが厳しさを増す。

「ん〜、そうね……でも、それはもしするとしても一番最後かな。その前に、それ以外の方法を探すわね」

それでももし駄目なら……。

「その時は、その時ね」

「……」

「ああ、でももし私が死んで再婚するとしても、香奈の事を蔑ろにする相手は駄目よ。香奈の事を可愛がってくれる相手。例え新しい兄弟が生まれてきても、一緒に可愛がって大切にしてくれる相手なら——許す」

「僕が再婚するわけじゃないじゃん」

「一人でやっていけるの?」

「いけない。だから、清奈は死んじゃ駄目」

連理は清奈を抱き締める。

そして抱き締めながら思う。

昔は、『死の女神』を殺す者達の行動を愚行だと思った。

決められた『死』を回避する為には、手段を問わない行動に醜ささえ感じた。

しかし——清奈を得て、香奈を得た今……自分ならどうするかと思う事がある。

もし、妻が、娘が死ぬとなった時——。

その女神が自分の前に舞い降りたならば……。

女神を殺した相手の中には、自分の命ではなく他者の命の為にそうした者達も居たのだろうか。

『その時はその時よ』

先程の妻の言葉が蘇る。

そう言って笑った妻の笑顔に、こみ上げてきた荒ぶる心が鎮まってい

ていく。

その時はその時――。

ふと、連理は気付いた。

『死の女神』は好きでその力を持っているわけではない。

そして……彼女にだって、彼女の死を回避したいと戦った者達が

居ただろう。

彼女が死ねば、その死を悼む者達は居ただろう。

『死の女神』だって、大いなる輪廻の輪の中の一人で、この世を

支える神の一人。

それに自分は言った筈だ。

『死は救いだ』と。

『本当に恐ろしいのは滅びない事』だと。

別れの来ない出会いなどない。

いつか、別れる。

それは……誰よりも自分が知っている。

けれど、例え離れる時が来たとしても……。

「まあ、もし私が死んだとしても、忘れないでいてくれればいいかな」

「え？」

清奈の言葉に、連理が我に返る。

「あのね、死んで、しかも忘れられたら流石に哀しすぎるわ。ま

あ――次の奥さんの事はあるから何時もとは言わない。でも……時々でいいから」

思い出して。

妻の言葉に、連理は瞬いた。

「清奈……」

「あゝ、でも今すぐ死ぬ予定はないから」

「……清奈、清奈清奈清奈！」

「うわっ！ ちょっと何処触ってるのよ！」

「清奈が可愛すぎるのが悪い！ ああもうっ！ 今日は仕事休むっ」

「休むじゃないわよ！ しっかり仕事してきなさいっ！」

そうしてすったもんだの拳げ句に叩き出された連理は、家で出来る仕事に変えようか本気で悩んだという。

第二十話 選択

「香奈」

「美鈴か」

共に一台目の通学バスで学校まで来た香奈と美鈴。

けれど、美鈴は日直だったから日誌を取りに職員室まで行き、香奈は一人で人気の無い階段下に座り込んでいた。

教室には既に他の生徒達がいて、落ち着いて見る事が出来ないからだ。

美鈴は香奈の手に握られている数枚の紙の束を見る。

「それ見てたんだ」

「うん」

香奈と美鈴の二人分印刷した、事件の概要と被害者の写真。

ホチキスで止めたそれは、第五の被害者の写真まで捲られていた。

「椿、来るかな？」

「可能性は低いと思う」

香奈の言葉に、美鈴が溜息をつく。

とりあえず、今の段階で調べられるところまでは調べた。

この後は、椿の証言にかかっている。

そう——この第五の被害者と椿の見た犯人が一緒かどうか。

それを明らかにするだけでも、自分達の出した幾つもの推測の中からかなり取捨選択する事が出来る。

犯人とこの第五の被害者が同じ容姿をしているのか？

もし、同じだとしたら——椿の言うとおりの化け物説が現実味を帯びるし、同時に美鈴の言った第五の被害者が今になって化けて出て来て三十年前の続きをしている、三十年前の事件の真犯人説も可能性が高くなる。

「って、最初は模倣犯かどうかだけだったのに……」

花屋で見かけた三人組の女性が話す過去の事件を盗み聞きした時

には、もしや犯人は模倣犯かと思った。

もちろん、今だってその可能性はある。

だが——もし、第五の被害者と今回の犯人が同じだとすれば……。香奈としては、見た目がそっくりな別人か親類という可能性もまだ捨てきれないが、首の傷や血塗れは特殊メイクでどうにか出来ても、片腕や片目が無い状態にするのは流石に無理だろう……という考えが沸いてきていた。

それに、四肢を一撃で切断するのに、人間が片腕だけで行うには確実に無理がある。

しかし——そこまで考えても、やはり心の中には化け物や幽霊が犯人なんて……という考えがよぎる。

これも、心霊スポットで一人何の心霊体験もしなかった哀しい過去のせいかもしれない。

しかも、自分以外の者達はみんな体験したというから、余計に腹立たしい。

もしか、自分はそういうのに嫌われる達なのだろうか？

いやいや、そんなわけない。

もともとそういうのは存在しないのだ。

でなければ余りにも哀しすぎる。

心霊現象の方が避けて通るなんて、こっちが化け物みたいではないか。

「香奈？　香奈？」

「え？　何？」

「何って、なんか凄い目をしてたよ？　親の敵を見るかのような」

「……」

「でも、椿が来なかったらどうしよう？」

「帰りに椿の家に寄るしかないよね」

「梓が会わしてくれるかな？」

毎日椿の家に通っている梓。

普段であればまだしも、現在没交渉中。

しかも数日前のあの剣幕からすれば、交渉する余地があるかどうか……。

「けど、向こうも椿を助けたくて動いているのは事実だね」

香奈の言葉に、美鈴が頷く。

「なら何とかなるかも」

「何とかって」

「椿を助けようとする気持ちは一緒なもの。椿の事に関してって言えば何とかなるかも」

「寧ろ関わらないでって言われるかも」

「その前に、見せつけちゃえばいいんだよ」

「上手く行くかな……」

寧ろ、資料を叩き捨てられるかもしれないと呟く美鈴に、香奈が苦笑する。

確かにその可能性は高いだろう。

それを思えば、椿が学校に来た時にでも梓の隙を見て見せるべきだが、香奈はそうはしなかった。

もし、それをすれば梓は……。

香奈は、梓の切り捨てとも言うべきその選択をあつさりと捨てた。ギシリと木の床が鳴る音が聞こえた。

香奈の瞳がキラんと光ったのを、美鈴は見逃さなかった。

しかも、その視線が自分の後ろに向けられている。

「香奈——」

名を呼んだ瞬間、香奈が動き出す。

そのまま走り出し、階段へと近付いて来ていた二人の少女を捕獲する。

「きゃっ！」

「か、かかか香奈ちゃん?!」

「早っ！」

教室に向かおうとしていた梓と理佳を素早く捕獲した香奈に、美鈴は舌を巻いた。

そのままズリズリと強制的に引き摺ってくる香奈に、美鈴は後退する。

「ちょっと！ 何するのよ！」

「ど、どどとうしたの?!」

「お話があります」

と、階段下まで引き摺り、ようやく香奈は二人の手を離した。

「話なんてな」

怒りを露わにした梓だったが、その顔に紙の束を押し付けられた。

「これ見て」

「香奈、顔にくっつけたら見れないって」

思い切り梓の口と鼻を塞ぐ状態で紙の束を押し付ける香奈に美鈴がツッコむ。

「あれれ？」

「殺す気かつ！」

ようやく圧迫から解放された梓の叫びに香奈はぶんぶんと首を横に振った。

「殺る気なら、違う方法をとる」

そんな答え聞きたくなかった。

律儀に答える香奈に、美鈴、梓、理佳の三人は未恐ろしいものを感じる。

そういえば、香奈にはそういう所があった。

「で、一体何よ」

「だから、これ見て」

「はあ? ——って」

また押し付けられては困ると紙の束を手にとった梓は、書かれている内容を見て言葉を止めた。

「……」

「それね、三十年前の事件なんだ。しかも、今回とかなり似てる」
香奈の説明に、梓は黙って文面を見る。

「事件の概要だけじゃない、被害者とか……。それに、もしかした

ら椿の言う事が……」

そこで香奈は言葉を止めた。

自分は何を言おうとしているのだろう。

今から自分が言おうとしている事は、自分の今までの考えを根本から覆す物だ。

そんな事は有り得ない。

そんな事はない。

だからこそ、椿が最初に話してくれた時にも、自分は有り得ないと否定した。

そういう被り物をした犯人だと、半ば決めつけた。

そして警察に椿を保護して貰える様な材料を搜した。

それこそ、犯人が化け物なんていう可能性を消そうとした。

しかし今から言おうとしている事はその逆になる。

もし、椿が見た犯人が被害者と同じなら……それが認められてしまえば、二度と警察の保護など受けられない。

まず信じて貰えないだろうし、そもそも警察が相手にするのは生きた人間で、幽霊とか化け物は霊媒師とか霊能者、お寺のお坊さんが相手だ。

だが、そういう不可思議なことが信じられない香奈にとっては、本当に効果があるのかも信じられない。

もしインチキだったら、椿はどうなってしまうのか？

だから、犯人は生きた人間でいて欲しかった。

そうすれば、警察が動いてくれる。

しかし……自分の中の何かが、突き動かすように香奈にその言葉を言わせた。

「椿の言う事は……真実かも——という証拠が載っているかもしれない」

目を見開く梓。

香奈を知っている者ならば、今の発言がどれほど有り得ない事か知っている。

それは香奈も同じだ。

けれど、その言葉を告げた途端、ストンと何かが上手くはまった気がした。

今まで嵌められなかった欠片が、突然思いがけず綺麗に嵌まったような……そんな感覚だった。

「とりあえず、今の話はそれだけ」

「か、香奈」

何か言おうとした美鈴を制し、香奈は梓と理佳を見据える。

「午前中までには読み終えられると思う。だから、放課後此处に来ても」

今日は午前授業。

給食もないから、授業が終わればすぐに帰れる。

けれど、その前に――。

「たぶん、梓達も質問があると思うから」

「……」

梓は何も言わなかった。

が、顔を見れば何となく受け入れてくれた事は分かった。

くるりと踵を返して去って行く梓に、理佳が慌てて後を追い掛けた。

「香奈……」

「後は、梓次第かな」

椿に見せるにしろ、話をするにしろ、障害となるのは梓だ。

だから、まずはその障害を取り除かなければならない。

「けど、よく素直に持って行ってくれたね」

「そりゃあ、椿の名を出されればね」

梓があそこまで怒り出したのも、椿の事が心配だったからだ。椿を助きたい。

椿の為に何とかしてやりたい。

その思いが根底にある。

だからこそ、香奈は資料を梓達に見せた。

出来る事なら、協力し合いたいから。

それに……そろそろ疲れてきていた——いがみ合うことに。

喧嘩が長引いて数日間口を利いてくれない事は今までにも何度かあったが、今は逼迫した状況だ。

それに——出来るならば、梓達を止めたかった。

もし、相手が本当に化け物とか……とんでもないものが相手なら、それは人間が相手よりもよほど始末が悪い。

人間が相手なら、いざとなれば何としても警察を頼るが、化け物が相手ならそれさえ出来ない。

つまり、自分達だけで何とかしようとする梓達がより危険になるという事だ。

「香奈は本当にお人好しね」

美鈴が呆れたように溜息をつく。

あれだけ梓に噛み付かれながら、それでも梓を切り捨てない。

「梓は友達だからね」

さらりと言い切る香奈に、美鈴は苦笑する。

「それに……」

香奈は、夢を思い出した。

祖父の死が分からず泣いていた幼い少女。

あれは夢の出来事だったが、香奈は今も身を切り裂かれる様な哀しみを覚えている。

言いようのない喪失感に香奈も少女と共に泣いていた。

もう祖父は生き返らない。

死んでしまえば、もう二度と生き返らないのだ。

話しかけても、笑いかけても反応を返してくれない。

もし——梓達がそうになったら。

そう考えると、香奈は恐ろしかった。

と同時に、自分達がどれだけ綱渡りのな事をしているかに気付いた。

迫り来る死は無情にもその歩みを止めず、自分達に迫ってくる。

対象者は椿だけだが、梓が椿を見捨てることはない。

我が儘だけど、情に厚くて、どんな相手にだって立ち向かう。
このままでは椿も梓も喪う。

そう——思ったら、居てもたつてもいられなくなった。
出来る事なら梓と仲直りしたい。

それには、今回の資料は打って付けだった。

椿の事であれば梓も話を聞いてくれる。

それを突破口にして、何とか話がしたかった。

もしかしたらまた拗れるかもしれない。

考え方があわなくて、言い合いになるかも知れない。

けれど——梓の存在を無視して事を進めれば、たぶんもう二度と
梓はこちらに心を開いてくれないだろう。

「香奈……」

「あんな思い」

「え？」

「あんな思い……したくないから」

香奈の記憶にある限り、近しい者を喪った経験はない。

葬式だって行った事はない。

でも、きつともし近い誰かが死んだら……夢の中の少女のよう
に号泣すると思う。

泣いて泣いて、棺にしがみついて……。

そうして、いつかは忘れていくのだろうか？

——ナイデ。

「っ！」

「香奈?!」

また、声が聞こえた気がした。

第二十一話 仲直り

放課後――。

階段下で待っていた香奈と美鈴の元に、二人は来た。

「資料、見たわ」

梓が代表して口を開く。

二人は互いに違った反応を見せていた。

梓は何を考えている様に訝しげに眉を顰め、理佳は相変わらず才ドオドとしている。

「授業中も見えてくれていたもんね」

「時間指定したのは何処の誰よ」

今日は昼休みもしない午前授業。

この時間割で分厚い資料をじっくりと見れるのは、授業中ぐらいしかない。

「で、これをどうしろと？」

「中を見たなら分かるよね？」

「……」

椿に確認させる。

それは梓にも分かっていた。

「椿に見せるって事ね」

「そういう事です」

「……なんで私達に見せたの？」

「だって、梓達も椿を助けたいんでしょう？」

「そりゃあ――って」

「だからだよ。情報交換はグループワークの鉄則でしょう？」

「……」

あまりにもあっけらかんと言いつ切る香奈に、梓はあっけにとられた。

グループワークも何も、今の自分達の現状を理解しているの言葉

だろうか。

まあ……時々香奈は不思議ちゃんな所があるし……と、失礼なことを思いつつ、梓はふと思いつ出した。

時々不思議ちゃんな香奈だが、梓は知っている。

香奈が、他の誰よりも不思議な事を信じていない事を。

だからこそ、朝の発言に梓は茫然とした。

梓の言う事が真実かもしれない証拠が載っていると告げた香奈。

それが何を指しているのかはすぐに分かった。

だが、信じられなかった。

それどころか、別の事だと思い込み、さっさと資料を確認するべく教室へと向かった。

なのに、載っていたのは……香奈が言ったその信じられない事で、気付けば、理佳をつれて此処にやってきていた。

梓は香奈を見据えると、ゆっくりと口を開いた。

「書かれている内容は全部読んだ。もちろん、中の被害者の写真も」
「うん」

「梓の言ってる事は真実……確かに、そうね。これを見る限りは」
第五の被害者の遺体状況と素性を確認した瞬間、梓は茫然とした。
梓から人相までは聞いていないが、もし見せて同じだとなれば……
犯人はただの幽霊とか化け物だけではなく――。

いや、まだ見せていない時点でそこまで行くのは危険だろう。

だが……それでも、生きてる人間ではないかもしれない。

毎日椿を宿めながら、そう思うようになっていた。

梓だって最初から化け物が犯人だと信じていたわけではなかった。
けれど、何度も椿の言う事を聞いているうちに、もしかして思うようになっただけだった。

それに、毎日の報道での被害者の殺害方法。

もし四肢を一撃で切断するとして、片腕だけで、しかも女子中学生がそんな事を出来るかと考えれば、確実に無理だと梓は答える。

しかも、椿が見た千切れた被害者の腕――肉切り包丁一本で腕を

飛ばすなんて、どれだけの力を必要とするのか。

絶対に、人間の仕業とは思えない。

それこそ、化け物の類でもなければ出来るわけがなかった。

そこに、香奈達から渡された資料だ。

これを見たら、もう犯人は幽霊とか化け物の類としか思えない。

それに、あの香奈ですら椿の言っている事は真実かとも言え、もう殆ど決まったようなものではないか。

だが……椿は香奈を注意深く観察する。

真実かとも思っているが、まだ完全に信じ切れていない様子が見て取れた。

確かに、香奈ほどオカルトなんて有り得ないと言い切る相手なら、すぐには信じられないだろう。

しかし今の椿の状態では、そんな事を言い出せば逆に刺激してしまいかもしれない。

だから椿は慎重に聞いた。

「資料の遺体状況は同じ。後は写真チェックだけ。でもね——もし、この写真が椿の見た相手だとしたら……」

椿は香奈の反応を確かめるように、ゆっくりと告げる。

「犯人は幽霊って事になるわよ？」

「……うん」

「オカルト否定の香奈からすれば、有り得ないって否定する事になるんじゃない？」

椿はわざと、突いた。

椿の言う事を認めつつも、まだ揺れ動いている香奈を徹底的に揺さぶる。

その反応次第では、椿は香奈達を再び突っぱねるつもりだった。

そんな中途半端な気持ちで、椿に近付いて欲しくない。

もともと考え方からして違うのだ。

それだけでも腹立たしいのに、その上中途半端となれば最悪だ。考え方が違う以上にイライラしてくる。

だが、香奈は梓にとって予想外の答えを返してきた。

「それはまだ分からないよ」

「え？」

「見せてもいないのに、結論は出せない。でしょ？」

「……」

香奈だつて、幽霊が犯人だとは思いたくない。

というか、良くある心霊話だつて信じてはいない。

幽霊も、化け物も、妖怪も。

超能力も、サイキック現象も。

全部作り事だと思っている。

でも――。

少しずつ、思い出されていく昨日の事。

そう……本当は、とつくに心の中で気付いていたのかもしれない。

第五の被害者の写真を見た時、ストンと椿の言葉が写真の少女に

重なった、その時に。

まさかとか、嘘とか、そんな否定の言葉を忘れるほど、綺麗に重

なった。

それどころか、言いようのない哀しみと無念と言うべき思いが香

奈を支配した。

――ナイデ。

聞こえて来た声は、酷く哀しげで懇願にも似ていた。

だが、写真が語りかけてくるなんて事はない。

きつと、あれは幻聴なのだ。

しかし幻聴が聞こえるほど、あの写真の少女の笑みは幸せそうだ

った。

初めて見た香奈でさえ、何故この少女が殺されてしまったのかと

疑問まで浮かんだ。

どうして？

何故？

なんで自分が？

——それは、少女や被害者達の方がよっぽど問いたかっただろう。普通に、平凡に暮していた筈なのに、突然の凶事に襲われて命を絶たれた。

しかも、殺されて四肢をバラバラにされた。

なのに犯人は捕まらず、事件すらも忘れられていった。

許せないと、化けて出て来ても当然なぐらいだ。

もし自分が同じ目にあつたら、絶対に犯人を許さない。

恨んで、恨んで、恨んで。

憎んで、憎んで、憎んで。

犯人を徹底的に追い詰めてやるかもしれない。

第五の被害者達だけではない。

他の被害者達だってみんな思つた筈だ。

何故自分が殺されなければならない？

どうして自分がこんな目に遭わなければならない？

あの時、どうして現場付近を通りかかったのか。

あの時、どうして犯人に出会ったのか。

後悔と苦痛と恐怖で心が引き裂かれたって、おかしくない。

それは死んだって続くのではないか。

香奈は幽霊など信じない。

信じられるだけの経験をした事がないからだ。

だが——もし、本当に幽霊が居るとすれば……。

「犯人に、復讐したっておかしくない」

また、するりと言葉が出た。

それは、椿の話した事が真実かもしれないと、朝に梓達に告げた時のように。

香奈の中にいる何かが、再び突き動かしてきた。

だが、梓はまだ納得出来ないのか幾つもの疑問を呈示する。

「それにしても全然関係のない人達を殺しているのはなんで？」

「……」

「犯人ではなく、関係者でもない人達——って、詳しく調べてない

から関係者がどうかは分からないけど……でも、もう一つ疑問もあるわ。どうして、今になって？」

「梓……」

美鈴が、梓を見る。

「復讐するなら、その時にするべきよ。なのに、三十年経ってからなんておかしくない？ それに、今まで全く出て来てないってのもおかしいわ」

それは、香奈も抱いた疑問で、図書館で美鈴に同じ様に質問した。「よく幽霊の出没する場所って、死んだ後ぐらいから噂になるじゃない。でも、この事件の人達の幽霊が出たなんて話は聞かないし、私もこんな事件があったなんて今の今まで知らなかった」

「それは私達もだよ」

美鈴の問いかけに香奈は頷いた。

「どうして今になって出て来たのかしら？」

「それって、梓は幽霊説を信じないって事？」

だとすれば、香奈からすれば驚きだった。

梓は自分とは違い、それほど強くオカルトを否定してはいないから。

「そうは言っていないわ。ただ、不思議なのよ……私だったら、即座に報復に向かうわ。もちろん相手は犯人よ」

「……死んだ時が苦しすぎて、誰彼構わず襲っているんじゃないの？」

「三十年経ってから？」

そう——確かに、そこでまずひっかかる。

「……でも、まあ——この写真は椿に見せた方がいい事は確かね」

「梓……」

「幽霊説にしるそうでないにしる、まず椿の見た相手かどうかで話は変わってくるからね」

もし、全く容姿が違いますなんて事になったら、幽霊説うんぬんどころの話ではない。

どうやら、梓も納得してくれたらしい。
と、梓の視線に香奈が気付く。

「どうしたの？」

「椿の事を見捨てたくせにって思ってたの」

「梓っ」

美鈴の瞳に怒りが宿る。

「真実を言っただけよ」

「つまり、不思議だっって言いたいなの？」

「そう」

香奈の質問に、梓はしっかりと頷いた。

「なのに、こういうのを持ってくるなんて」

「当たり前じゃない」

「え？」

「椿は見捨てないって言ったでしょ？」

「でも、私達だけでどうにかするのは、得策じゃない」

梓の言葉に、香奈が目を見開く。

覚えていたのか。

「……なら、この情報は他の人を使って得たの？」

「ううん、私と美鈴の二人で得たの」

その言葉に、梓がガクリと項垂れた。

「あんた達……ううん、香奈。それ言ってる事違うんじゃない」

「違わないよ。私達は、警察に椿を保護してもらった為の情報を探して、その途中で有益な情報を得て、これに辿り着いたの」

「……その何処が違うのよ」

「結果論は同じでも、過程が違います」

思い切り胸を張り、香奈は言い切った。

「……あんたらしいわ」

思い切り腕を伸ばしてピースする香奈に、梓はなんだか笑い出さなくなった。

「まあ、でもそれが香奈か」

そう——それが自分だ。

香奈は、ずっと梓を見つめた。

「梓」

「な、何よ」

穏やかな眼差しを受け、梓はたじろいだ。

香奈のこんな瞳は苦手だ。

その瞬間を、香奈は見逃さない。

そして心の中で留めておいた言葉を紡ぐ。

「ごめんね」

「……は？」

予想通り、梓は茫然としている。

だが、それでいい。

茫然としていればすぐには言い返せないから、こっちのペースに巻き込める。

「だから、ごめんねって」

「香奈?!」

梓だけでなく、美鈴や理佳も驚いている。

何か言いたげなのはすぐに分かったが、答えなかった。

今はそれよりもやるべき事がある。

香奈の中に、夢の中の少女が蘇る。

大切な存在を喪った喪失感と哀しみが蘇る。

あんな思い、現実では絶対にしたくない。

いつかするとしても、回避可能である限りは回避し続ける。

香奈は梓を見つめた。

例えどんなに我が儘でも、自分にとっては大切な友達なのだ。

「ど、どうしたのよ急に!」

あせる梓は、思いの外幼く見えた。

「謝ってるの」

「謝って——って」

「ああ、謝ると言っても、梓側の考えを全て受け入れたわけじゃない

いよ」

と、梓の機嫌が再び低下していく。
もちろんそれも了解みだった。

だが、謝るにしてもその部分だけはきっちりと言わなければならない。

なぜなら、香奈は梓と仲直りしたいが、梓の考え全てを受け入れて自爆する気も、梓達を喪う気もなかったからだ。

自分のやる事が正しいとは思わないし、必ず大丈夫という保証もないが、それでも色々な手段を講じておけばそのうちの一つぐらい良い方に当たるかも知れない。

子供が何を言っているのだと、聞いた者からすれば思われるかもしれないが、これだけは譲りたくなかった。

「あんた、私に喧嘩売ってるの？」

「売ってません」

「なら何の」

「ただ、梓と仲違いしたくないだけ」

梓が目を丸くした。

「はあ？」

「だって、梓と友達で居たいから」

香奈の笑顔に、梓はグツと息を詰まらす。

「……なら、もし仲直りするなら、私の考えを受け入れて協力しろって言われたらどうすんのよ」

「私が納得したら、する」

「……は？」

「だから、私が納得したら、する。じゃなかったら、友達には戻るけど、今まで通り分かれてそれぞれで搜索するの。あ、その方がはかどって良いかも」

すらすらと言い切る香奈に、梓は度肝を抜かれた。

まさか、こんな答えを返されるなんて……。

「って、友達に戻る為に考えを受け入れろって言うてるのに、どう

してそうなるのよ!」

「友達だからって、全てを受け入れるのは無理だから」

「はあ?!」

「だってそうでしょう? 梓には梓の考えがあつて、私には私の考えがある。それに、梓はこの第五の被害者のことまで調べられた?」
その質問に、梓は詰まる。

「そ、それは」

「そう。これは、梓と違った考えを持った私達だからこそ、調べられた」

まるで自分達が偉いと言わんばかりの言い方に、梓がムツとした時だった。

「でも、梓達だってそれは同じ事」

「……え?」

「私達では調べがつかない事を、調べたりしてるんじゃないの?」

「……」

目を伏せた梓に、香奈は確信を持った。

「ビンゴ」

「……はあ」

大きな溜息をつく梓に、二度目のピースをする。
半分はもちろんハツタリだ。

でも、もう半分はある筈だと思った。

それは、梓と長い付き合いの自分だからこそ、思えた事だ。
と、理佳が梓の肩にそつと触れた。

「あ、ああ梓ちゃん」

「理佳……もう、呆れるわ、本当に」

そう言つと、梓は香奈を見つめる。

しかしその瞳には、今までの鋭い剣呑な光はなかった。

「……つまり、香奈は私達の考えには同意出来ない。それは今もよね?」

「うん。私達だけでやるのは危険だから」

「でも、友達に戻りたい。で、違う考えのもと、別々に動いたっていいと」

「その方が、色々な角度から物事が見れるし、沢山情報を得られるもの」

正論だった。

「……で、あんたは私と友達で居たいと」

「うん」

「何だよ」

「梓の事が大好きだから」

香奈の真っ向過ぎる答えに、梓の顔が茹でたタコのように真っ赤になる。

「な、な、なっ！」

「理佳も好きだし、梓も好き。美鈴も椿も好き」

「桜子は？」

美鈴の指摘に、香奈の言葉が止まった。

「……」

「うん、ごめん。話の腰を折って」

好きというより、恐いという香奈の本音を悟った美鈴は素直に謝った。

「……好き、か」

「そう。好きだから、危ない目にあって欲しくない。だから椿の事は見捨てない。そして、危険性が高い梓の考えには共感も納得も出来ない。だって、それは間違ったら怪我だけではすまないもの。冗談じゃないよ。どうして私がそんなおかしな犯人の為に友達を喪わなければならないの？」

「……」

「だから、絶対に受け入れられない。もし失敗したら——ううん、失敗する確率の高い案は、絶対に受け入れたくない。たとえ、梓に薄情者と言われたって、絶対に嫌なもの」

「……香奈」

「かか、かか香奈ちゃん……」

美鈴と理佳が香奈を見る。

そして黙ったままの梓に視線を向けた。

「……なんなのよ……これじゃあ私が悪者じゃない」

「え？　なんで？」

「……はあ……　　つたく、怒っているのが馬鹿馬鹿しくなっちゃったじゃない」

そう言った梓は笑っていた。

「しかも、私と友達でいたいなんて……　　普通は縁が切れてせいせいでしょう？　　こんな我が儘娘」

どうやら、自分でも自覚はあったらしい。

「梓が我が儘なのはいつもの事じゃない」

「あんた……」

「でも、それが梓だもの。それに、欠点のない人なんていないしね。私だって欠点あるし」

特に淡々とした物言いとか、人を怒らせるのが上手いとか――と、理佳と美鈴は思ったが、黙っておいた。

下手になんか言えば、またこじれてしまう。

「それに、いくら言っても桜子へのライバル心を向きだしにするとか、色々あるけど」

「本人を目の前にして言う事？」

「言う事」

香奈はきっぱりと言い切った。

「そして出来れば、桜子へのライバル心とかも捨ててくれたらとっても素敵」

「それが今回の事と何の関係があるのよ」

「ないけど、このままの勢いで頷いてくれないかな？　っていう期待感をあらわにしてるの」

「それだけで捨てられたら、小学生の時にあそこまで大騒ぎにはならなかったけど」

「無理？」

「何年も培って来たものをそうそう無かった事に出来るわけじゃない」

「そっか。じゃあ、そっちは後でいいや」

香奈はあっさりと引き下がった。

「でも、友達の方は宜しくね」

「断ったら？」

「どうされたい？」

逆に聞き返された梓は、ぞくりとする物を感じた。

このまま断れば、恐ろしい目に遭うと、本能が警告する。

「……わかった」

「じゃあ、仲直り。美鈴とも仲直り」

「へ？」

驚く美鈴の手も掴み、ついでに理佳にも呼びかけ四人で手を繋ぐ。

これは仲直りの儀式みたいなものだ。

今までも、喧嘩した後はこうやって仲直りした。

「はあ……また流されたわね」

「うん、どんどん流されて」

そうして、香奈の願い通り仲直りが実現した。

そんな香奈を見ていた理佳と美鈴は思う。

案外、策士家なのかもしれない——と。

そこで美鈴は思い出す。

なんだかんだ言っであの桜子から逃げ回っていた香奈である。

それぐらいは当然かもしれない。

第二十二話 梓と理人

さて、仲直りもして後は椿の家に行くだけ。

だった香奈達だが、すぐに出鼻をくじかれた。

というのも、美鈴が今日日直だったにも関わらず日誌を出し忘れたから。

しかも黒板消しも日直の仕事だが、それも忘れたという。

「馬鹿じゃないのっ」

「馬鹿って言わないでよ！」

梓の言葉に美鈴が可愛らしい顔を赤く染める。

「普通ミステリー小説とかだったら、ここで何事もなく進むんだろ
うね」

「現実はこのまんよ」

だって、まだ十二歳の子供なんだから。

「自分の失敗を棚上げするんじゃないっ」

「誰だってあるでしょうがこんな事っ！」

確かにあるが、椿の命が危ないこの状況での失敗はかなり痛い。
けれど、ここでやらずに帰ったら、後日担任から怒られる。

「ったく！ 黒板消しは私がやるから、美鈴は日誌書き上げておい
てっ」

「うっ」

「ああもう！ 今からじゃ十分後の帰りのバスも間に合わないしっ

！ 香奈と理佳は次のバス時間をチェックしてっ」

「待ってもらってのは？」

「他の人達から大ブーイングになるわよ」

幸いな事に帰りのバスは、ある程度の本数が出ている。

というのも、一年生から三年生まで授業時間が違う場合があるからだ。

まあ——本数にも限りはあるが。

そうして、教室に日誌を取りに戻った美鈴と共に梓も走り去っていった。

「バスの時間確認だよね」

「そそそ、そうだね」

二人で渡り廊下の掲示板へと歩き出した。

「……香奈ちゃん」

歩き出して一分と立たずに理佳が口を開いた。

「ん〜？」

「あ、ああ、ありがとうね」

「何が〜？」

「だ、ただ、だから、梓ちゃんと仲直りしてくれて」

眼鏡の下にある嬉しそうな瞳に、香奈がポリポリと頬をかく。

「御礼を言われる事かな？」

「も、もも、もちろんですっ」

理佳が背中中央まである三つ編みの髪を揺らしながら、一生懸命に頷いた。

「でも、殆どは自分の為だし」

「そ、そそ、それでもです！……梓ちゃんも、きき、気にしてたから」

「理佳？」

視線を下に落とした理佳に香奈は気付いた。

「きき、きに、してたの。ずっと……落ち込んで……」

理佳は思い出す。

昨日のことを……。

ずっと、抱えていた思いがついポロリと出たその瞬間を。

『……もう……香奈達とも……これで終わりになるわね』

小さな呟きだったが、理佳は確かに聞いた。

そしてその顔によぎった哀しげな表情を確かに見た。

「凄く……気にしてたの」

「……」

「でも、あ、梓ちゃん、その、気が強くて」

あそこまで拗れたら、絶対に自分から謝れない。

いや、そもそも梓が自分から謝る事はない。

どんなに後悔しても、どんなに苦しんでも高すぎるプライドが邪魔をする。

そうしてまた、後悔するのだ。

梓はそうやって、いつも大切なものを失ってきた。

両親も、友人も、そして――。

「だ、だだ、だから、ありがとう」

いつもクラスを中心に居た梓。

友人だつて多い。

でも、その友人達の顔触れは一定期間毎に入れ替わっていた。ずっと友達でいるのは理佳と――香奈、美鈴、椿ぐらいだ。

しかも美鈴は何度も拗れる仲を香奈が引き留めている感じで、椿は流されるままな所がある。

「その意味で言うと、理佳ぐらいか」

「か、かか、香奈ちゃんもだよ」

オドオドとしつつも、強い口調で理佳が言う。

「そうかな」

「そうだよ！　だ、だだ、だからありがとう、梓ちゃんと仲直り、してくれて」

「……」

嬉しそくに微笑む理佳は、本当に梓の事を心配していたのが分かった。

「まあ……理佳が心配するのも分かるか。梓もなんだか何時もと様子が違ったし」

「っ……」

ハッとした理佳の様子に、香奈は気付かず言葉を続けた。

「なんていうか……いつもより怒りの沸点が低くて……なんか元々機嫌が悪かった所に油でも注いだような感じ」

前にも……似たような事があった気がするのだが、思い出せなかった。

「まあ……私の気のせいかな……っていう気もするけど」

「……香奈ちゃんの言うとおりだよ」

「理佳？」

「……梓ちゃん……その、今週の月曜日に、理人君りひとと何かあったみたいなの」

「……は？」

理人って、あの理人か？

「うん。その、理人」

本名を篠宮理人。

篠宮財閥の御曹司で、香奈達とは同じ学校に通う同級生だった。

篠宮財閥は、香奈の母の実家——神有財閥に比べると小さい財閥だが、元々は旧華族という歴史ある名家として政財界でもその名を馳せていた。

理人はその本家子息だった。

「でも、なんで？ 理人の通う学校はあそこでしょ？」

桜子と共にあの超名門エスカレーター校に合格し、今年の春からそちらに通っている。

おかげで、何人の少女達が泣いたか分からない。

美少女コンテスト荒しかった母にうり二つのクールビューティー。

加えて、文武両道、品行方正と三拍子揃い。

物腰は柔らかく紳士的という理想の王子様を描いた様な美少年となれば、異性は誰も放っておかない。

それこそ、まだ十二歳だというのに、社交界では彼の花嫁の座を巡って争いが起きているらしい。

名家の令嬢達の間では「結婚したい将来有望な男ベスト5」というものがあり、第一位は香奈の従兄弟である柚緋で、第二位が理人だった。

因みに、社交界の子息の間で「結婚したい女性ベスト5」のトッ

ブは桜子である。

と、なにげに同級生が男女ともにランクインしているが、実は男の方は残りの三人も香奈達は知っていた。

それこそ、第一位と第二位に負けない素晴らしい腹黒鬼畜どもである。

特に第三位は、理佳にとっては恐怖の対象でしかないが。

そんな理佳は、香奈の疑問にオドオドした物言いで答えた。

「だ、だから、社交界のパーティー、でで」

「また喧嘩？」

子供達にとつては将来の結婚相手探しでもあるパーティーで喧嘩をする者などまず居ない。

表ではにっこり笑い、裏で誹謗中傷が基本。

しかし梓と理人に関しては違った。

幼馴染みでもある二人は、場所や状況を関係なく喧嘩する。

といっても、実際には梓が一方的に怒るというものだが。

「く、詳しい事は、わからない」

「いや、あの二人なら有り得るよ」

特に今年の春先は酷かった。

梓が超名門校に落ち、理人は受かった。

その事でも酷くやりあったらしく、梓の怒りは暫く収まらなかった。

「理人なんて大嫌いよ！」

その後、梓は徹底的に理人を拒絶し目もあわせなかった。

理人は理人で梓の怒りに慣れているのか、完全に放っておきそのまま卒業となった。

それ以降会ったという話は聞かなかったが、考えてみれば社交界のパーティーでは顔を合わせていてもおかしくない。

「梓の家もお金持だからね」

といっても、社交界での梓の家の評判は良くない。

というのは、梓の家はいわゆる成り上がりだからだ。

古い家柄を尊ぶ者達にとっては、ポツと出の成金として蔑む対象でしかない。

おかげで梓は成金の娘と馬鹿にされる事も多く、それが梓の勝ち気な性格を助長させたといってもいい。

元々気が強かったが、馬鹿にされた事で負けん気が刺激されていたのだ。

だが、理佳からすれば梓がそこまで馬鹿にされるのは、理人が原因だとみている。

理人は社交界の高嶺の花だ。

そんな彼の側に居る梓は、他の令嬢達やその親からすれば邪魔な存在でしかない。

また、理人の親族の中でも古き血筋を尊ぶ者達の中では、成金の娘である梓が必要以上に次期当主に近づくのを激しく嫌っている者達も居る。

梓の家の事を気にしないのは、篠宮本家の人間ぐらいだろう。

「けど、理人との間の事なら私達が口を出さない方が良いよね」

「……う、うん」

理人がらみで梓が怒っている場合はとにかく傍観。

下手に手を出せば、桜子の事でライバル心を剥き出しにしている時よりも厄介な事になる。

「人間関係って難しいよね」

「う、うん」

と、後ろから近付いてくる足音に香奈と理佳は口をつぐんだ。

梓と美鈴の声が聞こえてくる。

「なんで日誌一つでそんなに時間がかかるのよっ」

「丁寧に書いてるからよっ！」

「どうせ余計な事ばかり書いてるんでしょっ?!」

「必要最低限の事しか書いてないって!」

「ならあの猫のイラストは何っ」

日誌一つでどうしてそこまで言い争えるのか。

不思議で仕方がない香奈だった。

第二十三話 夢見

「お願いします」

「はいはい」

このバスは校長の運転らしい。

先のバスに乗り遅れた生徒達が次々と乗り込む中、香奈達も挨拶して狭い通路を進んで行く。

そして空いていた座席を見つけると、前の座席に梓と理佳が、後ろの席に美鈴と香奈が座る。

「では、麓までのドライブをお楽しみ下さい」

いつもの校長の口上の後、バスが発進した。

「そうだ。お昼はどうしよう」

「美鈴は暢気ね」

「規則正しい生活をしていると言って」

前の座席に身を乗り出す形となったまま、美鈴は梓の物言いにふくれっ面をする。

「で、でで、でも、梓ちゃん。今日は、きゅ、給食なかったし」

「わかってるわよ。駅に着いたら何か買いましょう」

「了解。だって、香奈——」

隣に座った香奈を見た美鈴は言葉を止めた。

「どうしたの？」

「香奈寝ちゃってる」

「……」

そこには、すやすやと眠る香奈の姿があった。

一瞬呼吸が止まるほど激しい衝撃が全身に走る。
痛い。

痛い。

痛い。

イタイ。

イタイ。

イタイ。

だが、その痛みもほどなく消えた。
体の感覚がない。

手も足も消えてしまったようだ。

一体どうなったのか。

ああ――。

近寄ってくる幾つもの足が見えた。
運動靴、ハイヒール、革の靴……。

誰かが呟いた。

「……もう駄目だな……」

駄目？

駄目ってなんだ？

いや、その前に自分は何故こんな事になっている？
思いだそうとするが、頭が回らない。

目の前に見える足の主に聞こえる声が出ない。

口が動いている感覚もなく、ただ心の中だけで問う。

何故こうなった？

どうして？

どうして？

誰か教えて。

自分は誰？

自分は何をしようとしていた？

「これは絶対に生きてないな」

「当たり前だろ」

生きてない？

「こんな――バラバラで生きてるわけがない」

バラバラ？

その言葉が、脳裏にひっかかる。

バラバラ。

バラバラ。

バラバラ。

ああ……何かを思い出しそうだ。

大切な……大切な……。

まだやるべき事が残っている。

「っ！ 逃げる！ 火がっ」

「け、けどこの人はどうするんだっ」

「馬鹿！ 既に死んでるんだ！ 俺達が逃げるのが先だろっ」

「そうよ！ それに他の生存者を先に助けなきゃっ」

バラバラ。

バラバラ。

バラバラ。

思い出さなくては。

やるべき事を。

まだ残っている、自分がしなければならない事を。

業火がこの身を包み、全てが真っ赤に染まってもなお、考え続けた。

思い出さなくては。

思い出さなくては。

思い——。

——テヲカシテアゲヨウカ。

だれ。

聞こえて来た声に反射的に問いかける。

——オロカでカワイイ。

——オマエノゾミヲカナエテヤルヨ。

炎の中に、ねっとりと響く笑い声が聞こえる。

けれどその笑い声は、酷く心地良かった。

心の中に沈んでいたそれをゆつくりと呼び覚ます。
でも何故——助けてくれる？

——ゴホウビダヨ。

——オマエガイチバン。

——シヲモタラシテクレタ。

し。

シ。

シ。

死——？

紅いヴェールを切り裂く様に伸びてきた黒い手を、じっと見つめる。

——サアテヲ。

その言葉に、なかった筈の手が伸びた。

コレデモットコロセル

——ソウダ。

——ダカライマハネムレ。

——ヤツラノメヲノガレルタメニ。

——ソノトキガキタラオコシテヤロウ。

——トビッキリノブタイヨウイシテヤル。

血に染まった瞳がグルリと動き、傍観者を捕らえる。
それがニタリと笑ったのを、香奈は見た。

これは悪いものだ。

本能が激しい警鐘を鳴らす。

あれは駄目。

あれはけっして、近づいてはいけない——モノ。

ニタリ。

ニタリ。

口元から流れ出る血で染まって口元が引き上がる。

既に機能を停止した筈の筋肉が、歪んだ笑みを形作る。

あれはとてもキケン。

既に死んだ事にも気付かず、黒い手の誘いにつた哀れな存在。

それが、香奈をしっかりと見つめた。

べろりと唇のめくれた血だらけの口元が。

ゆつくりと動いていく。

見てはいけない。

見ては。

見ちゃ――。

禍々しい視線が香奈の動きを封じる中、必死に視線を逸らそうとした。

カイセンヲキレーー！！

「っ！」

ドオオオンと、もし雷に打たれたらこんな感じではないかという強い衝撃に香奈の体が弾かれた。

宙を舞う体。

めまぐるしく変わる視界。

それでも、自分を捕らえていた禍々しい鎖が引きちぎられていく感覚に香奈は安堵の息をはいて目を閉じた。

これは夢。

夢な筈だ。

けれど、全身に絡みついた悪意の恐ろしさがそれを否定しようとする。

夢。

夢。

これは夢。

目覚めなければ。

早く。

早く。

キヲツケロ。

(誰?)

キヲツケロ。

ヤツニミツカッタ。

ヤツハオマエヲ。

警告する声。

けれど急速に香奈の意識は閉じられていく。

(気をつける? 見付かった?)

ただ、とてつもなく嫌な予感がした。

恐い。

恐い。

コワイ。

その時、またあの視線が香奈を捕らえる。

すぐ耳元で、生臭い息が感じられ――。

「俺の女に手を出すな」

囁かれる言葉をかきけす様な鋭い声を最後に、香奈の意識は大き

く飛んだ。

「香奈? どうしたの?」

はっと我に返った時には、そこは見覚えのある通学バスの中だった。

聞こえて来た声は隣から。

ゆっくりと横を向いた香奈の目に、心配そうにする美鈴の顔が入った。

「み……すず?」

「大丈夫? 魔されていたみたいだけど」

「……ここ」

「ああ、まだ駅にはついてないわよ」

「あと十分ぐらいかしら」

前の席から梓が顔を見せた。

遅れて、理佳も顔を出す。

「凄い冷や汗……」

美鈴の言葉に肌に触ればベツトリと手が濡れた。

しかし差し出されたハンカチを受け取る気力はなく、代わりに美鈴が顔を拭いてくれる。

「大丈夫？ 椿の家に行ける？」

心配そうな声に、香奈はグツタリとしながらしばし黙り込む。

「香奈？」

梓達も心配そうに声をかけた時だった。

「……大丈夫」

何とかそれだけ、答える事が出来た。

二十畳ほどの広い和室。

中央にある木製の揺り椅子に座った存在がゆっくりと目を開ける。その華奢な身に大輪の花彩る紅い振り袖を纏った存在は、恐ろしい程の美貌だった。

触れる事すら躊躇わせる白い肌に、腰まで伸びたぬばたまの黒髪。けぶる様な睫の下にある大きな黒曜石の瞳には、深遠なる知性の光が灯る。

シャープな小顔に色づくのは、血のように濡れた唇。

誰もが女と見紛う優美な美貌は、穢れ無き巫女を思わせる風情を漂わせていた。

そう――その存在を一目見た者は、本来の性すら忘れて誰もが巫女姫と呟くだろう。

だが、近付いてくる気配に口元を引き上げた瞬間、巫女の清廉さ

は消え、恐ろしいまでの魔性の美貌へと変化し、蕩ける様な色香が沸き立った。

「来たのか」

「ええ——」

姿を現わさず、ただ声だけが部屋に響く。

「力を使われたようですね」

「なに……こんなもの、使ったうちに入るものか」

テノールの美声が、血の様な紅い唇から紡がれていく。

「それにしても……まさか、香奈が力を発現させるとは……しかも、夢見」

「そう思うか？」

「え？」

響く声の主に向けて囁く。

「あれは確かに夢見ではあるが、ただの付属だ」

「……」

「本来の夢見に比べれば、断片的にしか垣間見れていないし……だが、今回の『死』が関わっている」

「……」

「反応したな。『死』に」

「危険ですね」

「危険だが……それ以上に面倒な事が起きた。——ミツカッタ」
「え？」

「回線を切らせたが、相手側がしぶとくてな」

「それは、どちらで？」

「『香奈』の方だ。もう一つじゃない」
ホツと息を吐く音が聞こえた。

しかし、それは最悪の状況ではなかったというだけに過ぎず、危険は迫り続けている。

「それでは今後の方針は」

「後で説明する。まあ——連理叔父も放ってはおかないだろうがな」

とはいえ、あのフルオープンにはまいった。

取捨選択出来ないのは分かっていたが、「ヘイカモン！」と両手を広げきったあの状態。

出来もしない素人のくせして、アンテナだけは巨大なそれに思わ
ずベキベキと破壊してやりたいとさえ思った。

いつそのこと、テレビのアンテナのように叩き折ってやりたい。

「理人と夕霧を呼べ」

「あのお二人をですか？　しかし今は」

「無理なら夕霧だけでもいい。ふっ……あの叔母君とやはらは中々に
くせ者だからなあ」

理人が聞けばうんざりするだろう。

「楽しそうですね」

「ああ、楽しいさ。くくっ！　とんだ笑い話だ。いや、笑える冗談
だ」

主の言葉に、声は苦笑する。

あの血筋に煩い者達からすれば、この上ない夢の実現だというの
に、この主にとっては冗談にしかすぎない。

「ふふ、理人がな……まあ、自分に降りかかった火種ぐらい自分で
振り払えるだろうがな」

出来れば、女狐が動く前に終わらせて欲しいが。

あれが動くと、色々と面倒になる。

「行け——」

「御意、柚緋様」

声の主の気配が消え、再び一人になった中で、柚緋は腕のせ台に
肘を突き笑う。

ゾクリとするほど官能的な笑みだった。

「柚緋か……」

神有本家当主の孫息子——神有　柚緋。

それが今の自分の名であり、使える力でもある。

「まあ、せいぜい使わせてもらっさ」

ぐつと手を握れば、年を追う事に強まる力が滲み出る。

十二の年、まだ未成熟でこれだ。

この血肉が内包する潜在能力は、人には過ぎたる力だが、構いやしない。

まあ——自分でなければとつくの昔に暴走させていただろうが。

「強すぎる力も困りものだな」

まあ——それが『完末』の宿命でもあるのだが。

そうして柚緋は静かに瞼を降ろしていった。

第二十四話 梓の本音

まだ体がふらふらする。

しかし頭の痛みは減り、香奈は美鈴に手を繋がれながら通学バスから降りた。

運転手の校長や他の生徒達が口々に気遣う言葉をかけてくれたから、よっぽど顔色が悪いのだろう。

それほどあの恐ろしい夢は香奈を衰弱させた。

あの鼻の曲がる様な臭気が全身に絡みついているようだ。

ふと、肉の焼ける音と匂いが蘇り吐き気がこみ上げてきた。

「香奈、やっぱり帰った方が良くない？」

「大丈夫」

そう——大丈夫。

取り返しの付かなくなる前に夢から覚められたのだから。

と、先程の夢を思い出す。

あの恐ろしい視線に身動きを封じられた自分を助けてくれた声。

カイセンヲキレは、回線を切れという事だろうか。

何度も警告したそれは、力ずくであの夢から自分を引き剥がしてくれた。

最後に聞こえて来た言葉はよく聞き取れなかったが、何処かで聞いたような気が——。

しかし、あまりにもあの夢の光景が強すぎて、言われた言葉も声の記憶も消えていく。

と、その時腹部を中心に襲った感覚に、カクンと膝から力が抜けた。

「香奈?!」

そのままペタリと道に座り込んだ香奈に美鈴が悲鳴をあげる。

「ちよっ! 大丈夫?!」

「か、かか、香奈ちゃん?!」

梓と理佳も駆け寄ってきた。

「何処か休める所」

「……すいた」

「は？」

聞き返した美鈴に、香奈が答えた。

口では無く、お腹で。

グギュルルルと大きな音が鳴り響く。

「……お腹減った」

「……」

「……」

「……」

「死ぬ。マジ死ぬ。その駅横のスーパーで売ってる定価80円の特大コッペパン食べないと死ぬ。食べたら復活出来る」

「香奈の元気の源やつす！」

悪かったな。

「RPGのポジションより安いわね」

おいおい、RPGと現実世界の通貨単位は違うだろ。

「こ、コッペパンだね！」

「マーガリンと小豆のね」

めっちゃ元気じゃん！！

美鈴と梓の突っ込みは気にせず、香奈はふらふらと近くバス停のベンチにごろりと横になる。

が――。

「うわっ！ あちちちあつう！」

今日も気温は軽く三十度越え。

カンカン照りの太陽による直射日光を浴び続けたベンチに座れば当然そうなるだろう。

馬鹿だ。

学校の机の時と同じ事をしている香奈に、梓は溜息をつき理佳は苦笑したのだった。

「とりあえず、駅構内のベンチで休みなさいよ」

買い出しはこっちでしとくからと提案する梓だが、ベンチの暑さに飛び跳ねている香奈には聞こえるわけもなく。

香奈は強制的に首根っこを掴まれて駅構内へと投げ込まれたのだ。
った。

「じゃあ、美鈴。香奈についてあげてね」

「了解」

「死んじゃう」

「ならお握りで我慢してよ」

「……」

ふいつとベンチの上で寝返りをうつ香奈に梓を青筋をたてる。

スーパーには香奈の所望するパンはなかった。

だから代わりにお握りを買ってきたが、香奈はショックを受けて
ふて腐れた。

そしてパンパンあまりにも煩いから、梓はパンを買いに行くこと
にしたのだ。

そう――。

『うつさいわね！　なら、私の家の御用達高級パン屋から買ってきて
あげるわっ！』

因みにその台詞の後、香奈は梓に叩かれた。

というのも、『高いお店って量が少ないし』と本音を暴露したか
らだ。

そうして頭に大きなコブをつくった香奈はベンチに沈み、美鈴と
一緒にお留守番となった。

「けど、高級パン屋じゃなくてもいいんじゃない？」

「どうせ椿にも何か持って行くつもりだったし、丁度いいわ」

「いや、そうじゃなくて」

このお金持めと美鈴が苦笑する。

「理佳、行くわよ」

「う、う、うんっ」

そうして二人は駅を後にし、目的の店へと向かった。

パン屋は、駅前近くのショッピング街の中にあつた。

ショッピング街は一昨年からオープンし、「高くてもいいものを」をコンセプトに、本物志向の高級店が連なっていた。

一般市民が多く住む郊外ではあるが、近くにお金持ちや名家の子息令嬢が多く通う超名門校がある事もあり、客足も順調だという。また私立という事で遠方の学生が多い反面、以外にも郊外に住む学生達も比較的多く、そんな彼らは一般住宅地との間を流れる大きな川の向かいに構えられた高級住宅地に住みつつ、ショッピング街のお得意様となっていた。

しかも最近は、そのショッピング街にしかないブランドに興味を示した都心からの金持ち客も大勢来るようになっていた。

特に今日は金曜日という事もあり、どの店にも多くの客の姿が見えた。

また、客達を待つ運転者付きの高級車が店内前の道路にずらりと並んでいる。

普通であれば路上駐車として警察に検挙されそうだが、路上駐車可能な様に最初から道路整備されている事もあり、その手の心配はここがオープンしてから一度もなかった。

それを尻目に、梓と理佳は目的のパン屋へ向かって幅広い歩道を歩き続けた。

「つてか、香奈もパンパン煩いんだから」

歩きながら先程のやりとりを思い出す梓だったが、ふと横で理佳がくすくすと笑っているのに気付いた。

「な、何よ」

「あ、い、いや」

「言いなさいよ」

気になるじゃないと言えば、理佳が視線を彷徨わせる。

だが、一睨みすれば観念したように口を開いた。

「あ、梓ちゃん、嬉しそうだから」

「……は？」

予想外の答えに梓がパカンと口を開ける。

「き、気付いてない？ わ、笑ってるの」

ギョツとして思わず顔に手を当てる。

「う、嬉しくてたまらないって、感じ」

「な、何言うのよ」

と、理佳がふにやつと笑う。

「か、かか香奈ちゃん達と、なな仲直り出来て良かったね」

「な——っ！」

「か、かか、香奈ちゃんのおかげで、美鈴ちゃんとも仲直り出来て

…… あ、ああ梓ちゃん 落ち込んでたし」

「そ、そんなわけじゃないじゃないっ！」

理佳を怒鳴りつけるが、顔に熱が集まっているのはごまかせない。
だから、理佳を置き去りにするように早足で歩く。

「ま、待つて梓ちゃんっ」

照れを隠す様な梓を理佳は慌てて追い掛けた。

そのおかげもあり、パン屋へはいつもより早く辿り着く事が出来たのだった。

「た、たくさん、人がいるね」

「金曜日だしね」

外からでも大賑わいは一目瞭然。

しかし、梓は圧倒される事なく店へと突入した。

パンの焼ける良い匂いが梓達を包む。

途端にお腹が小さくなり、空腹感が増していく。

「た、たた、高いね」

「高級だし」

と言いつつ、梓はトレイにポイポイとパンを載せていく。

「今日は私の奢り。理佳も好きなのを選びなよ。美鈴はアップルパイに目が無かったわね」

「え、で、でも」

「いいから早く！」

梓の剣幕に追い立てられるように理佳が慌ててパンを選び出す。

「えっと、えっと」

優柔不断な面もあり、中々選べない。

美味しそうな焼きそばパン。

カリッと焼かれたカレーパン。

ほんのりと甘いメロンパン。

「え」と、え」と

「買えば良いじゃない」

全部買っていく梓に、理佳が慌てた。

一個五百円もする様なパンなのだ。

三個買ったら千五百円である。

「梓ちゃん、おちついてっ」

「私はいつも落ち着いてるわ」

「で、で、でもお金」

「あゝ、大丈夫よ。それぐらいなら貰ってるから」

今日の朝もテーブルの上に置かれていた封筒には、このパン代の数十倍のお金が入っていた。

中学生の一日のお小遣いが十万円。

有り得ない金額をポンツとにおいていく両親を思い出し、梓は嘲笑した。

いつもいつも仕事で忙しく、愛情とはお金を与える事だと思っている両親だった。

抱き締める代わりにお金を、会話の代わりにお金を、側に居てくれる代わりにお金を。

学校の行事どころか、具合が悪い時も両親が側に居てくれた事は殆ど無かった。

そして毎朝、今日も遅くなることを詫びる手紙と共にお金があるのだ。

お金持ちで良いね――。

確かに良いだろう。

お金がなければ生活出来ない。
けれど……。

「梓ちゃん？」

「……他に買う物がないなら、レジに行くよ」

「あ、う、うん」

飲み物はさつきスーパーで買ったから、パンだけを持ってレジへと並んだ。

「六千八百円です」

「ろ、ろろろ六千——」

「理佳、煩い！」

さっさとお金を払ってパンの入った袋を受け取ると、理佳の手を掴んでパン屋を出て行った。

「早く戻りましょう」

店が混んでいたせいで思ったより時間がかかった。
時計を見れば三十分も経っている。

「もう二時過ぎたのね」

「い、いいい急がないと——」

その時だった。

クラシックの曲が理佳の鞆から聞こえて来た。

「携帯？」

「あ、お母さんだ」

理佳が慌てて携帯電話を取り出すと、通話ボタンを押した。

「は、はい。あ、うん。え？　今居るところはショッピング街……」

うん、え？　わ、わかった」

「理佳？」

携帯を切った理佳が申し訳なさそうに顔を歪める。

「お、お母さんから、おおお使い頼まれた」

「お使い？」

「う、うん。この先にある、書店で、注文した本を持って帰ってっ

て」

「この先——ああ、あそこか」

数件先に目的の本屋は見えた。

「先行つてとつてきなよ」

「う、う、うん」

「外で待つてゐるから」

そう言つと、理佳が本屋へ向かつて走り出した。

が、五メートルほど進んだところでポテンと転ぶ。

「……」

泣きそうになりながら立上がった理佳に、梓は溜息をついた。

膝がすりむけている。

「絆創膏も買うか」

丁度自分の隣にドラッグ・ストアがある。

大きな声で理佳にストアに寄ることを告げると、梓は店内へと入つていった。

ウィーンと音を立てて開いた自動ドアを潜り抜けると、涼しい冷房の風が吹き付けてくる。

思ったより暑さが応えていたらしい。

汗を拭いながら、心地良い風にホツとしながら絆創膏売り場へと向かう。

「これでいいかな」

防水加工のものを選びレジへと向かう。

が、その途中で梓はあるものを見つけた。

「……」

香奈が近頃好んで食べるお菓子だった。

細い体をして食欲魔神。

絶対に神無家のエンジェル係数は高いと周囲が心配するほど食べまくる。

なのに肥らない体は梓にとっては自分に挑戦していると思えない。

一体何処でカロリー消費をしているのか。

「……」

気付けばお菓子を手に取っていた。

「……まいっか」

ついでに冷やせばしゃりしゃりアイスになる棒状のジュースも手に取る。

椿の家の冷蔵庫で冷やさせて貰えば良いだろう。

「って……私も甘いわね」

ふっと笑う梓だが、その笑みは嘲笑の類ではなかった。

と、その時店の入り口から激しく言い合う声が聞こえてきた。

「だから、私は悪くないって！」

「な、なによ！ そっちが悪いんでしょー！」

入ってきた数人の女子高生。

そのうちの二人が喧嘩している事にはすぐに気付いた。

どちらも意固地になっているのか、友人達に宥められても激しい言い合いが止まらない。

けれど――。

「もうっ！ いい加減にしてよっ！」

一人の友人の怒声に言い争っていた二人がビクリと体を震わせる。

「で、でも」

「別にそんなのどうでもいいじゃない！」

「そ、そんな事ないよっ！」

しかし、その怒声をあげた友人はとにかく口が回るらしく、ほどなく二人を仲直りさせてしまった。

そうして店を出る頃には、また仲の良い様子で店から去って行った。

ふと、理佳の言葉が蘇る。

『か、かか香奈ちゃん達と、なな仲直り出来て良かったね』

そう――確かに良かった。

『香奈ちゃんのおかげで……』

そう——香奈のおかげだ。

出なければ、自分はかけがえのない友人を二人も失っていた。
先程の女子高生達の喧嘩。

止めに入っていた女子高生が香奈とだぶる。

梓はけんかつ早い。

そしてその矛先は大抵香奈と美鈴だ。

しかし、相手が香奈の場合は喧嘩が長引く事は少なかった。

というのも、香奈がすぐに手を差し伸べてくれるからだ。

意地っ張りで謝る事が出来ない梓に香奈は自分から謝る。

そうして梓が仲直りしやすい方向に持って行ってくれるのだ。

美鈴と喧嘩した時も、大抵香奈が間を取り持ってくれる。

今回のように。

梓ははぁと大きく息を吐く。

理佳が言ったとおり、梓は今回の香奈達との仲違いを気にしていた。
た。

いや、後悔していた。

自分が悪いのは分かっていた。

もともと機嫌が悪かったなんて言い訳にもならない。

典型的なお金持ちの我が儘娘と言うように、自分の意見を押し付

けて断られれば思い切り罵った。

これで嫌われないわけがない。

しかも、梓は言ってしまった。

あんたなんて特別な筈がない——と。

香奈が悪いわけではない。

しかし、香奈はあの桜子と仲が良い。

自分が望んでも決して手に入らないものを手に入れた美しい少女
梓が必死に努力してきた事が馬鹿らしくなるほど、何でも簡単に
できてしまう恵まれ過ぎた存在。

気付けば桜子に関わるものまで忌避するようになり、それは今年
の春で更に強さを増した。

そして――。

その怒りと悔しさ、嫉妬が下地となっていた。
それが何時もなら聞き流せる事も聞き流せなくなり、今回のように香奈を罵る原因となった。

自分が悪いのだ。

凄惨な事件への不謹慎な発言をしたのは自分だ。

けれど、香奈の言い方に下がった怒りの沸点は敏感に反応し、それがあの女を思い出させた。

桜子――。

梓が決して乗り越えられない、完璧な少女。

一瞬、香奈に桜子が重なり、気付けば言葉を止められなかった。

香奈を罵りながら、自分は桜子を罵っていた。

桜子が憎い。

桜子が腹立たしい。

これはただの嫉妬だ。

桜子には桜子の苦労がある――そう思っても、今までの事を思えばあっけなく理性が崩れていった。

そんな風にして、自分の感情一つ制御出来ない未熟な自分。

その未熟さが、今回の件を起こした。

しかも冷静さを取り戻した後も、高すぎるプライドが邪魔をして謝る事すら出来なかった。

悪いのは自分。

なのに自分から謝れないプライドの高さが腹立たしく、その怒りが更に香奈達への理不尽な罵りへと変わっていった。

ああ……今回こそもう駄目だ。

香奈達を罵倒しながら思っていた。

いつも思うが、今回はその比ではない。

絶対にもう駄目だ。

普通に考えれば、あれだけいつも自分に振り回されているのだ。
理不尽な事を言われて、理不尽な事をされて。

もう今回の事は決定的だ。

誰も居ない所で涙を流して後悔するも、やはり謝罪は出来なかった。

どうして自分はこんなのだろうと、何度自己嫌悪に陥ったか。

だから……今回の事は本当に梓にとつては僥倖とも言えた。

でもすぐに差し伸べられた手に縋れず、また憎まれ口を叩いてしまった時には死ぬほど後悔した。

けれど一度出た言葉はなかった事に出来ず、今度こそ駄目だと覚悟した。

確かに香奈達が椿の事に関して自分と意見が違った事には怒りを覚えもした。

なぜなら、椿とは友達だから。

友達が困っていたら何を置いても助ける方を選ぶのが当然だと思っ
い込んでいた。

もちろん香奈も美鈴も助ける方を選んだ。

しかし、梓のやり方にはついていけないと言われて、ただでさえ
低くなった怒りの沸点は過剰なまでに反応した。

どうして分かってくれない？

友達を何が何でも助けたいと思うのはおかしい事なの？

一が駄目なら全て駄目。

そんな考え方は、断られた事だけに注目させ、梓の身勝手な怒り
をかきたてた。

でも——今日、香奈が言ってくれた。

『どうして私がそんなおかしい犯人の為に、友達を喪わなければな
らないの？』

そう……自分の案は危険すぎると、ようやく、納得出来た。

遅すぎる、頭の悪い自分。

いや……何処かでは分かっていたのかもしれない。

けれど……否定された事がショックで、認められなかったのだ。
どうしても……どうしても、認められなかった。

他の人から見れば酷く馬鹿らしく、幼稚な考え。

愚かなただの我が儘娘。

でも、それが梓なのだ。

そうやって生きてきたのだ——この十二年。

培ってきた考え方はそう簡単に変えられず、梓は香奈達に酷い事を言い続けた。

見捨てられてもおかしくない。

だから、両親だって自分を見捨ててるし、あいつも——。

投げつけられた言葉が脳裏によぎり、梓は首を振った。

もう……いいのだ。

理人の事なんて。

今更なのだ。

もうとつくの昔に見限られている。

でも……香奈達だけは。

差しのばされた手を、梓は必死に掴んだ。

こんな自分を受け入れて、美鈴とも仲直りさせてくれた香奈はきつと掛け替えのない存在なのだ。

椿も理佳も、香奈も美鈴も。

我が儘で意地っ張りな自分の宝物。

そう……これだけは手放せない。

「だから……いいのよ」

香奈達がいる。

それだけでいい。

『そんなに意地を張ってばかりだと、大切なものを失いますよ』

理人の言葉を思い出す。

まるで全てを分かっているかのような言葉。

それがまた腹立たしくて、酷い言い合いをした。

いや、一方的に自分が罵り続けた。

分かった様な事を言わないで——。

結局は、自分の手で大切なものを遠ざけているのだ。

両親も友人達もそう。

そして……理人に対しても。

『大切なものを失いますよ』

言われなくなつて分かつている。

だつて自分はもうとつくに沢山のものを失っているのだから。

「はい、千五百円になります」

レジに商品を持って行き、お金を払つて袋を受け取りながら梓はふつと自分を嘲笑う。

いつからこうなつたんだろう。

いつから。

ドラッグストアを出ると、一気に熱風が全身を襲う。

それに軽い目眩を覚えながら、本屋の前までいけば理佳はまだ店内に居るのが見えた。

どうやら店員が商品を渡すのに手間取っているらしい。

仕方ないな———そう思い、中に入ろうとした時だった。

視界に見覚えのある黒ベンツが止まるのが見えた。

と、本屋の隣にある宝石店で止まったベンツの扉が開き、三十代

中頃の高級ブランド服に身を包んだ女性が出てくる。

そして中から誰かを引張りだそうとしていた。

「さあさあ！ 早くおいでなさいな理人さん」

「叔母上、別に今でなくても宜しいのでは？ 今はその様な時間はないと思いますが」

「何を言うのです！ せつかくまとまつた話なのですよ！ 理人様

にとつて大切なお方にプレゼントの一つや二つ贈らずしてどうするのです！ それぐらいの時間は許されて然るべきですわ！」

聞こえて来た声に凍り付く梓の前に、ベンツからその相手が出て来た。

半ば女性に引きずり出されるようにして出て来た一人の少年に、その場は騒然となる。

女性も美しいと言えたが、少年の美しさに比べれば金メッキで誤

魔化された美しさだ。

偽物には決して越えられない、本物だけが持ち合わせる美。

対極的な二人に、誰もが目を奪われる。

いや、実際に周囲が目を奪われたのは、美少女コンテスト荒しと恐れられた美貌の母にうり二つの少年の方にある。

「なんで……ここに」

茫然と梓は呟く。

月曜日の社交界のパーティーで見たのが最後だったその美貌は、あれから数日しか経ってないのに更に磨き抜かれた気がした。

どちらかと言えば母の方が鮮やかで上品な赤牡丹、息子は春風にほころぶ清楚可憐で儂げな白牡丹として、社交界では有名だった。

幼い頃は美少女にしか見えなかった美貌は、十二となった今でもたいして変わらない。

超名門校中等科の制服に身を包む華奢な体も、身長が伸びたぐらいで到底男らしさとは無縁だった。

あれほど騒がしかった場が何時のまにか静まり返っていた。

と、艶やかな黒のミディアムヘアを揺らしながら、その黒炭の瞳がずっと梓へと向けられる。

途端にギョツとした表情に変わるが、それは梓もお互い様だった。しばし見つめ合う。

まるで自分達しか居ないように、互いに信じられないものでも見るかのように。

理人と、梓は小さく目の前の少年の名を呟いた。

幼い頃からの幼馴染みの名。

それが聞こえたのだろうか。

理人の瞳が微かに揺らいだ。

しかし言葉は出ず、梓もそれ以上何も言えずただ無言の時が過ぎる。

いつまでも続くように思えた……二人だけの時間。

だが——ほどなく少年の付き添いである女性の甲高い声によって、

その時間は終わりを迎えたのだった。

第二十五話 潰えた初恋

「まあ！ 榎木様の所の梓さんではないの！」

耳にキンキンと響く声に梓が我に返れば、三十代半ばの女性がこちらを見ていた。

だが、その瞳に侮蔑が色濃く混じっているのを、梓は見逃さない。社交界で何度も向けられてきた視線は、「成り上がりの生意気娘」という蔑みを強烈に含む。

「こんにちわ……理人の叔母様」

彼女は理人の叔母——理人の父の弟の妻だった。

旧華族の家柄で、遙か昔は一族から皇族に妃を差し出した事もある名家中の名家だ。

しかし時代の流れと共に権勢は弱まり、また支配者の座にあぐらをかき続けた歴史が仇となり戦後間もなく没落する事となった。

だが没落という現実を直視出来ない彼らは、一族の年若い娘達を有力な名家に政略結婚という名で差し出し援助を求めた。

それはこの理人の叔母も同じで、理人の家——篠宮家から援助を得る為に差し出された一人だった。

それだけ見れば、栄華に縋る『家』の被害者だろう。

しかしこの理人の叔母は中々に強かった。

自分の美貌と豊満な体を存分に使って当主の弟を籠絡し、最大限の援助を引き出していた。

と同時に、凄まじい選民意識の持ち主で異常なまでに血筋と家格に拘り、新興系の類は一切嫌った。

梓の家のような成り上がりもしくり。

そんなわけで、幼い頃から篠宮家に縁あつて出入りしていた梓は格好の侮蔑の対象とされてきた。

殴る蹴るの暴力を振るわれたわけではない。

しかし言葉の暴力の方は、梓の心を激しく傷付けた。

それは、気の強い梓でさえ恐怖と哀しみに萎縮してしまうほどに徹底したものだ。

だがそこまで酷くなったのは、梓の心の強さゆえだといっている。梓は必死に暴言や誹謗中傷に耐えたが、理人の叔母からすれば生意気にしか映らず攻撃の手はどんどん酷くなっていったのだ。

また理人の叔母は、篠宮家で自分と同じ思想を持つ者達を集め、彼らにも梓を攻撃させた。

篠宮家は理人の叔母の実家ほどではないが、古い家柄を持つ家である。

それゆえに、どうしても血に拘り昔の栄光に縋る者達は存在した。理人の叔母はその者達を利用したのである。

化粧が必要以上に濃く施された顔に禍々しい笑みを浮かべる。紅い口紅が引かれた唇が、ニタリと醜く歪む。

たとえ二人の関係を知らない者が居たとしても、一目で梓が蛇蝎の如く嫌われているのは瞬時に理解出来るだろう。

「梓さん」

名を呼ばただけなのに、まるで忌々しいと叫ばれたかの様だった。

「な…… んでしょうか？」

梓は笑みを作る。

社交界にて培って来た完璧なお嬢様の仮面を被り、本心を押し隠す。

今までの心の傷が悲鳴をあげ、手が震えそうになるのを必死に押え付ける。

ここで弱みを見せれば、途端に笑って喉元に食らいついてくるだろう。

儚げな花を思わせる風情の裏には、獲物を一撃で仕留める狩人がいる。

今も彼女は理人と梓の間に立って、気に食わない小娘の前から自分の甥を隠す。

お前には見る権利もないと言わんばかりの憎々しさが強烈に伝わってくる。

これが他の相手ならば、梓はすぐに噛み付き反撃しただろう。だが、この理人の叔母だけは駄目だ。

この——人の弱い部分を徹底的にえぐる存在だけは——。

「理人さんと仲の良かった貴方には、是非とも祝って頂きたいのです」

禍々しい笑みが、更に色濃くなる。

「理人さんと桜子様の結婚を前提とした婚約を」

「叔母上！」

理人の鋭い声が飛ぶが、梓は聞いていなかった。

いや、告げられた言葉を理解出来なかった。

理人。

桜子。

結婚。

婚約。

その四文字がグルグルと頭の中で回るのみ。

言葉の関係性とか、文章全体としての意味とかは全くなく、いつまでもグルグルと回り続ける。

理人。

桜子。

結婚。

婚約。

回り続ける中で単語は増え、減り、変化もした。

そして回り続けた結果——。

「理人が桜子に襲われて強制妊娠し結婚?!」

自分が何を呟いたのか、呟いた言葉の意味自体を理解してないとか色々問題はあ

が、大きく変わってしまった内容に、理人が叔母の後ろから梓に掴み掛かる。

「何で僕が妊娠する方になつてゐるんですかつ」

とんでもない誤解に理人の焦りも更に増す。

「違ふの？」

「違——」

「妊娠はしていませんわ。結婚前の妊娠などはしたない事ですからね。桜子様にはありえませんか」

クスリと馬鹿にした様に理人の叔母が笑う。

「とりあえずまだお二人とも中学生ですから、婚約のみ。ですが結婚出来る年齢に達したらすぐにでも式を挙げる予定ですよ」

桜子と理人が結婚。

単語だった言葉は文となり、再び梓の頭の中で回り始める。

それに気付いた理人が口を開くが、それを制するように理人の叔母が口早に告げた。

「もう本当に篠宮一族は大喜びですよ！ 桜子様のご実家である石守家は私の実家よりも古い由緒正しき名家。しかも現在も政財界、社交界にて権勢を振るわれているという偉大さ。その様な家と縁続きになれる事はわが篠宮家にとって最大の幸せですもの！！」

「……」

「しかも花嫁となられる桜子様は石守家の珠玉の姫。それを花嫁に頂けるなど——」

感極まつて声も出なくなる理人の叔母だが、その視線はしっかりと梓を捉えていた。

そして残酷に告げるのだ。

成り上がりのお前などとは比べものにもならない花嫁だと。

身の程を知れと。

そう——理人の叔母は気付いている。

梓の気持ちに。

必死に押し隠してきた——淡い初恋に気付きながら、叩き潰そうとしているのだ。

「もちろん、式は盛大に執り行いますが、その前に婚約式を行わな

いと。都心のホテルを借りて行つ予定ですよ。もちろん、梓さんにも出席願いたいですわ」

「え？」

「叔母上！」

「理人さんの大切なお知り合いですからね」

お知り合い——友人とすら認めないのだろう。

ましてや、幼馴染みなどとてもない。

ただの、お知り合いなのだ。

「席は理人さんと桜子様のよく見える一番前の席なんてどうかしら？ ああ、お知り合い代表としては是非ともお祝いのお言葉を頂きたいわ！ ねえ？ 理人さんもそう思うわよね？」

醜い笑みを浮かべ一人恍惚の表情のまま話し続ける叔母に、理人は眉を顰める。

だが、それさえも梓の視界には入らない。

「中学も違うようだし、理人さんと桜子様が婚約したら中々会えなくなるかもしれないから、是非とも婚約式には出席してね。ああ、中学が一緒ならまだ違ったのしょうけど」

理人の叔母は梓が超名門校の受験に失敗した事を知っている。

まあ——当然だが。

「二人の事、お祝いしてあげて下さいね」

ガブリと、喉を食いちぎられた。

と、理人が梓の肩を強く掴む。

「梓、これは」

「理人さん！ 桜子様と婚約したというのに他の女性に触れるなんてはしたないですわ！」

強引に理人を引き剥がそうとする叔母だが、甥に振り払われる。それをぼんやりと見ながら、梓の口は勝手に動いていく。

「婚約……ですか」

「ええ、結婚前提の婚約です」

梓に知らしめるように、言い直す理人の叔母。

「まあ、どうしましたの？ 顔色が悪いですわ」
分かつているのに、攻撃の手は緩めない。

「……その、あまりにも突然の事でびっくりしてしまって……理人……さんも、桜子さんも……ごく身近に知っている方なので」

「まあ身近なんて！ ああ、小学校は確かに一緒にいたが」

お前など近付く事すら許されないと言わんばかりに理人の叔母が笑い出す。

「それに婚約も突然ではありませんよ。今まで長く打診した結果ようやく先週決まったのですから。発表も今週の月曜日の社交界にて発表しましたしね」

今週の――。

「そう……なんですか？ 私も参加していましたが……」

「パーティーの一番最後に発表しましたの。聞いてないという事は、その前にお帰りになられたのではなくて？」

「……」

「本当に素晴らしかったんですよ？ 皆が若い二人に祝福してくれましたもの」

理人と桜子の婚約を祝福した。

二人が結婚する事を祝福した。

そうか……。

梓は、ずっと顔を上げて理人の叔母を見つめた。

と、その歪んだ笑みを浮かべた顔があっけにとられたのを見て少しだけ胸がスツとした。

どうやら泣いている顔を想像していたのだろう。

ならば笑ってやろう。

既に喉を食いちぎられ瀕死の状態を逆手に取り、演じるのだ。

梓は、既に泣きたいのか怒りたいのか喚きたいのか、それさえ分からなかった。

けれど、そのどれかを行えばきつと目の前の女性は大喜びするだろう。

だから絶対にしない。

人を苦しめるのが好きな相手にとって一番応えるのは、相手が全く応えていない事だ。

だから笑う。

とびつきの笑顔で、言ってやろう。

今だけは高すぎるプライドが嬉しかった。

潰えた初恋も、桜子への強烈な嫉妬も即座にプライドに抑えつけられた。

笑える。

笑える。

笑え！！

自分の全てを否定し、馬鹿にし、侮辱した敵に一矢を報いるのだ。榎木家の娘として――いや、梓として泣きながら背を向ける様な事はしない。

戦え――。

「婚約、おめでとうございます」

顔の筋肉を気合いで制御し、完璧な笑みを作ってお祝いの言葉を述べる。

「是非とも、そのお祝いの式に参加させて頂きたいです」

ツンとする鼻、乾いていく目、震えそうになる声。

それらを全て押え付け、笑う。

泣いたら負けだ。

今の自分は演じる者。

心を押し隠し、自分の誇りとプライドをかけて演じきる。

子供だからと見くびるな。

十二の小娘にだって出来る事はあるのだ。

分かなければ、窮鼠猫を噛むという言葉をもう少し勉強した方が良い。

あつけにとられる理人の叔母に、梓は更に言葉を続ける。

「桜子様は本当に素晴らしい方ですから、さぞや篠宮家の方々はご

結婚を楽しみにされている事でしょうね」

「え、あ、そ、そうね」

戸惑い言葉をもつれさせる理人の叔母に笑いながら、梓は血を吹く心に耐えていた。

しかしそれでも、暴れ出す嫉妬の咆哮だけは止められなかった。

桜子。

桜子。

桜子。

何故――。

よりにもよって、桜子なのか。

まだ相手が他の少女ならば許せた。

いや、嫉妬はするだろうし激しく傷ついただろうが、それでも――！
どうして。

どうして。

どうして。

よりにもよって、自分が一番ライバル心を抱く相手が初恋の相手の――。

「おめでとうございます」

嫉妬を必死に押え付け、梓は心にもない事を涼やかな笑顔で告げる。

好きなら告白しろ――と、美鈴辺りなら言うかも知れない。

ずっと……十年近くの初恋だった。

理人に初めて引き合わされ、共に遊ぶ中で恋心は募っていった。

昔は梓だって理人と素直な気持ちで付き合っていた。

でも、周囲はそれを許さなかった。

理人の両親や本家の者達はそうでもないが、篠宮家分家の中には、梓が理人に近付くどころか本家に入出入りする事すら蛇蝎の如く嫌がる者達が居た。

何故お前がいるのだ。

お前の様な輩が入り出していい場所ではない。

そんな事を囁かれ続け、非難の眼差しの集中砲火を受けながら、
どうして思いを伝えられるだろうか。

しかも周囲は理人と梓の仲を危惧し、自分達の本家子息に相応し
い令嬢達を常に引き合わせていった。

その令嬢達のなんと美しい事。

なんと聡明で知性に満ちあふれている事。

理人と…… お似合いな事。

お前など相応しくない——そんな空気の中で、梓は物陰から理人
と令嬢達が仲良くするのを見続けてきた。

理人の隣は自分の場所だったのに。

子供心の嫉妬は狂おしいまでに激しく梓を苦しめた。

それでも理人は梓を忌避する事なく、今まで通りに接してくれた。
その優しさに何度思いを伝えたいと願っただろう。

けれど最後の最後で諦め続けた。

そう——結局は、篠宮家分家の者達や、理人目当ての令嬢達の鋭
い視線と誹謗中傷に梓は負けたのだ。

戦う事もなく、あっけなく敗北を選んだ負け犬。

そんな梓に、理人達の婚約を非難するどころか、嫉妬する権利す
らない。

だってそれを梓は自分から手放したからだ。

認められる為に戦うわけでもなく、本人に思いを伝えるわけでも
なく。

自分の恋心全てを押し隠して、ただの幼馴染みで留まり続けた。

そればかりか、理人といつも喧嘩して、沢山酷い事を言い続けた。

そんな自分に何の権利がある。

理人は篠宮家本家の跡取りだ。

将来は家のために結婚し、跡取りを設ける義務がある。

市民平等の現代に家のためなんてと言う者達もいるだろうが、こ
うして古くから続く名家になればまだまだ家というものが重要にな
るのだ。

よりよい血筋の女性を迎えて子供を作る。

正妻に子供が出来なければ、妾を囲つてでも設ける。

そんな――事が必要だと言われるぐらいの名家の跡取りなのだ……

…理人は。

そして、理人の相手がたまたま桜子だったただけだ。

いや――たまたまではないだろう。

桜子は社交界では誰もが憧れる絶世の美少女だ。

しかも家柄も家格も飛び抜けており、神有家には劣るが社交界の上位に君臨する石守家本家の姫である。

嫺やかで美しく、知性と教養もあり才能豊かな桜子を当家の嫁にと望む者達が多い。

それこそ、毎日求婚者が長蛇の列をなしている。

つまり理人は、そんな数多い求婚者達を押しつけて、桜子を妻に迎える権利を手に入れたのだろう。

理人なら当然だ。

でも……。

梓は心の何処かで期待していた。

桜子の夫には、他の男であればいいのにと。

神有家跡継の柚緋や、本条家跡継の夕霧でも良かった。

彼らは桜子の夫の座に一番夫近いとされていた。

なんでよりにもよって……理人の。

しかし今更言つても仕方が無い。

なぜなら、それは梓よりも桜子の方が理人にとって必要な存在だと既に認められたからだ。

そう、なつてしまつたからだ――とつくに。

だからこそ、桜子は理人の花嫁の座を手にする事が出来た。

梓は桜子が嫌いだ。

それこそ蛇蝎の如くと言ってもいい。

それは桜子が自分より優れているからとか、態度が腹が立つとか色々ある。

でも——それでも理人の事がなければ、ここまで嫌いにはならなかっただろう。

桜子だって努力し、今の地位を築き上げているのは分かっているから。

たとえどんなに天才に見えても影では努力しているのだ。

それは、有名な科学者である理佳の両親を見ていれば分かる。

沢山の努力と、少しだけの運。

それが天才なのだ。

桜子の偉業をみれば、それはきつと天才の部類に入るが、だからこそ努力しているのも確かなのだ。

桜子が凄いのは当然だ。

桜子は努力しているのだ。

でも……それが分かっているにしても、梓は桜子が嫌いだった。

周囲になんと言われても。

その証拠が小学校時代の騒動だ。

桜子の全てが鼻につき、ひたすら大騒ぎして喧嘩をふっかけた。

特に理人が桜子を褒めた時はとことん許せなかった。

身勝手だって、我が儘だって分かっていたけれど、それでも抑えきれない思い。

でも梓だって考えた。

いつかは——と。

まだまだ我が儘な子供な自分。

でも、沢山の経験をもっと大人になったら……その時は、桜子とも普通に付き合えるかもしれないと。

まあ——桜子は香奈にしか興味がなかったが、それでも今みたいな争いは減少するだろう。

そうすれば、それに振り回される者達も居なくなる。

なのに……なのに……今回の事で、自分は死ぬまで桜子が大嫌いなままになると梓は思った。

胸の痛みは更に激しさを増し、大量の血を吹き出していく。

泣いては駄目だ。

それに、別に桜子からすれば謂われのない事ではないか。

梓が桜子を嫌おうとも、それはただの一個人の感情に過ぎず、桜子の今後の人生に関わって行くものではない。

それに桜子だって名家の娘だ。

家のために結婚を選択したのかもしれない。

それかもし理人の事を純粹に好きだから話を受けたとしても、それは桜子に許された選択の自由によるもので、梓がとやかく言えた義理ではない。

そう……結局は梓の独り相撲なのだ。

最後まで。

子供っぽい自分の、身勝手な我が儘なのだ。
ならば――。

梓は自分の肩を掴む理人の手をそつと降ろさせる。

「理人、おめでとう」

桜子と婚約した今、周囲は更に梓が理人に近付くのを嫌うだろう。
だからこれが会える最後の機会。

これが最後なら……最後ぐらい、自分の一番の笑顔で覚えていてもらいたい。

「桜子との婚約、おめでとう。出来れば結婚式にも招待してほしいわね」

「梓……」

「あ、でも私からも伝える事があつたわ」

ポロリと零れた言葉に梓自身がぎよつとする。

自分は何を言おうとしているのだろう。

けれど、口は勝手に告げていた。

「私もお父様から縁談話が来てるの」

縁談話は確かに来ていた。

でも、それは断っても良い話だ。

梓も当然断ろうとしていた。

「今大学に通っている方で、将来は父の後を継いで事業を引き継ぐんですって」

「梓……」

「来週お見合いがあるの……だから」

梓は笑った。

「話が決まったら私達の婚約式にも来てね」

精一杯の矜持を胸に、吐き出された言葉に泣きたかった。

馬鹿な自分。

馬鹿で愚かな自分。

今更意地を張ってどうするのか。

それどころか、顔も知らない縁談相手まで巻き込もうとしている。しかし吐き出した言葉はもう戻らない。

香奈達の時と同じ。

結局、同じ事をしている。

ああ……もう限界だ。

梓はうつむき、涙を堪える。

もう一秒だって此処にはいられない。

早く。

早く。

早く。

此処から去らなければ。

「あ、ああ梓ちゃん？」

理佳の声が聞こえ顔を上げれば、キョトンとした顔で本屋から出て来た所だった。

「理佳！ 行くよ！」

「え?!」

「梓っ」

思いのほか出た強い口調に理佳が怯えるのも構わず踵を返せば、後ろから理人の声が聞こえてきた。

でも、何も聞きたくなくて先に言った。

「ごめん、待ち合わせしてるから」

理人を拒絶する様な固い声に、背後で息をのむ音が聞こえた。

ああ……やっぱり自分は……。

これでは、全てが台無しではないか。

せっかく……笑顔で耐えたのに。

梓はグツと唇を噛みしめると、しっかりと顔を上げた。

そして……最後に告げる。

「桜子と幸せになってね」

最後の一言を紡ぎ出すと共に走り出す。

後ろで理佳の驚く声もあつという間に小さくなっていく。

馬鹿だ。

馬鹿だ。

流れる涙も拭わず、梓は走った。

理人と桜子は結ばれる。

きっと誰からも祝福される夫婦になるだろう。

社交界の高嶺の花の二人だから、きっと大勢の客が招待されて盛

大な式があげられる。

そうなれば準備は忙しいし、きっと何年も前から緻密な計算のもと進められるだろう。

当然主役の理人と桜子は何度も顔を合わせ、忙しく式の準備に勤しむはずだ。

最初の夫婦の共同作業は式の準備――なんて、テレビで言う様にそして忙しくて、忙しくて……きっと梓の事なんて忘れてしまうだろう。

互いに、相手の事だけを考えて、相手の事だけで心を一杯にして。だから、最後には笑顔の自分を覚えていて貰いたいなんて、最初から無駄な事なのだ。

いや、それ以前に酷く厚かましい事だ。

今まで散々酷い事を言って、酷い事をしてきた相手が今更笑顔を覚えていて欲しい？

どれだけ身勝手なのか。

それぐらいなら、最初から素直に振る舞っていれば良かったのだ。結局、自分の手で全てを壊していく。

全て、全て、全て。

もう……全てがどうでも良い。

めちやくちやに走っていく。

誰かが追い掛けてくるわけでもないのに、どうしてここまで走るのだろう。

でも……もうどうでもいい。

今は一刻も早く此処から逃げたかった。

一方、理佳はどんどん梓から引き離され焦っていた。本気で走られたら自分では梓に追いつけない。

「ま、まって、梓ちゃんっ！」

けれど梓は声なんて聞こえないかの様に走り続ける。

理佳の焦りは増した。

このままどんどん引き離されていったら、もう二度と梓に会えなくなるような気がする。

何度も制止の声を上げ、天敵からは鈍足と言われた足で追い掛ける。

「梓ちゃん、梓ちゃんっ」

そうして梓がショッピング街を出たのを、絶望の思いで確認した時だった。

突然目の前に現れた少年達に理佳が足を止めた。

急停止したせいで衝撃が体に伝わり、後ろに転がりそうになるのを堪えて少年達を見つめた瞬間、血の気が引いていく。

「の～みゃ」

「久しぶりじゃん」

「野宮つてば相変わらずトロイんだな」

「保護者はどうした？ 置いてけぼりか？」

「うわ～、梓にも捨てられたの？ か～わいそっ」

どこことなく軽薄な感じのする少年達。

見た目はそれぞれ整っているが、ニヤニヤとした笑いは見る者に不快すら覚えさせる。

だが理佳にとっては不快どころか恐怖でしかない。

「あ……」

彼らとは縁が切れたと思っていた。

自分が山中中学に入り、彼らはマンモス校の方に入学した。

超名門校の方に入った天敵たる彼と同じく、彼らとも縁が切れた筈だった……。

小学校時代に天敵に従って自分を苛めた少年達を前に、理佳は凍り付く。

「ねえ、今から一緒に」

「ちよっ！ 待て逃げるなっ」

理佳は走り出す。

梓の走り去った方向とは逆方向へと。

第二十六話 天敵（前書き）

警告）虐めに関する表現があります。

過去にそういう経験がある方、感受性の強い方は閲覧を控えて下さい。

この警告を無視して読まれての文句は一切受け付けません。

第二十六話 天敵

逃げて、逃げて、逃げて。

はやく、はやく、はやく。

捕まったら食べられてしまうよ――。

そう言ったのは誰だったか……。

だが、今は考える暇などなかった。

理佳は逃げた。

梓を心配する心は恐怖に塗り替えられ、完全な恐慌状態に陥った。何処をどう走ったか分からない。

後ろに迫る足音と自分を呼ぶ声に怯えながらひた走る。

しかし所詮は女の足。

じわじわと追い詰められ、人気の無い行き止まりに追い込まれた。足がもつれ、その場に倒れ込む。

「っ！」

慌てて立ち上がり、逃げ場を求めて視線を彷徨わせた所で凍り付いた。

「もう終わり？」

笑いを含んだ声がすぐ近くから聞こえたからだ。

「あ――」

一気に全身から汗が噴き出す。

胸の鼓動が限界を超える加速を行い、今にも口から心臓が飛び出しそうだった。

呼吸すら困難なほど、体を押し潰すような恐怖が全身を包みこむ。

「野宮く、こっち向けよ」

「別になんにもしないからさ」

嘘だ。

理佳は引きつった喉の奥で呟く。

背後に居る少年達はいつも理佳を苛めてきた。

小学校に入学して間もない頃からずっと。

大きな失敗をして、オドオドし始めた事もあり格好の苛めの的だったのだろう。

いつもいつも追い掛けまわされ、物を隠され、馬鹿にされてきた。しかも彼らは男女問わず人気があった部類の生徒だったから、彼らに気に入られたい他の生徒達もいつしか苛めに加わってきた。

毎日が悪夢だった。

毎日が苦痛だった。

誰かに助けを求めても、助けてなんてくれない。

梓や香奈達以外は――。

男子では理人が。

女子では梓、香奈、美鈴、椿の四人と桜子だけが特別だった。

率先して助けてくれたのは、もちろん梓だ。

香奈と美鈴、椿は見かけたら助けてくれたし、そもそも虐めには絶対に加わらなかった。

それどころか、その事で難癖を付けてきた相手を逆にボコボコにしていた。

桜子と理人は積極的に助けてくれる事こそなかったが、虐めに加わる事は絶対に無かった。

でもそれ以外の生徒達は……。

足かけされ、突き飛ばされ、物を隠され、トイレに閉じ込められ、沢山の侮蔑と嘲笑に満ちた笑いと陰口が思い出される。

どうして自分ばかりが……。

理佳は何度も心の中で叫んだ。

そして、彼に問いかけた。

自分を……一番最初に苛めた彼を。

あの日、コワイ顔で自分を突き飛ばした彼を。

それからだ。

虐めが始まったのは。

「野宮」

「ひっ！」

グッと後ろから腕を掴まれ強引に振り向かされる。
元同級生の少年達が楽しげに笑っている。

「逃げるなよ」

「そうそう。用事があるだけなんだから」

「……」

イヤだと叫ぶも声にならない。

ぱくぱくと口を動かすだけで、恐怖に震えた喉は何の音も生み出してはくれなかった。

恐い、恐い、恐い。

助けて、助けて、助けて。

「あれれ？ 泣いてるの？」

「もしかして俺達に会えて感動してるんじゃない？」

「へー！ なら、しっかりとてなさないとな」

「つて、馬鹿！ あの人が居ない所で触るなよ！ 殺されたいのか？」

腕を掴んでいた手が離される。

けれど、囲まれて逃げられない。

「それはイヤだ」

「だろ。だから——ああ、来たみたいだ」

来た——？

「野宮、夕霧さんが来たぞ」

その言葉に引き摺られるように理佳は顔を上げ、両手で口を覆った。

向こうに小さく見えるのは、紛れもなく理佳にとっての悪夢の象徴。

ゆっくりと近付いてくるずば抜けた美貌に、少年達の顔が恍惚の表情へと変わっていく。

首筋で括った肩より長い栗毛色の髪。

同性すら惑わす柔和で甘い顔立ちと華奢な体付き。

頭のとっぺんから爪先まで女と見紛う如き容姿だが、身に纏う超名門校中等科の男子学生の制服がかるうじて本来の性別を指し示す。だが、全身から匂い立つ壮絶なる色香を前にすれば性別すらどうでも良くなる。

性別を超越した美の前には、男とか女とかどうでも良くなってしまふのだ。

少しつり目の瞳が理佳を捉え、意地悪げな光を宿した。

「久しぶり、だな——理佳」

ふっと微笑んだ美貌が、理佳を怯えさせる。

何処か軽薄で飄々とした雰囲気の中に隠れ潜む獰猛なる獣。

油断すれば一瞬にして食らいつこうと狙うそれが、顔を出して理佳を見据える。

「なんかすつごく逃げ回ってくれたけど——どうやら今日で終わりたいだな」

クスクスと笑いながら、一歩ずつ。

ゆっくりと近付いてくる。

逃げ出さなければならぬのに、足が動かない。

下半身から力が抜け、ペタリと地面に座り込んだ。

逃げられない。

理佳は向けられる視線から逃れるように目を伏せた。

ようやく……小学校を卒業して縁が切れたと思ったのに。

夕霧——。

ずば抜けて美しい顔とは裏腹に、笑いながら追い詰めてきた——

理佳の天敵だ。

理人と女子の人気をほぼ二分にし、男女問わず絶大な人気を誇る学校の王子様だった。

だが、理佳が苛められる原因を作ったのは、この夕霧だ。

しかも彼に憧れる生徒達は、みんな夕霧に習うようにして理佳を苛めた。

男子も女子も、時には教師さえ理佳を苛めてきた。

最初は夕霧の為に目障りな相手を追い出そうとする思いで始めた節があった。

しかし、次第に他者を虐める事で得た快感に味を占め、最後には自分達の楽しみの為に理佳を虐め続けた。

仕事で忙しい両親には相談出来ず、教師すらあてにならなかった。そんなボロボロだった理佳を助けてくれたのは梓達だけ。

彼女達が居たから、何とか学校を続ける事が出来た。

ようやく卒業し、理佳は香奈達と同じ中学へと進んだ。

周囲から進められていた超名門校への受験を直前になって取りやめてまで。

だが、超名門校に進まなかったのは、香奈達と一緒に居たかったからだけではない。

あの学校に夕霧が行く事は知っていた。

自分を苛めてきた相手と同じ学校に行くなんてとんでもない。

絶対に嫌だ。

そうしてなんとか入学出来た山中中学での生活は本当に楽しかった。

時々笑われる事やかかわれる事はあっても、苛められる事はなかった。

ようやく手に入れた平穏な生活。

けれど……そんな生活の中で理佳は気付いた。

夕霧が自分を捜している事を。

まだ苛めたり無いのか！！

絶望し、外に出るのさえ恐くなった。

だが、理佳の異変に気付いた梓が外に連れ出した。

しかしその間、ずっと梓は理佳の隣に居てくれた。

決して一人にしないでくれた。

だから……あれ以来夕霧の配下とも言うべき少年達が自分を監視するように物陰から見ているのに気付いても、決して手を出そうとはしてこなかった。

彼らは梓に何度もボコボコにされていたから、手が出せなかったのだろう。

しかし彼らは今、自分を追い詰め此処に追い込んだ。梓が居なくなつた途端、姿を現わし牙を剥いてきた。怯える理佳を追い詰め、そうして――。

伸ばされる夕霧の手に、理佳は必死に手を動かして振り払おうとするが、無駄な努力に過ぎなかった。

強引に腕を掴まれ、引き寄せられる。

「や、ややあつ」

「相変わらずドモリ口調だな」

「は、はは、離して！」

自由な方の手で夕霧の手を自分の手首から引き剥がそうとするが、上手くいかない。

「はな、離し、て、誰か」

焦りは頂点に達し、口調は更に呂律が回らなくなっていく。

夕霧の顔は直視出来なかった。

恐くて、とても見る事など出来ない。

しかし顔を伏せ続ければ、苛立った様に体を引き寄せられる。

「お前、相変わらずだな」

「う、あ、ああ、あ」

少しでも声が出るようになってきたが、まだ上手く言葉にならない。い。

「行くぞ」

「う、あ――」

引き摺られそうになり、必死に足で踏ん張って抵抗する。

何かに掴まりたいが、あいにく掴めるものはない。

ふと視界の隅に、何時のまにか手から離れていた自分の鞆を手に持っている少年が映った。

と、彼は理佳の視線に気付くと、楽しそうに手を振った。

「理佳」

「や、あ、う——」
言葉にならない。

イヤだと言いたいののに、過去に受けた仕打ちの恐怖がギリギリと喉を締め付ける。

だから代わりに頭を激しく横に振り、掴まれた手首を引き抜こうとする。

しかしどれだけ頑張っても夕霧の力が緩むことはなかった。

「男の力に——まして俺に敵うわけないだろ？」

「——っ」

「いいから早く来い」

「ど、ど——こ」

なんとか告げた理佳に、夕霧が獲物を蹯る様な笑みを浮かべた。

「俺の家に決まってるじゃないか——聞きたい事があるしな」

急速に血の気が引いていく理佳の耳に悪魔の囁きが吹き込まれる。

「俺を出し抜いて試験当日にボイコットするなんてやるじゃないか。

ああ？」

「っ——!!——」

「けど……それで俺から逃げられたと思っているのか？」

ああ……やはり、夕霧は自分を苛めたりないのだ。

今の山中中学に通い出してから、夕霧は自分を慕う少年達を使わずと隙をうかがっていた。

自分を出し抜き、自分から逃れる為に試験自体を受けなかった理佳。

その後も徹底的に夕霧達から逃げ回ってきたが、もう終わりだ。どうしてほっといてくれないのか。

自分はただ、静かに平穏に暮しただけだ。

自分が夕霧に何をしたというのか。

「さあ——来い」

「や、やだ——」

連れて行かれれば終わりだ。

引きつった喉が、叫び声をあげる。

「た、た、助け——」

大きな手が口を覆う。

塞がれ声が籠もるのを聞きながら、理佳はその手を引き剥がそうとした。

だが、その耳元にふっと温かい息を感じ、注ぎ込まれる音に目を見開いた。

——お仕置きされたいのか。

それまでとは比べものにならないほど、ガタガタと体が震え出す。視界が点滅し、かと思えば閃光の後に脳裏に蘇る——。

迫り来る足音。

突き飛ばされる体。

恐慌が臨界点を突き抜けるままに理佳が悲鳴をあげようとした、その時だ。

「何してるのよ」

バンっと、夕霧の後ろで音が鳴った。

何かを強く叩付けた音。

それが何かを理解する前に、夕霧が頽れた。

第二十七話 幼馴染みの忠告（前書き）

警告）虐めに関する表現があります。

過去にそういう経験がある方、感受性の強い方は閲覧を控えて下さい。

この警告を無視して読まれての文句は一切受け付けません。

第二十七話 幼馴染みの忠告

「ひっ！ 夕霧さんっ」

「お、お前！ 美鈴か？！」

背後から叫ぶ少年達の声に、ようやく理佳は自分を助けてくれた相手に気付いた。

目尻をつり上げ、仁王立ちし、手には夕霧を殴ったであろう鞆がある。

「み、美鈴ちゃん」

「遅いから心配になって迎えに来てみたらとんだ事になってるわね

——理佳も梓も」

梓——それを聞いた瞬間、理佳は梓の事を思い出す。

「あ、梓ちゃんっ」

走り去った梓はどうなったのだろうか。

「梓なら、今は香奈と一緒にいるけど」

それも凄い正面衝突をしていたが――。

先程のことだ。

いつまで経っても戻って来ない梓達に悲鳴をあげたのは香奈のお腹。

ぐぎゅるると何時までも鳴り止まない腹の虫に、美鈴の方が先に根を上げた。

そしてフラフラになった香奈に少しでも早く栄養補給をさせる為に、梓達の元へと向かった。

だが、ショッピング街に入ろうとした所で、走ってきた梓と香奈が正面衝突したのだ。

が、そちらに駆け寄ろうすれば、理佳が小学校時代の元同級生達に追いかけて回されているのが見えて、梓の事は香奈に任せて追いかけて来たのだ。

そして駆け付けてみれば、予想通りの光景がそこにあった。

「しかも、夕霧までいるし」

「くっ……この、暴力女！」

夕霧が叫んだ瞬間、バンバンと鞆で何度も叩かれる。

「ちよっ！ やめろっ」

「理佳、香奈達の所に行つて。駅に戻つてと思うから」

「え、で、でも」

美鈴はどうするのかと問おうとしたが、向けられた視線に理佳はぐつと息をのむ。

そして振り返りざまに、何時のまにか近くに寄つてきていた理佳の鞆を持つ少年から荷物を取り返して走り出した。

「理佳っ」

夕霧が手を伸ばすが、それをすり抜ける様にして理佳が走り去つていった。

「ま、待てよ野宮！」

「逃げるなっ」

代わりに少年達が追い掛けようとしたが、進路を阻むように美鈴が立ち塞がった。

突破しようにも、キツイ視線に射竦められて逆に動きを止めてしまふ。

「美鈴……お前」

「いい加減に理佳から離れたら？」

「っ！」

怒りを露わにする夕霧に、美鈴は溜息をつく。

こいつとの付き合いは、ある意味理佳とこいつの付き合いより長い。

というのも、農家の両親が夕霧の家に新鮮な野菜を提供している事もあり、幼い頃から夕霧の家に出入りしていたからだ。

いわゆる幼馴染み。

本来であれば、夕霧の家と美鈴の家では付き合うのも憚れるほどの家格や財力の差があるのだが、夕霧の両親を含めた本家の方達が気さくな性分だった事もあり、普通付き合ってきた。

夕霧の母と自分の母が学校時代親友だった事も大きいだろう。

だが、幼い頃から夕霧を見知ってはいるが、他の少女達のようにその麗しい美貌に熱を上げるどころか、小学生レベルの恋愛技術に對する溜息しかない。

「そういう事してるから、逃げられるのよ」

「っ！」

好きな子の注意を引く為に虐める——その理論を全力で証明しているかの様な夕霧。

見た目は恐ろしい綺麗なのに、中身は断然にお子様なのだ。

それに信じられるだろうか。

大人さえ簡単に翻弄し骨の髄まで利用するこいつが、理佳を一目見た瞬間に恋に落ちた事を。

しかし結果は……というよりも、色々と問題を勃発させやがった。「あんたね、幾ら注意を引きたいからって、虐めは許されないですよ」

しかもこいつの場合はそれだけではすまない。

周囲に絶大な人気を誇る相手が誰かを嫌えば、周りも率先してそれに習おうとする。

理佳への虐めの大半はそれが原因だった。

憧れている夕霧の為に。

憧れている夕霧が嫌いなのだから。

憧れている夕霧が苛めているのなら。

それを免罪符にして始まった虐めは、程なく自分達の快感の為だけに行われるようになった。

美鈴も見かねて影で止めさせるように動いたが、それ以上に根深いそれはどれだけ根を取り払ってもしつこく理佳に絡み続ける。

もう——夕霧が態度を改めたところではどうにもならないぐらいに、状況は深刻化していた。

だが、だからといって夕霧に非がないわけはなく、寧ろこの状況を作り出した諸悪の根源である。

反省して理佳への対応改善の為に動く事もせず、ただひたすら自分の為に理佳を追いかけ回す。

しかもその理由が、理佳が嫌いだからではなく逆だというから大問題である。

それこそ、時の権力者に寵愛を受けたばかりに悲劇の人生を送り殺された某寵姫的立場に理佳は立たされてしまっている。

というか好きな子には優しくだろう。

何度そう言って夕霧をドツいてきたか。

しかし、よくよく考えればそれすらも止めた方が良く、これまでの経験から美鈴は思うようになっていた。

そもそも、誰だって美しく秀でた人が居れば近付きたいと思う。全員でなくとも、大半はそうだし、美しい人に注目され優しくされたら気分だって良いだろう。

それどころか、その美しい人を手に入れたいと願う筈だ。

時の権力者達のように。

だからこそ、周囲はこぞって手に入れようと激しく争い、少しでもその注意を得ようとする。

そしてそれと同じぐらい、手に入れた者への嫉妬による憎悪と殺意は激しいものとなる。

しかもその愛を受け、優しくされている姿を見れば、嫉妬の炎は更に燃え上がり手に入れた相手を焼き尽くすのは間違いない。

古代では、美しい美姫を巡って幾つもの国が争い滅んだ事例だってあるのだから。

しかし自ら手に入れたくて戦いに参加するのではなく、一方的に巻き込まれている理佳からすれば、とんだ傍迷惑な状態に過ぎない。実際に既に迷惑している。

虐めでこれだけなのだ。

もし今からでも夕霧が優しくしたら——考えるだけで恐ろしい。きつと理佳は嫉妬された上に殺されてしまう。

だが、だからと言って虐めは絶対に止めて貰いたい。

そう——夕霧が理佳に対して出来るのもうただ一つしかないのだ。ただ黙って諦めて関わらない事——それだけである。

実際、中学が違って夕霧と離れた途端に理佳に対する周囲の対応は良くなった。

もちろん、その虐めに全く関わらない別の学校の生徒ばかりだから完全な比較は出来ないが、理佳にとっては天国とも言える学生生活だろう。

実際、理佳のオドオドした態度に全くからかったりする事がないわけではないが、それは冗談の部類に入り理佳も何とか自分で対処出来ていた。

夕霧と離れたから——と、完璧な確証があるわけでもなく、元々虐めてきた者達で試したわけでもないから、全てをそのせいには出来ないが、それでも小学校時代を見ていれば割合は大きいはずだ。

だから、離れた方が良い。

なのにそれを言えば、その度に夕霧は言い返すのだ。

『美しければ、欲しくても諦めなければならぬのか?! 笑顔で奪われる立場に甘んじなければならぬのか?!』

到底子供と言えない発言に驚くより、その強い瞳に言葉を失う。

時の傾国の美姫のように、その美しさゆえに権力者達に翻弄され、望まぬ争いを引き起こされて賞品の様に扱われる。

そんな人生に甘んじろと言うのか——。

奪われるだけの人生。

賞品として争われるだけの人生。

沢山のものを与えられつつも、本当に欲しいものを与えられず後宮で飼育殺しにされた数多の美姫達のように、欲しいものを諦めろと言うのか。

確かに美鈴がその立場なら、ふざけんなと怒鳴りたい。

しかしだからといって、理佳への対応は認めていいわけではない。かと言って今更優しくするのも駄目だ。

理佳への嫉妬が強まり虐めを助長させてしまう。

もしかしたら虐めさえしなければ、別の道があつたかも知れない。
だが、過去は変えられない。

だから美鈴は、夕霧が理佳に対してしてやれる唯一の解決策を選んで欲しくて口を開いた。

「いい加減諦めたら？」

別に女の子は理佳だけではない。

もっと綺麗で可愛くて夕霧の家柄に相応しい令嬢達は沢山いるだろう。

それこそ、周囲が何も口出できないほどの完璧な令嬢が。

……桜子なんてどうだろうか。

だが、夕霧の美しい顔がきつくなる。

向こうに見える少年達も焦る様な表情を浮かべる。

彼らはただ夕霧に従っているだけの者達だ。

夕霧と仲が良い——と言うよりは、まるで忠誠を誓った配下のようにつき従い、命じられるままに目となり耳となり、手足となつて動く。

そうして、小学校時代は夕霧の命ずるままに理佳を追いかけて回すのにも一役買っていた。

しかし、彼らが他のいじめっ子達と違うのは、夕霧の命令だからそうしているだけであつて、別に理解に対して何の悪感情も抱いていないという点だ。

夕霧に命じられたから、している。

一度ボロボロにしてやったが、それでもこりずに理佳を追いかけて回す。

それに美鈴は知っている。

彼らは理佳を追いかけているが、他の者達が理佳を追いかけて回すのを許さないという相反する行動を行っている。

だが、ようは自分達の獲物に他者がちょっかいを出すのが嫌なだけだろう。

と、ギロリとした鋭い視線を感じて夕霧を見れば、化け物ですら

逃げ出すほどの眼差しにげんがりした。

「お前に口出しする権利なんてない」

「夕霧」

「煩い！」

「煩くないでしょうが！ 幾ら好きだからって、欲しいからって、何でもしていいわけがないでしょう！」

美鈴の怒声に、身を竦ませたのは少年達だ。

「いい？！ 虐めは一步間違えれば相手を自殺に追い込むのよ？！ それだけじゃない！ その人の尊厳もプライドも何もかもを踏みにじる、品性下劣で最低最悪の非道な行為よ！ 暴力行為だけじゃない。言葉の暴力だってある。手を出さない見ているだけの虐めもある。別に全てあんたが悪いとは思わない！ でも、あんたが原因で始まった事、そしてここまで酷くなった原因の一つとして自分が居る事ぐらいきちんと認識しなさいよ！」

「っ——」

「ただでさえ、虐めてきた子達は虐める事に快感を覚えた厄介集団よ。それが元になって、新たな虐めが発生しないと限らない」

もちろん、そこまで面倒は見切れない。

関われるのは、自分達の目の届く範囲ぐらいなのだから。

だが、目が届かないから——という言葉で済ますには余りにも事態は深刻だった。

「俺は虐めるなんて言っていない」

「あんたが言わなくても、言ってるも同然なのよ。自分の行動が周囲にもたらす影響を考えれば分かるでしょう？！」

男女問わず、教師にすら憧れの対象とされているのだ。

憧れの芸能人のまねごとをするように、夕霧のまねをする者達が出て来ないわけがない。

全て夕霧が悪いとは言わない。

結局は虐める事を選択したのは、本人の意思が関係しているからだ。

強引な強制などもなかった。

しかし、過去に夕霧の事で周囲が引き起こした騒動を思えば、夕霧に気に入られたくて始めたという事実は、火を見るよりも明らかだ。

夕霧だけではない。

理人も、桜子もそうだ。

この二人は精神的に大人だから、問題が起きても速急に収束に向かっていたが、夕霧の場合は消えかかっている所に油を注がれて大火災に発展した事さえある。

しかも本人が望んでない、意識してない、知らない場所で起きるから始末が悪かった。

だが、とにかくそれだけ影響力のある存在なのだという事を理解して欲しい。

もちろん人なんて完璧な存在ではない。

美鈴はまだ子供であるが、何となく分かる。

だから失敗だってするし、過ちだって犯す。

問題なのは、こっちが何度それを指摘してもこいつが聞き入れない事だ。

そうして事態をよりややこしくし、理佳はボロボロにされる。

厄介な相手に好かれた不運というには、あまりにも理佳が哀れだった。

この状況で理佳を手に入れるには、夕霧は余りにも未熟で問題を抱えすぎている。

はつきりいつて優しくただけで、アウトだと言ってもいい。

だから、もし本気で理佳を手に入れるならば、それなりの代償を支払わなければならない。

それこそ、理佳に対する虐めを根絶させ、この先二度とそんな事は起こさせず、理佳に対しても土下座して謝罪し許しを乞うぐらいしないと余りにもあの子が報われない。

しかし、こいつはそんな時間のかかる事をするぐらいなら、虐め

た相手を廃人にし、理佳を拉致するぐらいするだろう。

虐めに拉致監禁。

悪くすればそのまま結婚に直行しかねない程の夕霧の重たい愛は、今の理佳には絶対に受け止めきれない。

愛し合ってたって重すぎる。

そしてそのままペチャンと潰れるだろう。

ならば、今のうちに解放してやるべきなのだ。

「絶対に嫌だね」

しかしこいつは断固拒否。

気持ちは分かるが、それなら最初からきちんとすれば良かったのに。

「あ、そう」

なら、最終手段をとらせて貰おう。

そうして取り出したのは、一冊の本。

「そ、それはっ」

「夕霧が毎日書き綴っている、理佳に向けた愛の妄想ポエム集」

「ただの日記だー!!」

ふざけんなといきり立つ夕霧は、その恐ろしいまでの美しさ故に強烈な迫力がある。

しかし美鈴はノーダメージ。

「ってかそれをどこで手に入れたっ」

「プライバシー保護法により出品者の開示はヒカエサセテイタダキマス」

「なんで最後が片言になるんだよっ！ しかも出品者って提供者がいるのかっ」

「それはどうでも良いわ」

良くないという叫び声も無視し、美鈴は愛らしい顔に笑顔を浮かべた。

「もし理佳への対応を改めないならば、私、このポエムを朗読するわ」

「ちよつ！ ま、ええ？！」

「そして羞恥心を刺激されまくって数日間引きこもれば良いのよ」
そしたら理佳にも手を出せなくて万事オーケー。

愛らしい顔をして、美鈴はドSだった。

「待ておいしいいっ」

「えゝ、四月一日――」

と、美鈴はそこで言葉を止めた。

まじまじと中身を見る。

その間、何とかして日記を取り戻そうとする夕霧や少年達を軽くかわしながら、ひたすら中身を見て――。

「何これヤバイわ、内容が重すぎて口に出したら呪われそう」

「なら返せ！」

「理佳にこれ以上手出ししないって言うなら」

「お前に関係ない！」

「朗読パターン、お経ばーじょん」

「ひいいいっ！ やめろっ！」

有名なお寺の住職も驚きの美声で朗々と読み上げる美鈴に夕霧が叫ぶが、お経ばーじょんは止まらない。

子供ながら数多の大人達を手玉にとって転がしてきた夕霧。

しかし、この幼馴染みから与えられる羞恥プレイには、五分と経たずにギブアップしたのは言うまでも無かった。

第二十八話 異変

時はしばし戻る――。

「梓――泣かないでよ」

香奈は地面に仰向けに転がったまま、自分のお腹の上に乗ったままの梓に告げた。

空腹を抱え、美鈴に連れられて梓達を迎えに行った。

そしてあと少しでショッピング街に辿り着くという所で、向こうから走ってきた梓と正面衝突した。

といっても、それまでお腹が空きすぎてフラフラだったから、猛スピードで走ってきた梓を支えられるわけもなく、二人で転がった。美鈴はと言えば、理佳を追い掛けるとか言い出してさっさと居なくなってしまう、香奈は梓と共に残された。

しかし――梓は転がったままの体勢から動こうとしない。

香奈のお腹の上に顔を埋めたまま。

それから十五分ぐらいこのままだった。

けれどここは白昼の往来。

多くの人が行き交うショッピング街の入り口付近。

周囲の視線が痛すぎた。

一刻も早く移動しなければと頭の隅で考えるが、体は動かなかった。

完全にガス欠。

お腹と背中がくっつきそう。

そして意識も飛びそう。

香奈はくらくらとしつつも、梓の頭だけは優しく撫でていた。

と、その時――風が吹き、鼻がその匂いを捉える。

こんがりと焼けたジューシーな匂い。

香奈の瞳がキュピキュピンと光る。

顔だけ動かし、目的のものを見つけた。

コッペパン！

紙袋から顔を覗かせるのは、コッペパンにレタスやお肉を挟んだサンドイッチ！！

もはや香奈に何の迷いもなかった。

最後の力を振り絞って紙袋に手をやると、そこからコッペパンを取り出し口に含んだ。

地面に仰向けに寝たままの状態で。

よりいっそう周囲の注目をひいているが、今度は全く気にならない。

そのまま、ハムスターのようにばくばくとパンを食べていく。

その様子に、とりあえず助けるかーと、遠くから見守っていた通りすがりの者達が一気に引いていく。

今までも近寄りがたかったが、更に近付きたくなかった。

もしかもしやもしや。

もぎゅもぎゅもぎゅ。

一個食べ終わると、二個目に突入する。

「……香奈」

「ふぁ、ふぁふゅはぁ」

お腹の上にのったまま微動だにしない梓が名を呼んできたので、口にパンを押し込んだまま答えた。

「……私より、パンを選んだわね」

なんだかとおつてもオドロオドロシイ声だったが、食欲が全面的に出してしまった香奈には全く効果はなかった。

「ひょひゅひょひゅひゅひゅ」

「何言ってるか全然分からないわよ！」

と、ガバリと顔を上げた梓だが、後頭部に強い衝撃を受けて再び香奈のお腹に突っ伏した。

「な、なにをするのよ」

「もう少し突っ伏してて」

パンを口から離れた香奈の言葉に梓が目を見開く。

「な……」

と、香奈がガバリと起き上がり梓がバランスを崩す。
しかし後頭部に添えられた手の御陰で、後ろに転がる事はなかった。

「とりあえず、駅まで戻ろう」

「……」

「ああ、理佳も来たみたい」

その言葉に、顔を上げようとしたが、やはり香奈に阻止されて出来なかった。

「つて、理佳も凄い顔」

「か、かか、香奈ちゃ、あ、梓ちゃん」

泣きながら、それでも香奈と梓の姿にホッとした様に笑う理佳。

「駅まで戻ろう」

「ま、まま、まって」

「理佳？」

立上がり、梓を抱える香奈に理佳が慌てる。

「美鈴、ちゃん」

「ああ。美鈴なら大丈夫。此処に居なかったら、駅に戻ってるって分かる筈だから」

梓達を探しに行く時に、もし迷子になったら駅前まで戻ると決めていた。

「で、でで、でも」

青ざめた顔でガタガタと震える理佳に香奈は眉を顰める。

昔もこういう顔をした理佳をよく見ていた。

「……もしかして、夕霧に会ったの？」

と、思ったままに呟いてしまった香奈だが、この後心底後悔する事になる。

というのも、一気に涙を流し始めた理佳が泣き止まなくなったからだ。

おかげで、香奈は駅前まで二人を連れて戻るまでの間、大量の好

奇心溢れる視線を浴びることとなった。

「とりあえず、ここで休んでて」

理佳と梓を駅舎のベンチに座らせる。

すると、そこに美鈴が戻ってきた。

「香奈、ごめん遅れた」

「美鈴」

「つて、なんか凄い事になってるね」

美鈴の言葉に香奈は苦笑すると、梓達から離れた隅っこまで友人を連れて行く。

「理佳は半分私のせい。夕霧の名前出したら泣かれた」

「あゝ、仕方ないよ。夕霧とその子分達に追い掛けられたみたいだから」

追い掛けられた？

「なんで。まだ虐めたりないの？」

香奈の質問に、美鈴は苦笑した。

香奈は夕霧が理佳を虐めているのは知っているが、その裏側までは知らない。

夕霧が今も理佳を追い掛けているのは、虐めたいというよりも理佳を逃がしたくないからだ。

たぶん自分と夕霧の家族ぐらいいしか知らない。

夕霧が、理佳と初めて出会った時からずっと恋心を抱いている事など。

虐めも全て、理佳の注意を引くため。

なのに、理佳は最後の最後で夕霧の手から逃げ出した。

同じ学校に入ったら最後と言うように、山中中学ー香奈達の通う学校に入学したのだ。

夕霧には大ダメージだっただろう。

当然、中学も同じだと思っていたはずだから。

理佳の学力からすれば、超名門校こそが相応しい。
だから、夕霧はあの学校を受験したのだ。

理佳と同じ学校に行くために。

「で、梓はどうして泣いてるの？」

「わかんない。理佳にも聞いたんだけど、恐怖が強すぎて前後の記憶があやふやだし」

本屋に母から頼まれたものを取りにいったが時間がかかり、ようやく外に出た時には梓が誰かと話していたが、何故か梓に怒鳴られるようにして呼ばれたかと思えば、梓が走り出して。

一応文章にはなっているが、誰と会っていたのかとか、詳しい事は分からなかった。

梓も何も言わない。

しかしあんな凄い顔をしていて、しかも理佳を放置して走り出すなんて普通ではない。

「涙と鼻水で凄かった」

「香奈……」

「まあー少し落ち着いた頃だと思うから、聞いてみようか？」

「いや、それはしなくていいよ。何か話したくなったら自分から言うでしょ」

「そっか」

二人の様子からしても、もう少し黙っておいた方が良さそう。

「でも……椿の所と一緒にに行けるかな？」

「それは……聞いてみた方がいいかも」

あんな様子の二人だ。

香奈達から見ても、可哀想なほど震えていた。

無理はさせない方が良さそう。

しかしー梓達の所に戻りその旨を伝えれば、予想外の答えが出た。

「一緒に行くわ」

「でも」

「いいの。何かしていた方が気が紛れるから」

「わ、わわ、私も」

「それに、私達も居た方が良いでしょう？」

椿がパニックになった時の為に。

確かにその通りだった。

そうして、予定通り四人で行く事になった。

椿の家に辿り着いた時には、既に午後三時を回っていた。

「ちよつと遅くなっちゃったね」

そんな事を呟きながら、美鈴がチャイムを鳴らした。

「……」

何時もならすぐ出てくる筈の椿の母からは何の応答もない。

「聞こえないのかな？」

今日は椿の母は家に居ると聞いていた。

もう一度鳴らす。

しかし応答はない。

「留守かな？」

「うん」

首を傾げる香奈と美鈴を余所に、梓が扉に手を触れた。

その途端、梓が一気に目を見開く。

「っー」

「梓？」

「……留守よ」

ドアノブから手を離し、梓が此方に背を向けたまま告げた。

「は？」

「留守よ。だから帰りましょう」

「留守？」

「帰りましょう」

梓はひたすら帰ろうと言う。

だが、なんだか様子がおかしい。

「梓？」

「留守よ、留守。だから帰ろう」

「いや、でももう一度」

と、美鈴がチャイムに伸ばした手を強く掴まれる。

「あ、梓っ」

「留守って言ってるでしょう！」

「鍵開けた状態で？」

梓の目が驚愕に見開かれる。

その瞳には、香奈が扉を開けた光景が映り込んでいた。

「あー」

どうして。

どうして。

どうしー。

「ナゼアケタ！」

「は？」

ギョロリと目玉を動かした梓の顔は、悪鬼そのもので、理佳と美鈴が悲鳴をあげる。

と、扉の中を覗き込んでいた香奈に向けて手が伸びた。

「ん？ これ何？」

なんか足下に小さな石が転がっているのが見えて手に取った。

後ろから絶叫が聞こえて来た。

「あああああああつ」

「は？」

振り向けば、梓が頭を抱えて悲鳴を上げている。

だが、それもつかの間のことで、ふらりとよろめいたかと思えばその場に倒れた。

「梓、近所迷惑だつて」

ゴツキーでもいたのかと首を傾げる。

と、理佳と美鈴が茫然と立ち尽くしているのが見えた。

「二人とも、梓倒れちゃったけど」

「え、あ」

「あ、ああ、あ」

「とりあえず、中で休ませて貰おうよ」

その為には、椿の母を呼ばなくては。

それか、椿本人でもいい。

一人事情を飲み込めていない香奈は、手に持っていた小石をポケットに入れると、大きく開いた扉から声を上げた。

「すいません〜！ 神無ですけど、椿ちゃんのお見舞に来ました〜」
と、そこでようやくパタパタと奥から近付いてくる音が聞こえた。
ほどなく姿を現わしたのは、椿の母だった。

「まあまあ、こんにちわ。どうしたの？」

「椿のお見舞に来ました」

「まあ！ それはありがとうね。でも、椿は今体調が悪くて伏せているのよ」

「そうなんですか？」

「ええ。だからまた今度来て下さいね」

椿の母が申し訳なさそうに告げる。

「……少しだけ顔を見るのは駄目ですか？」

香奈は少し食い下がってみた。

体調が悪い時に無理はさせたくないと思う。

しかし、問題の火曜日まで時間はない。

せめて、椿の見た犯人と自分達が探し出した被害者が同じかどうかだけでも確かめたかった。

だが、椿の母は申し訳なさそうに首を横に振る。

「ごめんなさいね。あの子には無理をさせたくないの」

「……そうですか」

ここまで言われたら仕方が無い。

無理を言っているのはこちらなのだー！。

と、そこで梓の事を思い出した。

「すいません。実は友達の梓が気分悪くなったみたいなので、少し

休ませて頂けませんか？」

「え？」

「お願いします」

「あ、でも……気分が悪いのなら、家に帰った方が宜しいのでは？」
穏やかな口調。

けれど、その中に香奈はあるものを嗅ぎ取った。

「……梓の家までは遠くて、私達だけでは運べません。せめて、家の電話を借りさせてくれませんか？ 迎えに来て貰いたいのです」

「え、でも少し気分が悪いぐらいでしょう？ なら貴方達でも運べるんじゃないくて？」

「……」

香奈は黙ったまま、椿の母を見つめた。

「どうしても、駄目ですか？」

「ど、どうしてもではないけど」

しかし言いよどむ姿に、香奈は疑問を抱く。

絶対に様子がおかしい。

完全に挙動不審だし、いつもの椿の母では言わないような事をペラペラ言っている。

もしかして椿に何かあったのだろうか。

だが、明らかに家に入ってこられてはまずいという雰囲気は妙だ。もしか、テレビとかで良くやっているあれだろうか。

実は強盗が中に居た所に客が来たので家の家人に追い返させようとしているとか。

で、当然椿が人質になっていて……。

「んなわけないな」

香奈は自分の考えを打ち消した。

そんな事がそうそうあってたまるか。

「と、とにかく今日は帰って」

いつまで経っても帰らない香奈達にしびれを切らしたのか、椿の母が強引に押しだそうとしてくる。

「ちょ、ちょっと」

「いいから帰って！ 椿の事は私がきちんと面倒見ますからっ」
何故こんなに慌てているのか。

いや、その前にこの人は本当にあの優しい椿の母だろうか。

「別人みたい」

ポロリと言葉が落ちた時、香奈は確かに見た。

椿の母の顔に、瞬間的に動揺の色が走ったのを。

「……」

香奈は決めた。

椿の母を突き飛ばし、中に入る。

そのまま椿の部屋へと向かって走った。

「ま、待ちなさい！」

後ろから慌てて追い掛けてくる声も無視し、椿の部屋の前に辿り着く。

「椿！」

ドアの前で声をかける。

だが、ドアは開かない。

仕方ないとドアノブに手をかけると、追いついた椿の母がそれを阻止しようとした。

「何をするの！ 警察を呼びますよ！」

「好きにしてください」

そう告げ、ドアノブを回す。

「やめなさい！ 叩き出すわよ！」

後ろから羽交い締めになされてドアから引き離される。

「なんて子なのかしら！ こんな勝手に人の家に上がり込んで！」

「椿のお母さんの様子が変なので」

「私は何処も変じゃないわ！ それより、こんな無礼な事をするなんてとんでもない！ もう二度とうちには上がり込まないで下さいねっ」

振り返れば、悪鬼の様な形相がそこにはあった。

心底忌々しいと言いたい様な顔に、香奈は考え込む。

どう考えても、この人は椿の母ではない気がするのだが。

やはり誰かに脅されていて、そう言わなければならぬのだろうか。

「強盗でもいるんですか？」

「はあ？」

違うらしい。

心底キョトンとした顔がそれを物語っている。

となれば、ひっかかるのはあの別人発言。

確かに動揺が走ったのだ。

「本当に椿のお母さんですか？」

「当たり前よ！」

そう言った顔には動揺は見られない。

予想していた質問だからだろうか？

それともさっきの見間違い？

「いいからさっさと出て行って！」

「きゃっ！」

髪の毛が何かにひっかかり、走る痛み。

反射的に頭を大きく動かした時だった。

「ぶっ！」

「あ」

椿の母と香奈の身長は頭一個分。

しかし、羽交い締めになされて足が少し浮き上がっていた事で身長差が埋まったらしい。

また、椿の母が頭を少し傾けていた事もプラスされ、顔面に香奈の頭が見事にぶつかった。

背中に密着していた体が離れるのを感じた。

そのまま、羽交い締めになっていた手が外れ、後ろからボタンと音が聞こえる。

「椿のお母さん？」

「……………」

完全に目を回しているらしい。

着物の裾が大きくめくれ上がり、白い太股まで露わになっている。
だが――。

「誰、これ」

確かに美人だ。

長い髪の妖艶な美女。

けれど、椿の母とは違う――いや、比べものにならないほど美しい美貌だった。

しかも、どう見ても椿の母より若い……十六、七ぐらいだ。

「……衝撃で若返った？」

そんなわけのわからない事を呟いてみる。

と、叫び声が聞こえて来た。

「章子！」

二階から此方を見下ろすのは――。

「……椿のお父さん？」

と、二階の少年に呟いた瞬間。

「俺はまだ高校生だっ！」

怒鳴られた。

しかも、これまた凄まじく端正で凛々しい美貌の少年だから、迫力は倍増した。

第二十九話 理人の憎悪

広い和室で揺り椅子を動かし微睡んでいた柚緋は、ゆっくりと目を開ける。

部屋に現れた二つの気配に、何処か暗い光を宿す瞳を向けた。

「お呼びと伺いまして」

「一体何の用だよ」

理人は微笑み、夕霧はふて腐れた様に目をそらす。

「対照的だな」

嫋やかな絶世の美貌に似付かわしくない口調に理人は苦笑する。

自分でさえ時折見誤ってしまう美貌は正しく女のそれ。

これで男だと言うのだから不思議だ。

と、柚緋が聞けばお前も同類だと呆れられる事を思っていた理人の目にそれは映り込んだ。

唇をニイと歪めた途端、漂うゾクリとするほどの濃厚な色香。

同時に、大和撫子や穢れ無き巫女を思わせる美貌は、造形美こそ何一つ変わっていないにもかかわらず、どんな相手でも一目で墮とす様な魔性のそれへと変わる。

同じ美貌で此処まで変わるのだろうか。

しかし、こちらこそが柚緋の本当の姿。

到底十二歳とは思えない存在感に、理人はニコニコと笑いながら、小さく溜息をつく。

まあ……十二歳とは思えないのは、自分も夕霧も同じだが。

「夕霧はまた理佳にふられたのか？」

揶揄する様な口調に夕霧が怒りを露わにする。

「違う！！ ふられてないっ！」

「それにしても連れてくる事も出来なかったと聞くが」

「そ、それは美鈴が！ あいつは悪魔だっ！」

男の心をえぐり抜いた幼馴染みを思い出す。

「あ、あ、あんな羞恥プレイを」

「日記を読まれたのか」

「っ?! あ、あれは誰かが美鈴に日記を渡しやがったから」
金庫の中に入れていたのに誰が。

「あ、それ俺だ」

ああなるほど。

柚緋なら……。

「お前が原因かあああつ！」

「良かったな。心優しい取り巻き達で」

あの文才皆無なポエムを間近で聞き、全身に蕁麻疹を出しながらも、必死に耐え抜いた取り巻き達は勇者だと柚緋の手の者達が称えていた。

因みに手の者達のうち、初めてそれを聞いた新人は泡を吹いて倒れたらしい。

流石は別名『呪いの書』。

たぶん三日三晩は悪夢に魘される。

「それで柚緋、どのようなご用件でしょうか？」

「俺を無視するな！」

ぎゃあぎゃあ騒ぎ出す夕霧を綺麗に無視し、理人は柚緋に微笑む。

「まさか理人も来るとはな」

その言葉の意味する真意を理解し、理人は笑った。

ニタリと、儚くも清楚な白牡丹の如き顔に幽艶な笑みを浮かべる。

「ええ、来ました」

「中々に楽しそうな事をしていたと聞くが」

「お人が悪いー」

楽しそうどころか、腸が煮えくり返った先程の件。

「梓は祝ってくれたらしいな」

煮えくり返った腸を笑顔で切り裂く柚緋にただ静かに微笑む。

全てはあの馬鹿女のせいだ。

何か裏でこそそしている事は知っていた。

面倒なので放っておいたが、それが裏目に出た。

だが一番許せなかったのは、あの女がペラペラと梓に話した事だ。おかげでよりもよって一番知られたくない相手に知られてしまった。

月曜日のパーティーでは先に帰った事で運良く知られずにすんだというのに。

運の悪さに理人はほぞを噛む。

「どうせすぐにバレただろ」

「この俺がバレる様なヘマをするとでも？」

婚約発表をされた後、すぐに手をうった。

梓を社交界のパーティーに近付けず、彼女に情報を吹き込むだろう相手にはそれとなく脅しをかけておいた。

だが、そんなこちらの努力をあの女はぶち壊してくれた。

当主の弟をたぶらかし、自分の造った箱庭で女王様面をしていれば良いものを。

更に権力を握る為に理人を駒にしようとしている。

「無視した報いと言うわけですか」

「だな」

柚緋も頷いた。

権力欲と選民意識の塊と言っても良い理人の叔母。

彼女は理人の父の弟をたぶらかして篠宮家に入った。

だが、その後も彼女は当主の弟夫人に満足しなかった。

元々は理人の父が狙いだっただから。

しかし父に全く相手にされず、代わりとして父の弟をターゲットに選んだ。

優秀と言われる父よりも出来の悪い弟の方が操りやすいと考えたのだろう。

だが弟の妻では当主夫人にはなれず、権力もそれほど得られるわけでもない。

ならばと自分の夫を当主にしようと一族内、外の男達と関係を持

ち、何とか自分の夫を当主にするべく画策し続けた。

しかし余りに弟が愚鈍な為すぐに計画は暗礁に乗り上げたが。

「だから今度はお前に目を付けた」

理人はそつと目を閉じる。

夫を見限り、今度は年若い甥に目を付けた。

初めてあの女に手を付けられたのは、まだ理人が三歳の頃だ。

そうしてずっと性的虐待を受け続け、初めて女を覚えさせられたのは小学校に入った直後だ。

畜生にも劣る行為。

叔母は、自分の体を覚えさせる事で未来の当主を操ろうとしたのである。

だが叔母が理人にした非道はそれだけではなく、自分の愛人達に幼い甥を差し出したのだ。

特に理人は母譲りの美少女とも見紛う美貌の持ち主である。

そんな美少年を抱けると知った者達が叔母の元に殺到し、理人は毎日の様に男達に弄ばれるようになった。

時には一人、時には複数で。

家人が居ない時を見計らって手引きしたり、学校帰りに理人を相手の家に連れて行ったり。

相手は政治家、経済界の重鎮、名家の関係者と実に様々。

父にバレたらどうなるのかとも思うが、そこは世間体を盾にでもとうとうとしたのだろう。

浅はか過ぎて涙が出る。

それに叔母は理人を見誤っていた。

抵抗出来ない小さな子供だって、時が経てば大きくなる。

確かに植え付けられた恐怖と洗脳から抵抗すら考えられない者達も居るだろう。

だが、理人の場合は違う。

調教されながらも、ふつふつと心に宿した憎悪を膨らましていった。

男達の玩具にされたのは柚緋や夕霧も同じではあるが、他人に売られた二人とは違い、身内に売られたのは理人だけだ。

そして身内だからこそ、余計に煩わしくもあつた。

「さて、どうしてくれましょうか」

叔母ははつきり言つて馬鹿だ。

しかし権力に關しては馬鹿みたいに鼻が利く。

だからこそ、年を経る毎に理人への支配が少しずつ減弱していく事に勘付いたのだろう。

当然慌てた叔母は、それまで以上に理人と強引に關係を持った。

けれどそれも上手く行かない事に気づくと、手を変えてきたのだ。結婚という手段を利用した。

もちろん自分が理人と結婚出来れば良いが、流石にそれは許されない。

下手な女と理人が結婚すれば自分は遠ざけられる。

その事を叔母は何よりも恐れた。

自分に権力が無くなる事よりも、数百倍も。

そう――叔母は理人を虜にするどころか、逆に自分が理人に執着し手放せなくなっていたのだ。

知らぬは本人のみだから笑える。

叔母は最初自分の娘を理人と結婚させようとした。

だが、叔母の娘は母を嫌い理人側についている。

だから外から別の傀儡となる花嫁を連れて来る事に決めたのだ。

それが桜子だと知つて笑いが出た。

あんな女狐をあゝの叔母が制御出来るはずがない。

なのに何故選んだのかと思ひ調べて見れば、一族の選民意識が原因でいた。

叔母としては御しやすい気弱で格下の相手を選びたかつたのだらう。

だがそこで叔母に協力していた篠宮家分家が口を出してきた。

彼らは格下の娘よりも、自分達の格を上げるために石守家の姫―

「つまり、桜子と理人の縁組みを望んだ。

もちろん叔母が拒んだのは分かり切っているが、分家も引かなかった筈だ。

それこそ叔母と決別してでもという覚悟を見せられ、認めるしかなくなつたのだろう。

気位の高い叔母だから当然苛立つただろうし、何より自分が執着している理人を別の女性に奪われると嫉妬した筈だ。

だが、そこはあの叔母の事だ。

桜子をお飾りの妻とし、本当に理人が愛しているのは自分だと思ひ込む事ぐらい朝飯前。

そればかりか、桜子をいかにして自分の思うがままに操るかに方に考えが即座に移行した筈だ。

それに自身の選民意識の強さは他者も同じだと思っている叔母だから、そんな格上の花嫁との縁組みに尽力した事で本家に恩を売れると踏んだだろう。

あの叔母の考えそんなことだ。

「さつさと消してしまえばいいのに」

柚緋の言葉に理人は首を横に振った。

「それはもう少し後にします」

ここまで人をコケにくれたのだ。

すぐには消してなんてやらない。

それに楽しいではないか。

あの女の首を真綿で絞め、この手で自滅させていくのは。

それに自分に執着しなりふり構わず動く様は見えていて面白いものがある。

それに梓の事もある。

あの叔母は、理人の梓への思いを敏感に嗅ぎ取っては徹底的に幼い少女を攻撃した。

理人が梓を庇えば余計にヒステリックになって梓を虐待した。

人様の娘によくそこまで出来ると本気であきれ果てるほど、叔母

の梓への仕打ちは酷かった。

それだけでも許せないのに、今回の事だ。

「徹底的に、苦しめたいと思います」

それも長くー。

「恐いな」

「理人を切れされるなんて馬鹿だな」

柚緋と夕霧の呆れた声に理人はクスクスと笑う。

「まあ……とりあえず、あの馬鹿女よりも先にやる事はありますが」
梓が言った言葉を思いだし、すっと笑みを消す。

既に手の者に調査をさせたから、戻る頃には報告書が上がっているだろう。

「で、私のことはもう良いですから、用件を」

「ああ。その前にー」

柚緋が言葉を切る。

「柚緋様？」

「……あの馬鹿が」

「馬鹿って……香奈の事か？」

夕霧の呟きに柚緋が口を開いた。

「そうだ。にしても……」

「何か問題が？」

「大ありだ。章子に頭突きして気絶させた」

「は？」

「頭突き？」

「次のターゲットである鷺崎 椿の家に相棒と共に潜入していた所に香奈達が来たらしい」

「章子って、あの章子だよな」

「『ISPM』の能力者」

「ああ」

「って、あいつが潜入捜査って」

「この程度の事件ですか？」

確かに面倒な事件ではあるが……。

「『ISPM』の威信がかかってるからな」

二度目の失敗は許されない。

だからこそ、章子を選ばれたのだろう。

「話の続きだが、章子達は香奈達を追い返そうとしたものの、結果を突破されてた挙げ句、椿の母に変化していた章子を押しつけて家の中に侵入。捕獲して何とか追い返そうとしたが――」

「頭突き」

「したのか」

「事故だったらしいが……あの石頭は痛いぞ」

流石は香奈の頭突き経験者。

心底同情した眼差しを浮かべる柚緋を、夕霧と理人が不憫そうに見つめたのだった。

第三十話 口は災いの元

椿邸の客間で寝かされているのは全部で四人。

この家の主である椿親子に玄関で倒れた梓、そしてー。

「不法侵入者？」

「違う！」

香奈の呟きに叫んだのは、高校生ぐらいの凛々しく美しい少年だった。

もちろん、彼も不法侵入者の一人だ。

香奈の起こした騒ぎに誘われるようにして現れた彼は、自分の相棒を必死に介抱している。

そんな相棒は、これまた美しい少女。

年の頃は少年と同じぐらいだろう。

そしてこの少女こそが、椿の母に化けて香奈達を家から追いだそうとしていた張本人である。

何を企んでいたのかは知らないが、香奈の頭突きの洗礼を浴びて現在気絶中。

「ってか、なんで家の中に入ってこれるんだよ」

「鍵が開いてたんで」

「鍵は関係ない！」

何が言いたいのかさっぱり分からない。

とにかく少年が暴れる様に叫んでいたので落ち着かせようと香奈は口を開いた。

美鈴と理佳は怯えていて部屋の隅から動こうとしないから仕方が無い。

「おじさん」

「誰がおじさんだ！　そして俺の何処がおじさんだっ」

その高校生とは思えない落ち着きっぷりとか、存在感とか色々。素直にそう言うと、なんだか複雑な表情を浮かべた。

「……いや、それはどうでもいい。それより一般人にバレたなんて分かったら上がなんて言うか……懲罰もんだぞっ」

「上？」

「『ISPM』だよ！ーあ」

なんだか自分でぼろを出してくれたらしい。

だが、出した単語がよく分からない。

「アイエスピーエム？」

「全部カタカナで言うな。間抜けに聞こえる」

「じゃあ英語なんですか？」

「そう！　って、騙されるどころだった！　俺は何も喋らないぞっ
何を今更と香奈は呆れた。

何か不都合があるのならさっさと仲間を連れて逃げればいいのに、
ご丁寧にもこうして客間に布団を強いて寝かせている。

まあ香奈のペースに巻き込まれたと言えばそれまでだが、知られ
たくない事があるにはあまりにもウツカリ屋だ。

きっと、そのアイエスピーエムという所でもー！。

「下っ端なんだろうね」

「俺はシックスだ！」

「は？」

「っー！！」

また何か余計な事を言ったらしい。

というか此処までペラペラ喋っているのを聞くと、わざとしか
思えない。

だが肝心な事は何一つ喋っていないから、もしかしたら出来る相
手なのか？

「とりあえず私が知りたい事は『貴方達が誰なのか』、『なんで椿
の母に化けて私達を追い返そうとしたのか』、『椿の家に入り込ん
で何をしようとしていたのか』です」

まだ他にも聞きたい事はあった。

この気絶している少女がどうやって椿の母に化けていたのかとか、

さつき聞いたアイエスピーエムとか色々。

しかし全ては教えてくれないだろう。

「俺が素直に喋るとでも思ってるのか？」

当然の台詞に香奈はスツと梓の携帯を取り出した。

「通報します」

「はっ！ してみるよ。どうせあいつらには俺らを捕まえる事なんて出来なさい」

「何ですか」

「警察関係者上層部にも『ISPM』の幹部がいるからさーあ」
「……」

「い、今はナシだっ！」

「どうせぼろ出しまくってるんだからもう言っしまえばいいんじゃないですか？」

そして出来ればさつさとお帰り願いたい。

今の時点で叩き出してもいいが、何をしていたか分からなければ再び来ないとも限らない。

見たところ椿や椿の母が眠らされている以外何もされていないが、次も同じとは限らないだろう。

そつー椿と椿の母は眠らされていた。

香奈達来るよりも前に、この少年と少女によって。

一体何をする気だったのか。

椿達の身の安全の為に、このまま少年達を野放しにしてはおけない。

だが警察上層部に彼らの関係者が居るとなると、その権力を笠に着てまた来るかもしれない。

「いいから！ とにかくお前達は帰れっ」

「イヤです」

「ならお前達の方こそ不法侵入で警察に連れて行ってもらっからなっ」

「じゃあ貴方達は椿のお母さん達に招かれたんですか？」

「そ、それは、もちろんだ」

「で、眠らせてイヤらしい事をしよう」と

「するわけあるかっ！」

「なら、なんで眠らせてあるんですか」

「それはちよつと暗示を――ってなんだその性犯罪者を見るような目付きはっ」

香奈はどん引きの眼差しを少年に向けた。

きつとイヤらしい事をする為にこの少年は椿と椿の母を眠らせたのだ。

二人とも美人だからな。

けど、椿の母はまだしも椿はまだ中学生だ。

つまり、つまり。

「ロリコン」

「ぐわっ！」

凄まじい嫌悪感溢れる視線に少年がよろめいた。

今までに憎悪の視線を受けた事は多々あった。

殺意を向けられた事も多々あった。

しかし今向けられている視線は、まるでゴミでも見る様な嘲りと残念な人を見るような不憫さが入り交じっている。

「ち、違う！　俺はロリコンじゃ」

「なら熟女好みですか？」

まだそっちの方がマシだと思うのは自分だけだろうか。

しかし同意したら何かが終わりそうだった。

「なんで椿達を眠らせたんです？　眠らせて何をしようとしていたんです？」

「っ――」

「しかもこの女の人にはかり対応させて……まさか、その間に証拠の隠滅を」

「違うわ！」

このままでは本気で性犯罪者にされかねない。

少年はどうしてさっさと相棒を連れて逃げなかったのかと、今になって激しく後悔した。

いや、逃げたら逃げたでやはり性犯罪者として通報されていただろう。

こいつなら確実にやる。

少年は確信すると共にぶるりと体を震わせる。

ふと記憶操作という言葉が思い浮かんだ。

そうだ。

記憶操作をしてみれば自分は性犯罪者――ではなく、こいつらを追い払える――！

少年は確信し、術式に入り始める。

民間人には使用してはならないが、任務遂行のためには仕方ない。一刻も早くこの邪魔者達をどうにか。

「やめなさい」

「っ?!」

眠っていたと思った筈の相棒が目を覚ましていた。

「しょ、章子」

「記憶操作はやめておきなさいな」

「っ!」

ゆっくりと起き上がった章子の言葉に少年は目を見開いた。

「な、で、でも俺達の正体が……いや、いつから起きてたんだ?!」

「あなたが記憶操作の為の術式を開始しようとした辺りからよ」

「あ……」

「記憶操作?」

香奈が首を傾げる中、少年が慌てて章子と呼んだ少女に視線を戻した。

「お、おいつ」

「今更焦っても遅いわ。それよりも記憶操作はナシよ。事態が更に悪くなるわ」

「な、なんでだよ」

「神有家を敵に回す気？」

「は？ 神有家ってあの八大家の――ええ？！」

「しかもこの少女はあの柚緋の従兄弟。家出姫様の娘よ」

「家出姫様の娘って、せ、清奈姫の娘で、つまりあの――」

「なんだか自分の知らない場所で色々言われているようだ。」

香奈はとりあえず黙っておく事にした。

第三十一話 『ISPM』

「つて、う、嘘だろ！　なんでそれがここに」

愕然とする少年に少女は溜息をついた。

「調査書をきちんと読まなかったの？　書いてあったじゃない」

「え、あ、その」

少年は美形だ。

凛々しく精悍な面差しで、どちらかという二ヒルでクールっぽい。しかし今はその影は今、更に見えなくなっている。

「だから私が足止めに出向いたし、結界だって張らせたでしょう？」

「あ、そ、そうなんだ」

「馬鹿ですね」

少女は綺麗な顔をして以外に毒舌らしい。

少年はあっけなく沈没した。

「記憶操作どころか害を与えたが最後、神有家を敵に回すわ。この日本では生きていけないだけではない。あの家からは『ISPM』の上層部に君臨する者達も数多く輩出している。組織から追い出されるわよ」

「っ」

その言葉に、少年がガタガタと震え出す。

「特にあなたは組織に保護され育てられてきた子供。ホームを失いたくなければ、この少女に手出しは無用よ」

可哀想なほどに少年が震えている。

「つまり、この少女を家の中に入れて、私が追い返せなかった時点で勝敗は決まってしまったんですよ」

「あの」

これ以上黙っていられず、香奈が少女に声をかける。

「何ですか？」

「なんかよく分からないんですけど」

神有家は確かに自分の母の実家だ。

母が家出娘と呼ばれている事も知っている。

けれど、アイエスピーエムとか、上層部とか、結界とか、よく分からない言葉ばかりでわけが分からない。

「ふむ。私としてはこのまま何も聞かずに帰って欲しいんだけど。

もちろん、椿さん達には変なことはしないわ。それは私達の目的ではないから」

椿さん？

「どうして椿の名前を知ってるの？」

「調査したからよ」

「なんで調査する必要があるんですか？」

「……」

「そしてどうして椿達を眠らせたんですか？」

「それが必要だったから。記憶を読み取る為のね」

「……」

香奈の表情を見て少女がクスリと笑う。

「納得いかない顔ね」

「当たり前です。記憶を読み取るって何ですか。変な装置とか使ってますか？」

「は?! 何を馬鹿なーい、いや、装置じゃない。記憶を読み取る術を使うんだ」

少年が口調を改めて説明してきた。

「術？」

「力と言った方が良いか……って、知らないのか？ あんた神有家の娘だろ？ それに結界破りもしたし」

「娘じゃなくて孫娘です。ってか、なんで神有家の娘なら知ってるんですか」

しかも結界破り？

結界って、あのゲームとかに出てくるバリアとかそういうのか？
「知ってるも何も神有家は」

「重樹」

「あ」

「私が説明するから」

重樹と呼んだ少年を少女が黙らせる。

「まず自己紹介から始めましょう。私の名は章子」

「俺の名は重樹」

「あ、神無 香奈です」

つられて頭を下げると、章子が優しい笑みを浮かべた。

「宜しく香奈さん。私達は共に『ISPM』に所属する能力者です」

「章子！」

「重樹、今更なのよ、もう」

章子が戸惑う重樹を見つめた。

一方、香奈は与えられた言葉に首を傾げていた。

「……能力者？」

「それも知らないのねーああ、別に馬鹿にしてるわけではありませんよ
せんよ」

ムツとした様子の香奈に章子はクスクスと笑う。

そして美鈴と理佳を見た。

「彼女達はどうしましょうか」

「え？」

「これはあまり大勢の人達には聞かれない事なんですよ」

その言葉に香奈は美鈴達を見る。

未だに茫然としている二人。

「……それは、椿の事に関係がある事ですか？」

「……まあ、あるでしょう」

それだけで香奈は決めた。

「では、聞か聞かないかは二人に任せます」

「どういう事でしょう？」

「あの二人は、私とそこに寝ている梓と一緒に椿の為に一緒に走り
回っている友人なんです。だから、椿の事に関係する事なら聞く権

利があると私は思います。でも、実際に聞くか聞かないかは本人の意思に任せます」

「そう……って、貴方はやはり聞く方を選ぶのね」

「聞かなくていいなら聞きません。面倒事に首を突っ込みたくないですから。でも、椿に関係する事なら」

それに不思議な予感があった。

この人達の話を書くことで、今まで目に見えなかった新しい道が開けるような……そんな感じた。

普通なら、こんな訳の分からない人達には近寄る気も無いのに。

「……わかつたわ」

そう言つと、章子は美鈴達の元に向かい問いかける。

すると、美鈴と理佳はしばし顔を見合わせた後、恐る恐る頷いた。「では、説明しましょう」

梓はまだ意識を失っているから後で伝える事にして、香奈達は章子と向かい合つた。

「それで、まずは何から話そうか……」

「じゃあさつきその重樹つて人に質問した、『貴方達が誰なのか』、『なんで椿の母に化けて私達を追い返そうとしたのか』、『椿の家に入り込んで何をしようとしていたのか』についてお願いします」
すらすらと言いつける香奈に章子が苦笑する。

「そうね……まず私達はさつきも話したとおり『ISPM』の者よ。椿さんのお母さんに化けて追い返そうとしたのは、私達のする事の邪魔を排除したかったから。何をしようとしていたのかは、椿さんの記憶を見る為。お母さんの方はその作業の時に邪魔にならないように眠ってもらっただけよ。つまり、私達が用があったのは椿さんだけ……って、どうしたの？」

「いや、なんか凄くすらすら話されるんですね」

隠して起きたい事をこつと話してしまつていいのか。

「聞きたいと言つたのはそつちですよ」

「でも、あまり話したい事じゃなきゃはぐらかすとかしても当然だ

し……それに話すとしても、まさかここまで詳しく答えてもらえるとは思わなかったです」

章子が苦笑した。

「するなら最初にしてます。言っただしょう？ 貴方に家の中に入られて私が追い返せなかった時点で勝敗は決したと。私の変化も見られたし、その状態では家にも帰すに帰せない。かといって記憶操作する事は神有家に喧嘩を売るし、何もせずに帰したら何処で私達の事を話されるか分からない」

「だから、全てを話して」

「私達側に引き込んでしまおうかと。といっても、きちんと理解してもらった上での口止めですよ。理由が分かれば貴方達であれば吹聴はしない筈」

そこまで信用されてもいいものだろうか。

「不思議ですか。でも、神有の血を引く者であれば多かれ少なかれいつかは私達の組織に関わります。それが早まっただけです」

「……」

神有家ってそんなに凄い家なのだろうか？

まあ日本有数の財閥ではあるが。

しかし、章子という少女の話からすると、財閥とは違う所でなんだかの影響力があるようだ。

というかなんだか展開が早くない？

まるで急流に流されていく様な感覚に香奈は瞬きする。

「さて、続きを話しましょう」

「ちょっと質問させて」

「はい？」

「さつき椿の記憶を見るって言っただよね？ なんで記憶を見るの？ どうやって見るの？」

すると、章子がうーんと考え込む。

「記憶を見るのは、私達に下された任務に必要なだから。椿さんだけが今回犯人を見ているからね」

その言葉に、香奈の脳裏に一つの単語が浮かびあがった。

「連続無差別殺人事件」

「そうよ」

章子はあっさりと認めた。

「……もしかして、警察なんですか？」

「違うわ」

「違う？」

「確かに警察上層部からの依頼をされているけれど、私達は警察ではないの。『ISPM』の者よ」

「ってか、さつきから言ってるアイエスピーエムって何なんですか？」

美鈴がようやく口を開いた。

「……そうね。普通の人には知らないわよね」

そう言つと、章子にはこりと笑った。

「貴方達は知っているかしら？ この世の中には人の手には過ぎたる現象が幾つもある事を。俗に言うサイキック現象やらオカルトとかいう超常現象、それが実在している事を」

「はい？」

香奈は首を傾げた。

サイキック現象？オカルト？

よく聞く言葉だが、それが実在？

してるわけがないではないか。

あれは全部作り話――。

「作り話じゃないの」

「っ――」

香奈の心を読んだかのように章子が笑う。

「存在しているの。遙か古代より、異能という力を持つ能力者を始め、幽霊、超能力、妖怪、その他のあらゆる超常現象、あるはずのない超物理的な事象がこの世には存在する」

「……」

黙ってしまった香奈達に章子は優しく微笑んだ。

「信じられないのも無理はないよね。表向きには科学文明が発達し、そもそも「能力」や「能力者」自体が表向きには隠されてきたから一般人で知る者達はごく限られた者達だけ……当然、その能力者達の機関だつて知らない」

「能力者達の機関？」

香奈は頭の上に幾つもの疑問符を飛ばした。

「そう。超能力や霊力、不思議な力を持つ者達が所属する最大機関——それが、『国際超常現象機構』International supernatural phenomenon mechanism——通称『ISPM』。これは国際機関として各国政府に公認されている正式な組織。但し、知っている人達は少ないけどね」

「何故ですか？」

「能力者達の存在自体が隠されているからよ。でも、能力者達は存在する」

そこで章子は少し哀しげに笑った。

「確かにテレビや妖しげな宗教団体とかでは、インチキな超能力者や霊能力者が多く出て来るから嘘だと思われがちだけど、本当に力を持っている本物も多いの——っていつでも、力を持たない人達が殆どだけだね」

「……」

「けど、不思議な力を持っていると知られば、科学文明が発達したこの時代では迫害される恐れだつてあるわ。中世の魔女狩りみたいに……だから、公にしないのよ。そしてそんな能力者達を守る為に組織は存在し、能力者の保護、仕事の斡旋、物資の提供、教育、情報交換なども請け負っているの——ああ、管理もか」

「……つまり、労働組合みたいなものですか？」

「うーん、それとは違うかな。どちらかといえば、ハローワークの方が近いかも。最大の業務は保護・管理と並んで仕事の斡旋だし」

「仕事の斡旋？」

「そうよ。仕事の斡旋。っていつでも、別に普通の仕事ではないわよ。能力者がその能力を活用して行う仕事。つまり、超常現象の解決」

「超常現象……」

「そういえばさっき、妖怪とか言ってた。」

「妖怪と戦ったりするんですか？」

「それも仕事の一つよ。他には魔物とか悪霊とか色々なものを相手にするわね」

「げ、ゲーム？」

「それかSF？」

「宇宙人とかも出て来ちゃう？」

「頭の中でグルグルと色々な情報が回りまくる。」

「ひよこがピーチクパーチク鳴く声が聞こえた。」

「まあ、言い出せば切りが無いから簡単に言うけど、人の手には終えない事件は全て能力者達の仕事になるの」

「……」

「ただし、正確にはただの超常現象ではなく『ASP』を担当するんだけどね」

「エーエスピー？」

「超常現象の中でも今回のように悪意を持って引き起こされるものよ。特殊超常現象事件の略称ね」

「今回のよう？ …… って」

「なんだか理解出来ない事ばかりだが、それだけはしっかりと聞き取り理解した。」

「この章子という女性は、あの連続無差別殺人事件が「エーエスピー」とかいうものに含まれると言っているのだ。」

「で、エーエスピーは超常現象という人の手には終えないもので、その超常現象には妖怪とか色々含まれていて……。」

「って、あの、じゃあ今回の事件は」

「そう。人ならざる者の手が関わっていると判断されたの。だからこそ、うちの機関に警察上層部から依頼が来たのよ。そしてその解決の為に私と重樹は此处に居るの」

あまりの事に香奈は茫然とした。

だから話がSF的な展開になってるってば。

「よ、よく理解できません」

「でしょうね。突然沢山の事を告げられてるんですもの。それに、今までテレビや漫画の世界だけに存在すると言われていたものが実際に存在すると言われても混乱するわね」

「って、能力者とか能力もよく分からないです」

「分からないって、超能力者とか霊能力者とか身近にいるだろ」

「いません」

そんなのがそうそう居てたまるか。

確かに学校ではスプーン曲げが流行ったことがあるが、出来た生徒は一人も居なかった。

「そうね……ではそこも説明します」

一つ息を吐くと、章子は香奈を見つめなが口を開いた。

「そもそも、この世に生きる者は、量や質に差はあれど誰もが能力という力を持っているとされています。つまり、誰だって能力者というものになれるんです。でも、力は持っているだけでは駄目で、それを使う為の技術とか色々なものが必要となります。そして力を使えるようになる事を覚醒と言います」

「覚醒……」

「但し、覚醒には遺伝的要因や環境的要因など様々な要因が複雑に作用しあう必要があります。で、能力には一般的に知られているサイキック能力、霊力、その他物理的になしえない事象を発揮する超常の力があり、これらを総称して「能力」と呼びます」

「能力……」

「能力者とは、この能力を操る力を持つ者を指します。能力者には先天的タイプと後天的タイプがありますが、この部分はまためんどく

さくなるのでまたの機会にしましょう」

そう言つと、章子はちらりと香奈達を見た。

「何か質問は？」

「既にパンクしてます」

「し、しし、信じられないです」

「能力……って」

香奈だけでなく、美鈴も理佳も信じられない様子だった。

説明は一通り聞いたが、実際に見たわけではないのだ。

「確かに見ないと信じられない。それは当然ですね。寧ろこの時点ですぐに信じられる方がおかしいですもの」

「しよ、章子」

戸惑う重樹を制して章子が香奈達を見る。

「では見たら信じられますか？ 能力者という存在を。そして『I SPM』という組織の存在を」

「う、うん」

「見たら」

「し、しし、信じ、られるかも」

寧ろそれらを信じるという事は、椿の件を信じることに繋がる。そう――椿の見た犯人が、やはり化け物だったと信じる大きな決め手になるだろう。

だってそういう不思議な力があるのなら、化け物とか霊とかそういうのが居てもおかしくなくなるからだ。

どう考えても、人とは思えなくなっていた椿の見た犯人。

それこそ化け物だと認めてしまった方がよほど辻褄が合う。

その為にも、章子達の話が真実だという裏付けは必要だった。

「では、見せましょうか」

そう言つた章子だが、ふとその笑みに香奈はひっかつた。

「な、何？」

「いえ……普通なら全部嘘だと怒りながら出ていってしまったてもおかしくないんですけどね」

「……まあ、確かに。でも、私見ましたし」
「え？」

「貴方が椿のお母さんに化けていたのを」

見た目は完全に椿の母だったのに、香奈が頭突きした後居たのは章子だった。

メイクや被り物をしていたとしても、残っている筈のものが無い時点でその可能性は薄い。

それに頭の何処かで、不思議な何かが起きたのだと声高に叫んでいるのだ。

もし椿の件がなければ……椿の見た犯人の件がなければ未だに否定し続け、章子の話だってまともに聞かなかった筈だ。

けれど……少しずつ、少しずつ傾いてきている所に聞いた話を前に、香奈は否定の言葉が思いつかなかった。

それに、それが本当に真実かどうかは今から分かる。

「では、証拠を見せましょう」

能力者を始めとした不可思議な存在が居る、確たる証拠を――。

第三十二話 殲滅の雷姫

沢山の言葉を聞いた。

『能力』、『能力者』、『IPSM』、『超常現象』、『ASP』
その他様々。

聞いた事のない言葉、聞いた事はあるけどテレビの中だけの言葉
がわんさか出て来た。

少し前の香奈なら笑い飛ばしはせずとも、どうせ作り話だと思っ
ただろう。

けれど、今香奈達が見ているのは、まぎれもなく真実――。

だと。

思う。

「っ！」

香奈は自分の産毛が総毛立つのを感じた。

目の前で行われていく章子の状態変化に、息を呑む。

他の子供達が怯えて泣く中、香奈だけは一人教室の窓から眺めて
いた。

父と手を繋ぎながら、雨が降り注ぐ中仰ぎ見た空の中に、それは
あった。

灰色の曇天の隙間に見える幾つもの青い閃光。

それは、大地を青白く照らしたかと思えば、大きな轟音と共に空
を切り裂き地面に降り注ぐ。

雲と地面との間に起きる光と音を伴う大規模な放電現象。

一般には天災と認識されながらも古代では稲を実らせる現象とも
謳われ、他国の神々ではその力を持つ神こそが最高神と崇められた
――。

「これが、私の力ですよ」

章子がパチンと指を鳴らせば、体に蛇の様に纏わり付いていた青い光が章子の前に現れる。

バチバチと激しい音を立てる球体は正しく。

「雷」

香奈がその強い電気を纏う球体に魅入られながら呟いた。

「そう、雷です」

章子の笑みに、理佳が驚きの声をあげる。

「こ、ここ、こんな事が、ど、どう、して」

「ふふ。雷の発生の仕方は分かる？」

「雷雲があるから？」

香奈の答えに章子は笑った。

「確かにそう。でも、雷には火山雷と言うものもあるの」

「火山雷？」

「そうよ。けど、そこは割愛するわ。今は雷の発生についてだから」

章子が自分の造り出した雷の球体を見る。

「雷は電位差によって発生する。私はその電位を操作する事が出来るの」

「電位？」

「雷の発生に関わる要素の一つよ。物理を学んでいれば分かるんだけど……まだよね？」

章子は香奈達の様子を見て苦笑する。

完全に頭の中に疑問符を飛ばしていた。

ただ、理佳だけは少し様子が違う。

「電位……そ、それって、い、位置、エネルギーの事ですか？」

「ビンゴ！」

流石は秀才。

調査書通りだ。

「位置エネルギー？」

香奈は余計に頭が混乱するのが分かった。

「元素使いの中でも雷使いは珍しいんだ」

重樹と呼ばれた青年が誇らしげに言う。

「それに、章子ほど雷を自在に操れる能力者は『IPSM』には居ないんだ！」

「おかげで通り名は『殲滅の雷姫』ですけどね」

「なんだか物騒な通り名だ。」

「で、信じてくれた？」

にこりと笑い雷の球体を突く章子の言葉を聞きながら、香奈は球体を見つめる。

「他にはどういう事が出来るの？」

驚いて言葉も出ない少女と、ひたすらワタワタする少女。

たぶん普通の感覚を持つ相手ならば、そういう驚愕する反応が殆どだろう。

後は有り得ないと怒って否定するか、悪ければ罵詈雑言を吐き捨て、それも無理なら畏怖と恐怖を向けてくる。

特に人は普通とは違うものを忌避する傾向が強い。

しかし、香奈はそのどれとも違い、他には何が出来るのかと聞いた。

本人は気づいていないが、目に宿る輝きは純粹な好奇心と尊敬。

「そうね、簡単に言うくと雷関係は何でも。落雷させたり、今のように雷の球体作ったり、電気に影響を及ぼして停電にさせたり、逆に発電させたりとあらかたの事は出来ますよ」

「……自家発電機？」

香奈の表現に重樹はぶっ飛んだ。

『IPSM』の中でも名高いあの『雷姫』を発電機なんて。

いや、それよりも章子を侮辱する事は死に繋がる。

なのにそんな簡単に言うとは、やはり神有家縁の娘だからだろうか。

「重樹、構わないわ。たいして変わらないもの」

「け、けど、章子はエイスだぞ！」

「それでもよ」

「つてか、本当にこの子は神有の娘なのか？ それにしては知らなすぎるぞ」

バチンと雷の球体が消滅する。

総毛立っていた産毛が再びペタリと肌にくっついた。

「重樹」

「別に俺はおかしい事は言っていない！ だって神有家だぞっ！」

「IPSM」の重鎮なんだぞっ！ なのに能力の事すら知らないって有り得ないだろっ」

「教えていませんからね」

「何でだよ！」

「その必要がないと判断したんでしょう。それに、母君は既に家を出られているから」

「なら、神有家とは関係ないんじゃない」

重樹の言葉に章子は頭を横に振る。

「ありますよ。親族会議にも出席されてますからね」

「……なんなんだよ！ わけわかんないよっ」

「確かに普通はそうですね。でも、その事に関しては外部の者である私達の口出す領分ではないわ」

「……」

また、分からない事を話していると香奈は感じた。

「というか、神有、神有、神有と何故こつも母の実家の名が出てくるのか。」

しかも、『IPSM』の重鎮って……。

「IPSMは能力者を抱えている団体で……」

つまり、神有家は。

それを言おうとした時、章子はそつと香奈の唇に指を当てた。

「そこまです」

「章子、さん？」

「神有家の詳しい事に関しては、どうぞ神有家からお聞き下さい」
「……」

「私達が話せるのは、能力と能力者、そして私達の所属する団体の事」

そして、今回の連続無差別殺人事件の依頼を受けている事。

「事件について話したのは、貴女方を協力者として認めた上での事よ」

「協力者？」

「そう。協力者。だって、椿さんの為に駆けずり回っていたんでしよう？ 助ける為に。ならば、事件を解決しようとする私達と目的は一緒。椿さんを助ける為に、この事件を解決しようとしている」

「……」

「だから、協力者」

章子の笑みを前に、香奈はなんだか自分達は知らないまま色々な立場に立たされている事を悟った。

「では、事件の事は」

「話せる分だけは話すわ。それも含めて貴方達に話したのよ。逆に言えば協力者に協力を仰ぐ為に能力や私達の所属する団体について話したと言ってもいいわね。そして協力者の記憶はもちろん消さないわ。貴重な助力ですもの」

「え、でも」

確か自分に話してくれたのは神有家の縁者だからで、記憶操作が出来ないのも神有家だからとか言っていー。

と、そこで香奈はハッとした。

美鈴と理佳。

この二人に向けられて今の理由は告げられたのだ。

神有家以外の者達にも話をする理由。

そうー香奈ではなく、美鈴と理佳の記憶消去をしない為の、理由。

「……」

そもそも考えてみれば、記憶が消せないのは香奈だけだ。

美鈴と理佳は違う。

幾ら椿を助けたいからといっても、所詮は子供の戯言ととられてもおかしくない。

けれどそれでもこうして話をしてくれて、記憶を消さないでくれるにはそれなりの理由がないとならないだろう。

章子はその理由を協力者としたのだ。

その存在がどれだけ章子の組織に重要なのかは分らないが、記憶を消さないで済むからにはきつとある程度の影響力はあるのだろう。

まあ、確かに事情を知っている民間人が居る方が、秘密裏の組織からすれば動きやすくなるのかもしれないが。

「という事で、事件についての話を進めるわね」

そこには、もはや神有家の「か」の字を呟く隙間もなかった。

「……わかりました」

神有家の事は気になる。

しかし、話せないと言うのならそれ以上聞くべきではないだろう。既に、美鈴や理佳が事件に関わる事が許されているとか、沢山の譲歩がされている状況である。

それに今は香奈も一杯一杯過ぎてこれ以上情報を得ても整理が出来ない。

と、その時客間の壁掛け時計が午後五時を知らせる音楽を鳴らした。

「あー」

その音楽に、既に思いの外時間がかかった事を悟る。

それと共に、椿の事を思い出した。

時間が無い。

火曜日の午前二時まで、残り少ない。

そう言っていた筈なのに。

無駄な時間を過ごしたとは思わないが、香奈の中に焦りが生まれる。

まだ自分達は此処に来た目的を何も果たしていないのに。

「は、犯人」

「え？」

「椿に見せなきゃ」

香奈は鞆の中から図書館でコピーしてきた被害者の写真を取り出す。

今回の事件の犯人と怪我の状況が一致していたそれを椿に見せるつもりで持ってきた。

「……それは」

章子が香奈の持つ写真を見る。

「そこまで、辿り着かれていたのですか」

「え？」

「流石ですね、香奈さん」

「章子」

重樹が恐る恐る口を開く。

「重樹、あれを」

「え、あ、うん」

重樹が自分の鞆から青いA4ファイルを取り出した。

「それは、何ですか？」

「貴方の持つ被害者の情報が載ってるわ」

「え?!」

茫然とする香奈達に、章子がファイルを開きながら告げた。

「今回の犯人は、その被害者なのよ、たぶん」

香奈達の欲しかった答えは、あっさりともたらされた。

第三十三話 苛立ち

「三十年前の最後の事件被害者——秋月 響子。当時中学一年生。彼女が今回の無差別連続殺人事件の犯人だと言われてるわ」

章子は淡々とファイルを読み上げていく。

「秋月 響子……」

香奈は自分の持つ写真を見る。

美鈴と理佳も手元を覗き込んできた。

この被害者はそういう名前だったのか。

そういえば印刷した情報やHPに載っていた気がするが、容姿しか注目していなかったから殆ど覚えていなかった。

「生前は東京都心の中学に通っていたわ。生前住んでいた場所の住所は東京都の——」

住所が読み上げられていく。

「両親は半年前に死亡。その後は被害者の妹が家土地、財産を引き継ぎ夫と子供と共に暮しているわ」

「妹さんが居たんですか？」

「ええ。姉が亡くなった七年後に生まれているから、今年で二十三歳ね」

香奈の質問に章子はページを捲って妹の情報を口にする。

「その人はお姉さんの事を知ってるのかしら？」

美鈴がポツリと口にした言葉に反応したのは章子だった。

「残念だけど知らないみたいよ、全く」

驚きを露わにする香奈達に章子は溜息をついた。

「この秋月 響子が犯人かも知れないと分かった後、すぐに詳しい情報を調べる為に秋月邸に向かったの。でも、既に両親は亡くなられていたわ。だから最初は故人の持ち物を捜したんだけど」

「故人の持ち物？ ……それって、響子さんの遺品の事ですか？」

「そうよ。えっと――」

「美鈴です。で、こつちが理佳」

美鈴のハキハキとした紹介に章子が満足げに頷いた。

「ええ、美鈴さんの言うとおりよ」

「あ、ああ、あの、どうして遺品を」

「情報を取る為だよ。サイコメトリーするんだ」

章子の代わりに重樹が説明する。

「サイコ？」

首を傾げる香奈に重樹がめんどくさそうに説明する。

「物体に残る人の残留思念を読み取ることだよ。特に事件の時に身につけていたものが望ましいんだけど……」

「だけど？」

「何も残されていなかった」

「へ？」

あつけにとられる香奈に今度は章子が口を開く。

「まず実家には響子さんに纏わるものは全て無くなっていたの。ど
うやらご両親が全て処分していたみたい」

「なっ?!」

死んだ娘の遺品を全て処分したというのか。

「そ、そんな……こと」

「ええ、私達も驚いてる。普通はそういうのって残す事が多いと思
うから……心情的にも」

「……」

「あ、あの」

「何？ 理佳さん」

「じ、実家に、なくても、その、警察にはないんですか？」

「理佳？」

「ど、ドラマ、とととかであつたよ。しょ、証拠品」

「でもとつくの昔に時効を迎えた事件だよ？」

香奈の言葉に章子が頭を横に振った。

「時効になると遺留品を含む証拠品は時効送致といって、被疑者不詳又は未検挙ということで検察庁に送致されるの。他には所有者が明らかで変換を望んでいるものについては、所有者等に還付されたりもするのよ」

「ほら、以前に検察へ時効送致すべき捜査書類や証拠品を処分していた事件があつただろ？」

「ありましたっけ？」

「ニュースぐらい見ろよ」

「重樹」

呆れた顔をする重樹に章子の鋭い声が飛ぶ。

「だ、けどさ、章子」

「香奈さん達ぐらいの年齢でそこまで知ってる方が凄いわよ」

「あの、じゃあつまり証拠品は検察つて所にあるって事ですか？」

「そういえば重樹が言っていた。」

自分達の組織は警察上層部にも繋がりはあると。

ならば、そこから証拠品を捜せばそのサイコメトリーとかが出来るのではないか。

「ええ、本来ならありますよ」

「……本来なら？」

「そ、それって」

何かを悟った美鈴が口を手で覆う。

「ないんですよ」

「は？」

「証拠品が一つも残ってません」

「な、なん、え？」

「丁度今回の事件が起きる直前に証拠品が置かれている場所で火事が起きたんです。それで証拠品が全て燃えてしまいました」

「はい?!」

証拠品が燃えた?!

「もちろん、この情報は検察側によって隠されています。公にした

ら一大事ですからね」

「い、いや、公って証拠品が燃えたんでしょ？」

「ええ。でも、既に時効をとっくの昔に過ぎてしまった証拠品だった為、重要性は薄いとして事件の隠されました」

重要性が薄いという言葉に香奈は力チンと来た。

例え時効が過ぎようと、遺族にとつては犯人に繋がる大切なものだ。

「そしてその調査も私達に依頼が来てました」

「は？」

放火まで担当するのか？能力者達って。

だが、そこで香奈は気づいた。

章子達の所属する組織は特殊超常現象というものを解決するのが仕事だという。

そこに依頼が来ると言う事は……。

「もしかして」

「ええ。人ならざる者が関わっています。でなければ、到底火を点けることなど出来ません。実はその検察の証拠品置き場には能力者の結界が張られていますからね。出来るとすれば同じ能力者か、人なるざる者」

「能力者っていう可能性はないんですか？」

「あるわけないだろ！」

重樹の怒声に理佳が怯えて美鈴にしがみつく。

「能力者がそんな事するわけないっ！」

「わかんないです。だって人には色々なタイプがいるように、能力者にだって色んな人がいるだろうし」

「能力者の事を今まで知らなかった奴に言われたくない！」

「重樹！」

章子の怒声に重樹がハッと我に返った。

「全く——ええ、確かに香奈さんの言うとおりな所もあるわ。ただ、人なるざる者の証拠が残っていたの」

「証拠？」

「その結界には特殊な仕掛けがあるの。能力者が解いた場合と人なるざる者が解いた場合での解かれ方が違うのよ」

「へ」

「で、俺達はその火事の一件も今回の件に関わっているとみている——なんだよ、その顔。だってそうだろ？　まるで狙ったかのような感じが」

「狙った……」

「火事の発生時期だよ！　その件があった後で間もなく今回の事件が起きている」

「……」

「それに実家に遺品が全く残されていない状態で検察の方にも証拠がなくなるなんて偶然じゃない。特に事件が起きた今は——くそっ——！」

ガンツと重樹が壁を殴る。

「くそ、くそ、くそっ！　なんでっ！」

「重樹、止めなさい」

「けど、けど！」

「重樹」

章子の窘めに重樹がグツと唇を噛みしめる。

だが、終に耐えきれずに部屋から飛び出していった。

「あ」

「良いのよ。少し頭を冷やさせるから……それで、被害者の」

「あの人……何かあったんですか？」

香奈の質問に章子が言葉を止める。

「なんか、凄くイライラしている感じだったんですけど」

「……気にしないで」

「私の言い方かな」

「は？」

香奈はポリポリと頭をかきながら話した。

「私の話し方って良く人を怒らせるって言われるんです。だから」

「それは関係ないよ」

「でも」

「ここに来る前からだから——友人を亡くしたの」

ギョツとした様子の香奈に章子はハツとするが、口から出た言葉を戻せるわけもない。

しかし積極的に話していいものでもないだろう。

暫し迷うが、香奈達の視線に結局は説明する事に決めた。

「今週の火曜日の事件は知ってますか？」

「はい……って、あの」

「そうです。あの事件の被害者が重樹の友人なんですよ。そして——

『IPSM』の能力者でもありました」

「能力者が被害者って……」

「シフト的に休日だったのかな」

香奈と美鈴がアルバイトのシフトを思い出す。

まだアルバイトは出来ない年齢だが、よく街でシフトがシフトがと耳に入ってきた。

「……そうですね。休暇中ならどんなに良かったか」

何処か疲弊した様な声音に香奈は章子を見た。

「……そう、任務中だったの」

「任務、中？」

「つまり、事件解決をしようとしていたって事ですか？」

美鈴の指摘に章子は頷いた。

「そう……その仕事中に亡くなったの」

香奈は今週の火曜日にテレビで見た事件を思い出す。
遺体はバラバラで酷い状態だった。

「だから、余計に、ね」

「……でも、大丈夫なんですか？」

「美鈴さん？」

「普通関係者って外されるんじゃないですか？」

病院でも手術とか、警察でも身内が被害者になった場合等は担当から外される。

それは、心情的なものにより客観的に仕事が出来なくなるからだ。

「……確かに、普段ならそうね。でも、重樹は……」

「重樹は？」

「どうしてもこの件に加わると」

「でも、正常な判断が出来なくなったら……大変じゃないですか？」

「……うん。でも、正式に任務が下ってしまったから」

だから、連れて行くしかなかったと章子は告げる。

「理由は分からない。ただ重樹は、今後『IPSM』の心強い戦力になる素質があるから、経験値稼ぎをさせたいという組織の意向もあつたのかもしれない」

「経験値稼ぎって」

「後は、友人の死を乗り越えて任務に徹底できるよという訓練かな……はつきりいつて私達の仕事は失敗すれば死に直結する仕事だからね。こういう事はこれから先沢山あるから」

「……貴方もそうなんですか？」

香奈の質問に章子は頷いた。

「ふふ、それでも友人も知人も十数人は亡くしてるのよ。だから残酷かも知れないけど、重樹もこれから能力者として仕事をしていくなら、これは乗り越えなきゃならない事なの」

「……」

「だからね、本当は香奈さん達の事も巻き込みたくなかったの。既に能力者も死んでる。関われば貴方も命の危険性があるから」

「でも、許可してくれましたよね？」

「うん、今更だしね。というか、秋月 響子にまで辿りついているんだから、もうどっぷり関係者でしょう？」

「え、まあ」

「私もまさかそこまで嗅ぎ付けているとは思わなかったけどね」
何処か呆れた様子の章子に香奈達は顔を見合わせた。

「でも、寧ろ協力者としては心強いよ。今はどんな情報でも欲しいの。それほどうちの組織は切羽詰まってるのよ」

「切羽詰まってる？」

「ええ。うちの組織は世界の中でも最大の能力者組織。そこに仕事を依頼すればほぼ確実とさえ言われている。にも関わらず今回は失敗した——こういう仕事って信頼で成り立っているから、失敗には特に煩いのよ。つまり威信を賭けた再チャレンジ中という事ね」

なんかそう言われると、真剣さが失われていく気がする。

「ってか、失敗理由って……向こうの方が強くて負けちゃったからですか？」

「うーん……もういつか、言っても……失敗したのは依頼書の誤った記載のせい。それが原因で、能力者の選択ミスによるものよ。簡単に言えば火事が起きているのに火を消す消防車を呼ばずに救急車を呼んでしまったパターンよ」

何となく分かった様な分からなかった様な……。

香奈達は頭の中に救急車と消防車を思い浮かべながら章子を見つめた。

「何故そうなってしまったか……そうね、最初から話さないと行けないわね」

そう言つと、章子は視線を落とした。

第三十四話 経緯

「……私達に依頼が来たのは、丁度二つ目の事件が起きた後だったわ……最初の事件の調査結果から、それが人なるざる者の手だという事が確認され、『IPSM』に依頼が来たのよ」

「ってか一つ突っ込んでいいですか？」

香奈の突っ込みを章子は許可する。

「その依頼をしたのって」

「『IPSM』に係る警察上層部です」

「その人達って、能力ないんですか？」

「ありますよ」

「……なら、その人達が倒せばいいんじゃない」

美鈴と理佳がポンツと手を叩く。

確かに香奈の言うとおりだ。

「そうなんだけど、そう上手く行かないのが組織なのよ。それに、警察上層部の能力者はある意味警察組織と『IPSM』の仲介者的存在だから戦闘には積極的には加わらないのよ。もし何かあつて死なれると、またパイプ作りに時間がかかるから」

「……それって、戦う人の方は代わりがいるっていうニュアンスですけど」

「ニュアンスじゃなくて、実際そうなの。って怒った顔しないで。それは最初から承知の上なんだから。それで討伐する相手が依頼書には記載されていたの。『魔物レベル3』って」

「魔物レベル3？」

なんだそれ？と香奈達は顔を見合わせる。

「『ISPM』では『ASP』の元凶となる対象者を、それぞれの殺傷力、性格気質、種族を三大柱とした総合的評価に基づいて、レベル1～10の十段階に分けているの。依頼書の表記例では、『魔物レベル6』、『悪霊レベル3』、『堕神レベル5』等という記載

がされ、レベルは数が大きいほど、対象者の凶悪性が大きくなり、対処するのが難しくなるわ」

一気にされた説明に、香奈は何度目かのひよこ召喚の準備に入っていた。

「通常、人間が単独で相手に出来るのは種族問わずレベル4まで。だから、今回の件もそのレベルに対応出来る能力者達が討伐に向かったの」

「ってか、能力者って魔物とかも倒せるんだ」

「RPGだね」

「す、すす、凄いです」

ゲームだ。

いや、もうとっくにゲームじみた話だ。

そこで章子はグツと拳を握りしめる。

「でも……実はその依頼書に間違いがあったのよ」

「え？」

「『魔物レベル3』なんかじゃなかったのよ、相手が」

「何で分かったんですか？」

「だって、そもそも今回投入された能力者の実力なら『魔物レベル3』ぐらいなら十分倒せる筈だったもの」

つまり、倒せる相手を倒せなかったから間違いがあったという事——いや、でも。

「でも、絶対なものってないですけど」

香奈の鋭い指摘に美鈴と理佳が頷く。

自分達だって確実に百点を取れるテストに対して、ケアレスミスやらないにやらするのだ。

「確かにそうね。けど、インカムから——ああ、仕事中はインカムという通信機をつけるの。で、そこから聞こえて来た会話は酷く焦っていてね。完全にパニックになっていたわ。その時に聞こえて来たの。『違う』、『依頼書には』って」

章子はそこで一呼吸置いた。

「その二つの単語から、依頼書に何かあると思われたわ。それに加えて、能力者が返り討ちにあった事、またこれといった証拠品を残さない事から、相手は『魔物レベル3』なんかじゃないって判断されたの」

「人、死んだんですね？」

失敗では済まされない話だ。

「その通りよ。今週の火曜日の朝にニュース速報が出たように、『IPSM』に能力者達が殺されたという報告が入って……その中に重樹の友人が居たの」

「……」

「もちろん能力者が死ぬ事はあるわ。こういう仕事をしている限りはね。でも、依頼書に問題がある可能性が出て来た。はっきりいつて依頼書は能力者の選抜や仕事の振り分けの際に重要な書類よ。だから、すぐに組織側で調査がされたわ」

もし今後度々こんな事が起きれば、仕事をしようとする能力者自体が居なくなるから調査はかなり厳しいものとなった。

「調査ですか？」

「ええ。で、依頼書を捜査する上で出向いた現場で、サイコメトリが行われたところ、目撃者がいたという事が分かったの。目撃者は依頼書の件に直接関わらないけれど、すぐに椿の元に能力者が出向いたわ。今回の件で事件直後に現場に居て生きていられた相手は初めてだから、何か情報が得られる事に期待してね。また依頼書の内容が本当かの確認もかねて」

「内容がって」

「だって犯人を見たかも知れないでしょ？」

「……犯人についてはサイコメトリ出来なかったんですか？」

「出来なかったのよ、これが」

章子が溜息をついた。

「……って、あの、椿の所に出向いたって言いましたけど、それが今回の」

「いえ、私達は二度目よ。最初は火曜日に行われてるから」

火曜日——それは椿から初めて話を聞いた日の事だ。

「って、そんな人見なかったんですけど」

「貴方達が帰った後に来たみたいね。じゃなきゃ私達みたいに完全に鉢合わせしてたわ。まあ——今回もそうであって欲しかったんだけどね……で、最初のサイコメトリーでは椿さんの強い恐怖と混乱が邪魔して殆ど読み取る事は出来なかった。唯一分かったのは、犯人の容姿とその存在が悪霊の類だと分かったの」

「……」

「けど、本当の問題はそこからだった。悪霊だとしてもその素性が分からない上に、あまりにも強すぎたの。だって、幾ら悪霊専門ではないとしても、『IPSM』の能力者を一撃で葬るほどの力を持つ相手は中々居ないわ。それに、事件以降は痕跡も残さず、追う事も出来ない。それこそ、何かの力が加わって居所を隠しているんじゃないか思えない」

「何かの力？」

「……で、調査は続けられ、幾つかの事が分かったの。一つは今回の事件が、三十年前の事件と同じという事。もう一つは、三十年前の事件の被害者の中に椿さんの見た犯人と同じ人物が居た事。それがこの秋月 響子。すぐに素性を調べ、その過程で遺品や証拠品が消えていた事が分かり、証拠品の保管庫の火災と関わりがあるのではと予測が立てられたのよ」

「その、秋月っていう人の妹さんは何か知らないんですか？」

美鈴の提案に章子は哀しげに笑う。

「それが、姉が居たという事は知ってるけれど、それ以外は何も知らなかったの」

「え？」

「しかも姉は事故にあって亡くなったと両親から教えられていたそうよ」

「じ、事故？」

事故どころか事件。

それも未解決事件だ。

「私達も不思議だったけど、両親がそうやって教えたのが記憶から読み取れたわ」

「な、なんで……」

「また秋月家の親類も数少なくてね。他に情報を取れる相手はいなかった。それに三十年前の事件だから殆ど情報も残っていないしね」

「で、さっき、もう一度犯人を確認する為に椿さんに記憶の照合を行ったけれど、やはり同一人物である事が99・999パーセントの確率で確認されたわ」

「……その為に、今回来たんですか？」

「一つの目的はね。もう一つは……」

「もう一つは？」

「犯人を捕らえる為の罠をしかける為よ」

「……罠って」

「椿さんは今回の件では次のターゲットにされている確率が高いわ。だから、待ってれば向こうから来る」

その言葉に、香奈は嫌な予感を覚えた。

待っていても？向こうから来る？

「……それって、椿を、罠にするつもりですか？」

「……」

「罠にするんですか？！」

「……だとしたらどうする？」

「どうするって……ほ、他には方法がないんですか？」

「あるならとづくにやってる」

「……」

「でも、もう時間もないの。それに、私達には椿さんを殺しに来る時にしか犯人と接触する方法がない」

「え？」

「彼女が死んだ場所、彼女のお墓と彼女に関係する場所は一通り回った。でも、そこには何の痕跡もないの。捜そうにも見当たらないのよ。だから接触する最後の方法は椿さんの所に来る時だけ」

「け、けど」

「分からない事はまだあるわ。今回の事件の目的よ」

「目的？」

「そう。なんで三十年も経った今、こんな事件を起こしたのかって復讐するとしても三十年も待つ必要はないわよね？」

「それは……」

「だから、私達は別の存在が彼女に関わっていると判断したの。さつきも説明したよね？『ASP』の事を。人ならざる者が介入する事を」

「……」

「はつきりいつて、その人なるざる者の存在は現時点では全く分からないの。言い換えればそれほど厄介な相手という事。だからその影響を受けているだろう彼女も自動的に厄介な相手となるわ」

厄介な相手……。

香奈は自分の持つ写真の中の少女を見つめた。

幸せそうに笑っている姿が、今回の事件とのギャップを濃くする。

「それこそ、今回捕まえられなければもっともつと被害者を出す筈よ」

「……」

「だから、何としても今回捕まえなければならないの。でなければ、死んだ『IPSM』の能力者達だって報われない」

「……どうして、依頼書が間違ってたんですかね？」

「それはまだ調査中よ。でも、すぐには結果は出ないわね。何せ依頼書を書いた相手は現在行方不明になっているの……何か事件に巻き込まれたのかもしれない」

章子は溜息をついた。

「とにかく、これ以上の犠牲を出さない為にも、椿さんには協力し

て貰わなければならないの。だって、彼女だけが次のターゲットって分かってるのよ？」

一度目のサイコメトリーでその可能性が指摘され、二度目のサイコメトリーにて確信した。

秋月 響子の悪霊は椿に言ったのだ。

アナタノモトニイクノヲ——と。

そして次のターゲットであるならば、する事は一つ。

彼女に張付き、今回の犯人を倒すまでだ。

「でも、椿は」

あんなに怯えていた。

あんなに怖がっていた。

「大丈夫。本人に意識はないから」

「え？」

「だから暗示をかけていたのよ」

暗示？

「私達に協力してくれるように」

章子の必死な顔に、香奈はそれを口に出すのを躊躇った。

けれど……。

心の中にわだかまる思いが飛び出す。

「本人の意思を無視してですか？」

「香奈っ！」

美鈴が咎める様に腕を掴んでくるが、香奈は章子から目を離さなかった。

「……そういう事になるわね。でも、きちんと説明した所で彼女が協力してくれるとは思わなかったから」

章子は誤魔化さなかった。

その態度に好ましさを感じるが、同時に告げられた内容に苛立ちを覚える。

仕方ないと心の何処かで思う部分があるが、自分の若い部分が酷いと叫ぶ。

「私達のやろうとしている事が非人道的な事ぐらい分かってる。でも、失敗したら椿さんも死んでしまう。だから」

「だから、勝手に暗示をかけて囮にしてもいいんですか？」

「香奈さん……」

「椿は……椿の意思は無視ですか？もしかしたら納得してくれたかもしれないのに？」

「……その可能性は低いわね」

章子は厳しい声で告げた。

「普通に考えて、自分がそんなわけの分からないものに狙われていると知って冷静でいられる相手は殆どいないわ。既に椿さんは怯えていたもの」

「確かにそうですけど」

「その状態で説得するにはどれだけ時間がかかる？　言っただけじゃないって？　時間がないって」

「……」

「相手は今まで何人も殺しているの。凶悪な悪霊なの。失敗したら私達が死ぬだけじゃない、椿さんも死ぬし、もっと沢山の人も死ぬかもしれない」

「……」

「戦闘はかなり厳しいものになるわ」

「あの」

「ん？」

「なら、戦って……勝ったら、椿は助かるんですか？」

「もちろんよ。その為に私達はこの任務に望んでいるの」

決意に満ちた表情の美しさに思わず目を奪われる。

「だから、何としても椿さんには協力してもらいたい」

章子の懇願にも似た言葉に、香奈は寝ている椿を見る。

最後に見た時は怯えて泣きじゃくっていたが、今はすやすやと穏やかな寝顔を浮かべていた。

椿は今まできちんと眠れていただろうか。

いや、きつと怯えて眠れなかっただろう。

毎日椿の元に訪れていた梓達からはまだ何も聞いていなかったが、それぐらいは長い付き合いだから分かる。

椿が恐怖から解放されるなら……。

死を回避出来るなら――。

椿の寝顔を見つめながら、香奈は考えた。

でも……それを選択するのは、自分ではない。

第三十五話 決意

「椿に話しちゃ駄目ですか？」

「え？」

「確かに椿は今の時点で凄く怖がってます。でも、だからといってやはり何も言わないのはやっぱりおかしいと思います。だって、病気とかでも結局はそれと戦うのは本人なんです」

「香奈さん」

「それに暗示は完璧ですか？ もしその犯人と対峙している時に正気に戻ったらどうなるんです？ それこそパニックですよ」

「それは、その」

「でも、最初から納得済みだったら、絶対にパニックにならないっていう保証はなくても、突然暗示が解けるよりもよほど安全じゃないですか？ それに、よく霊とかって本人の意思である程度憑きにくく出来るというかなんというか」

でも一番の方法は、そういう場所にまず行かない事だ。

しかし向こうから来ると言われている今はそれが使えないから、やはり本人の気力が鍵となる。

「……けど、もう時間が」

「椿の事は私達が説得します」

「え?!」

「いや、香奈、それは厳しいんじゃない」

「まあ厳しいけど——何とかするでしょう。死にたくなかったら手伝えって言えば」

それで何とかなるのか?!

しかも説得ではなく脅迫だ。

「香奈、それなら別に私達じゃなくても」

「私達だからだよ。ただでさえ怯えている状態で見知らぬ章子さん達に突然協力してと言われるよりは、長い付き合いの私達が言った方

「が良いんだよ」

「なんで？」

「椿の弱みを徹底的につける」

鬼だ。

こいつ悪魔だ。

美鈴は激しく心の中で香奈を罵った。

「確かに良い方法ではありますが……もし、失敗したら？」

「その時は、椿の命が保証される最も良い方法を選んで貰って構いません。ただ聞きたいんですけど」

「何？」

「その組織の目的は今回の事件を解決する事と聞きました。でも、それは犯人を倒す事と人命のどちらが重要視されているんですか？」

「香奈？」

「だってそうじゃない。もし犯人を倒す事が最優先なら、いざとなったら椿は切り捨てられるもの」

「……聡い方ね」

章子がクスクスと笑った。

「組織的には、犯人を倒す事が最優先よ。でも、だからといって人命を切り捨てる事はできる限りしない。けれど最後の最後は分からない」

「……」

「そして私達は組織に従う。組織の能力者だから。でも——協力者は違うわね」

「え？」

「組織所属ではないから。協力さえしてくれれば、何をしても構わない。私達の邪魔にさえならなければ」

つまり、椿を守る為に何をしようと構わないと言っていると香奈は悟った。

ならば——。

「じゃあ、私も自分の思うとおりに動きます」

「か、香奈？」

「美鈴達はとうする？」

「え？」

「この人達は最後の最後では椿を切り捨てるかもしれないと言う。ならば、最後の最後で椿を守るかどうかは私達次第」

「香奈、それって」

美鈴は焦った。

それについては、最初に椿に話を聞いた時に散々美鈴と梓でやり合った事だ。

所詮中学生の自分達が殺人犯と正面切って戦える筈も太刀打ち出来る筈もないと。

しかも今、その殺人犯が化け物だと分かったばかりである。

それこそ何の力も持たない、ましてや章子達のような能力者でなければ戦えない相手にただの無力な中学生が出来る事なんて何もない。

「逃げるぐらいかな」

「逃げるぐらいって、逃げ切れる保証が何処にあるのよ！」

「うん、問題はそこなんだよね」

犯人の目的は椿。

だから、章子達に見向きもせずに椿に向かってくるかもしれない。

「だから、どう逃げたら良いか考えようよ」

「考えるって……何か案でもあるの？」

「うーん、ない事もないけど」

「え？」

「ほら、よく恐い話で神社とかお寺に逃げ込んだら無事だってあるでしょう？」

「あれはお話でしょう！」

そう叫べば、章子の笑い声が聞こえた。

「章子さん？」

「そうとは言えませんよ。場所によっては悪霊などの魔が入れない場所はあるもの」

「ほ、本当ですか？」

「ええ。椿さんの事を考えるなら最初からそこに居て貰いたいけど、秋月 響子を捕まえるには接触して貰わなければならないから……そうね、すぐに逃げ込める場所の近くで接触させればいいかも知れない」

「でも、逃げ込める場所って」

「問題はそれよ。人なるざる存在が関わっていないければ何処の神社や寺でもいいけれど、そうでないなら場所は限られる」

章子はファイルから一枚の地図を取り出す。

それはこの近辺の地図だ。

と、そこに香奈はあるものを見つけた。

「神有家」

「え？」

それは、香奈の母の実家だ。

椿の家からは少し遠いが、章子達が言っていた。

神有家は『IPSM』の重鎮だと。

という事は、もしかしたら悪霊に対する対抗策とか持っていないだろうか。

「……いや、でもなあ」

母の実家ではあるが、香奈はあの家が苦手だった。

出来れば、あんまり近付きたくない。

それにあそこは神社でもなければ寺でもなかった。

「神有家なら良いかもね」

「は？」

「あそこの家のある場所は一種の聖域だから、逃げ込むには良い場所なのよ」

「……そう、なんですか？」

章子が頷く。

「うん。でも、当主に許可を貰わなければならないけど……」

ただ正式な許可を貰うには時間がかかるらしい。

確かに悪霊に狙われている存在など普通なら中に入れたくないだろう。

そういえば明日は親族会議だ。

その時にでも頼めないだろうか。

「私、頼んでみます」

「香奈」

「か、かか、香奈ちゃん」

「美鈴、理佳」

香奈は二人を見た。

「それで、許可が取れたらどうする？」

「え？」

「逃げ込める安全な場所が確保されたら……」

「……」

「……」

「確かに、私達はただの中学生で、戦うのとかは無理。でも、椿の手を引っぱって逃げるぐらいは出来るかな」

「失敗したらどうするの」

「うゝん……とりあえず、失敗しない事だけ考える。あと、椿と逃げる時は大勢居たら逃げにくいから、側に入れるのは一人か二人ぐらい。後は神有家の方に待機して貰う形かな」

安全な場所から援護射撃でもしてもらうか。

つてか、悪霊に利く援護射撃ってどんなものがあるたのだろう。

御札か？

お守りか？

と、美鈴の強い視線に香奈は考えを打ち切った。

睨み付ける様な、挑むような強い視線。

「……本気なの？」

「うん、本気。それにもう今更だよ」

もともと警察に椿の保護を頼みたかった。

でも、相手が化け物となればそれ専門の『IPSM』という組織

に頼むしかない。

けれど最後の最後で化け物を倒す方を優先するとなれば、椿は自分で自分の身を守るしかない。

所詮は自分の身は守れるのは自分しか居ないのだ。

だがそれを主張するなら、最初から自分は関わらないでおくべきだっただろう。

中途半端に関わり、ひっかきまわして「はい、さようなら」が一番最悪だ。

そしてそれを香奈は最初からする気などなかった。

椿に安全な保護を——その為に、図書館で秋月 響子の写真まで手に入れたのだ。

「その顔は、もう何を言っても駄目ね」

「うん。でも、美鈴と理佳、あと梓には自分で決めてほしいから」

香奈は椿の側に居る。

でも、それは強制でなく自分の意思。

美鈴達だって別に嫌なら嫌で良いのだ。

ただ、全てを了承して手伝う場合は色々と相談しなければならないから、聞くのだ。

今、どうするかと。

きつと綿密な計画を立てなければ、逃げ切れない。

だから、今、決めてほしい。

「……分かった」

「美鈴」

「私も椿が死ぬのは嫌だからね。戦うのは無理でも、考えを絞り出せば逃げ切る事は出来るでしょう。それに——ずっと逃げるわけでもないしね」

「そうなの？」

首を傾げた香奈に美鈴は押し黙った。

「……今回の事件の被害の日はいつか言って」

「毎週火曜日の午前二時～四時の間」

「そうよね。で、それ以外は被害が起きてない。だから、つまりその時間を逃げ切れば」

「助かる——うん、すっかり忘れてた！」

「香奈ああっ！」

ガツと胸倉を掴まれて振り回される。

「み、みみ美鈴ちゃん、落ち着いて！」

「そんな基本的な事を忘れて逃げ切れると思ってるの?！」

「思わない。だから美鈴頑張っ」

「おおいつ！」

「美鈴、人は上手く使うものよ」

「違うでしょうがああっ」

そんな美鈴の怒声は香奈の鼓膜を攻撃しただけではすまなかった。

「う……ん……煩いわね」

「……あ、あれ?　ここ、客間?」

「あ」

「梓と椿が起きちゃったね」

「誰のせいだ！」

怒鳴ったのは自分ではない。

が、それまでの五割増しで香奈は美鈴によって胸倉を掴まれ振り回されたのだった。

第三十六話 責任と義務（前書き）

警告）後半ホラーっぽいです

第三十六話 責任と義務

午後八時を回った頃、ようやくやるべき事を終えた香奈達は、それぞれ帰宅する事にした。

まだ本調子ではない梓は、祖父母が迎えに来るまで理佳と共に椿の家で待たせて貰い、香奈と美鈴の二人だけで帰宅する。

それに椿の母が起きるまでまだ時間がかかるから、椿にとっても友人がいる方が心強いだろう。

章子達も居るとはいえ、彼女達にはやるべき事があるし、まだ椿も警戒している節があるから理佳達の存在は心強いに違いない。

そうしていざ玄関へと向かおうとした時、その声はかった。
「送ってやる」

普通男からそう言われたら、多かれ少なかれ胸がときめくだろう。しかし、ここまで胸がときめかないのはどうしてだ。

それはたぶん、彼がもの凄い仏頂面をしているからに違いない。

『ISPM』の能力者——重樹の顔には、しっかり【不機嫌】の文字が張付いていた。

美形な分、そういう顔をされると周囲に与える影響は大きい。

そんな顔もまた麗しくて良いという者達も居るだろうが、香奈はそんなDMにはなれない。

「重樹、またそんな顔して！」

パソコンと章子が重樹の後頭部をスリッパで殴る。

「女の子には優しくでしょうっ！ そんなんだから死んだ友人とおもダチって言われるのよ」

「ちげえよ！ あいつとは正真正銘清い仲だっ」

その言い方もどうかと思う。

「タダでさえ、『ISPM』所属の腐女子達の間では、貴方と死んだ友人はそういう仲だっと思われているのよ？ 同人誌まで出るくらい」

何やってるんだ、『ISPM』。

命をかけて戦ってるんじゃないのか、『ISPM』。

とりあえず、香奈の中では関わり合いになりたくない団体にランク上げされたが、美鈴は違った。

「なんだか素敵な団体なんですね」

「でしょう？ 人手不足だから、今なら簡単な審査で入れるわ。どう？」

「章子！ ってか、そこのお前も馬鹿な事を言うな！」

重樹は顔を真つ赤にして美鈴に怒鳴った。

「因みに重樹さんは受け？ それとも攻め？ 私の考えだと、ツンデレ受けか強気な小犬受けな気がしますけど。死んだ友人は穏やかで包容力のある大人な攻めで」

「凄いわ美鈴さん！ まさにその通りよ！」

「違うわ！ 勝手に俺を受けにするな！」

「受けでも攻めでもいいから、さっさと帰ろうよ美鈴」

何気に酷い事を言いながら香奈が時計を見ると、美鈴から反論が来る。

「え〜？ とりあえず重樹さんが受けか攻めかだけ判明してからでも」

「どうやら、美鈴はそういう話が好きなようだった。」

「章子！ 俺やだよこいつら送るの！」

「しかも一纏めにされてしまった。」

「重樹、協力者の安全を確保するのも私達組織の役目よ。それに、既に彼女達は立派に協力者の仕事をしてくれたわ」

「ちらりと章子が後ろに視線を向ければ、心配そうに香奈達を見つめる椿の姿があった。」

「う、うう……わ、わかったよ！ ほらっ！ さっさと行くぞ！」

重樹が香奈と美鈴の腕を掴んで玄関の扉を開けると、後ろから椿の声がかかる。

「香奈、美鈴、今日はありがとう」

「うん、またね」

そうして三人で家を出た。

ひんやりとした夜の空気が三人を包む。

時間が時間だから行き交う通行人も殆ど居らず、車が時折行き交うぐらいで後は静寂な夜の空気を震わす虫の輪唱が響いていた。

中学生になれば、クラブ活動等でこのぐらいの時間に帰宅する事もあるかもしれない。

しかし、山中中学はその学校の立地条件からクラブ活動はなく帰宅はかなり早い。

有志達でクラブ活動のまねことはするが、それも短時間の事でしかも駅まで通学バスで戻ってきた後の事である。

香奈に至っては帰宅部で習い事もしていないし、特にこの時間に彷徨く様な用事もない。

だから、久しぶりに歩く夜道に何処か気分が高揚していた。

「で、最初はどっちの家に行けばいいんだ？」

重樹が隣を歩く香奈達に問いかける。

「美鈴の家をお願いします。私の家はその先なんで」

簡単に場所を告げる。

「了解」

重樹は頷くと、再び視線を前に戻した。

しばらくのんびりと三人で歩いた。

「でもさ、香奈。良かったよね——梓と椿も納得してくれて」

美鈴が夜空を見上げながらポツリと呟いた。

「そうだね」

梓と椿が目覚めた後、早速二人に自分達が聞いた事を伝えた。もちろんすぐには信じなかった二人だが、自分達のように章子の能力を見せられれば納得しないわけにもいかず、最後には能力者や能力、組織の事について理解してくれた。

また、今回の事件がその『ASP』である事を説明する中で、椿自身に記憶の中の犯人と香奈の持って来た写真を比べてもらえば、

やはり間違いなくあの『秋月 響子』と今回の犯人が同一人物だろうという確証を得た。

だが、犯人が化け物だと確定された事により、椿の怯えは更に酷くなったのも言うまでも無い。

怯えてパニックになりかけた椿を説得するのは骨が折れたが、それでも最終的には納得してくれた。

まあ、それには章子や重樹も加わり懸命に説得してくれた事もあるだろうが、一番は化け物専門に相手をする人達が助けてくれるという心強さからだろう。

化け物に殺されるかもしれない——そう怯えていた所に、その化け物をどうにかしてくれる相手が出て来たのだ。

しかも、不思議な力を持っている。

椿の安心した様な笑みに、香奈は自分が思っていたよりもずっと椿が不安だったのだと気づかされた。

梓の方も、椿の様子と章子達の真摯な対応、そして香奈達の説得に言いたい事はあるだろうが、最終的には理解し納得してくれたのだった。

ただそれでも、章子達が最終的には化け物達を倒す方を選択し、そうなると椿を守りきれない、だからその時には自分達がどうにかするしかないと二人に伝えたと、当然のように二人は戸惑ったが。

特に、命のかかっている椿は泣きそうになった。

だが、それでも香奈や美鈴が予想していたようなパニックは起こさず、最後には受け入れてくれた。

何となく腑に落ちなかったので納得した理由を聞いてみれば、答えは実に簡単だった。

『か、香奈達の事、信じてるから』

『椿を守れても、化け物が生きている限りは安全にならない。それなら化け物を倒してもらった方がいいわ』

椿は香奈達を信頼しているという。

それは、自分の為に駆けずり回ってくれる事を知っているからだ。

特に梓達は自分がどれほどパニックになろうとも見捨てずに毎日通ってくれたし、香奈達も自分を助けようと休日も犯人に繋がるものを捜してくれた。

だから、納得したと。

梓の方も、化け物がいる限り椿が無事でいられる確率は低いと考え、それならば、自分達が梓を連れて逃げるから、その分章子達には何が何でも化け物を倒して欲しいという思いで納得したという。

まあ――逃げるとしても、永遠ではなく時間制限があるという事も、二人が納得してくれた大きな理由の一つだったらしい。

但し――今の所、逃げ切れた相手が居たわけではないから、確たる証拠はないのが難点だが。

それでも、このままむざむざ次の被害者になってやる義理はどこにもない。

「明日はよろしくね、私は行けないけど」

香奈が言うと美鈴がポンツと自分の胸を叩いた。

「任せて置いて。だから香奈は神有家の方をよろしく」

その件についても梓達には報せていた。

だから、明日は香奈抜きで美鈴達が椿の家に集まる事になった。た。

「でも――どうせなら『IPSM』の方ももつと人手を出してくれればいいのに。そうしたら椿を守る分の余裕だってあったのにね」

美鈴の呟きに、重樹がむすつとする。

「あのな、『IPSM』に所属していても、仕事を貰える能力者はそんなに多くないんだぞ？　なのに事件ばかり多く起きてて、年中人手不足だ。しかも今回の件で貴重な人材を失って更に人手不足が進んでる。増やせるわけないだろ」

「そうなんだ」

「つたく、人事だと思って」

重樹が忌々しげに呟く。

「因みに、重樹さんの能力って何？」

「は？」

突然の質問にキョトンとした重樹だが、すぐに慌てた様に周囲を見る。

「どうしたの？」

「馬鹿！ 能力者の事は秘密だって言っただろ！」

『IPSM』や能力者は古くから存在しているが、決して表舞台には出ず隠された存在である。

はつきりいつてこんな外で話していいものではない。

「でも、今は人はいないし」

確かに周囲に人気はなく、車もまばらだ。

「それでもだ！」

「けど気になるし」

章子は雷。

なら、重樹は何だろうか。

ずっとそれが気になっていた。

いわゆる、知的好奇心である。

「じゃあこそつと教えて下さい」

「嫌だよ」

だが、美鈴は諦めなかった。

「でも、私達協力者ですよ？ なら、知ってた方が良くないですか？」

「はあ？ どういう根拠だよ」

重樹が胡散臭げに美鈴を見た瞬間、小悪魔な笑みとぶつかる。

「だって、協力する人達がどういう人かを知るのって大事じゃないですか」

「……」

「それに、私達も協力するって事は命を預けるって事でもあるし」

「そこまでいくかつ」

「行きますよ。下手したら死にますし」

そつという相手なのだ、今回の相手は。

「なら最初から関わらなければいい」

「むう、冷たいですね。強気小犬受け＋ツンデレか」

重樹がヒクヒクと頬をひくつかせるのを香奈は黙って見ていた。そしてあえて自分は関わらない。

面倒事に首を突っ込みたくないから。

既に椿の事で首を突っ込んでいる身なのを忘れて、しっかりと安全距離を保つ香奈だった。

「どうしても駄目ですか？」

「なんでそんなに知りたいんだ」

「気になるからです。だって今までゲームの中だけでの不思議な力が実際にあるって分かったんですよ？ 気にならない方がおかしいです」

ようはそこに尽きる。

すると、重樹は大きく溜息をつき、なにやら呟きだした。

「……だよ」

「は？」

首を傾げた美鈴に重樹は不機嫌な口調で告げた。

「霊者だ」

「何、それ」

「霊視や除霊、退魔の力を扱う能力者で、世間一般の霊能力者、霊媒者を指す」

「へー、あ、だから今回」

香奈の言葉に重樹は頷いた。

「そうだ。今回の任務に最適なタイプとして連れてきてくれた」

そこで香奈が口を挟んでくる。

「でも、記憶を見るがうんたらかんたらって」

「ああ。霊視を使ったからだ」

「霊視？」

「……サイコメトリーの事だよ。それ以外の能力としては、さっきいった除霊、退魔、結界張りとかも出来る」

「何でも屋みたい」

香奈の感想に重樹がうんと首を傾げる。

「どうかな？ これでも結構出来ない事はあるぞ。それに――俺の力はかなり不安定だから、道具を媒介にしないと出来ないしな」

と、そこで重樹がこっちの道の方が近いといって裏道に入る。

すると、民家もまばらとなり車の姿も全くなかった。

ただ、小さな道路を挟む道の両脇の香奈の背丈ほどもある茂みが、時折風に吹かれて音を立てる。

「そういえば章子さんは雷だけど、火とか水とかも使える人はいるんですか？」

「だからお前、そういう事はあんまり――」

しかし、あまりにも美鈴が目を輝かせて聞く姿に、重樹は口を閉ざす。

最初に見た時や言動を聞けば、あんまりオカルトと超常現象に興味を持っていない相手だと思った。

だが、一度認めてしまえばとことん知りたくなるタイプらしい。

しばし考えた後、大きく溜息をついた。

「……言つとくが、他言はするなよ」

「うん」

「はい」

何時の間にか香奈も返事をしており、重樹はガツクリと頂垂れた。「炎や水を操れる能力者はいる。章子もそうだけど、そういうのは元素使いと呼ばれる。俺が霊者と呼ばれるように。他にも幾つか能力の種類で呼び方があるんだ」

香奈達の目が更に輝く。

「詳しく説明しろとか止めろよ。時間がかかるから」

「じゃあまた今度教えて下さい」

美鈴の言葉に重樹がガクリと肩を落とした。

「そこまでする義理が何処にある」

「いや、気になるし」

「あのなあ」

いや、もう何も言うまい——重樹は諦めた。

「でも——能力かあ」

香奈は美鈴と重樹のやりとりを余所に、章子が発生させた雷を思いつ出した。

「まるでゲームの世界に飛び込んだみたい」

「確かに」

美鈴も頷く。

本当にゲームのような話だった。

「信じられないか？」

重樹の呟きに、香奈は首を横に振った。

「うっん。信じるだけのものを見せてもらった。でも——ちょっとだけ思ったの」

「……何を？」

「そついうの、私も使えないのかなって」

こんな自分でも、魔法とかに憧れた時期はあった。

学校でスプーン曲げが流行った事もあった。

でも、所詮はお話で、そついうものは現実には有り得ないと知った。

だから香奈は幽霊ですら信じなくなった。

「……欲しいのか？　こついう力が」

スツと視線を厳しくする重樹に香奈はうんと唸る。

「欲しいっていつか……まあ、憧れはあるけど——」

物を浮かせたり、空を飛んだり。

超能力とか魔法に憧れた。

でも——。

「やっぱり、実際には欲しくないな」

「……」

「そついう力ってさ、恐いもの」

「え？」

「章子さんが言った魔女狩りとかではないけど、何事にも良いことと悪いことがあるように、その力だって良いことばかりじゃないんでしょ？ 章子さんが見せてくれたあの雷だって、あれだけなら綺麗だけど、もしあれが何かにあたったら絶対に大変な事になる」

重樹がギョツとした様に見開く。

この、少女は。

「ゲームとかなら、魔法を放って綺麗だとか楽しいで済むけど、実際には水とか火とかむやみやたら起こしたら大変そうだし……それに、超能力とかでも物が吹っ飛んだり、人の記憶を読んだり……使い方を間違えたら、本当にまずそうなもの」

香奈は夜空を見上げると、ゆっくりと手を伸ばした。

こうすればすぐに掴めそうでも、決して掴めない星々。

自分にとつての能力とはそういうものなのかもしれない。

「それを考えたら、能力者の人達って本当に大変だよな。ってか、普通の人にないような力を持つ分、きっと普通の人よりももっと大変なんだと思う」

「……」

「だから、私はいけない。あつても、使いこなせなかつたら意味ないもの。ほら、車とかだって便利だけど、あれは使い方を間違えれば凶器で、実はドライバーって凶器を持ってウロチヨロしているようなものだって聞いた事あるし」

香奈が重樹に笑いかける。

「大きな物を得れば、それだけ義務と責任を負うってお母さんも言ってたしね。普通の人でもそんななもの。能力者みたいな人達はおもつともっと大きいんでしょう？ 私には無理だと思う。なら、最初から無い方が良い」

香奈の言葉に、重樹ばかりか美鈴も黙った。

ざあああと風が吹き、茂みが激しく揺れる。

その時、道を照らしていた街灯がフツと消えた。

「え？」

周囲が一気に暗闇に包まれる。

星明かり以外は民家も殆どなく、灯りになれた目が対応しきれず、ぐんにやりと視界が揺れた気がした。

その時、香奈はグイッと強く手を引っぱられた。

「重樹さん？」

「……こつちにこい」

「え？」

影になっでいて顔がよく見えない。

だが、硬い重樹の口調に、香奈は引っぱられるままに歩き出した。その時、近くでガサガサと茂みが揺れた。

「きゃああああっ！」

横に居た美鈴が消えた――。

と思えば、グイッと足を掴まれた。

地面に倒れた美鈴の指が香奈の足首に食い込む。

「み、美鈴?!」

名を呼び、少し暗闇になれた目で美鈴の状態を確かめた途端、驚いた。

美鈴の膝から下の足が、茂みの中に入り込んでいるのだ。

「美鈴、何――」

その時、美鈴の手が香奈の足から離れた。

美鈴の体が一気に茂みの中へと引きずり込まれていくのを見た瞬間、香奈は美鈴の手を掴んだ。

激しい抵抗が来たが、何とか美鈴の全身が茂みに入り込むのを防いだ。

「そのまま掴んでおけっ！」

「え？」

その次の瞬間、美鈴の絶叫が響いた。

第三十七話 危機

「美鈴?!」

「いや、いや、いやああ! 首、首がああつ」

美鈴の叫びに香奈は周囲を見渡す。

だが、おかしい。

何も無い。

しかし自分達の前に立つ重樹の緊張、そして美鈴の恐怖が痛いほど伝わる。

何?

何が起きているの?

香奈は美鈴のしているものを理解出来なかった。

一方、美鈴は己のしているものが信じられなかった。

振り返れば、自分の足を掴む――黒く変色した二本の腕。

香奈の方を向けば、道路を挟んだ向こうの茂みから自分達を見つめる者達が居る。

「な、なんなのよこれえ」

美鈴の泣き声が響く中、重樹は囲まれた事を悟り焦っていた。

微かに自分達をつける嫌な気配の正体を探る為に、此方に来た。

だが、その気配は唐突に消えたかと思えば、突然こいつらが現れた。

さっきの気配はこれかとも思ったが、すぐに経験からなる勘が違うと叫んでいる。

道路挟む両側の茂みにせわしく視線を彷徨わせて睨み付ける。

ぼうぼうに茂った両側の茂みから、幾つもの人間の頭が見えた。

だが、ただの人間ではない。

完全に死相の現れたそれは、顔のパーツが所々欠損し、血に塗れていた。

それらは重樹達に向けてケタケタと笑いながら、茂みを此方に向

かつて移動してくる。

ザ

ザザ

ザザザ

ザザ ザ ザザ

ザザ ザザ ザザ

ザザ ザザ ザザ

ザザ ザザ ザザ

その時、また背後で美鈴の悲鳴が響き、重樹は我に返った。
この状況をどうにか出来るのは自分しかない。

自分は『ASP』のプロ。

そのプロ意識が重樹に失われた冷静さを取り戻させる。

「くそっ！ 急急如律令っ」

懷から取り出した呪符が光り出し、素早く投げつけた。

「ちっ！」

数匹が断末魔をあげて霧散する。

しかし、倒せたのはごく一部。

取り逃がした者達は再び茂みに姿を消す。

その動き、その素早さ。

シックスの自分の攻撃を避けた事実、重樹は愕然とした。

つまり、今自分が相手にしているのは、少なくともレベル5～6

かそれ以上の相手だという事だ。

重樹は『IPSM』基準の撃退可能魔性レベルを思いだしながら素早く判断する。

後ろから悲鳴が聞こえてきた。

「美鈴、美鈴！」

香奈達の事を思いだし、ハッと後ろを振り向いた時だ。

一匹が香奈に向かって飛びかかっているのが見えた。

だが、香奈はそれに気づかないまま、美鈴を茂みから引きずりだそうと奮闘している。

「おいっ！ 逃げろ！」

そう叫んだ時、香奈がようやくキョトンとした顔で重樹を振り返った。

「はい？」

と、それが香奈に覆い被さる――。

重樹はそこで有り得ないものを見た。

香奈に覆い被さるその瞬間。

それは何かに弾き飛ばされたように、香奈から弾かれ茂みに突っ込んでいった。

まるで、全力で何かに殴り飛ばされたように――それこそ、漫画そのものに直線的なフツ飛び方に思わず目を丸くする。

ドゴオオンと、何か硬いものにぶつかる音が夜の闇に響いた。

「……は？」

「よいしょ、よいしょ――っ！」

香奈は渾身の力を込め、美鈴を茂みから引きずり出していく。

そこで重樹は美鈴の体を掴んでいた二本の腕を見た。

それが獲物を追って伸びる。

「逃げろ！」

「は？」

香奈は重樹の叫びが理解出来なかった。

それどころか、美鈴の足から靴が脱げている事に気づき、茂みの

中に靴を取りに行く。

地面を這うように伸びてきた二本の腕を、グシヤリと力強く踏みつけて。

腕が絶叫する様に痛みに暴れるが、それを行った当の本人は全く気づかず靴を拾い重樹と美鈴の元に戻ってきた。

「はい美鈴、靴」

「あ……ああ、あ」

「……お前……一体、何な、んだよ」

茫然とする重樹と美鈴の表情に香奈は首を傾げた。

一体どうしたと言うのだらう。

一人何も理解出来ない香奈は周囲を見渡すが、何の変哲もない茂みが広がっているだけだった。

変わっている事といえば、街灯の明かりが点かない事だけ。

「どうしたの？」

「どうしたって——」

ザザ ザ ザザ

ザザ ザザ ザザ

ザザ ザザ ザザ

ザザ ザザ ザザ

「っ！」

再び茂みの中を移動する音が聞こえ、重樹は香奈と美鈴の腕を掴んだ。

数が多すぎる。

しかも自分一人ではなく、お荷物が二人も居る。

ここは立ち向かうよりも逃げるを選択した方が良い。

「ちよっ！ どうし」

走り出した重樹に引き摺られるようにして香奈と美鈴が走らされる。

とりあえず人気のある場所に向かえば――。

幾ら妙な気配を探る為とはいえ、人気の無い場所に來たのが完全に仇になった。

だが、重樹にもようやく無効の意図が理解出來た。

この場所には特にこれといった怪談はない事からも、わざと気配を悟らせる事で自分を此処に誘導したのだ。

畏にはまった自分への激しい怒りと嫌悪に舌打ちする。

自分一人ならまだ良い。

しかし今は香奈達という民間人が居る。

香奈は神有家とはいえ能力の類は使えない今、重樹が一人で何とかするしかない。

「ちくしょう！　こんなとこでくたばってたまるかっ！」

重樹にはやるべき事がある。

友人の仇を討つという、命をかけてやるべき事が。

こんな所でくたばる気は毛頭なかった。

しかしそんな重樹の決意とは裏腹に、空間が歪む気配がした。

「な？！」

急激に、道が閉鎖されていく感覚に血の気が引いていく。

「う、嘘だろ！」

道が閉じられていく。

すなわち、この場所を現実世界から切り離されようとしていた。

このタイミングで。

絶対に自然に起きた事ではないが、今はそんな事は言ってられない。

完全に道が閉じられる前にこの道を抜けなければ、重樹達は二度と現実世界に戻れなくなる。

「くっ！」

今居る場所は一本道。

横にそれる道はなく、また両側の茂みにはあの生首共がいる。
道の出口は後百メートルほど先か。

だが、道の様子がどんどん変貌していく。

「な、何よこれ！」

「っ——」

叫ぶ美鈴に重樹は舌打ちした。

能力者ではない美鈴にも見えるという事は、もうかなり進んでしまっている。

この空間の異界化が。

このままでは完全に閉じ込められる。

出口に行くまで間に合わない。

一体何が起きたのだ。

まさかこの生首、いや——あの気配か？！

突然の事に頭が回らないが、それでも重樹は走った。

間に合うか分からないが、止まれば確実に死ぬ。

この異界に巻き込まれ、二度と現実世界には戻れない。

だが、重樹達の努力を無視するようにそれらが立ち塞がった。

「うわっ！」

突然グイッと後ろから引っぱられて地面に倒れ込んだ重樹に、美

鈴の悲鳴が響いた。

「きゃあああっ！」

「っ——」

茂みから伸びる手が、重樹の足を掴んでいる。

どうやら足止めをしようとしているようだ。

「くそ！ 離せ！」

呪符を取り出す。

だが、その間にも閉じられていく空間に焦り、重樹は上手く力を発動出来なかった。

「くそっ！」

どうすればいい——。

既に戻る事は出来ない。

空間は後ろの方から閉じられていつているから。だから、逃げるにはひたすら先に進むしか無い。そう——前の出口だけでも開いていれば——。

重樹はハツとして懐からあるものを取り出した。

「ん？ それ、水晶ですか？」

悲鳴を上げる美鈴を落ち着かせていた香奈が目敏く気づく。

「ああ。これがあれば何とかうわっ！」

グイッと足を引っぱられ重樹が地面を引き摺られる。

「重樹さんっ」

「くそっ！」

自分は無理だ。

重樹は素早く周囲を見渡し、香奈に視線を止めた。

「おい、これ持って走れ！」

「はい？」

「いいから！ この道の出口にこの水晶を置け！」

「え、置く？」

「死にたくなかったらとつととやれっ！」

重樹の切羽詰まった叫びに香奈は弾かれた様に走り出した。

「い、一体何なの？！」

走れ、走れ、走れ。

後ろから怒鳴られ追い立てられるように香奈は走り続ける。

残り八十メートル。

残り六十メートル。

重樹は香奈の気配が遠のくのを感じながら、美鈴を抱き寄せ術を放つ。

だが、相手は思いの外しぶとく、また地面を引き摺られた。

「くそっ！」

美鈴はもう悲鳴すら上げられないのか、ガタガタと震えるだけだった。

「離せ！」

重樹は呪符を取り出す。

「急急如律令っ！」

発動の言葉と共に、青白いドーム状の結界が重樹達を中心に展開する。

重樹の足にしがみついていた腕が弾かれる。

「これで、なんとか」

「ひいっ！」

「おいっ！」

腕の中に居た美鈴が胸にしがみついてくる。

その途端、全身の毛穴が極限まで開き、どっと冷や汗が流れ出すのを重樹は感じた。

上部から、硬い塊が当たる音が聞こえて来た。

ゴン

「何の音——」

それは、手だった。

一本だけではない、無数の握り拳。

美鈴や重樹の足を掴んでいたのと同じ、黒く変色したそれは、何度も何度も振り下ろし、窓を叩いた。

ゴン ゴン ゴン

ゴン ゴン ゴン

ゴン ゴン ゴン

バン バン バン バンバンバンバンっ！！

ダアアンと結界が揺れる。

重樹の瞳に、結界に群がるそれらが飛び込んで来た。

沢山の手。

と入れ替わりに張付いていく。

顔。

顔。

顔。

バンッ！！

「くそっ！」

重樹は美鈴を抱き込み、その光景を見せないようにした。
激しく揺れる結界。

奴等が何をしようとしているのかなんて、考えなくても分かった。
この結界が壊れれば、終わりだ。

口から大量の唾液を垂らすそれは、自分達を完全に獲物とみている。
る。

取り憑いて殺すよりも、食い殺される方が先だろう。

重樹は何度目かの後悔を覚えた。

この道を選んだことを——いや、自分の考え無しの行動を。

民間人を送り届けるという事がなかったとしても、もっと慎重に動けば良かった。

なのに、気配だけに気を取られ、その気配を最優先して、こんな助けも呼べない場所に入り込んだのは自分の責任だ。

自分は取り返しのつかない事をした。

民間人の安全より、自分の都合をとったのだ。

友人を殺した相手を許せない。

だから常にアンテナを張り巡らせ、どんな情報も貪欲に嗅ぎ取った。

だが、それは一人の時にやるべきだったのだ。

ヘマを踏むところではない。

言われた仕事さえ満足にこなせない、最低の能力者。

勝手に突っ走って自滅するだけではない。

自分が死ぬならまだしも、民間人を死なせたとしたら……。

『重樹は能力の量は十分よ。でもまだ力の発動は不安定で、感情に引き摺られる所がある。それに迂闊な事をしてヘマをする事も多いし、暫くはサポート役が必要でしょう』

章子の言葉が蘇る。

だが、それは章子だけでなく組織の総意である事を重樹は知っていた。

こんなんだから自分は未熟者と言われるのだ。

いや、未熟どころの話ではない。

普通有能力者でなければまず有り得ない事を実行する、状況判断力の低さ。

本当は香奈に水晶を託す事だっではならないというのに。

能力者どころか、人としてすら失格だ。

その時、結界が再度激しく揺れる。

「いやあっ」

「しっかり気を持て！ でないと奴等は簡単に入り込むっ」

それは自分の腕の中の少女にとっては難しい事だった。

普通ならとくに気が狂っていてもおかしくない状況である。

以前の仕事の民間人のように、結界から飛び出さない分だけでも

マシである。

そうそう、あの時の民間人と来たら――。

重樹は蘇る嫌悪感を払う様に頭を激しく振った。

そんな中、ニタリと、結界に張付いていた顔が笑ったのを見た。

『近付かないで化け物！！』

眼前に現れた女が叫ぶ。

「っ！」

嫌悪の眼差しを向け、重樹を睨み付ける。

『あんたの方がよっぽど化け物じゃない！』

ああそうだ。

そう言つて、この女は守ろうとした重樹を突き飛ばして逃げた。

安全だと言つた結界から。

入れずとも、自ら出られる結界から。

そして女は――。

『あんたのせいよ！ あんたのせいでこの子は死んだのよ！』

自ら結界を出て死んだ女。

その母親が娘を抱き、重樹を責めた。

娘の父親は何も言わなかったが、まるで射殺す様な視線を向け睨

み付けてきた。

お前のせいだ。

お前のせいで死んだ。

触るな。

触るな！！

最初から能力者を厭い、こちらの指示を無視し勝手に窮地に陥つたくせに。

安全な場所から自分で飛び出し死んだくせに。

なんで。

なんで。

『あんたは化け物なのよ』

重樹の前に赤い服を着た女が立っていた。

息を呑み、眼を見開き引きつった喉で重樹は悲鳴をあげる。
ニタリと、女が笑う。

赤い服。

赤い服。

違う、あれは。

『どうしてあんたみたいな化け物が産まれたのよおお！』

あんたさえ産まれなければ！！

自分を殴り、蹴り、徹底的に痛めつけた――。

伸びてきた腕がグツと重樹の首を掴んだ。

グイッと首に圧迫感を感じた途端、ぐにやりと視界が歪む。

見開いた目が、自分の首を絞める二本の黒い腕を捕らえた。

と、眼前にそれが迫る。

しまった――。

心の隙を突かれ、引きずり出された事で、結界に隙が出来たのだ。

だが、修復する暇もなく、我に返るとほぼ同時に結界の破壊音が

聞こえる。

結界に張付いていた者達が飛びかかってくる。

食われる――。

その時、重樹は腕の中の美鈴に気づいた。

せめて、せめてこいつだけでも。

それが巻き込んでしまったこいつにしてやれる、最後の事だろう。

願わくば、閉鎖される前に香奈が出口を確保してくれる事を願う。

だからそれまで、その間だけでも時間を稼ぐ。

重樹は自分の身を盾にする事を決めた。

そんな事をしたって誰も褒めてなんてくれない。

それどころか、どうしてこんな目に遭わせたと罵るだろう。

美鈴の家族も同じ筈だ。

娘を返せ、娘を返せ。

お前が死ねば良かったと――。

化け物。

それが自分の。

体を締め付けられる圧迫感に重樹はハツとした。

「来ないでええっ！」

美鈴の叫び。

それ以上に驚いたのは、重樹が美鈴の後ろに居る事だ。

すなわち、守られているという格好である。

なんだこれ。

一体どうなっている。

だが、ギョツと守るように抱き締められた状態の重樹は、迫るそれらに気づき美鈴を抱え込んだ。

第三十八話 絶望の調べ（前書き）

警告）ホラー要素強いです。嫌いな方はUターンお願いします。

第三十八話 絶望の調べ

走る、走る、走る。

砂利を踏み締め、蹴り上げ。

香奈がひたすら求めるのは、この道の出口。

「い、一体、何、が、起きて、るの？」

息が苦しい。

酸素が足りない。

走るのが得意ではない体がヒィヒィと悲鳴をあげている。

風を切り、揺れる視界で出口を見つめる。

喉が痛い。

走るのを止めたい。

歩きたい。

止まりたい。

けれど、そう思う度に思い出すのは重樹の叫びだった。

間に合わなくなる――。

その言葉に背を押されるようにして走り続ける夜の道。

風でザザアアと後方の茂みが揺れる音が聞こえる。

最初は遙か遠くで。

けれど、次第にその揺れは、少しずつ自分に追いついて来ている
ようだった。

道の両側に背高く茂る茂み。

虫の音は聞こえず、街灯の明かりも消えたまま。

走れ、走れ、走れ。

自分の中の何かが叫び続ける。

「走れ、走れ、走れ」

引きつる喉で自分を鼓舞し、ひたすら闇の中を駆け抜ける。

走らなければ。

何処までも。

あの出口に向かつて。

ふと、握ったままの右手が熱さを感じる。

そこに握られているのは、重樹から渡された水晶だ。

走れ、走れ、走れ。

間に合わなくなる。

追い抜かれた時が、最後。

永遠の虜囚として、閉じられた空間を彷徨い絶望と共に腐り果てる。

それでも死ねない苦しみ。

生き続けなければならぬ、苦痛。

シオ。

「え？」

微かに聞こえてきた声に、香奈は思わず足を止めかけた。

しを、しを、しを。

少しずつ迫りくる声。

その声は次第に数を増す。

しを、しを――。

出口まで後十メートル。

すぐ後ろまで迫っている――茂みの揺れ。

「ま、けて、たまるかあっ」

何かが居る。

何かが自分を追い抜こうとしている。

けれど追い抜かせたりはしない。

向かい風が吹く。

地面がぐにやりと歪む。

その全てが香奈の行く手を阻もうとする中で、ただひたすら伸ばす手。

そこに握られた水晶を――。

凄まじい突風が後ろから吹く。

ザザザと両側の茂みの揺れが駆け抜ける。

香奈を追い抜いて。

「っ——！！」

視界の先に見える茂みの揺れ。

ああ、負けた。

負けてしまったのだ。

向こうは勝者、こちらは敗者。

そして敗者には――。

「はい、ここまで」

ギョツとする間もなく、茂みの揺れが弾かれるように逆戻りしていく。

その光景に啞然としながら、聞こえて来た声に香奈は暫し混乱した。

見えるのは何処までも続く闇。

視界がぐにやりと歪む。

そのまま、後方に引っぱられるようにして、香奈の意識は何処までも深い闇の中へと沈んでいった。

意識を失った体が倒れる寸前、音もなく姿を見せた男が抱き留める。

「よく頑張ったね、愛しい僕の娘」

香奈を抱き留めた連理が微かに口の端を引き上げる。

「で、この落とし前はどうするんだい？」

「もちろん、つけさせて頂きます」

砂利を踏み締め姿を現わした少女に連理は笑う。

『殲滅の雷姫』。

その名にふさわしい強大な能力の持ち主は、既に体から青白い放電を放っている。

「ふん、力づくで空間を安定させているのか」

にこりと笑う雷姫に連理は鼻を鳴らす。

電位操作能力。

しかし、この雷姫のはただそれだけではない。

電気ので電子に影響を与え、出口を封鎖しようとした力を弾き飛ばしたのだ。

「電子に影響を与えられる能力者なんて、そうそついないな」

「連理様の奥方様には敵いませんが」

「当たり前だ、小娘」

クツリともう一度笑うと、連理はすつと腕を上げる。

「好きに使え」

「まあ、嬉しい」

ふわりと笑み、現れた複数の気配を感じながら章子は力を解放した。

ワスレナイデ。

ワスレナイデ。

ドウカ、ワスレナイデ。

暗い闇の中。

漂い、ただ流されていく。

ああ、また。

気付いた時、香奈はそこに居た。

カタンと音を立てて倒れたのは、祖父の写真だった。

今では手を合わせる事も殆どなくなり、月命日の度に呼ばれていたお坊さんも一年に一度だけの訪れとなった。

少女は中学生になっていた。

祖父に手を合わせなくなってから久しく、親と居るよりも友達と

遊ぶ方が楽しい年頃だった。

少しずつ大人になっていく体。

けれど、まだまだ子供の心。

その境目であり、体の成長に心がついていかない苦しさともどかしさに悩む年齢だが、それでも少女は両親と仲良く暮らしていた。

変わらない暮らし。

ずっと続く筈の日常。

何も変わらない、何も変わることがない。

中学に入った少女は、三年後には何事もなく高校に進学し、そして大学に進んでいく。

好きな人が出来て、働いて、結婚して、そして子供を産む。

そんな平凡な人生を送る。

そこに疑いの余地など有るはずがない。

六年間を共に過ごした小学校時代からの友人達と共に中学に通う日々。

浮かれていた。

新しい生活に。

浮かれていた。

少しずつ出来る事が増えていく自分に。

浮かれていた。

大人になっていく自分に。

お洒落に興味を示し、ちょっと勉強が苦手で、友達と遊ぶ事が大好きで。

そんな、何処にでもいる、女の子になっていた。

そう。

何処にでもいる筈だったではないか。

何処にでもいる、他の子と変わらない子だったではないか。

なのに。

なのに。

ぐにやりと歪む視界に香奈はハツとした。

このまま見ていては危ない。
飲込まれる。

この暗い思いに飲込まれてしまう。
しかし、体が動かない。

以前と一緒に。

手も、足も、目も、口も。

何もかもが、ただそれを見ている。

ドウシテ。

ドウシテ。

ドウシテ。

奔流の様に流れ込むのは、純粹なる疑問。

ドウシテ。

ドウシテ。

ドウシテ。

それが、墨汁をこぼした半紙の様に黒い闇で染まっていく。
純粹なる絶望に。

何故、自分が。

何故、私が。

どうして私でなくてはならなかったのか。

あの日、あの時、外を歩いていた人達は沢山居た。

沢山、沢山。

なのに、何故私が。

走れ、走れ、走れ。

何処までも、走れ。

安全な場所まで、走れ。

走って、走って、走って。

そして絶望が目の前に立ち塞がる。

こんな筈じゃなかった。

『ここに隠れてて!』

それは、小さな正義感。

『大丈夫だから』

逃げ切れると思っていた。

『私がひきつけます』

そう言っで、ひたすら走り続けた。

知っていたから。

逃げ切れると。

分っていたから。

大丈夫だと。

なのに、絶望は立ち塞がった。

後ろから、新たな絶望がコツコツと足音を立てて近付いてくる。

来ないで。

来ないで。

ただの中学生だった私。

なのに、少しだけ出した小さな正義感がこの身を滅ぼす。

助けて。

少女が叫ぶ。

助けて。

刃物を瞳に写し。

死にたくない

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない
死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない
死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない
死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない

「しいいにたあああくううううなあああああああああ
 ！」

叫
子
叫
子
叫
子。

少女が、女性が、男性が、少年が、子供が、バラバラとなった体
で這い蹲ったまま、ギョロリとした目で香奈を見る。

オ

マ

エ

モ

シネ!!!!!!!!!!

絶叫する香奈の腕が、背後から強く引かれた。

第三十九話 父の思い（前書き）

すいません！！三カ所ほど修正をかけさせて頂きました！！

修正箇所は、夢見 咲についての部分で

*下から五段目

高校生の娘が、そうだ。↓まるごと削除

*下から七段目

そして一年ほど前↓そして十年以上前に修正力を↓強い力をに修正

修正理由は、単純なこちらのミスによるものです。

というのも、夢見 咲と清奈は同級生なので、清奈の娘が中学生にもなっているこの時点で咲が高校生なら大変おかしい事となります。

本当に申し訳ありませんでした！！

2011/08/02 23:37

第三十九話 父の思い

「落ち着け！」

「あ——」

腕を引かれ、そのまま後方から強く抱き締められた。

全身を包み込むかの様な温かい気配に、香奈は目を見開く。

少しずつ頭が冷えていく。

恐怖はまだあったが、一人ではないという思いが安心感を呼び起

こし、冷静さを取り戻させる。

「落ち着いたか」

聞き覚えのある声が後ろから聞こえる。

この声は……。

けれど、それを問う前に香奈の視界が揺れる。

「眠れ」

耳元に寄せられた唇が囁く。

「魂に負担をかけすぎた。これ以上此処に留まれば、連れていかれる」

連れて行かれる？

何処に？

問おうにも、口がぱくぱくと動くだけで音にならない。

意識が、薄れていく。

——ネ。

何？

シ、ネ。

おぞましい声に足下に視線を向けた香奈は、自分の足首を掴むものに息を呑んだ。

相手の死を願う声が響く。

相手の苦痛を望む声が広がる。

幾つもの手が、闇の中から突き出てくる。

死ね。

シンデ。

ドウシテ。

シ。

死。

イッショニキテヨオ！！

「――っ」

少女の笑い声が聞こえた。

ケラケラと狂った様な笑い声が、香奈の意識を蝕んでいく。

アタタチガワルイノヨ

笑い声の中に入り交じる声は憎悪か悲痛か。

ワタシタチヲ

ただ、言いようのない苦しみに襲われながら、香奈はその先の言葉を待った。

だが、その先を知る事は出来なかった。

「散れ」

自分を抱き締める相手の短い言葉と共に、幾つもの絶叫が響き渡る。

それは長く間延びし、闇の中へと溶け込んでいった。

それと共に、一気に体の力が抜ける。

「早く戻れ」

戻る？

「限界だ。強制的に戻る」

限界？

戻る？

幾つもの分らない単語の羅列を理解する間もなく、香奈の意識は沈んでいった。

光の粒子となって有るべき場所に戻った存在に、柚緋はふっと小さく微笑む。

「今回の事は、前回と違って殆ど憶えていないだろう」

負担をかけすぎた魂を守る為に、記憶は自ら深く深く沈んでいく。ただ、それは消えたわけではない。

記憶は消える事はない。

忘れるという事は、一度は記憶したという事の証。

遠く、深く、何処までも手の届かない場所に誘われるだけである。

「人間は忘れる生き物」

哀しい記憶すらも、長い時をかけて風化させていく。

そうしなければ、生きていけないから。

受け入れるにしろ、拒むにしろ、忘却こそが生きていく為の術。

ワスレナイデ

眼前の地面がボコンと泡立つ。

「ふん……見苦しい」

吐き捨てる様に告げ、柚緋は闇へと溶けた。

香奈が目覚めた時、そこは自分の部屋だった。

両親のホツとした笑顔に安堵と疑問を憶える。

なんだかとても悪い夢を見ていた気がするが、それよりも何時の

まに家に戻ってきたのだろう。

確か椿の家から、美鈴と重樹の三人で帰る為に夜道を歩いていた。

そこで何かがあつて……走って、走りつづけて。

何があつたのだろうか？

突然真っ暗になった。

美鈴が泣いていた気がする。

重樹が慌てて、何かを渡されて走り出した。

走って、走って、走って。

追い抜かれたら駄目で、ひたすら出口に向かって走った。

どうして？

走らなければならないから。

なんで？

閉じ込められてしまうから。

分らない。

頭が痛い。

茂みの揺れる音が聞こえる。

「少し休みなさい」

頭痛を憶えた香奈に父が柔らかに告げる。

「……美鈴と重樹」

「その二人なら大丈夫だよ。きちんと家まで送ったからね」

「……そう」

泣いていた美鈴。

慌てていた重樹。

でもきちんと帰れたなら、きっとまた明日会える。

そこで香奈はふと疑問を憶えた。

「重樹のこと、お父さん、なんで、知ってるの？」

いや、そもそも自分はどうやって此处に帰ってきたのか？

すると、父がおどけた様に笑う。

「実はその重樹って子が香奈を家まで送ってくれたんだ。彼から事情を聞いたよ」

事情……それは。

香奈は椿の家で聞いた事を思い出す。

まさか、あの、全てを。

「さあ、今は何も考えずに眠りなさい」

酷い頭痛に目を開けていられず、香奈は父の言つとおり目を閉じた。

あつという間に寝息を立てる娘に、連理は深く息を吐く。

「連理……」

妻の呼びかけに連理は苦笑した。

「さて、どこまで知っている事にしようか？」

香奈と章子達が出会った事は既に知っている。

そして——香奈達が椿を助ける為に調査している事も、知っている。

「でもねえ、章子ちゃん達の事を知っていると分ればややこしくな

らない？」

それが『IPSM』やら能力者の事を言っているのだと連理はすぐに分った。

「まあね。神有家の事も話さなくてはならなくなるな」

香奈には、少しだけだが神有家の事を話していると章子から聞かされていた。

そして、椿の避難場所として神有家を使う予定であり、その為に神有家を説得することも。

「けど、話さないわけにはいかないだろう——今となっては」

「……そうね。それに椿ちゃんの名もかかっているし」

椿——今回のターゲットであり、香奈の友達の一人。

「これが全然知らない相手ならねえ」

連理の笑みに清奈は溜息をついた。

「あんたね……」

「だってさ！　せっかく香奈には、能力者とか冥界とかに一切関わらずに普通の娘として幸せになって欲しかったのに！！」

能力者の「の」の字も娘には入れなかった。

なのに、今になって一気に知ってしまうなんて。

「ああ、僕の愛しい娘の頭は、いまやパンク寸前となっているに違いない」

「あんた、それ結構娘の事を馬鹿にしてるわよ」

「そんな事はない！」

この天才野郎と清奈はギロリとにらんだが、連理には全くきかなかった。

「くそ！　全く腹立たしい！」

とくに香奈が産まれた頃は酷かった。

冥界の末皇子と、神有家の長姫の間に産まれた娘として、『IPSM』はおろか日本中の名家が娘の能力に興味を持った。

が、結果は無能力者。

何の力も持たない娘に対して、多くの者達は差し障りのない言葉

をむけたが、ごく一部の者達は明らかな落胆と失望を見せた。

そして清奈を責め立てたのだ。

『やはり力の弱い母親のせいだろう』

『くそっ！ 強い能力者が産まれるチャンスだったのに』

その時の怒りは、もはや筆舌尽くしがたい。

娘が産まれた時に側に居られなかった連理は、その事を後で聞いた。

自分の様な欠陥品の所に産まれてくれた大事な大事な娘。

ろくでもない者達のせいで自分と引き離された清奈が、命がけで産んでくれた子供。

力なんてなくてもいい。

何の力も持たなくていい。

ただ、幸せになってくれるなら。

そうして騒がしい雑音を全て遮断するべく、連理は娘に何も知らせなかった。

まあ、娘に何も言わなかったのはそれだけが理由ではないが。

しかし、その雑音だけでも嫌気がさすには十分だろう。

眠る娘の頭を撫でた。

「連理……」

「本当ならさ、今からでもいいかって思うんだ。記憶を消し、この事件の起きている場所から引越して……また普通に暮らす」

清奈は視線を床に落とした。

連理は普通に固執する。

それは、連理が普通ではないからだ。

天才——その名にふさわしく、出来ない事は何一つないとされていた。

容姿端麗、文武両道、地位も身分も持ちあわせ、全てに恵まれた存在。

しかし清奈からすれば、こいつのどこが？と本気で疑問に思う。何気に子供っぽいし、沸点低いし、我が儘だし。

まあ、何気に生活力があって、良き夫、良き父ではあるが。
というか、良き父を通り越して異常に達している気がする。

「記憶操作はやめて」

娘の為にも。

本人の意思を無視してのそれは、娘が築き上げてきた全てを汚す
事になる。

「わかってるよ」

連理がふう〜と大きく溜息をつく。

「僕が守りたいのは香奈の幸せだからね」

それには、一つも失うわけにはいかない。

ただの一つも。

「椿ちゃんもその一つ」

「あなたね」

「仕方ないよ。僕の中での優先順位は清奈と香奈が一番だもの」

「はいはい、わかりました。じゃあ、私達は全部知ってるって事で
いいのね」

「うん。その方が、何かあった時にすぐに助けやすいしね」

知らない事にすれば、助けに入った時に「なんで？」という事態
となってややこしくしかねない。

と同時に、知っているという事で娘の不安を和らげてやりたい。

「で、美鈴ちゃん達の方は大丈夫なの？」

「もちろんだよ。ちゃ〜んと送ったよ」

危ない所をすんで助けた。

結界が壊れ、それでも重樹を守ろうとしていた美鈴。

かなり怯えていたが、それでも大丈夫な筈だ。

それにあの二人は、最後まで香奈の事を心配していた。

重樹の方は、それで失態をチャラにしてやったが。

「でも、美鈴ちゃんが無事で良かったわ」

体だけでなく、心も。

普通なら恐怖に壊れてしまってもおかしくない。

「今回の事件についても色々聞いてみたいだしね。それも美鈴ちゃんが何とか自分を保っていられた原因の一つだろう」

能力とそれを扱う能力者達。

この世にある不思議な現象。

心霊、怪奇、サイキック現象。

中には、人ならざる者達によつて故意に引き起こされるものもあるという現実。

それが『ASP』。

今回の連続無差別事件もその一つ。

それらを聞いた美鈴。

けれど、それを聞く以前に、娘と共に自分達で辿り着いていた真実。

死者が犯人かもしれない。

だからこそ、美鈴はあれに遭遇しても壊れずに済んだ。

「宣戦布告みたいなものかしら？」

「ああ、それも黒幕からのだ」

邪魔をしたら殺す——そんな、メッセージ的なもの。

下手すれば、重樹はまだしも美鈴は連れていかれたかもしれない。

あの世に。

「許しがたい事だ」

あれさえ余計な事をしなければ、娘もこんな風にはならなかった。娘が目覚める前に、話していた相手を思い出す。

『魂が疲弊している』

よりにもよつて、娘は見てしまっている。

見えるようになってきている。

夢見——。

夢を通して、起きた事を知る。

その、凄惨なる事件を。

けれど、連理にそれを阻むことは出来ない。

封印するにしても、今の状況では難しい。

出来る事は、引き摺られる娘を守るだけだ。
柚緋のように。

「あとは、力の使い方を学ぶ事」
清奈の言葉に連理は頷いた。

それを専門とする者達に、力の使い方を学ばせるしかない。

「夢見家か」

一時は権勢を誇りつつも、能力者の減少と共にその名を廃らせて
いった夢見家。

それに抗う事なく、普通の人として生きることをお願い、望み、そ
して実行した家。

それゆえに、神有家からも尊敬をもってその名を紡がれる。
とはいえ、能力者が一人も居なくなつたわけではない。

まだ数人居る。

そして十年以上前、その娘の一人が強い力を発動させた。

「夢見 咲」

力を発動させ、『神の花嫁』である彼女ならば。

「連絡を取りましょうか」

「ああ、頼む」

彼女ならば、娘に力の使い方を教えてくれる。

第四十話 祖父、暴走

空に青が薄く滲み始めた夜明け。

日中のうだるような暑さとは裏腹に、ひんやりとした空気が人々の眠りを深くする。

そんな中で、神有家の者達だけは忙しく動き回っていた。

今日は土曜日。

月一回の親族会議の日。

早い者達は朝から本家に入り、会議後は此処に泊る者達も居る。

会議場の設置から始まり、彼らの食事、そして宿泊する部屋の準備をする。

一人や二人ではない、多い時には数百名を超える者達がこの屋敷に滞在するとあって、準備も大わらわだった。

数日前から前もってできる限りの事はしていたが、それでもやはり当日の忙しさの比ではない。

そんな中、柚緋は姿の見えない当主を捜していた。

彼にとっては祖父にあたる神有家当主。

威厳と静かな気迫に満ち、誰をも魅了する絶対的なカリスマ性の持ち主だった。

正しく王の気質を持ち、その視線一つで他者を傳かせる。

この日本の影の重鎮の一人として相応しい男は、その天才的な頭脳と策謀によって神有家を繁栄させていた。

近寄りがたい神々しい雰囲気を漂わし、年を経てもずば抜けた冷たい伶俐な美貌は男女問わず虜にし、遊びでも良いからと群がる者達は多い。

しかしそんな祖父が愛するのは、現当主夫人である祖母ただ一人。その間に五人もの子供を作り、年を取った今もなお祖母への愛情は重、いや深い。

だから祖母の所に居るかと思ったが、いないという。

「全くあの人は何処にいったんだ」

長い黒髪と振り袖をゆらして歩く柚緋に、行き交う者達が次々と頭を下げる。

直接顔は見えないが、その頬が茹で蛸の様に赤く染まっているのは想像するまでもない。

中には柚緋の美貌に耐えきれず、失神する者達まで出た。

しかし、それらは全て勤務年数の浅い者達。

長年神有家に仕えた者達は、強靱な精神力で自分を律して仕事に戻る。

柚緋は、自分の恐ろしいまでに整った美貌が引き起こす現象を理解していながらも、気にせず長い廊下を歩いて行った。

と、廊下の突き当たりを右に曲がった所で不穏な気配を感じた。

まさか、『魔性』？

いや、この神有の敷地に入ってこれるわけがない。

それこそ、吸血鬼が教会に来るほど有り得ない事だ。

が、この禍々しい気配は一体何だ。

柚緋はそこに混じる覚えのある気配に嫌な予感がした。

まさか――。

この先は、本家の者達の居住区。

柚緋は速度を上げて、その場所に向かった。

目の前に迫った襖を開け放つ。

「祖父様、一体何が」

柚緋は部屋に広がる光景に啞然とした。

「……祖父様」

「うおう！ ゆ、柚緋ではないかっ！」

何かをわたたと隠そうとしている祖父に、柚緋は全く隠せてないと毒突く。

「というか、それはなんだ。」

柚緋は部屋の中を見回した。

部屋の真ん中にあるのは、巨大な檻だった。

「……罷でも飼う気ですか」

「んな？！ 柚緋、愛らしい従姉妹を罷扱いとはなんたる男じゃ！」

嫌な予感が大当たりした。

「そうですか、そこに入れるのは香奈ですね」

香奈——それは柚緋の従姉妹だ。

そして、この祖父の長女にあたる清奈の娘。

と、祖父がちつつちつと顔の前で指を振った。

「違うぞ柚緋。わしも入るのだ」

スツと着物の合わせ目から携帯電話を取り出し、柚緋はボタンを押す。

「もしもし、警察ですか。すみません、ここに幼女に手を出そうとしている変態が一名います」

「無駄だぞ柚緋！ わしはこう見えても警察上層部と深い繋がりがあつてのう！」

「くたばれジジイ」

柚緋は本気で祖父を手につけようかと考えた。

「柚緋こそ酷いではないか！ わしはただ孫と仲良く語り合いたいだけで」

電話から「もしもし」と叫び声が聞こえる。

よし、やはり逮捕してもらおう。

しかし柚緋が油断していた隙に電話を取られた。

「ああ、すまんのう。ただの間違い電話じゃ」

そしてさつさと電話を切る祖父。

その手慣れた様子に素人ではないと確信する。

「ちょっと待て、ジジイ」

「柚緋、甘いのう。このくらいでは香奈を守る事は出来ぬぞ」

「犯罪者に言われたくないな」

「何を言う！」

心外だと言わんばかりの祖父。

「どう考えても犯罪だろ。どうして孫と話す為に檻を用意するんだ」
「だ、だって、こうでもしないと香奈が逃げてしまうではないか」
はつきりいつて、香奈は神有家を忌避している。

というか、この長い年月を経て培われた厳かで厳肅な空気が苦手なのである。

神有家のある場所はいわば霊場で、普通はこの神聖なる空気に心洗われる筈なのだが。

もしかしてあいつは魔性か？

そんな事を考えていると、祖父がなにやらぶつぶつ言っているのに気付いた。

「わしだって普通に話が出来るならしとるわい」

「祖父様」

「一緒にお話しして、一緒にご飯食べて、一緒にお人形さん遊びして、一緒にお風呂入って、一緒に添い寝して」

「後半二つはやめろ。そして後半三つ目も無理だ」

「何故じゃ！ 女の子はお人形遊びが好きな筈じゃ！」

そんな思い込みにより、祖父が香奈の為に買い集めたアンティークドールは数十体。

中には国宝級のものもある。

また、渾身の名作である市松人形もあるが、渾身過ぎて魂が宿って夜に彷徨い歩く始末。

余計な事ばかりしてくれる当主である。

それに人形は一体も渡せず蔵にしまわれる始末だ。

「香奈と話したいんじゃ！ おじいさまって最後にハートマークをつけて呼ばれたいんじゃ！ この気持ちがお前に分るかああっ」

「むしろ妻に呼んでもらえよ」

語尾にハートマークは妻の役目だろう。

「無理じゃ。あいつは恥ずかしがってつけてくれない。くうう、ツンデレめ！」

ツンデレなのか？

「だがあいつはのう、恐怖に怯えつつも涙目状態が笑顔と同じぐらいとても可愛いのじゃ」

「ああ、そうか——って、は？」

「昔はそれが見たくてのう。ああ、そういえばあいつとの仲を深める為によく実行したものだ」

「何をだ」

「わしのかつこよさを遺憾なく発揮する事じゃ」

嫌な予感がする。

いや、予感を通り越して確信となる。

「ほら、女というものは危険から救ってくれた男に恋するものだろう？ だから、剣崎を使って妻を夜道で追いかけて回してもらったのじゃ！ で、そこをかつこよくわしが助けにいった」

犯罪者。

柚緋でもまだそこまでやってない。

しかも剣崎は、現在の警察庁トップである。

「また、お盆の時期には気分を盛り上げる為に、悪霊が封じられた祠や石碑を常葉達に片っ端から壊させてのう！ わしが、こう、かつこよく封じたというわけだ」

常葉は検察庁のトップである。

というか、国の治安を守る者達になんて事を！！

また、常葉達という事は、他にも色々な者達に悪事に荷担させたのだろう。

剣崎達はこの祖父の下僕である。

何でも昔、徹底的に調教だかなんだかして以来、絶対に逆らえなくなったらしい。

鬼だ、鬼畜だ、悪魔だ。

自分なんてまだ可愛い方だ。

「ふふ、愛は人を狂わすものだ」

「あんただけは狂うな」

この国が沈没する、文字通り。

「いやあ、もう本当に可愛かったぞ、妻は。あれだけわしをゴミ虫でも見る様な普段の眼差しはなく、涙目で抱きついてくれる！これこそ人生の楽園！」

どうしよう。

もう駄目だこの人。

というか祖母様、ゴミ虫とはその時点で人を見る目があつたんですね。

もうさっさとうちの父親に当主の座を譲り渡して隠居して欲しい。いや、隠居した方がとんでもない事をやらかすかも。以前に父が言っていた。

『当主という首輪が父を抑えてくれているんだよ』

つまり、当主を辞めたら歯止めがなくなる。

当主夫人たる祖母にそれを願うのは無理だ——あまりにも可哀想すぎて。

そしてそんな祖父が一番可愛がるのが香奈。

他の孫達の事も心底可愛がっているが、香奈の場合は自由に会えない事が暴走のレバーを全開にする要因となっているらしい。

ノンストップ暴走列車。

しかも脱線なしの何でもあり。

「香奈の泊る部屋も準備済みじゃ」

またまた嫌な予感がする。

「女の子の大好きな姫系の部屋にしてみたのじゃ」

そういえば、数日前に改装業者が入っていた気がする。

「そう！今回こそわしは香奈と『仲の良い祖父と孫』になるのじやああああっ」

「なら檻を撤去しろ」

むしろこんなものを見たら速攻で逃げ出す。

「ふっ、落とし穴や鎖、枷も準備万全じゃ。食べ物にも薬を仕込む手筈に」

「本当に容赦ないな」

どこの世界に祖父が孫娘に薬を仕込む。

「愛の為には手段は問わないのじゃ。わしはただ、香奈に『おじいさま』と笑顔で呼ばれて、一緒にお散歩とかしたいだけじゃ」

威厳の欠片もない。

厳粛な空気も、視線だけで誰もがひれ伏する毅然とした気迫も何もない。

そこに居るのは、いかに孫娘とのスキンシップをとるかに悩むただの危ないジジイだった。

柚緋は祖父を尊敬してはいるが、こういうところだけはついていけない。

「香奈に好かれたかったら何もしない方がいい」

「何を言う！ 女というものは押せ押せの姿勢にこそ愛を感じるのじゃ」

「感じたら駄目だろ」

祖父と孫に親愛以上の何かを感じたら終わりだ。

「それに、今回を逃したらまた一月後までお預けなのじゃ。冥界大帝からも香奈のきゃわいいベストブロマイドを頼まれておるし」

香奈馬鹿二号——それは冥界の支配者であり、香奈の父方の祖父である。

神有家はまだいい。

一月に一回来るから。

しかし、冥界とは完全に香奈の父側からの没交渉となっている。

手紙も贈り物も全て突っ返され、会いたいと来ても強制送還される。

時折この祖父の所に来てはさめざめと泣く冥界大帝の哀れさは、もはや言葉で言い表せないほどだった。

孫娘に会いたい。

それが、冥界大帝と神有当主の願いだった。

というか、冥界と人間界の権力者を手玉に取るなんて、香奈はあれでいて中々の悪女である。

まあ、本人の知らない所でそれらは行われているのだが。

なにせ冥界側に関しては、香奈は全く知らない——存在すらも。

「はあ、孫達に囲まれて幸せおじいさん気分に浸りたい」

孫に会いたい気持ちが始まり出した。

更によく分らない事を言い出した。

「まあでも、柚緋と結婚すれば香奈はこの家に来てくれるかのう」

床に転がり「の」の字を書いていた祖父の言葉に、柚緋の纏う空気が変わる。

「ほほ、もうすぐじゃからのう。お前の許嫁選定は」

神有家の次期当主の許嫁は、代々神有家の本家が分家の娘から決まる。

まだ物心つく前から本家と分家の子女達から吟味し、十二歳頃には最終候補が決められる。

現在柚緋は十二歳。

既に、年齢的に見合う娘達が候補に上った後、幾つもの審議を重ねて少しずつ候補を絞られていっている。

現在、柚緋の許嫁候補は二十名。

「一月後の親族会議にて、まず十名にまで絞り込まれる。更にその二月後に五名にまで絞り込まれ、その後——」

本当の花嫁審議が始まる。

それに伴い、分家、また神有家以外の家々も煩くなるだろう。

未来の当主夫人に取入る為に。

また、候補者の中には香奈も入っている。

が、香奈の場合は少し特殊だった。

『ゆずひとけっこんするくらいならしんでやる』

幼い頃、香奈が宣言した許嫁候補辞退宣言。

もちろんそれだけで辞退出来る筈もなかったが、とにかく明確に柚緋と結婚したくないと告げた香奈。

そのおかげで、忍び寄る未来の当主夫人に取入る者達の魔手が、香奈にだけは及んでいないのは不幸中の幸いだ、言われた本人は

最悪の一言だった。

つまり、香奈は万が一にも候補に残ったところで、最初っからレースに参加する気がないのである。

だが、それで逃がす柚緋でもなかった。

「確かにある程度の選定は家の方で行う。が、今までその選定以外の相手を選んだ事がなかったわけでもない」

ある時は他家から、ある時は一般家庭の少女を、ある時は選定から零れた本家や分家の娘を選んだ場合もあった。

遙か昔は選定こそが絶対だったが、今では最後は本人の意思が重要となる。

つまり、選定は一種の隠れ蓑である。

当主が心の底から愛しい相手を選ぶための。

「別に香奈を選ばなくてもいいんじゃないよ。ただ、最終候補にまで残してくれればのう」

そうすれば、香奈は長く本家に留まらざるを得ない。

そうしたら、香奈と一緒に過ごせる。

当主の瞳は爛々と輝いた。

何をして遊ぼうか。

息子達は香奈の為に美味しい料理を造るだろう。

妻が香奈の為に着物を仕立てているのも知っている。

流行に詳しい娘なら、香奈の気に入るものを持つてくるだろう。

従姉妹達も香奈と遊べて楽しい筈だ。

それに、香奈が来たら娘の清奈も来る。

ああ、なんて楽しい。

「連理が切れると思うが」

「はう！」

膨らんだ夢がガラガラと崩れた。

美しい美貌が歪み、眼に溜まる朝露の様な涙。

「む、婿殿は、その」

切れた連理は流石の当主でも恐い。

「そ、そこは、正々堂々と酒飲み勝負をするぞ！　そう、婿殿とも語り合うのじゃ！」

娘婿の連理とも実は仲良くしたかった。

昔はそれなりに仲が良かったが、香奈の事があってからは娘を普通に通に育てたいといって離れていつてしまった。

別に香奈の事を除けば酷い事はされていないし、娘婿としても気に入っている。

しかし、しかしだ。

「婿殿はいけずじゃあああつ」

「どうでもいいから、とつとと檻を撤去しろ」

柚緋の冷酷な一言に、当主は更に喚いた。

第四十一話 密談

「それで、一体何の用じゃ？」

祖父の言葉に、当主直属の影達によって檻が撤去されるのを見守っていた柚緋が溜息をこぼした。

「香奈の事だ」

「なぬ?!」

キラんと目を輝かせる祖父に、柚緋は冷たく吐き捨てた。

「想像している事とは違う」

「ぬう?! 柚緋、そなたとうとうわしの永久保存フォルダーを盗み見るまでに」

「何保存してんだよ」

しかも永久ってなんだ永久って。

「で、香奈がどうしたのじゃ」

今すぐ頭に電磁波でも流してやりたいと思いつつ、柚緋が先を続けた。

「あいつ、力が発現し始めた」

「なんだと? それで、なんじゃ? 炎か? 水か? それとも」

「いや、夢見だ」

「夢見?」

怪訝な顔をする当主に柚緋は苦笑する。

「夢見とは……まあ、うちの家も色々な血を入れておるからのう。」

夢見家の血も数代前に入っておる。だから発現してもおかしくはないが」

当主の言葉に柚緋は笑みを濃くする。

当主は知らない。

香奈の、力を。

封じ込められし、その本当の能力を。知られれば、香奈は世界を敵に回す。

ごく一部を除き、全ての者達が香奈を忌避し、憎悪を抱いて虐殺するのは確実だった。

だから言わない。

この十二年当主達を観察し、信頼に値する者達だと分つてもなお、彼らはごく一部に入るから。

言えば、きっと香奈を守る、香奈の両親も。

だが、世界全てが敵に回れば、彼らもまた香奈を守る者として迫害され虐殺されるのは間違いない。

今までがそうだったから。

だから……言えない、言わない。

その力がバれてしまうギリギリまで。

どこに裏切りものが居るか分らないのだから。

実の両親すら知らない香奈の力を知るのは、柚緋を除けば彼らだけ。

「しかし夢見か……珍しい能力じゃな」

今では、世界を見てもその数は少ない。

「それで、その力はどうするのじゃ？」

発現した力の行く先は二つ。

力の使い方を学ぶか、それとも封印するか。

「嬪殿の望みは封印じゃろうな」

「いや、今はまずい」

当主の瞳に冷たい光が宿る。

「まずい？ なぜだ」

「既に、相手に目を付けられている」

「なんだと？」

「今起きている連続無差別事件については？」

「ああ、あれか。どこぞの馬鹿が哀れなる死霊を唆して引き起こしたとる」

「その黒幕にだよ」

当主の顔から笑みが消える。

ただ、鋭い眼光がぎらりと光り、冷酷な空気を漂わす。

「それが、わしの孫に目を付けたと？ 何故」

「さあな？ ただ、今回の件について夢見を行えた存在として、目を惹くだけの価値は十分あったんだろう」

柚緋はゆつくりと告げた。

「それも、犯人の過去を視ている」

当主の顔色が変わった。

「なんじゃと？ まさか、香奈は、咲でさえ出来なかったものを視てしまったというのか？！」

それは、あの希代の夢見として名を馳せる夢見 咲でさえ行えなかった事だ。

今回の組織の失態後、協力を依頼された夢見 咲は、目撃者の記憶から判明した犯人たる少女の過去を視ようとした。

というのも、今回はサイコメトリーで得られた情報が余りにも心許なかったからだ。

しかも、少女の素性に関するものは何一つ読み取れてなかった。

それは、次のターゲットとなった少女の記憶には、そもそも犯人の容姿の情報しかなかったからだ。

そして少女の素性が判明しても、生前の少女の持ち物は既に無く、事件の遺留物さえなかった。

ならばと、昔の記事や人々の記憶などに残る少女に関する情報を搜したが、得られる情報にはやはり限りがあった。

情報収集でもサイコメトリーでも得られる情報は少ない。

だから、過去を見る事も出来る夢見を行うしかなかった。

例え、夢見を行う能力者が、組織外の人間だろうと手段は選んでいられないと反対派を制して。

一度失敗していることもあり、出来る事は全て試された。

しかし、黒幕も手を打っていたのだろう。

すぐさま強力な結界に阻まれ、犯人を直接『視』る事は出来なかったという。

「そう、出来なかった。しかし、香奈は出来た。だから、目を付けられた」

邪魔な因子として。

「ならば今更力を封じても無駄じゃろうな」

「ああ。しかも、昨日もちよつかいをかけられている」

「ちよつかい？」

「夜道を襲われた」

その瞬間、当主から放たれた激しい怒りの気が渦となり襖や壁をゆらす。

ガタガタと大きく揺れ、異変を感じた影達の気配が現れる。

それを手で制止ながら、柚緋は先を続けた。

「ただ、重樹もそこに居たから、大部分は『IPSM』への牽制だ。邪魔するなという」

「なら、残りはわしの大事な孫娘への」

「ちよつかいである事は間違いない。連理と章子が助けに向かい、保護してすぐにあいつはまた夢見を行った。いや、今回ののは行わされたといった方が良い」

あの時、結界がゆるんだ。

そして意識を失う香奈の中に入り込み、その魂を飛ばしたのだ――あの、凄惨なる記憶へと。

亡者の怨念が渦巻く、黒く粘ついた液体の中に叩き落としてくれたのだ。

あのままでは、香奈は間違いなく死んでいただろう。

強引に亡者達を蹴散らし、柚緋は香奈の魂を掬い上げて体まで還した。

だが、それでも魂に負ったダメージは計り知れなかった。

連理がすぐに自分の力を分け与えて治療しなければ、それこそ助からなかったといってもいい。

それを聞いた当主がうんとうなり声を上げる。

「婿殿が力を……それで、婿殿にはこの事を」

「一応は話しました」

今回の事件で夢見が行えていない事は話していなかったが、たぶん向こうも気付いてはいただろう。

なのに香奈が犯人の過去を見ているとなれば、それは『IPSM』側にとつては闇の中に一条の光明が射したというものである。

しかし、犯人側からすれば——今回の黒幕からすれば、邪魔者以外の何ものでもない。

しかも香奈が素人だという事に気付き、ちょっかいまでかけてきている。

対等な相手ではない。

まるで猫がネズミをいたぶるように、遊んでいるのだ。

「まあ黒幕の件は別としても、『IPSM』側は先の失態で解決を急いでいる。香奈が夢見を行えると知ったらまずいな」

協力者として引きずり出されかねない。

もちろん、心ある者達は強要する事はない。

しかし、ごく一部にはそういう傾向を有する者達も居る。

「ですから、祖父様に動いて頂きたいのです」

「つまり、牽制を行えと」

「ええ。それに香奈は、今回の件については既に協力者となってますから」

「協力者……そういえば、次のターゲットは椿という少女だったな、香奈の友人の」

「ええ。美鈴、梓、理佳と共に椿を助ける為に協力者として加わってます」

「なんと……うむ、本当に友達思いの良い子じゃ」

「ええ、そんな良い子にちょっかいをかける馬鹿がいるんですよ。そして更にその馬鹿が増えるかもしれません」

「わかった。こちらで上手くやっておこう」

「ありがとうございます」

柚緋は優雅に頭を垂れる。

さらりと流れる黒髪に当主は目を細めた。

自分そっくりの髪質を受け継いだ者達の中でも、柚緋は一際自分に似ていた。

「で、協力者は四人も居るが、現場担当は今のままで十分なのか？」

章子と重樹の二人では荷が重いのではないかという祖父に、柚緋は余裕の笑みを見せる。

「章子がついていきますからね、大丈夫ですよ。それに――」

「ん？」

「いえ、何でも」

お楽しみは後までとつとく方が良いだろう。

ただし、この変態ジジイには刺激が強すぎるかもしれないが。

柚緋はその際には自分も同席する事を心に誓った。

「では、宜しくお頼み申します」

「わかったわかった……それで、のう」

「祖父様？」

視線を落とした祖父に柚緋は首を傾げた。

「いや、その、清奈は知っておるのかと思って……香奈が力を使える事を」

香奈に何の力もないと分った時、娘は大喜びしていた。

香奈が産まれてから半年後の事だった。

能力測定で無能力者。

口に出す出さないはあったが、多くの者達が落胆する中で、娘は、そして婿殿は香奈が力を持たない事を祝福した。

それはただ、普通の娘として過ごしてもらいたいという親心だったのだろう。

そうして、能力者を初めとした全ての不可思議な現象から娘を遠ざけていた。

神有家に連れてくる事も、今では親族会議ぐらいである。

それ故に、他家やその世界の有力者は香奈に関して幾つもの誤解を憶えているが。

しかしそれを正す気はない。

本家からも疎まれていた無能力者。

それでいいのだ。

そうでなければ、香奈は狙われることになる。

神有家と縁を結びたい獣達によって。

「ただでさえ、香奈の存在が明らかになった頃は煩かったからのう」
何の力も持たない娘を産んだとして清奈を責め立てた者達。
しかし、ほどなく彼らは気付いた。

香奈に力がなくとも、半神たる存在である事は間違いない。

それも、冥界の皇子と神有家の姫との間に産まれた娘。

その娘が産んだ子ならばと、奴等は考えた。

親が駄目でも、数多く子を産めばその一人ぐらいは——と。

但し、今ではそんな考えを持つ者達は居ないが。

当主はくすりと唇を歪ませ、冷たい土の下に居る者達に嘲笑を向ける。

警告を無視した者には死を。

更に神有家の情報操作にて、香奈を狙う者は一人も居なくなった。
それこそ、『IPSM』でさえ香奈に関しては神有家のお荷物と
いう認識しかない。

だからこそ、今になって力が使えるという事が分れば、まずいのだ。

権力を求めて蠢く者達にとって格好の餌となる。

「で、娘の……清奈の方は知っておるのか？」

当主の再度の問いに、柚緋は少しだけ哀しげに微笑んだ。

「ああ、夢見の力を扱える事は知っている。連理から伝わっている
だろうから。ただ、その黒幕にちよっかいをかけられた事は知らない筈だ。また、今回の件で夢見が使えていない事も」

「夢見 咲とは友人だからのう。あの子が心を痛めてしまう」

当主は嘆息した。

清奈とは高校の時の同級生。

昔は神有家にも良く来ていた——友人の赤塚 真穂と共に。

「それで、結局香奈の能力に関してはどうのようになるのじゃ？」

「夢見 咲に力の使い方を伝授して貰う」

「なんと！」

「封印するにしても先となるし、問題は今どうするかだ。向こうからかけられるちよっかいに關しても、必ずしも俺や連理が弾けるわけではない。だから、学ばせる」

「それに、今回の件の解決の糸口を切り開けるかもしれぬし、この当主としての顔で告げる祖父に柚緋は頷いた。

「犯人の過去を見れるならば、黒幕の存在、そして、何故今回このような事件を引き起こしたかを知れる」

「となると、強引に被わすともすむと。確かにその方が能力者達にとつても被害は少ないじゃろな」

「その通りだ」

「しかし夢見 咲が来るとなると、かの方も来られるのう」

合計十三の世界からなる神々の世界——天界十三世界の一つ、炎水界。

そこにある風国の上位神でありながら、咲の人としての寿命が尽きるまで、人間として妻の側で暮らすことを選んだ男神。

妻を溺愛するあの神が来ないわけがない。

「まず間違いなく関わってくる筈だ」

「まあ、此度の件は人なるざるものが関わっているからのう、大丈夫じゃろ」

「ただし、冥界の関係者だが」

「ほほ、妻への愛に種族の差はないという事じゃ」

馬鹿共の操りの糸に絡められていたとはいえ、己の手で妻を殺してしまったあの男神の嘆きと後悔は深く、一時は狂いかけたというそれでも数百年をかけて、ようやく人間に転生していた妻を取り戻したあの神は、それ以来常に妻の側から離れなかった。

炎水界に戻る時も常に側に置き、それが出来なければ己の配下を

使わした。

そう……親友とも言える、同じ境遇のもう一人の男神と共に、その神の妻への愛は深かった。

「ただ、咲が来るとなれば、あの真穂も来るかもしれませんね」

「そうじゃのう。あの二人は仲が良いからのう」

まだ女神として生きていた前世からの親友であり、夫も親友同士。今生でも咲と真穂は大親友として生きている。

「だが、それは真穂の夫が許さぬだろう」

咲の夫の親友たる男神を思いだし、当主が呟く。

「ああ、顔を見せる事ぐらいはあるだろうが、関わる事はあの夫がさせない」

「そうじゃな。となれば、今回の来訪は玲珠だけとなるう」

「玲珠か」

『氷華』の如き美貌を持つ絶世の美神を思い浮かべ、柚緋は笑う。今回の件では、あの神の怒りは臨界点ギリギリにまで達している。

普段は温厚だがら気付きにくいのが、あの神は怒るとんでもなく恐い。

その笑みを瞬時に消し、眉一つ動かさずに標的を打ち砕くだろう。それに気付かず、咲を責め立てた者達の末路を思い、柚緋は美しい笑みを唇にはく。

「気持ち分るがな」

滅多に怒らぬ穏やかな気性だからこそ、ここまで怒らせた人間の愚かさに笑いがこみ上げる。

「さてさて、それでは玲珠殿を迎える準備もせんとな」
力の使い方を練習させるとなれば、場所に限られる。

香奈の力の発現を隠したまま行えるのは、神有家のこの本邸ぐら이다。

「そうじゃ、この前オークションで競り落としたアンティークのティンバアを用意しておこう！」

「待て、それ珍珠達を迎える準備じゃないだろ!!」

どう考えても香奈を迎える準備だ。

「いや、それか、この前凧国の王妃様にもらった大根のぬいぐるみを百体ほど敷き詰めて」

「ちよいまで、どんな手段を使っただ」

あの大根大好き王妃から大根のぬいぐるみを百体ももぎ取るなんて!!

「一体一体愛を込めて縫ってもらったんだぞ?」

柚緋は悟った。

神有家があゝの鬼畜大魔王にロツクオンされた事を。

鬼畜大魔王こと凧国国王。

鬼畜と腹黒が服を着て歩いている様な男の妻への愛情は異常だ。

まあ、『完末』ならば誰もが妻への愛は異常だが、あれは飛び抜けている部類に入る。

「明日ぐらいに全員が溺死するな」

「大丈夫じゃ、柚緋。このぬいぐるみの御礼として、王妃を綺麗にデコレイトして王にプレゼントしたからおおう! 柚緋、苦しいぞおっ!」

「くたばれ! マジでクタバレ!」

その時、襖が開いた。

「すいません、当主。当主夫人がお探しに——って、殺害現場まっただ中?!」

家人の悲鳴に、それまで凍り付いていた当主直属の影達が動き出す。

「若様、どうか落ち着いて下さい!」

「誰か! 若様がご乱心したぞっ!」

「うわああ! 当主が白目を!」

その騒ぎは、当主夫人が駆け付けるまで続いた。

その後、半ば本気で首を絞める柚緋に、慌てて当主直属の影達が止める事態に発展したのは言うまでも無い。

第四十二話 心に宿る灯火

キーンコーンカーンコーン。

そんなお決りのチャイムが鳴り響き、土曜日の学校は終わりを告げた。

その後、校舎前に停まっていたバスに生徒達が続々と乗り込んでいく。

その隙間を縫うように、香奈は美鈴と共に空いていた席に身を埋めた。

「香奈、大丈夫？」

「うん」

美鈴の言葉に香奈は肩をコキコキとならす。

「つてか、体がだるい」

「マッサージでもしようか？」

「うん、して欲しいけど、今日は急ぐからやめとく」

今日は神有家での親族会議がある。

駅前には迎えの車が来ていて、それに乗っていくのだ。

会議は朝から始まっているから、両親は先に行っている。

学校がある時は、香奈だけが遅れていくのだ。

いつもは気が乗らない神有家への訪問。

しかし、今日は行かなければならない。

もしもの時の椿の逃げ場所として受け入れて貰う為にも。

だが、体のだるさが香奈を億劫にさせる。

駄目だ、こんなんでは。

そう思いながらも、昨日受けた疲れが抜けていかない。

そう——昨日だ。

香奈は美鈴を見る。

昨日、美鈴と重樹の三人で帰った。

その途中で何か起きて、気付いたら家に居た。

美鈴と重樹は無事に帰ったと父は言っていたし、今日の朝に挨拶した時も美鈴には別におかしなところはない。

「というか、何もなく普通に帰ったのなら、おかしいものもないが。」

でも、何かが気になる。

朝は忙しくて何も聞けなかったが、今なら。

「美鈴」

「ん？」

梓と理佳は少し離れた席に座っているが、それでも二人には聞こえない小さな声で話し出す。

「あのさ、昨日の椿の家からの帰り道なんだけど」

その時、美鈴の笑顔が一瞬崩れた様な錯覚に陥る。

だが、それはほんの一瞬であり、すぐに美鈴はいつもの笑顔を浮かべていた。

おかしい。

何かが、おかしいと香奈は思う。

「ああ、昨日は大変だったよね」

「うん、それで私、昨日の帰り道での事を良く憶えて無くて……気付いたら、家で寝たの」

すると、美鈴が吹き出すようにケラケラと笑い出した。

「ど、どうしたの？」

「え、いや、ごめん思い出しちゃって」

「思い出した？」

「そう、香奈の大コケを！どこまで憶えてるの？」

「え？ いや、帰る時に横道に入って、そこで突然街灯が消えて……」

そう、真つ暗闇になった。

「それで、気付いたら走って」

走らなければならなかった。

でないと。

「閉じ込められてしまっから」

「……」

「それぐらいかな、憶えてるの」

「そう言っと、美鈴が再び吹き出す。

「そっか。つまり道が暗くなつてパニックになつたのね」

「え？」

「憶えてないの？ 突然走り出して、いきなり転んだのよ」

「は？と香奈が頭の上に疑問符を飛ばした。

「で、どうして転んだのかって思つたら、そこに大きな石があつてね。それにひっかけて転んだの」

美鈴が爆笑している。

「もうその転び方が凄くてね。重樹さんも顔真っ青」

だが、何故だろう？

その笑い方が。

その、話し方が。

「で、そんな香奈を連れて帰つたつけ、香奈のお父さん大激怒」

「はい？」

あの父が大激怒？

香奈は昨夜の父を思い出した。

そんな様子は全く見られなかったが。

いや、この前梓に叩かれたのを見た時の父の暴れっぷりを思い出せば……。

ザアアアと血の気が引く音が聞こえる。

「美鈴、大丈夫だった？」

「うん、でも重樹さんが怯えて」

「え？ 重樹さん何かしたの？」

「いや、男の子なのに女の子を守れなくてどうする——みたいな？」
理不尽すぎる。

後で父に言っておこう。

そんな事を考えて居ると、バスが駅前に到着した。

「けど、そうか…… よほどハデに転んだんだね、記憶が飛ぶって事は」

「みごとだったわ、苺のパンツ」

美鈴の笑いをかみ殺した様な口調よりも、呟かれた単語に香奈はギョツとした。

な、なぜ知っている。

「あんだけハデにこけたら見えるって」

「……こうなったら美鈴のパンツを」

「は?! 何言ってるのよ!」

やられたらやり返す。

これ基本。

なので見られたら見返す。

しかし美鈴はすんでの所で逃げ切った。

そして香奈は捕獲された。

神有家の迎えに。

「さあ、香奈様。家に参りましょう」

「待つて! まだ美鈴のスカートをめくって」

そのまま車の中に放り込まれ、車が発進した。

遠ざかっていく車を美鈴は見送った。

そこに梓と理佳がやってくる。

「あれ? 香奈は?」

「家の用事だよ」

「ああ、そういえば今日だったっけ」

どうやらすっかり忘れていたらしい梓に美鈴は苦笑した。

「それで、今日も椿の家に行くんでしょう?」

「ええ。でさ、前々から決めてたんだけど」

「ん?」

「実は土曜日の夜は椿の家に泊ろうって決めてたの」

泊まる?

「と、突然出来るの?」

泊まるのは良いとしても、突然の申し出では椿の母もびっくりするだろう。

しかし、梓はぬかりなかった。

「大丈夫。前々から言ってあったから」

「本当に梓はやり手ね」

「もう時間がないもの」

梓の瞳は強い決意に溢れていた。

「それで、この後は一時解散して荷物を持って椿の家に集合にしようかと思うの。ああ、夕食の材料は私達で持ち込みよ」

「昼食は？」

「適当に買ってくればいいんじゃない？」

そうして梓達と別れると、美鈴は家に向かって歩き出した。が、家に着いた美鈴はそのまま家の前を通り過ぎると、前方の横道へと入る。

そこは、昨日の帰りに通った道だった。

道の両側に茂った茂みに囲まれ、等間隔に街灯が立ち並ぶ。

昨夜とは違い、虫の鳴声がつるさいぐらい聞こえていた。

遠くに、見覚えのある人物が茂みの方を向いて立っているのが見えた。

「こんにちわ」

後五メートルほどの所まで歩み寄り美鈴が声をかけると、くるりと相手がこちらを向いた。

「ああ——」

重樹の瞳が美鈴を映す。

「香奈は？」

「神有家に向かいました」

「そうか……で、記憶は？」

「殆ど憶えてないです」

「そうか、と呟き黙り込む。」

香奈は憶えていない、ここで起きた事を。

いや、断片的にしか憶えていない。

だから、美鈴は嘘の記憶を吹き込んだ。

章子に言われたとおりに。

美鈴は重樹の横に並び、昨日起きた怪奇現象を思い出す。

あの時、伸ばされた幾つもの黒い腕に絡め取られる瞬間、視界を青白く染める光に包まれた。

時間にして五秒も経たないうちに、美鈴と重樹を取り囲んでいた者達は消え去った。

『殲滅の雷姫』の名にふさわしい破壊力。

全てが、一瞬のうちに行われ、一瞬のうちに終わった。

恐ろしくて、美しくて、思わず見惚れる様な笑みを浮かべて現れた章子。

その堂々とした姿に、気付けば体の震えも止まっていた。

『もう大丈夫』

そう言われて、小さな子供のように泣きじゃくった。

恐怖が、不安が、いっぺんに爆発した。

そうして暫く泣いた後で、ようやく香奈の事に思い当たった。

慌てる美鈴に、章子は優しく一つ一つ説明してくれた。

香奈が出口まで到達した事。

そして変なのに襲われかけた時に、通りかかった章子と出会い、気絶してしまった事。

章子の仲間に先に家まで送らせた事。

そうして、章子に言われたのだ。

ここで起きた事は、椿が巻き込まれた事件の黒幕に当たる存在からの警告みたいなものだ。

今はこれ以上の危険はない。

しかし、どちらにしろ協力者として関わるからには、今回の様な事はまたあるかもしれない。

そして協力者を辞める事も出来るという道を示された。

正直、美鈴は迷った。

こんな恐い事、二度と嫌だった。

しかし自分は辞められても、椿は辞められない。

今も怯えている椿を一人には出来ない。

それに、次第に今回の件に関しての怒りも湧いてきた。

まるでネズミをいたぶる様に、なぶる様に自分に恐怖を与えてきた相手に、美鈴は激しい怒りを覚えた。

恐ろしいのに、恐くてもう二度と嫌なのに。

けれど、怒りが、止まらない。

こんな相手に、椿をどうこうされたくない。

美鈴は決めた。

自分はただの中学生だ。

章子達とは違って何の力も持っていない。

今回は運が良かっただけで、次に同じ目にあったら死んでしまう可能性の方が強い。

椿の事でも、助けるどころか一緒に殺されてしまいかもしれない。けれど、美鈴は章子に言った。

絶対に、降らないと。

その決意に満ちた視線に、章子はどこか嬉しそうに頷いた。

その後、章子と重樹に家まで送ってもらった中で、香奈について言われたのだ。

今回の件については他言無用だと。

確かに、これは他の者に言いふらしていい事ではないだろう。

だがそれよりも、美鈴にとってはその後と言われた内容の方が驚きだった。

というのも、先に家に送られた香奈が、出口付近で襲われかけた事から記憶の混乱をきたしているとの事だった。

だから、もしその事について聞かれても、誤魔化して欲しいと頼まれた。

記憶を取り戻す事で香奈がパニックになるのを防ぐ為だという。美鈴も酷くパニックに陥ったから、章子の言いたい事は分った。

そうして、ついさつきバスの中で香奈に聞かれた美鈴は、章子に言われたとおりに誤魔化したのだ。

椿を助ける為に、香奈はこれから香奈にしか出来ない事をしに行く。

その決意をくじくわけにはいかない。

そして美鈴は、ここに来た。

昨日の事件の場所に。

昨夜家まで送ってもらった後、章子から言われていた。

今日の明日ですぐに襲われるとは思わないが、しばらくは重樹を置いておくと。

それは、椿の方に重樹を張付かせると共に、護衛をさせるという事らしい。

重樹の方もそれについて何も言わず、静かに頷いていた。

そうして今日、学校が終わったら此処で落ち合うことになっていた。

昨日の事件が起きた場所にもう一度来るなんて、普通は考えられない。

しかしあえて此処にしたのは、美鈴なりの決意だった。

昨日の事なんて、もうこれっぽっちも自分に恐怖を与えないと、昨日の恐怖と決別するために。

結果はこの通りだ。

実際此処に来て、美鈴は恐怖に震えることはなかった。

ただ、今は昼だからかも知れないが。

美鈴は更に言葉を続け、今日の夜は椿の家に泊まることを告げた。

「そうか。なら、夜は章子が泊まる事になるな」

「どうしてですか？」

すると、重樹が呆れたように口を開いた。

「お前な、女ばっかりのところになら男が居たら困るだろ」

椿の家は母子家庭だから、父親という唯一の男性もいない。

確かにそこに重樹が居れば肩身は狭いだらう。

しかし命がかかっているのに、肩身うんぬんに構っていいのだろうか。

「いいんだよ」

人の考えを読んだかのように重樹が答えた。

「でも、泊まらないけど来るんですよね？」

「ああ。日中は俺が担当だから」

昨日の事があって以来、章子が重樹が必ず椿の近くに居るように決めていた。

「じゃあ、私の準備が終わるまで待ってて下さいね」

「わかった」

「それと、お昼ご飯も買いましょう」

「ああ——って、は？」

「お昼まだなんですよね？ 梓からお昼ご飯を買ってこいって言われてるんです。それと、夕食の材料も買わないと」

そこで重樹が嫌な顔をした。

「まさかと思うが、良い荷物持ちが出来たとか思ってるだろ」

「はい」

笑顔で美鈴が答えると、重樹ががつくりと項垂れた。

だが、嫌々そうにしながらも、そこに昨日の様な拒絶感みたいなものはない。

それは、昨日の件が原因だろうか。

そこで美鈴は大切な事を思い出した。

「重樹さん」

「なんだ？」

「昨日は助けてくれてありがとうございました」

美鈴は昨日言えなかった礼を述べた。

反対に、重樹は驚いて言葉を失った。

「昨日は言えなかったので」

「なんで……」

重樹は混乱した。

自分の失態のせいで、巻き込んでしまった。

なのに、その相手から礼を言われる。

こんなおかしい事があっていい筈がない。

「なんでって、私を守ってくれたのは重樹さんですから」

「違う。俺は、危険な目にあわせて、助けたのは章子」

「章子さんが来るまで守ってくれたのは重樹さんです。そして香奈が出口まで逃げ切って章子さんに出会えたのも、重樹さんがあの時走れって言うてくれたから。それは譲れない」

強い視線に、重樹は言葉を詰まらせる。

今まで憎悪の眼差しを向けられた事は多々あったけど、こんな風に見つめられた事はない。

「私を守ってくれたのは重樹さんなの。だから、御礼を言っんです」
不思議だった。

どうして、そんな事を言えるのか。

あんな恐い目にあわされて。

あんな恐ろしい目にあわされて。

以前助けようとした相手は、自分を睨み付けたのに。

相手の両親は自分に殺意の視線を向けたのに。

しかも今回美鈴達が巻き込まれたのは、完全なる自分の失態だ。
どうして。

どうして――。

「待ってて下さいね」

美鈴が手を振りながら、自分の家に向かって走り出す。

その後ろ姿を見ながら、重樹は目の前にあった対象物が突然消えてしまったかの様な穴の空いた心を持て余す。

罵られると思っていたのに。

時間をおき、一夜明けて。

恐ろしさが美鈴の心を蝕んで。

そんな目に遭わせた重樹を睨み付け、罵るのだと。

それは、ここを待ち合わせ場所にした事からしても絶対な筈だっ

た。

自分が犯した罪を再確認させ、その罪を罵る。
なのに、ありがとうって――。

言われた言葉は御礼。

分らない。

こんな事は初めてだ。

あんなに澄んだ瞳で、ありがとうなんて。

重樹は自分の手を見つめる。

昨夜、この手で美鈴を抱き抱えた。

誰も助けられなかった手。

血塗れの手。

でも、昨夜、美鈴を死なせずにすんだ、手。

「わからない……」

わからない。

こんな事は、初めてだから。

そう、あんな目にあわせて御礼を言われたのも。

自分を罵らず、こうして気安く接してくれたのも。

それに……。

昨夜の事を思い出す。

結界が壊れる瞬間、美鈴が自分を守ろうとした、あの光景。

考えるだけで、更に分らなくなる。

それでも走る去る時に浮かべた美鈴の笑顔が、いつまでも重樹の
心に残った。

第四十三話 神有家

神有家本邸。

それは、伝統的な純和風の日本家屋の佇まいをしていた。

門を通り抜け敷地内に進む車の中で、香奈は憂鬱な思いで景色を眺めていた。

約五千坪の敷地を持つ日本家屋の敷地内には、瓦葺き屋根の木造三階建てかつ地下二階まである屋敷面積約二千坪の本邸を始め、離れが五つと蔵が数個ほど存在する。

広い中庭は池泉回遊式庭園の見事な日本庭園で、池中に設けられた小島や橋、林を始め、茶亭、東屋などの休憩所や、奥には薬草園も存在する。

また、昔ながらの日本の趣に満ちた歴史的建造物としての価値も高い。

しかし、ガス、水道、電気は昔ながらではなく、現在の一般家庭と同じものが使用されていた。

家屋の中は六畳から三十畳の部屋が三十室ほどあり、それぞれに趣が異なった内装が施されている。

床や柱の素晴らしいケヤキ塗り、漆喰の壁、神代杉の天井、うぐいす張りの磨き抜かれた廊下はもはや芸術品だった。

そして襖一つとっても有名な芸術家による手の物だという。

何でも、数代前の当主が芸術家の卵達を養った縁から、彼らが有名になった後に作品を送ってくれたのを飾っているらしく、襖や書、壺、花瓶、更には食器の御猪口一つでも数百万の価値があるという。

本邸前の広場に辿り着くと、先に降りた運転手が香奈の座る後部座席のドアを開けた。

こうなればもう外に出るしかない。

椿の為にもここに来る必要がある。

そう思っているが、やはり気分は重かった。

長い歴史を経て培われた厳格な雰囲気もそれに一役買っている。ただ、それ以上に、ここは自分の居場所ではないとの思いが香奈の心を重くさせる。

敷地に足を踏み入れた瞬間変わる研ぎ澄まされた空気。

敷地の外と同じ筈なのに、空気が、風が、全てが変わる。

恐ろしいまでに清廉で神聖な――場所。

有名なパワースポットともこういう感じなのだろうか。

心霊スポットでさえ感じない、何かを、香奈はここに来ると感じる。

それが、香奈に場違いな場所に来てしまったと思わせる。

自分は此処に居てはならない。

此処から消えなければならぬ。

自分の存在は此処では異質。

それは年々強まり、香奈の中に渦巻いていく。

けれど、来ないという選択肢はない。

神有家の分家である限り、本家から絶縁でもされない限り、香奈はここに来なければならぬ。

というか、母が家出しているのにどうして神有家は神無家と縁を切らないのだろうか。

それが本当に不思議でならない。

普通家出なんてものは家の恥であるというのに、今もこうして付き合いをしている。

本当に不思議だ。

まあ、それでも母の事を思えば絶縁されなくて良かったのかもしれないが。

いくら家出したとしても、母にとってはここは実家。

そして本家の者達は母の家族である。

そう、母の為に絶縁なんて駄目だ。

そうして何とか自分を奮い立たせるが、一歩進んだ瞬間体を貫くような凜と研ぎ澄まされた清廉なる空気に香奈は目眩を覚えた。

たぶん、ニンニクの湖にツツコンだ吸血鬼とは、こういう気分なのだろう。

自分だけが、部外者だと言われている様な空気に、どん底まで気分が下がる。

やっぱりこの空気は好きになれない。

自分が家出した姫の子供だから、ここに来るなどとも言われているのだろうか。

だが、そこに更に追い打ちをかけてくる運転手が居た。

「どうぞ、控えの間に。そちらに従姉妹様達が既にお待ちです」
従姉妹――。

それを聞いた瞬間、香奈の気分はもはやどん底を突き抜けた。会議に参加出来ない子供は控えの間で待つのが鉄則。

それは別に良いのだ、が。

「い、従姉妹」

それは、香奈にとっての鬼門の一つであり、やはり此处に来たくない原因の一つでもあった。

出来るなら、いや、出来る限り、ううん、絶対に会いたくない。分家筋はまだいい。

そう――問題は本家筋だ。

柚緋とか、綾乃とか。

いやいや、まだいる。

由宇とか、蘇芳とか、黎とか、理子とか。

特に問題なのは柚緋と綾乃の二人だが、他の四人も最悪だ。

柚緋と綾乃は兵器で言えば最終兵器。

他の四人は最終兵器をサポートする――核融合補助装置。とにかく、関わりたくない。

気があわないなんて可愛いレベルではない。

見付かったが最後、香奈は確実に餌食になる。

ふざけんなと何度叫んだだろうか。

自分はお前らの玩具じゃない。

物心ついた時から追いかけて回され、危険な場所に置き去りにされ、助けて欲しかったら言う事を聞けだのとほざいてくれた。

そればかりか、他家から来た他の子供と遊んでいたら、毎回音もなく現れては笑い一つで遊んでいた子達を連れて行ってしまった。

そんな事を毎回毎回されていて、「柚緋達の事大好き」なんて香奈には言えない。

従姉妹同士仲良くして下さい？

無理無理。

香奈は心の中でぶんぶん両手を振る。

それでも今はまだマシだった。

昔と違い、今では親族会議で月一回の頻度だから。

けれど、その月一に来れば、彼らは香奈を追いかけて回す。

だからいつも途中で逃げ出すのだ。

そして壮大なカクレンボ、見付かったら鬼ごっことなる。

因みに助け鬼にはならない。

だって味方が居ないから。

はつきりいつて命をかけた戦いである。

会議が終わるまで逃げ切れたら勝ち、捕まったら負け。

他の遠方の親族とは違い、会議が終われば自宅に帰るから、夜まで逃げれば何とかなる。

戦績は、百二十戦中五十勝七十敗ぐらいか。

大切なのは、とりあえず奴等の居る控えの間に入り、その後隙を見て飛び出す。

これが大事である。

よし、今回もこのパターンで行くか。

そうして、当主たる祖父への頼み事より自分の身の安全を模索する香奈は、何時の間にか運転手を追い越していた事にも気付かない。

そして、玄関まで後一步という所で。

「あ」

ガクンと体が沈む。

足を置いた地面が、そのまま香奈ごと下に。
見えていた玄関が消え、土色一色に染まる。
ボスンと何かにぶつかり、不思議な浮遊感が終わった。
落ちたと気付いたのは、それから暫くして。
悲鳴が上から聞こえてくる。

とりあえず香奈は状況を判断した。

香奈は重ねられたクッションの上に居た。

大小様々なふかふかの可愛いクッション。

けれど、横は土の壁で、上を見上げれば数メートルほど上にぽっかりと丸く開いた穴から空が見える。

運転手やら家人やらが騒いでいる声が聞こえた。

「香奈様！」

「だ、誰か梯子を！」

「いや、レスキュー隊だ！」

「それより影を！」

「つてか誰が此处に落とし穴を掘ったんだあああつ」

そうか、落とし穴に落ちたのか。

しかし落下した際に怪我しないようにクッションを置いてくれる
とは中々に優しい――。

「んなわけあるか」

香奈は冷静にツツコンだ。

人を落とし穴に落すのにクッションだけは敷くつて、ただ落とし穴に落すより悪質ではないか。

人に嫌がらせをしたいのか、それとも――いや、何がしたいんだ。
香奈は昏々と落とし穴の下で考える。

そして一つの結論を出した。

とりあえず、殺さない程度での嫌がらせだろう。

数メートルに及ぶ落とし穴。

クッションが敷かれてなかったら、骨折か、それか首の骨を折って死ぬ可能性だってあった。

つまり、ここでまず死なない程度の嫌がらせ又は脅迫と考えられる。

更に玄関前に掘られていたという事は、『お前にはこの神有本家の敷居を踏むだけの価値もねえんだよ!!』と言われているのかもしれない。

しかし嫌味や嘲笑はまだしも、落とし穴は初めてだ。
手を変えたのか。

それとも相手が変わったのか。
例えば、孫に本当に敷居を踏むだけの価値があるのかと、当主が直々に判断し始めたとか。

目の前に梯子が降ろされた。

「香奈様！　どうかそれを登って下さい！」
降ろされた梯子を登る事数分。

ようやく地上に出た。

泣きじやくる運転手や傷がないかと集まってくる家人達に香奈はポツリと呟いた。

「歓迎されてないんだね、私」

その途端、なんだか崩れ落ちる運転手達が見えた。

第四十四話 衝撃的な出会い

騒ぎを聞きつけた柚緋が正面玄関にやってきた時、そこでは異様な光景が広がっていた。

とにかく必死に巨大な穴を埋め立てる家人達。

そして香奈を説得する残りの家人達。

その一人が、柚緋に気づいて事情を説明した時、心に浮かんだ思いはただ一つ。

(じ〜〜〜じ〜〜〜いいい〜〜〜〜〜!!!!!!)

祖父への果て無き殺意が溢れる。

殺す気か孫を!!!

「クッション敷き詰められていたので殺傷能力は皆無ですが」

まるで人の心を読んだかのように告げたのは、長年この屋敷に仕えてくれる家人の男。

祖父の時代から仕えており、彼の言うことなら執事の高岡 秋人の発言並みに聞き入れる。

「祖父に伝えてくれ」

「何をでしょう？」

気の良いこの男を利用する、そんな罪悪感は——とりあえず微塵も抱かず柚緋は笑顔で告げた。

「香奈声で『香奈、おじいさまなんて大嫌い』、一字一句間違わずに伝えてこい」

「ちよっ！ それ言ったら当主が——柚緋様?!」

家人の叫びも気にせず柚緋はすたすたと香奈へと近づいていった。が、当然その騒ぎに気づかない香奈ではなく、後二メートルのところでしっかりと見つめ合った。

「.....」

「.....」

先に動いたのは香奈だった。

すさまじい勢いで走りだそうとする香奈に、柚緋は自分の履いていた草履を投げつけた。

「ぐほおおっ」

「ひいいい！　香奈様ああっ」

木製のそれは、当たり所が悪ければきつと対象物を殺せる。

それを微塵の躊躇いもなく実行した柚緋に恐怖を覚える家人達は、その恐怖が邪魔して誰も柚緋を止められなかった。

「ったく、人の顔見て逃げ出すんじゃないよ」

完璧に目を回した香奈の首筋を掴み廊下を引きずっていく柚緋に、二人の今後が心配になる彼らはしばしそのまま凍り付いていた。

が、程なくそんな彼らを溶かす相手が現れる。

コツンと足音を立て、落ちついた声音が耳をなでる。

「こんにちわ、あの」

その声に、彼らはハツとして振り返れば、一組の男女の姿があった。

女性の方は平凡な二十代前半頃にも見える容姿だが、男の方の美貌に彼らの思考は吹っ飛んだ。

近寄りがたい硬質な氷の美貌は、高貴かつ繊細ながらも妖しく謎めいていて。

長身ながらもどこか中性的な雰囲気の肢体からは、妖艶で扇情的な色香が香る。

氷貴人——それが、美女と見紛う美貌を持つ彼の呼び名である。

そんな彼は、隣にいる少女が頭を下げると、同じように優雅に頭を下げて挨拶の言葉を述べる。

シャランと澄んだ音が聞こえた。

それは彼が耳につけたイヤリングからか、首元のネックレスか、それとも腕輪がもたらした音色なのか。

男にしては少々装飾品が多いが、それすらも彼の魅力を引き立てるものでしかない。

そんな彼が守るように側に居る女性はただ一人。

「お、お待ちしておりました——夢見 咲様」

頭を下げた家人の隣で、また別の家人が頭を下げる。

咲の隣にいた、美しき佳人に向けて。

「玲珠様もよくぞ来てくださいました」

恐縮する咲の隣で、玲珠が淡く微笑む。

その笑みは、まるで男達を墮落させる淫魔の様にぞくりとするほど艶麗だった。

その頃、香奈は暴れていた。

「離せっ！ この男女っ！」

「五月蠅い黙れ泣かすぞ」

相変わらず首根っこを掴まれたまま柚緋に引きずられていく。

というか、だんだん首が絞まってきた。

これは何のプレイだ。

いや、拷問か。

しかも首を転じれば相変わらず麗しい柚緋の姿がそこにあった。

鴉の濡れ場の様な黒髪に黒曜石の瞳。

首から上の顔も超絶和風美少女だが、首から下も凄い。

男にもかかわらず、その妖艶な色香を振りまく肢体は大輪の花咲

き誇る振り袖に包まれている。

はつきりいつてこれで男だと分かった方が凄い。

たいてい、初めて見た者は誰もが柚緋を女だと間違っし、初めてでなくても女だと勘違いする。

というか、脳が柚緋を女として捉えたがっっているのかもしれない。

たぶん美女コンテストに参加すれば確実に優勝するだろう。

それこそ、柚緋の美貌は数多の美女条件があるだろう世界にも通じる完璧な美少女ぶりである。

できれば、そのままだこそこの富豪にでも見初められて日本から出て行って欲しい。

「その時はお前をペットとして連れて行ってやる」

「いやだ」

心を読んだのか、完璧なやりとりがそこで行われた。

「ってか離せ」

「離したら逃げるだろ」

ずるずると引きずられ、香奈は逃げるまもなくとうとうその場所へと連れて行かれた。

ずううんという効果音が聞こえてきそうなほど、凄まじい威圧感と怨念を放つ障子はその向こう側が原因。

「とつと中に入れ」

後ろには柚緋、前には怨念の障子。

柚緋の手からは解放されたが、どっちにしろ逃げ場はない。

「く、くそおお」

こうなったら、一度中に入るしかない。

香奈は、意を決して障子に手をかける。

大丈夫、この中にいるのは別に猛獣でも幽霊でもない。

いや、むしろそちらの方がよほどマシだった。

中に居るのは、香奈にとって従姉妹や遠縁に当たる親戚の子供達だ。

今日の親族会議に参加する親に同行し、年齢が達していないから会議が終わるまでここで時間をつぶす子供達。

しかし、子供達しか居ないはずなのに、凄まじい黒い気が立ちこめる。

障子を挟んでいてこれなのだ。

だが、動き出した手はまるで操られるように障子を引いていく。

これが、魔に魅入られるという事なのか。

母の実家で、向こうにいるのは従姉妹達という普通なら全く心霊怪奇現象とは関係ない状況で、香奈は激しい危機を感じていた。

が、思い返してみれば、これもいつもの事だったような気がする。そう、毎回毎回こういう状況に陥っていた香奈だった。

ガラガラと音を立てて障子が開ききった。

「……」

「ああ、香奈か」

薫る煙はたぶんお香。

脳を揺らす様な官能なる香りの中で、一斉にこちらを向くのは十六歳までの子供達。

どの子も美しいが、中でも従姉妹達はの美しさはすば抜けていたが、なぜ皆が服を乱しているのだろうか。

男も女も、着ている服が乱れ、脱げ、半裸に近い者も居る。

それこそ、まるで王の訪れを今か今かと気怠げに待つ女達の園――ハーレムだと、この状況を見た者は表すだろう。

「魔女のサバトっ！」

だが、香奈は別の表現をしてバンッと障子を閉めた。

とたんに、遮断される部屋の中の邪気。

だが、今度は後ろから圧倒的な威圧感が襲いかかってきた。

「何がサバトだ」

自分が数分前まで居た場所を馬鹿にしてんのか。

柚緋が放つ黒い闇に、香奈は凍り付いた。

命がピンチ。

いや、命よりも大切な何かがピンチな気がする。

と、目の前で障子が開いた。

「へ？」

開いた障子から伸ばされた沢山の腕がそこにあつた。

あ、なんか怖い話でこういうのがあつた気がする。

生者を引きずり込む死者の腕。

引きずり込まれたら、死ぬ。

でも大切な何かも奪われる。

その瞬間、香奈は命よりも大切な何かを守るために動き出した。

「っ！」

香奈の頭突きを寸前のところで避けきつた柚緋だが、突然の事に反応が遅れた。

「待て！」

腕を伸ばすのが遅れたせいで、香奈はその腕をぐぐり抜けて走り出す。

「ああ！ 柚緋、何してるんだよ！」

「柚緋様の馬鹿ああ！ 香奈逃げたああ」

「捨てられた」

「逃げられた」

「離婚された」

「殺すぞてめえら」

きやつきやつと笑う年少組の子供達にガンを飛ばしつつ、柚緋は香奈を追いかけて走り出した。

「待てって言ってるんだろ！」

そして始まる追いかけっこ。

他の家と違い、広すぎる神有家は逃げ場も十分あった。

まずは長い廊下。

庭に面した長い外廊下を香奈と柚緋は駆け抜けていく。

途中、幾人もの家人と行き会ったが、家人達はいつもの事として道を譲る。

香奈達を阻む者は誰も居ない。

そう、家族さえも。

広い大広間。

当主とそれに連なる本家の者達が一段高くなった最奥に座り、他の出席者達が壁際に並んで座っている形だった。

ちょうど、「コの字」型の配置は、まるで江戸時代の將軍への謁見を思わせる。

親族会議の最中、採決がとられ、その結果が報告されようとしている時だった。

外廊下につながる障子を背後にしていた清奈はすっと横にそれると、その障子を開く。

そのとたん、開いた障子から誰かが滑り込んでいく。

ちょうど、部屋に入る状態で段差に足を引っかけ、うつ伏せに倒れたまま磨き抜かれた最高級の畳の上を滑り抜けたのは、清奈の娘——香奈。

そのまま部屋を横切り、対岸の出席者が素早く開いた障子から外へと飛び出す。

が、庭に落ちること無く立ち上がり、再び外廊下を駆け出した。それを追いかけるのは、次期当主の息子である柚緋だった。

「待て！　香奈！」

そこが会議場である事は果たして頭の片隅にあるのか。

長い黒髪をなびかせ、着物の裾を優雅に持ちあげて走り去る様はまさしく美少女そのもの。

それを見送り、清奈は開けた障子を閉め、また向かいに座る出席者も背後の障子を閉めた。

そうして子供達が通り抜けた後、再び混乱もなく会議が続けられる。

誰も騒がないのは、誰にとってもいつもの事だから。

今更騒いでも仕方が無い。

それは諦めなのか、呆れなのか、それすらも超越した何かなのか。

「では、次の議題だが」

次期当主——現当主の長男が司会進行の為に口を開いた時だった。
「お父様」

上の妹の清奈がにこりと笑うのが見え、口を閉じる。

妹が会議中に父に声をかけるなんて珍——。

「どうして鼻血を出しておられるのですか？」

鼻血だけでなく、ぶつぶつと呟く当主。

よく耳を澄ませた瞬間、次期当主こと長男はどん引きした。

香奈可愛い香奈可愛い香奈可愛い香奈可愛い香奈可愛い。

確かに妹の娘は可愛いだろう。

しかし、一人の時ならばまだしも、今ここでそんな事を言えば。

ズウウウンと恐ろしい殺気を放つ妹の媚が視界に入り、長男は凍り付いた。

自分もたいてい鬼畜腹黒だが、この妹の媚に比べれば可愛いものだ。

その後、会議は導火線のない爆弾となった清奈の夫——連理によってギスギスとしたものへと変わっていった。

が、その原因となった香奈達は当然それに気づくことはない。

「いい加減諦めて！」

「お前が諦める！！」

「私の辞書に諦めるという文字はないわ」

「嘘だ！」

確かに香奈の辞書にはない。

柚緋関係に関しては。

それ以外では素晴らしいまでに諦めが良い。

ドタバタと外廊下を走り続ける香奈と柚緋。

ちようと屋敷にそった外廊下だから、途中で曲がり角も多く存在する。

しかしそこは慣れたもの。

香奈は曲がり角に立つ柱をうまく使い、上手に方向転換を行っていく。

「このまま逃げるのみ」

いつもの事、いつもの状況。

そう、香奈が大人しく子供達の待機場で時間を潰した事なんて数えるほどしかない。

それはすべて、そこにいる者達のせいだ。

「待てこの小娘がつ！」

「私と柚緋は同い年。私が小娘なら柚緋も小娘」

「口だけは良く回るなっ！」

柚緋の怒りが五割マシになる。

それに呼応する様に、なんだか空間が歪んでいる様な気がした。

「やっぱり柚緋の前世は魔王だ」

魔王じゃなくて、ある帝をたぶらかした絶世の美姫姉妹の長女である事を香奈が知るまでもう少しの時間が必要となるが。

「とにかくどこかに隠れないとな」

このまま走り続けていてもどうにもならない。

香奈は追いかけてここからかくれんぼに転じる為、隠れ場所を探す。が、あまりにも視線を彷徨わせていた事もあり、次の曲がり角に對する注意が散漫となった。

「そうですか、その少女も夢見の力を使えるのですね」

「はい、ですからどうか姫様にご教授をお願いしたいと思い」

廊下を歩くのは三人の男女。

家人の男を筆頭に、後ろに二人の男女がついて行く形となって歩を進めていた。

「この度は本当にご足労頂きありがとうございます」

「いえ、とんでもないです」

咲の微笑みに、家人は今までの疲れが吹っ飛ぶようだった。

容姿こそ平凡だが、その微笑みには周囲の疲れを癒やすような力がある。

「ん？ 玲珠？」

「そういう顔はあまり他に見せないでくれ」

隣を歩く玲珠の顔に、家人は微笑む。

嫉妬の色を濃くする氷貴人は、そのずば抜けた美貌とは裏腹に、まるでどこにでもいる青年のようだった。

家人も愛する妻が居て、その妻と結婚するまで本当に大変だった。妻も自分の魅力に気づかず、他の男達にも笑顔を簡単に見せて……どれほど嫉妬した事か。

特に、男の方が美しければ女は自分の魅力に気づかなくなる。

どんなに注意を促しても、自分なんてと言って貴重な魅力を惜しみなく無意識にふるまいて。

「大変ですね」

思わずでた言葉に、玲珠があっけにとられる。
だが、すぐに苦笑を浮かべて頷いた。

「全くです」

そうして男達が苦笑しながら曲がり角を曲がった時、それは起きた。

「あ」

後ろから玲珠達につくようにして曲がり角を曲がった咲がそう呟いた瞬間、玲珠の前から愛しい女が消える。

「さ——」

突然視界から消えた咲に、玲珠の中で一気に恐怖感が渦巻いた。
その瞬間。

「香奈様っ！」

玲珠が家人の見つめる先に視線を向け、啞然とした。

そこには咲と、咲が受け止めるような形で一人の少女が居た。
が、彼女達が居るのは外廊下に面した池の上だった。

しかも当然この世には重力というものがある。

特に地球では、重力は上から下へと向かう。
なので。

「きゃあああっ！」

どっちが叫んだのかは重要ではない。

二人して池に落ちたのを目の当たりにした玲珠は引きつった悲鳴をあげた。

守ると決めたのに。

もう、美琳を、美琳の生まれ変わりの咲を傷つけないと、どんな危険からも守ると決めたのに。

その誓いはあっさりと破られた。

「ばっ、香奈ああ！」

一度は引き離され、ようやく追いついた柚緋が、いち早くその現場の状況を悟り悲鳴をあげた。

そうして、夢見 咲と香奈の出会いは一
緒に池に落ちるとい
う
とんでもない状況から始まったのだ
った。

第四十五話 両親の友人達

それは神有家の最奥にある楔ぎの間。

ひんやりとした静謐な空気が漂う場は、人を容易に寄せつけない神秘的な聖域という言葉が相応しい。

その空間に広がる澄み切った泉は、一目で神聖なものだと悟るだろう。

同時に、そこに身を浸せるのは、選ばれし者のみ。

神かそれに近いものだけが入ることの許される、そんな場所だった。

そこに今、一人の存在が身を清める為に泉の中心に立っていた。

長い黒髪のが水の上で舞う。

白く艶めかしい裸体は淡い燐光を放っているようにも見えた。

その光景を見た者は誰もが眩くだろう。

女神——と。

「柚緋様」

泉の前で傳く女性達の中で、最も高位の巫女が前に進み出て頭を垂れる。

「用意ができました」

「そうか……香奈は？」

「姫様は先に」

その言葉に、柚緋は巫女達の方へと足を勧める。

泉からあがると、巫女達が柚緋の体を白い清潔の布で覆う。

ただそれだけなのに、間近にある神々しいまでの雪花石膏の肌に巫女達はため息をつき、続いて目眩を覚える。

触れがたいほど神々しく、けれど思わず触れたい、穢したいと強く願ってしまう。

艶めかしい肢体、蠱惑的な色香。

清らかな筈なのに、どんな巫女姫よりも美しい筈なのに、どこまでも扇情的で相手を惑わす。

神々すらもこの美しさに抗えないかもしれない。

ああ、どうしてこの方が男なのか。

いや、もはや性別など関係ない。

美しさに、性別など関係ない。

欲しい。

この方が。

しかし、そんな彼女達を一瞥する事なく柚緋はさっさと楔ぎの間を後にしたのだ。

その頃、神有家客間では簡単な自己紹介が行われていた。

「夢見 咲と言います。どうぞよろしくお願いします」

まるで日だまりの様な笑顔を浮かべる咲を香奈はじっくりと見つめた。

纏う空気は温かく柔らかく本当にお日様そのもので、自分のせいで一緒に池に落ちたのに逆に心配までされてしまった。ぶつかった事はもちろんすぐに謝った。

どう考えても香奈の方が悪いから。

けれど、下手すれば溺れてしまう危険性があつた事でも、笑顔で許してしまえる彼女はきつととても懐の大きい人なのだろう。

そんな事を思いながら、香奈は咲の隣の相手へと視線をずらした。咲が日だまりなら、彼は吹雪。

決して溶けることの無い、永久凍土の上に覆い被さる万年雪を思わせる。

その美貌は、手を触れれば壊れてしまいそうなほど儚く、触れることの許さない高貴な氷の結晶の華を思わせる。

人ならざる美貌とはこういうのを言うのだろう。

袖緋と並んでもなんら遜色のない程であるばかりか、どこか人形めいているが、咲が話しかければ途端に人間臭くなる。

それは、誰もが傳く天高き場所に存在する神が、突然隣に住むおばちゃんになつてしまつたかのような……そんな印象を受けた。

といつても、隣に住むおばちゃんなど比較にならないほど一つの動きが鮮麗されているが。

貴族——という言葉が香奈の脳裏に浮かんだ。

「あ、隣にいるのは玲珠と言うの」

「玲珠と言います。咲の夫です」

「お——」

なぜか咲が慌てだした。

いや、慌てるというよりは顔を真っ赤にして恥ずかしがっている。

「……新婚さん？」

「いえ、もう結婚して長いです」

そう答える玲珠はどこか嬉しげに見えた。

「え」と、玲珠さんと、咲さん。で、二人は夫婦なんですね」

「……まあ」

「まあってなんだ」

「え、う、その……は、恥ずかしくて」

「ああ、照れてるんですね」

香奈がぼつりと呟けば、咲が余計に慌てだした。

「て、照れ」

「そうか」

「玲珠っ！」

最初はどこか近寄りがたかった硬質な空気は消え、にこにこ満
足げに笑う玲珠の様子になかなかの愛妻家だと香奈は判断した。

「そ、それより、清奈ちゃんの娘さんがこんなに大きくなったのね」

「母を知っているんですか？」

「ええ、同級生だったの」

咲の言葉に香奈は驚いた。

いや、自分の両親もとうてい三十には見えない。

だが、咲はもつと見えない。

玲珠でも二十代半ばに達するかどうかで、咲に至っては確実に二
十代前半だ。

「凄く若く見えます」

「ありがとう、でももうおばちゃんなのよ？」

そう言いながらも嬉しそうに笑う咲は、優しい眼差しを香奈へと
向ける。

「でも、あんなに小さかった香奈ちゃんがねえ」

咲は昔を思い出しながら呟く。

あの時は、自分と玲珠も居なくなってしまった清奈を必死に探し
ていた。

そうしてようやく見つかってまもなく、狂った連理の暴走が始ま
ったのだ。

清奈は小さな赤子だった香奈を胸に抱き、狂った荒ぶる神となっ
た連理の元に向かい、彼を納めた。

彼だけではない。

強引に連理と結婚させられかけた事で連理と共に狂った清奈の妹
も、神有家の主立った者達の暴走も清奈は納めてしまった。

一歩間違えれば確実に死んでいた。

荒ぶる神はそれほどに恐ろしい。

しかもそれが連理であればなおさらだった。

冥界の神々の中でも、それこそ歴代の冥界大帝すら足下に及ばない彼を止めるのは神々でも骨が折れる事だった。

十三の世界からなる神々の世界——天界十三世界。

その一つである炎水界の大国——珍珠の祖国である凧国すら荒れ狂う水を治めるだけで精一杯だった。

かの国は凧と時化、すなわち水を司る。

連理の暴走を受けたのは、火、水、土、風、雷。

どれもが人間界を構成する大きな要素であり、凧国は清奈の援護にまわる事はできなかった。

たった一人で立ち向かうしかなかった清奈。

いや、違う。

清奈と香奈、その二人で立ち向かったのだ。

その時の小さな赤ん坊の成長に、咲はそつと目元をぬぐった。

あれから、自分も夫と共に凧国に行くことが多く、清奈と連理の二人に会うことはあっても香奈に会うことはほとんど無かった。

また普通の娘として育てたいという連理の方針もあり、神の世界に近い自分や完全なる神である珍珠が近づくことは躊躇われ、結局は自ら会いに行く勇氣も持てなかった。

「大きくなっただわ……本当に」

暴走した連理にとって、清奈と香奈は間違いなく宝物である。

当時、清奈の腕の中で可愛らしく笑った顔が、目の前の香奈と重なる。

そうして咲が感慨深い面持ちを浮かべる一方、香奈は咲と珍珠を交互に見た。

「珍珠さんも、母の同級生なんですか？」

「いや、俺は違う——けど、知り合いではあるな」

「珍珠」

「ああ、うん。友人だよ、清奈と連理のね」

氷の様な冷たい美貌が、微笑むことで驚くほど柔らかく優しいものとなる。

「父と母の」

「ああ。咲と一緒に、夫婦揃っての付き合いをしてる。因みに、先に仲良くなったのは咲の方で、咲が連理と清奈の二人と知り合った後に俺が咲を通じて知り合ったという感じかな」

「あの時は色々大変だったものね」

「うーん、確かに」

くすくすと笑う二人に、香奈は羨ましさを感じた。

自分もいつか好きな人ができて結婚できたらこういう夫婦になれるだろうか。

「で、君の事も、赤ん坊の頃から知ってる」

「それで、今日は両親に会いに来たんですか？」

「いいえ、あなたに会いに来たの」

「え？」

咲の穏やかながらも強いまなざしに香奈は気圧される。

「私に？」

「ええ。といつても、友人の子に会いに来たのではなく、あなたに教えなければならぬ事を伝授する為に」

「……教える？」

その時、背後でスツと軽い音を立てて障子が開いた。

振り向けば、そこには相変わらず艶やかな着物を身に纏った柚緋が立っていた。

鴉の濡れ羽の様な黒髪は背中に垂らされ、動く度に妖しく揺れ動く。

華奢な輪郭とすつきりとした目鼻立ち、黒曜石の瞳からなる白皙の美貌は、相変わらず日本人形よりも麗しかった。

滑らかな纖手が流れるように障子を閉め、滑るように畳の上を歩く一連の優雅な動きに目を奪われないものは一人も居ない。

華奢な肢体を包む紫色の着物の柄は、大ぶりの牡丹と蝶。

柚緋の妖艶さをいっそう引き立てるそれは、香奈の目から見ても最高級品の着物だった。

というか、男なのに振り袖をここまで見事に着こなす存在はなかなか居ない。

香奈も七五三で着物を着たが、予算の関係から一番安い着物で、しかも着こなすのではなく完全に着られていた状態だった。

また、髪の毛も短く、綺麗な髪飾りが逆に浮きまくる始末で、その時の写真は嚴重に香奈自身の手で封印されていた。

と、そんな部分もまた柚緋に会いたくない理由の一因となっていた。

自分よりも完璧に着物を着こなし、完璧な和風美少女となってしまう従兄弟にわざわざ好き好んで会いたいものがあるだろうか。

いるかもしれないが、香奈はイヤだ。

その完璧な女顔も、壮絶な色香も、たおやかで淑やかな仕草と柔らかな物腰も、深層の汚れ無き巫女姫と呼ばれるよ相応しい美貌も、全てが腹立たしい。

そして香奈はその感情が何かを知っていた。
嫉妬だ。

ただでさえ人をおちよくりからかい虐め倒す相手が、女の自分よりも綺麗だなんて腹立たしい。

だから、香奈は柚緋を避ける。

からかわれたり酷い目にあわされたりする事よりも、男なのに女よりも綺麗なんて。

自分の立つ瀬があまりにもないではないか。

『柚緋様は本当にお綺麗ですね』

『本当に！ その着物もとてもお似合いですわ』

『あ、香奈様——ああ、その、はい』

『か、香奈様の着物も、その、似合ってますね』

『というか、安物をそこまで着こなせるのは素晴らしいですわ』

嘘つき。

香奈は過去に自分を褒め称えた者達に向けて吐き捨てた。

七五三で、七歳のお祝いに着物を着て神有本家に出向いた。

そこで、美しく装った柚緋と並んでいた香奈に、屋敷に来た客達は褒め称えたのだ。

表向きは香奈の事も柚緋と同じぐらい褒めては居たが、裏では香奈の事を徹底的に蔑んでいたことを。

悔しい、腹立たしい。

そして香奈は、二度と着物を着ないと決めた。

沢山の反物を前にした祖母が着物を作ってくれと言った時も、香奈は決して反物を選ばなかった。

いない。

着ない。

どうせ、比較される。

わざわざ傷つくなんてバカみたいだから、香奈は着物を着ない。

「何ボケてんだよ」

「っ」

遙か過去に飛んだ心が、柚緋の言葉で現実に戻される。

気づけば、自分の隣に当然のように座っている柚緋が居た。

ふわりと香るのは、何の香かと考えすぐに香奈は考えを打ち消した。

これは香ではなく、柚緋自身の香りだ。

小さい頃はよく嗅いでいた香りだったが、神有本家に来る機会が少なくなっただけからは嗅ぐ機会も一気に減った。

と、柚緋が向かいに座る咲と玲珠に向かって頭を下げる。

「この度は、突然の申し出にも関わらず神有本家までご足労頂き、誠にありがとうございます」

完璧な作法だった。

お辞儀一つ思わず目を奪われる様に優雅で、香奈は呆然と魅入った。

「こちらこそ貴重な申し出を頂き嬉しく思います——と、こんにちわ、柚緋さん」

「久しぶりだな、柚緋」

微笑む咲と玲珠。

が、柚緋を見て香奈は驚いた。

あの自分にとって価値の無い相手や邪魔する相手には石ころほどの価値も認めず、完璧な作り笑顔を浮かべる柚緋。

しかし今、柚緋は柔らかで暖かみのある笑顔を浮かべていた。

それは近い者達だけに見せる特別な笑顔だった。

それだけで、柚緋にとってこの二人は尊敬する相手なのだと香奈は悟った。

「お二人に会えて本当に嬉しく思います。また、この度は長らくお待ちたせしてしまい申し訳ありません。楔ぎを行っていました」

楔ぎという言葉に香奈は首をかしげた。

そういえば、池に落ちた後に入られたお風呂の中で聞いた気がする。

入浴後、香奈はすぐ近くの泉へと連れて行かれ、そこで泉の中にたたき込まれた。

が、水中待機時間およそ三秒。

寒くていれませんかとかばかりに飛び出て逃げ出し、結局あれは何だったのか分からないまま、この和室で先に入浴を終えて待っていた咲の元に戻ってきたのだ。

というか、本当に冷たかったのだから仕方が無い。

しかし柚緋には既に話が言っていたらしく、ギロリと睨まれた。

「この、ボンクラ女が」

「誰がボンクラなの」

「お前だ。ったく、楔ぎを三秒で終わらせるバカがどこにいる」

「え？ 楔ぎって、もしかしてあの泉に入るの？」

「そうだ——ってか、その様子だとそれすらも知らなかったみたいだな。神有家本家のくせに」

「知らなくて悪かったね。ってか、お母さんは家出てるんだから分家です」

「ああ？ 清奈叔母は特別だ」

ああ言えばこう言う。

柚緋との関係は昔からこうだ。

と、そこにかかなり心外な言葉が聞こえてきた。

「ふふ、仲が良いんですね」

「良くないです。ってか、こんな性悪根性の腹黒鬼畜いじめっ子と仲なんて」

「へー、誰にものを言ってるんだこの小娘があっ！」

「ぎゃあああああ！ ギブギブギブううう」

逆エビの地固めを食らった香奈がばんばんと畳を叩いてギブアップを叫ぶが、残念なことにレフリーが現れる事はなかった。

そうして完全にギブアップした香奈から離れ、柚緋は埃を払うように手を打ち払う。

「俺に逆らうからだ。身の程をわきまえろ」

そう言つと、別室にと咲と玲珠を促し、柚緋は香奈の片足を掴みそのまま引きずっていった。

「……あの二人って、従兄弟よね？」

「……だと思っ、たぶん」

にしては、扱いに色々と問題のある二人だと咲と玲珠は苦笑するしかなかった。

第四十六話 説明

オボエテイテ

オボエテイテ

ネガイハ

ソレダケナノニ

タダソレダケダッタノニ

闇の中、蠢く幾つもの『想い』。

闇の中に墜ちながら、それでも『カレラ』が願うただ一つの想い。自分達が一体何だったのかそれさえも思い出せず、いつしか想いすら歪んでいく。

深い汚泥の中、ぼんやりと見える光に手を伸ばそうとも届かない。最初はそこに居た筈だった気もするが、それすらもはつきりしなくなる。

オボエテイテ

ナニヲ

ワスレナイデ

ナニヲ

個は失われ全となる。

そしてその全は闇の中へと飲み込まれていく。違う、生きる場所は最初からここ――。

その時だった。

——三

その声に、『カレラ』は笑う。
ああ、もうすぐなのだ。

それにほら——。

ワタシたちハココニイルヨ。

その証を、示すのだ。

「ユメミ？」

首をかしげる香奈に、正面に正座して座る咲が柔らかに微笑む。

「ええ、夢見。それが私の能力」

能力や能力者について知っているとなれば話は早い——そういつて、香奈が何処まで知っているかをまず確認した後、咲は自分もまた能力者である事を明かした。

その能力こそが「夢見」。

しかし、香奈は夢見という言葉を初めて聞いた事もあり、聞き慣れない言葉にひたすら首をかしげるのだった。

「夢見は夢を見ると書くの。そして字の通り、夢を見る事で色々な事を知る事が出来るの」

「色々な事？」

「ええ。未来なら予知夢、現在なら今起きている事をリアルタイム

で、そして過去ならば過去視というように」
「見るだけなんですか？」

香奈の疑問に咲は頷く。

「ええ、見るだけ。でも、見ることで沢山の情報を得られる。特にそれが過去ならば、直接見る事でその時に何が起きていたのかという真実を知る事が出来るの。そしてそれは、とても重要な事。自分達に都合の良いように過去を偽り未来に残しても、真実の過去を見る事でその真実を知ることが出来る」

そこで咲は一息置いて香奈を見つめた。

「たとえそれがどんなに過酷で辛い過去でも、悲劇で救いようないものでも」

「……」

「そうね……過去を見るのが一番辛いわね。未来であれば今の在りようで変えられる可能性があるし、現在でも今動く事で変えられる可能性は高い。でも、過去ではそうも行かないわ。過去は既に起こってしまった事を見るの。たとえそこで恐ろしい悲劇が起きていたとしても、どんなにそこに居る人達を救いたいと願っても、それは出来ないの」

「……咲さんは」

「ん？」

「咲さんも助けたいって願った事はあるんですか？」

香奈の質問に咲は軽く目を見開くが、間もなくゆっくりと頷いた。

「ええ、あるわ。でも、助けられなかった。見ていただけしか出来なかった。今すぐそれを引き起こした相手を殴り倒したくて……」

何も出来ないの。既に起きた映像を見ているだけの私には」

その時を生きていた者だけが、その時を変えられる。
寂しそくに呟く咲を香奈はじつと見つめ——そして口を開く。

「あの、さつき咲さんは私にに教えなければならない事を伝授する
為に来たと言いましたけど……」

「ええ……その通りよ。私はあなたに教えなければならない事があるの」

強い眼差しに息をのむも、香奈は自分の意見をしっかりと口に
する。

「その、それって今でないと駄目なんでしょうか？」

「え？」

「あの、実はちょっとやる事があって」

問題となる日までもう残り少ない。

狙われている椿を逃がすための場所として、この神有家を使用す
る事を祖父に直談判しなければならぬ。

それを、会議が終了後に香奈は祖父に頼み込まなければならない
のだ。

失敗は許されない。

椿の生存率を上げるためにも、何が何でも祖父には納得してもら
わなければならないのだ。

ただ問題は、椿をかくまうとなれば、当然連続無差別殺人事件を
引き起こしている犯人が神有家に迫る危険性があり、神有家当主と
しては当然ながら拒否する可能性が高い。

それを何とかして納得してもらおう。

それはかなり厳しい話し合いになるだろう。

香奈はあまり祖父と話をした事はないが、多くの分家達をまとめ上げ、会議でも厳かに厳粛な雰囲気と厳格さを漂わせている様を見れば、どう考えてもすんなりと納得などしてくれない。

そちらだけでも頭が痛い今、悠長に別のことに意識を向けている暇がないというのが香奈の本音だった。

「やる事ってなんだ」

「御祖父様をお願い事が」

当然の如く、柚緋に突っ込まれたが、別に隠す事はないとして素直に答えようとした。

どちらにしろ、祖父に話せば次期当主の息子である孫の柚緋にも伝わるのだから。

しかし、香奈の答えは途中で遮られた。

「お前、それ人として捨ててはいけない何かと引き替えだぞ」

「は？」

「だから、鬱陶しすぎるウザ人種との共存を果たさなきゃならないって言ってるんだよ」

当然祖父は「孫のお願い」と引き替えに香奈との時間を強請るだろう。

そう——「祖父と孫の団らん」とか「祖父と孫の食事」とか「祖父と孫の買い物」とか「祖父と孫の——」。

別にいかかわしい事はしないが、あの存在自体が変態な祖父との時間は一秒だとして苦痛でしかない。

それに香奈が耐えきれぬだろうか——いや、耐えきれぬかもしれ

ないがそれはしゃくなので全力で邪魔してやろう。

「柚緋、何かよからぬ事を考えてるみたいだな」

玲珠の指摘にも妖しげな笑みを浮かべ、柚緋は変態祖父への対応を考える。

いつもの厳格さは何処にいくのか。

基本的に孫に大甘だが、香奈に対する甘さは特に飛び抜けている。今も誕生日やクリスマス、正月などにプレゼントと称して大量の贈り物を贈っては清奈に送り返されている。

これは、連理の父である冥界大帝の方も同様で、鬼畜と名高い息子に叩き返されてはいつもシクシクと泣いていた。

というか、これほど祖父の愛情が届かない孫は香奈ぐらいではないだろうか。

しかも、それを阻止しているのが実の両親とは……。

「とにかく、祖父に半径十メートル近づくな」

「なっ！ 酷い！ 確かに私は出来損ないの孫だし、お母さんは駆け落ち結婚してるけど」

「馬鹿。お前の精神汚染を心配してるんだよ」

あんなのが祖父だなんて実態を知ったら自殺しかねない。

いや、柚緋ならする。

「でも、椿の」

「その事なら既に把握済みだ」

「へ？」

「悪いようにはしない。だから、お前は今やるべき事をやれ」

「いや、だからやるべき事は御祖父様への説得」

「んなもんいつでも出来るわっ」

いつでも出来るわけではない。

そもそも柚緋と違い、香奈は祖父と一緒に住んでいないのだから、それにいつでもは駄目で、本来ならいますぐにでも説得したい。

「分かった。なら、お前が咲さんとこれから行う修行を行えば無条件でお前の要望を受け入れる。これならどうだ」

「は？　ってか、これから行う修行って何？　ってか修行って絶対に時間かかるじゃない。それに私は落ちこぼれなんだから更に時間がかかるって。でも椿の件はもう時間がないの」

「そんなことはわかってる。それに、椿の件を解決する為にお前には力の使い方を学んで貰う必要があるんだ」
「え？」

キョトンとする香奈の目を柚緋はしっかりと見つめる。

「今回の件はお前にかかっているといってもいい。そう、犠牲者を少なくする為に、犯人の過去を見れるならば、黒幕の存在、そして何故今回このような事件を引き起こしたかを知るのは何よりも大切だ。それにより対応も変わってくるからな」

「過去を……って、それは夢見で？　でもそれなら咲さんが」

そう告げる香奈に柚緋はクツと心の中で笑う。

つい先日までは能力者の存在も知らなかったくせに、もうこれほど順応している。

普通なら能力なんてとまだまだ疑っていてもおかしくないというのに。

だが、香奈の順応性が高い事は柚緋も昔から知っていた。

元々オカルトを信じなかったのも、香奈のある体質のせいだろう

いう被害にあつてこなかったからこそ「ない」と思っていた。
だから、それが「ある」と理解したならば、それ以上グチグチ言うような性格ではない。

「第二の夢見 咲を目指せ」

「馬鹿を言うな。咲はこの世でただ一人しかいない」

こいつ何馬鹿なこと言つてんの？

そんな視線を柚緋に向けた香奈だが、それ以上に妻馬鹿発言をした玲珠にギョツとした視線を向ける。

しっかりと咲を抱き込む妖艶な美女――。

いや、男だが見た目はどう見ても美女、女性、女。

「百合カップル」

「――っ！」

めまいを起こした玲珠を後ろから支える柚緋。

「みたいに見えるほど玲珠さんって綺麗ですよね」

「お前、それ全くフォローになってないし。しかも何爆弾発言して人様に迷惑かけてんだよこの馬鹿娘っ！」

「あ、いいのよ、柚緋さん。いつもの事だから」

そう言つてきつぱりと切り捨てられた玲珠がシクシクと泣いている姿に、香奈はやつぱり美女、いやお姫様だと感じた。

「百合……百合……いや、百合でもいい、百合がなんだ、むしろ俺は咲が相手なら百合だつて構わない。そう、百合万歳だ」

「やばっ……トチ狂った」

「玲珠ってば……」

困ったように微笑む咲とは反対に、柚緋が慌て出す。
ぶつぶつと呟く玲珠が更に強く咲を抱き込む。

「今はそういう時じゃないわ」

玲珠がぺいっと咲によって引きはがされて部屋の隅に転がされるのを香奈は目の当たりにしてしまった。
漫画、いやコメディ映画か。

「咲！ 待ってくれ、俺を捨てるな！」

「それで先ほどの過去視を私が行えないかについてですが」

咲は夫に放置プレイを強いることにした。

「残念ですが、私では無理です」

「え？」

「私では、今回の元凶の過去を見る事は出来ません」

「どうしてですか？」

香奈の疑問に咲は丁寧 to 答えていく。

「そもそも今回の件では、『IPSM』側でも事件の解決の為に『夢見』が必要との判断がなされました。その際、私にも依頼がありました。残念ながら見る事が出来なかった」

「見れなかったんですか？」

「ええ。私を含め、過去を見る事の出来る者達在必死に見ようとしても全て邪魔されて」

何か、強いものが分厚い幕となって覆い隠しているのだという。

「過去を見る事は、特定の日に犯行を犯す犯人の居場所を突き止める事も出来る重要な能力でした」

「居場所ですか？」

「ええ。今の時点では、犯人は特定の日にだけ現れるとなっていてますが、当然それ以外の日にはどこかに潜伏している筈。しかしそれを見つける事はいまだ出来ず、ならば過去をたどることでその潜伏先を見つけようにも過去自体が見れず行き詰まってしまった」

だから、犯行当日にどこかに現れる犯人を捜すという方法しかないのだと咲は悲しげに笑った。

「けれど、探し出す前に犯行が行われればおしまい。特に、今回は椿ちゃんという香奈ちゃんのお友達が狙われている。殺されてからでは遅いわ。そして逃がせばまた事件は続いてしまう。今度は誰が狙われるか分からない状況で、見つける前に次々と標的が殺されてしまうかもしれない」

「……」

「だからこそ、今回の椿ちゃんの件で止めたいと思っているの。椿ちゃんを助け、この事件を終わらせる。その為にも、過去を見る事は大切なの。いえ、たとえ居場所が分からなくても、椿ちゃんの元に現れた犯人を止めるには」

「止めるには……？」

「そう。今回の事件にはきっかけがある。何事にも始まりがあるように、この事件が始まったきっかけが存在する。それを知る事で、相手と対話し説得して止めるの。でなければ力尽くで倒すしかないでもそれは双方に多大な被害をもたらしてしまうわ。悪ければこちら側だけに死傷者が出るかもしれない——先の一件のように」

重樹の友人の死を指す言葉に香奈は何も言えなかった。

「だから、絶対に過去視は必要なの。でも、私達には出来なかった。どんなにしたくても——」

それを覆い隠す『モノ』が居るから。

自分の無力さに咲はどれだけ嘆いたことが。

「けれど、ようやく見つけたわ」

「見つけた？」

「ええ、あなたを。過去視が出来たあなたを」

「過去視が、出来た？」

わたし——？

「ええ。今まで夢を見なかった？」

「……」

「怖い夢、恐ろしい夢、悲しい夢。それは、あなたが今回の件の犯人の過去を視たから」

「……私」

「教えて、見た夢を。その後で私はあなたに教えなければならぬの。あなたの力を引き出し、制御し、今回の事件を解決する為に」

咲がそつと香奈の手を取る。

「あなたの視た夢を」

教えて——。

香奈は誘うような咲の囁きに無意識に頷き、話し出した。

祖父を亡くした小さな女の子。

いつしかその死を忘れた女の子。

炎に包まれた恐ろしい夢。

何かが自分を見て笑った時の恐怖。

そして――ワスレナイデという言葉。

オボエテイテ。

オボエテイテ。

そう、覚えていて。

咲は全てを話し終えた香奈の頭を優しくなでた。

「そう……やっぱりあなたも『夢見』なのね」

正確には違う。

彼女が見たのは『死にまつわる夢』。

でも、咲達でさえ見れなかった過去を覆い隠す分厚い幕をかき分けてそれを見た香奈の力は、紛れもなくこの行き詰まった事態に一条の光をもたらすだろう。

「力を貸して、香奈ちゃん」

「咲さん」

「あなたの力が必要なの」

これ以上の犠牲を出さない為に。

そして――相手の魂の消滅という最悪な事態を回避するためにも。

第四十七話 限られた時間で

能力者や能力、この世には人ならざる存在が居るという事を知った。

それが引き起こす事件も知った。

けれど、どこかで他人事のように思っていた節があつたのかもしれない。

香奈は咲に手を握られたまま、そんな事を思っていた。

「あなたには過去を見る力があるの」

「……」

「でも、今の時点では、それをあなたが制御する事は出来ないでいるの。そうね、どんな力でも制御しなければ使えないし、使い方を誤れば他者を傷つける凶器になる。そうならない為には使い方をしっかりと学ぶこと」

「……使わなくても、ですか？」

「ええ、そうよ。たとえ使わないと決めても、暴走しないとは限らないし、誰かがあなたの力に気づいて利用しようとするかもしれない。その時に対抗する為にも、しっかりと知識と制御する術を身につけなければならぬの。その上で使わないという選択をするのならそれで構わないわ」

「……」

咲の優しい笑顔に、香奈は気づけばコクリと頷いていた。

「でも……」

「でも？」

「私に、本当にそんな力があるんですか？」

「確かに疑問に思うのも当然ね……でも、間違いないわ」

咲は断言に香奈は首をかしげた。

「どうしてそう言えるんですか？」

「そうね……似たような力を持っているからかしら……っていつても、私の『夢見』と香奈ちゃんの力の根本は違うのだけれど」

「私の根本は何なんですか？」

「……詳しい事は分からないわ。調べてみないと。でも、今はそれよりもその力の使い方を学ぶこと」

このとき、よくよく考えれば咲がおかしな事を言っているのだが、香奈はごまかされた事に気づかなかった。

力の使い方、知識、技術を学べと言いながら、力の根本を知らなくとも良いと促す咲。

力を知り、制御を学べと言いつつ、それに必要な本質を知ろうとする香奈を煙に巻く。

その本当の意味を香奈が知るのはもつと後のことだった。

その後、香奈は夢見の知識について簡単に説明を受け、その危険性についてもわかりやすく教えられた。

「本当はもつと時間があれば良かったんだけど」

それでもわかりやすい説明は、きつと能力者や能力など全く知らない相手でも理解する事が出来たに違いない。

とりあえず、『夢見』は数ある能力の一つという事から始まり――
|。

『夢見』は『夢』によつて過去、現在、未来を見る事が出来る。訓練すれば、自分の見たい対象の好きな時間を見る事が出来る。見るだけで実際に操作することが出来ない。

簡単に言えば、『夢見』は情報屋のようなもの。

力を使っている時は眠ってしまうが、普通の夢とは違うので起きた時にも覚えている。

ただし、力の制御が上手く出来ないと普通の夢のように忘れてしまう。

力の暴走や、夢に飲み込まれて眠ったまま見起きられなくなる可能性もある。

等々。

とくに最後は、見ている光景に同調しすぎたり、その映像の関係者の感情に飲み込まれてしまう事で発生する事があるという。

「つてところまでは理解出来ました？」

「うん、なんとなく」

凄く教え方は丁寧で、言われれば納得する。

しかし、もともと能力者や能力とは無縁に香奈は育ってきた事もあり、理解というよりはそのまま「そうなんだ」と受け入れるしかないというのが正しかった。

疑問？

質問？

するだけ詳しく能力者や能力について知っているわけもないので無理である。

むしろ、十二歳の少女の許容範囲を超えた知識にも関わらず、素

直に受け入れようとしているところに咲は微笑んだ。

自分の時は十六歳だったが、それでも非常にパニックに陥った。

流石は神有家の姫——清奈の娘である。

「で、知識についてはまた今後少しずつ補っていくとして、次は実践になるんだけど」

本来ならばここまで急ぐ事はないし、まずこんなにすぐに実践に入らない。

しかし、残り時間は限りなく少ない今、悠長にしている時間はなかった。

「実践つて……」

「ええ、『夢見』を行うの。ごめんね……本当なら時間をかけて行つていく筈なのにこんなに急がせてしまって」

咲の悲しげな様子に、香奈は口を閉じる。

咲が悪いわけでは無い。

時間がないのだ。

椿を助ける為にも、この力が必要だと言われた。

そう、椿は今回の件で狙われていて、時が来ればその命を刈り取りに犯人は現れるだろう。

それも人の手には負えない人智を超えた存在に。

悪霊——。

既に、『IPSM』の能力者も数人殺害した程の強い存在。章子や重樹が殺された能力者達の代わりとして来てはいる。しかし、章子達がどれだけ強いのかは分からないし、既に能力者

を数人倒した化け物を相手にすれば無事でいられるか分からない。

そう——椿だけでなく、章子達も殺されてしまいかもしれない。
そして、椿を助けようとする美鈴達も殺されてしまいかもしれない。
い。

椿の逃げ込み先としたい神有家の屋敷だって、どうなるか分からない。
ない。

ふと、考えすぎかもしれないと香奈は思った。
が、途端に頭の中の何かが激しく警鐘を鳴らす。

見くびるな、見誤るな！！

打てる全ての手を打たなければ負ける——。
香奈の中の何かが叫ぶ。

それは、魂の記憶。

「香奈ちゃん、大丈夫よ」

咲が香奈の手を握る。

「力の使用中は、私も側に居るから」

「咲……さん？ でも、咲さんは」

「ええ、私では無理だった。でも、香奈ちゃんと一緒になら大丈夫。
そう、こうやってしっかりと手を握ってね」

香奈の手を握る自分の手に力を入れて咲は笑った。

「ようはね、香奈ちゃんが『夢見』を行う時に私も一緒に『夢見』を行って香奈ちゃんにしがみつく。で、そのまま香奈ちゃんが見る夢にくっついて行こうと思うの」

「そ、そんな事出来るんですか？」

「本来はね。でも、今回みたいに覆い隠そうとする力が働いている時には難しいわ。下手したら私だけはじめに飛ばされるかもしれない」

香奈だけが見る事が出来た過去。

それを咲も見ようとするならば、今の時点では香奈に同行するしかない。

しかし咲は弾かれ、香奈だけが受け入れられてきたその過去はきつと同行する部外者を弾きだそうと暴れるだろう。

もちろん咲も徹底的にあらがうが、下手したら香奈だけが取り残されるかもしれない。

そう――夢の中に。

犯人の過去の中に。

自分が出来れば香奈を巻き込む事などしなかった。

しかし、香奈だけが受け入れられ、見る事が出来たならば咲がする事はただ一つ。

もしもの時の為に香奈自身が力を扱えるようにしておくこと。

たとえ自分だけがはじめに飛ばされても、香奈がきちんと過去を見て戻ってこれるように。

柚緋も今までのように香奈を助けられるわけではない。

今では、運が良かったのだ。

たまたま、柚緋が香奈の後を追えて、過去を見た香奈がそこからはじめに迷子になりかけたところを助けに行く事が出来た。

しかし、向こうは香奈に気づいて、しかも香奈にちょっかいをかけてきていると聞いた。

香奈に何がしたいのかは分からないが、場合によっては柚緋達でも助けられなくなってしまうかもしれない。

危険すぎる行為だった。

今まで力を使った事のない少女にさせるべきではない作業だった。しかし、他に方法はない。

今回の犯人は許されない事をした。

それは贖うべき罪なのは確かだ。

けれど、元は先の連続無差別事件の被害者で、本来ならせめて安らかに眠る為に冥府へと誘われている筈だった。

苦しかった筈だ。

辛かったはずだ。

怖くて、恐ろしくて、憎くて――。

恨みに思っても当然だった。

自分は死んでいるのになぜ相手は生きているのか。

それは果たして理不尽な怒りなのだろうか。

怒りだけなら誰しもが持つ。

誰だって、こんな事だという事で怒る事が全くないわけではないのだから。

それでも、実際に命にかけてしまう事は許されない。

それでは、自分達を殺した相手と同じになってしまうから。

相手と同じように地獄に落ちてしまう。

そんなのはあんまりではないか。

殺されて、恐ろしい目に遭わされて。

なのに、死んでまで地獄に落ちるなんて、あまりにも酷すぎる。

それをさせない為に、冥府の官吏——死神と呼ばれる者達が魂を迎えに行く。

どんなに苦しくても、辛くても、その怒りのままに生者を引き込んで地獄に落ちさせない為に、せめて来世だけでも幸せになれるように。

地獄になんて行かせたくない。

だから、死んでしまった者達をすぐに迎えに行く。

その恨みから暴拳に走ってしまふ前に。

散々苦しんだのだ。

これ以上苦しませたくない。

地獄に行かせたくない。

せめて冥府から、自分を殺した罪で死後に地獄に落ちていく存在を高みの見物をする。

それぐらいで収まる心でなくても、それ以上苦しむ道に進まないで。

それが、冥府の官吏達の願いであり、それ以上堕ちる前に救い出すのが彼らの誇りだった。

恐ろしい恐怖がそんなに簡単に薄れる筈が無い。

たった数年で、消えるはずが無い。

時が癒やしてくれるとしても、時が経つほどに苦しむ事だってある。

それでも、どうか。

そうやって願い、官吏達は仕事に励む。

なのに——その手からこぼれ落ちた魂が、殺していく。
沢山の命を。

冥府の官吏が叫んだ。

『誰が、あの魂を逃したっ』

『誰が、あの哀れな魂に更なる悲劇を与えたっ』
『誰が、地獄への道に誘った』

そう、もう地獄に堕ちるしか無い。
でも、それでもせめてその時間が少しでも短くなるように、願った。

咲は冥府とも親交がある。

『夢見』として発現してからの付き合いだが、仲の良い官吏も居る。

犯人が霊だと知り嘆いていた友人が言った。
せめて、これ以上その手を穢す前に——。

穢す前に——。

続く言葉の先を、咲は聞かなかった。
いや、聞く前に会話は終わったから。

だからその言葉の先は、咲自身の思いを紡ぐ。

助けたい——。

たとえ、どんなに甘いと言われても、被害にあった者達の事を考えろと言われても、思ってしまう。

馬鹿なのかもしれない。

でも、それでも、助けたい。

本来ならば、冥府の官吏達に優しく誘われ、次の転生まで眠りにつく筈だった未来を狂わせられた被害者。

そう――彼女もまた被害者。

利用された哀れな存在。

利用されたのだ、何者かに。

でなければ、ただの人間だった魂にあれだけの事は出来ない。

いや、そもそも、冥府の官吏にとつくの昔に保護されている筈。

『今回の件には色々疑問がある。いや、それ以前にその魂の持ち主が死んだ後に一つの事件が起きている』

親友は言った。

『魂回収の死神が一人、死体となって発見された』

死神が死ぬなど本来ならあり得ない。

いや、人間界で神が死ぬなどあり得ない。

そう、人間界で神を殺せるのは、神、それか神の力を授けられた相手だけ――。

「咲さん、あの」

香奈の声に咲は我に返った。

どうやら、少しばかり長く意識が彼方に飛んでいたらしい。

「ごめんなさい、こんな時に」

「あ、いえ……その」

香奈はしっかりと咲の手を握り返す。

「弾き飛ばされないように、しっかり掴みますから」

「香奈ちゃん？」

「こうやって手を、掴んでおいたら、大丈夫ですよ？」

「……ええ」

咲の笑顔に香奈も肩の力を抜いた。

けれど――。

香奈は心の中で思う。

もし、この優しい人に何か危険が迫った時には。

香奈は咲の手をしっかりと握る自分の手を見た。

その時には、躊躇無くこの手を離そう。

まだ出会って時間はそれほど経っていない。

しかし、それでも香奈にとって咲は信頼に値する人物であり、何よりも危険な目に遭わせたくない存在となっていた。

もちろん一人は怖い。

一人で、怖い場所に残されたくない。

けれど、今回は既に沢山人が死んでいて、色々と危険なことが沢山ある。

香奈も夢を見て怖い思いをした。
だから、もしも。
もしもの時は。

咲だけでも逃げて欲しいと思う。

そこまで考え、香奈はふつと笑う。

あまりにも色々な事が突然すぎて、沢山ありすぎて。
というか、なんでこんな事を思っているのだろう。

何もかもがいつぱいいつぱいな感じなのに、もしもの時を考えて、
その時には咲だけはなんとしても逃がそうと思っている。

子供の自分が大人を逃がす。

素人の自分が、玄人の相手を逃がす。

普通は逆なはずなのに……。

『あなただけでも逃げて』

「っ?!」

遠い記憶の彼方から聞こえてきた様な声音に香奈は息をのんだ。
何かが見えた気がする。

「香奈ちゃん?」

「あ、なんでもないです」

「……とにかく、始めましょう。少しでも時間が惜しいわ」

そう言うと、咲が部屋の隅に立つ柚緋に目で合図する。

「後のことは」

「分かっています。咲さんとこの馬鹿の体はこちらで見えています。空になると余計なものが入り込みかねませんからね。まあ——ここには余計なものはまず入れないですが」

「確かにここほどの聖域は人間界には中々ありませんね」

「そう言って頂けると心強いです。ああ、それともし何かあっても追いかけますので大丈夫ですよ」

ただし、追いかける範囲はあり、そこまで戻ってきてもらう必要があるが。

もし閉じた場所から出てきてくれなければ柚緋でも手の打ちようが無い。

先の香奈の場合は、香奈の方から勝手に柚緋が手を出せる範囲まで出てきてくれていた。

本人は無意識だっただろうが、たぶん危険を感じた魂がそうさせたのだろう。

「では、お願いします」

「ああ」

そう言つと、咲は香奈を誘い隣室の布団へと向かった。

「布団？」

「ええ、力を使うには眠らなければならないから」

確かに畳の上で寝っ転がってでは体が痛むだろう。

咲が布団の上に寝っ転がり、香奈に向かって手招きする。が、寝そべったところで香奈は気づいた。

「あの、力の使い方は」

「最初は私が誘うわ。といっても、少しでも、少しでも手助けする形だけだね」

誘う——と言われても香奈は不安だった。

「な、何かする事はないんですか？」

「強いていえば、見たいものを思い浮かべる事よ。そう、今回でいえば犯人の過去を見たいってね。出来れば、私と一緒に見たいって思っ
てほしいな」

そう思う事で、咲も香奈に同行しやすくなる。

「わ、わかりました。その、他には」

「他にはないわ」

「そうですか——で、玲珠さんも一緒に行くんですか？」

「え？　なんで——」

咲は香奈の言葉に首をかしげた瞬間——勢いよく後ろを振り返った。

「玲珠……何してるの」

「いや、心配だから俺も」

「玲珠は夢見が出来ないでしょっ」

「咲にひつついていけば出来る」

確かに、昔はそうやって強制的に連れて行く羽目になった事はある、が——！！

「それは私に余裕があったらよ！　今回は無理！」

どれだけ向こうの拒絶が強いと思っているのか。
しかし、この妻大好き男は聞こうとしなかった。

「大丈夫だ。俺が勝手にひつついていく」

「どこが大丈夫なの！　ってか、私の方が引きずられるわっ」
「その時は俺が受け止める」

そんな問題ではない。

が、玲珠は妻と行くとこねまくった。

「というか、そんなに危険な場所にお前だけを行かせたくはない！」
「それが私の役目なの！　玲珠はきちんとここで留守番していて
っ
っ
っ」

お留守番って子供か。

柚緋だけでなく、香奈も玲珠に冷ややかな視線を向けた。

「ならば妻を守るのが夫の役目だ！」

「自分の身ぐらい自分で守れるわ！」

「そう言って前回は別の男にちよっかいかけられていたくせに！」

「あ、あれはちよっかいとかじゃなくて攻撃」

「俺の中では攻撃もちよっかいも同じだ！」

考えようによっては同じだが、普通はたぶん違う。

「もう玲珠の過保護！　良いから大人しくしててっ」
「咲っ！」

そこで咲は最終手段をとった。
自分の後ろにぴったりとくっつく珍珠を引っぺがし、部屋の隅に
放り投げる。

「あの、珍珠さん」

「いつもの事だから」

いつもの事なんですか！

「さあ、行きましょう」

にこやかに微笑む咲の笑顔がなんだか怖い。

香奈は伸ばされた手に自分の手を重ね合わせようとした。

「香奈」

「え？」

今まで黙っていた柚緋に名を呼ばれ、顔をだけ向ければ何かがと
んでくる。

それを反射的に受け止めた瞬間、電撃が全身に走った。

戻ってきた。

失われていた物が。

帰ってきた。

ようやくこの手の中に。

欠けていたものが、ゆっくりと補われていく。
あるべき場所に、ある筈だった場所に。

心が震える。

それを触る指が震える。

それは――。

「これは」

驚くことに咲が目を見開いている。

香奈の手の中にあつたのは、銀の鎖が通されたペンダントだった。ただし、ペンダントヘッドは――。

大根。

「大根？」

それを認識した瞬間、香奈は首をかしげた。
しかし、いまだ欠けていた物が戻ってきたかのような衝撃は続いたままである。

が、それが美しい宝石とか可愛らしいネックレスとかではなく、大根のペンダント。

「手荒く扱って壊すなよ」

「壊さないよ」

「どうだか。言つとくが、それ翡翠で出来てるんだからな、葉っぱも白い部分も」

「翡翠？」

つてか、翡翠で大根なんて作れるのか。

いや、確かにこの光沢と輝き具合とか感触とか、どう見てもちやつちい安物ではない。

が、翡翠の大根って高いのだろうか。

「言つとくが、高いからな。翡翠も最高級品だが、まずその作品の出来自体が凄い」

「ふゝん」

「新車は軽く買える」

「へゝ……つて、なんでそんなものを私につ」

「お前のもんだから返した」

「は？」

香奈は首をかしげる。

お前のもんだと言われても、こんなものを持っていた記憶はない。

「それに、それならしつかりとしたお守りとなる」

お守りと言われ、余計に分からなくなる。

というか、翡翠の大根をお守りとして売る場所があるのか。そしてどうしてそんな高価な物を自分が持っていたのか。

いや、そもそもそんな高価な物を手に入れるなんて無理だ。

だが、自分には高価すぎると返そうとする香奈の意思に反し、勝手に手がそれをしつかりと握りしめる。勝

離したくない。

返したくない。

もう奪われたくない。

奪われたくない？

ようやくこの手に戻ってきたと歓喜する心。
香奈は混乱する。

喜ぶ心に問いかける。
どうして、なぜ、私は。

しかし思い出そうとすれば、ツキンと頭が痛む。

マダソノトキデハナイ。

頭の中で囁く声に、香奈の思考は霧散する。

そんな香奈を静かに見つめていた柚緋はそつと香奈に近づいた。

「もしもの時は、それを握りしめて俺の名前を呼べ」

駆けつける――。

その言葉に、香奈はコクコクと頷く。

駆けつける――その言葉に、心のどこかで嬉しさと安心感を感じた。

柚緋は香奈の手からペンダントを外させると、それを首にかける。その時に再度確かめる。

淡くだが、それでもこのペンダントに込められた思いはただ一つ。贈られた主を守る為に存在する。

だからこそ、香奈に戻す。

よろよろと近づいてきた玲珠がそのペンダントを目にした瞬間、咲と同じように息をのむ。

しかし、何かを口にする事はなかった。

いや、口にする前に、咲が香奈の手を握って囁く。

「では、行きましょう」

答える前に、香奈の意識は急激に沈んでいく。
だが、それはいつもの眠りに入る時とは違う。
どこまでも沈んでいくが、ある地点に到達した瞬間、不思議な浮遊感に包まれた。

ああ、これが『夢見』なのだ。

香奈はぼんやりとそんな事を思った。

第四十八話 忘れない、記憶

眠りにおちた香奈と咲。

布団に並んで向かい合うようにすやすやと眠る二人の前に柚緋は腰を下ろした。

その視線は最初は咲に向けられ、次は香奈に、そして香奈の首にかけられている大根のペンダントで止まった。

「柚緋」

背後に立つ珍珠の呼びかけに、柚緋はペンダントに視線を向けたまま口を開いた。

「何でしょうか？」

「それは……なんだ」

「大根のペンダントです」

「違う！」

珍珠の厳しい口調にも柚緋は笑みを崩さない。

「その作り手は誰だ」

「……」

珍珠もまた大根のペンダントへと目を向ける。

「それは、人間界の物ではない」

「……ええ、違いますよ」

人間界の物ではない物がこの世界にある。
それをあつさりと肯定する柚緋を玲珠は見つめた。

といつても、玲珠がこれほど反応しているのは何も「人間界の物ではない」という事だけではない。

そのペンダントに宿る力が問題なのだ。

「俺はこの少女と王妃様が知り合いだなんて聞いた事がない」

王妃様——それは、玲珠の敬愛する主君の一人。

玲珠の現在の祖国である風国の王妃。

しかし、その王妃の口からこの少女の名前が出たことは一度も無く、知り合いだという話を聞いた事もない。

「……」

「柚緋、答えろ。どうして、この少女は」

「確かに、今は知り合いではありませんよ」

「なんだと？」

柚緋の言葉に玲珠は訝しげな目つきとなる。

「どういう事だ」

「ですから、今は知り合いではありません。いえ、正確には今の王妃様から貰ったものでもない。そして、王妃様から直接貰ったものでもない」

「……それは、誰かが王妃様から渡されたものを譲り受けたという事か？」

「本当に玲珠様は聡いお方ですね」

「皮肉は言わなくていい。それに俺にも分からない事がある。今の王妃様から貰ったものではないとはどういう事だ」

もし最初に貰った相手から譲り受けたとしても、「今の王妃様から」とは言わない。

なぜなら、香奈が別の相手から貰う時には、当然「今の王妃様」ではなく「過去の王妃様」から最初の相手が貰っているからだ。

では、どういう事か。

一つの可能性が玲珠の脳裏に閃く。

「まさか——」

「それ以上は言わないように」

「柚緋っ」

「今はまだその時ではありませんし、既にそれは過ぎ去った過去ですから」

くすくすと笑う柚緋に玲珠は額に手を当てた。

「真実を知るのは、未来の俺か」

そう呟く玲珠に、先ほど妻に見せていた姿はない。

柚緋は香奈の首に掛かっている大根のペンダントに手を触れた。

「まあ……とにかく、だ。まだ不思議なことがある」

「なんででしょう？」

「それを貰ったのは、その少女——香奈という事でいいのか？」

「ええ。香奈が直接手渡しで貰いました」

あの、忌々しい一件の後、香奈はあの少女から手渡しで受け取った。

その少女が、姑となる存在から貰ったお守り。
そこらの下手なお守りよりもよほど強い力を持った護符。
大根のペンダントなんて言葉だけ聞けばギャグみたいなのに、翡翠で作られた本物を目にした途端その美しさに言葉を失う。

力を持つ人間が見れば即座にその価値を知り、また普通の人間であつてもその芸術的価値の高さを本能的に感じ取るだろう。

喉から手が出るほどの代物——それを、ポンつと香奈に渡したあの少女。

普通なら、違う時代の品物を過去の人間に渡すのは御法度だった。それを知っていてなお渡したのは、それだけの理由があつたから。

しかし結局、その後香奈に起きた事は……。

「柚緋」

玲珠が詰問するように口を開く。

「俺が見た限り、香奈はそれが自分のものだとは認識していなかった。それはどういう事だ。香奈は、それを自分で貰った筈だよな？」

「ええ」

「なのに、貰った事を覚えていないのは」

「玲珠様、人には覚えていない方が良い記憶もあるんですよ」

「柚緋……？」

「人間は忘れる生き物です」

「……」

「そうしなければ生きていけない事だつてある。でも、それは人間だけではない筈ですよ」

柚緋の言葉に玲珠は口を閉ざす。
まるで全てを見透かした様な口調。

そう——玲珠にも、思い出したくない過去があった。

風国に保護される前、玲珠はある国の田舎に住んでいた。

一介の農民として、愛する妻や気さくで優しい村人達と静かに暮らしていた。

なのに、ある日、突然村は王直属の軍に焼き払われ村人達は殺された。

残ったのは玲珠と妻だけで、二人揃って拉致されたが、たどり着いた王宮で玲珠は後宮に王の寵姫として納められ、妻は地下牢へと叩き込まれた。

王は、酷い加虐嗜好のある男色家だった。

美しい男達を好み、自国はおろか他国にまで自分の寵姫とする男狩りを行っていた。

その際、証拠となる物は全て消し、それが村の焼き討ちに繋がっていたのだ。

被害者となった寵姫達は、祖国が滅んだ時点で数百名に及び、玲珠はその一人だった。

美女と見紛う如き冷たく妖艶な美貌が徒となり、玲珠は当時の王のお気に入りとなった。

毎日の様に陵辱されたばかりか、お気に入りの寵姫を他人に陵辱させる事も好きだった王によってあらゆる責めを強いられた。

同じ趣向を持つ王の側近である大勢の男達に犯された事も、なぶり物、見世物にされた事も毎日だった。

けれど、それは他の寵姫達も皆同じだった。

そればかりか、妻——珍珠の妻は地下牢に入れられた。

しかし、それは珍珠の妻だけでなく、他の寵姫達の大切な者達も同様だった。

母、姉、妹、恋人、娘、許嫁、妻——。

中には、幼い息子もいれば、仲の良かった親友を人質ならぬ神質として地下牢に押し込められ、抵抗したり自害すれば彼女達を殺すと脅された。

彼女達を守る為に必死に耐えていた羞恥と屈辱。

神としての尊厳、男としての矜持、その他全てをめちゃくちゃにされて、それでも愛する者の為に耐えた。

それは、自分を虐げていた王や側近達が実の息子による血の粛清を受けた後も。

というのも、血の粛清後も何も変わらなかったから。

その王の息子もまた、鬼畜な男色家だったからだ。

それどころか余計に酷くなった。

飼い主が変わっても解放されない寵姫達。

それでも、愛する者達を守る為に必死に生き続けた。

なのに、その愛する者達は、男色家ではない下級兵士達に玩具にされていたという悪夢。

陵辱、暴行、強制墮胎——。

それは、虬国に、虬国の王妃様に助け出されてから知った鬼畜の所行。

穢されたのは自分達だけでないと知った時、愛する者達を守る為に立ち上がった。

その後も長きにわたって残った後遺症。

男達は数年間に及ぶ性的虐待によって女性として開発され、見た目は男なのに体は完全に『女』として華開き、強い男に抱かれる事を望む淫らな体となった。

女、いや、雌だった。

肉欲に支配され、男として女性を愛することも出来ず、ただ芽生えさせられた女の本能が男を求めてやまない。

そんな地獄のような日々。

愛する者が側に居ても、愛する者が出来ても体は男として機能しない。

見た目は男なのに、芽生えさせられた被虐待好と女の部分が元龍姫達を責め苛んだ。

と同時に、元龍姫達の誰もが抱いた思い。

女性として愛せない大切な者達。

果たして、その悲惨な事実をいつまで彼女達が受け入れてくれるのだろうか。

今は良くても、いつか自分よりもっと優れた者が彼女を奪っていつてしまつかもしれない。

それは、龍姫時代の悪夢から愛する者を傷つけられたり、失いかけたりする事を酷く恐れた者達には恐ろしい恐怖だった。

もしその時が来たら、彼女達を手放すのが元龍姫達が愛する者達に出来る唯一の事だ。

しかし、それが出来ないほど元龍姫達の依存は深かった――。

そう、悪夢でしかかった過去。

女として虐げられた記憶。

祖国での地獄。

あれから、どれだけ時が経っただろう。

もう、かなりの時が経つ筈だ。

そうして、元龍姫達の中には、子供が生まれた者達も現れていた。絶対に、一般的に夫婦の様な形では子供など持てないと諦めていたのに。

そう、愛する妻を女性として愛し、子供を持てるようになってきた元龍姫達。

結婚は出来ても、無理だと諦めていたそれが出来た時、ようやく初めて解放されたような気がした。

けれど、それでも完全に悪夢が無くなったわけではなく、今もそれに悩まされている者達は居る。

玲珠だって、今でも夢で過去の悪夢を見ては、悲鳴をあげて飛び起きていた。

忘れない。

忘れない。

忘れない。

辛い過去を乗り越えてこそ、新しい道に進める。
そう言った者達も居た。

けれど、それが出来ればとづくにやっている。
これほどの時間が経っても、できない事だつてある。

頑張れとある者は言った。

それぐらいの事、乗り越えろとある者は言った。

数百人も居るなら、みんなで力をあわせれば何とかならないの？と言った者も居た。

逃げれなかったんじゃないの？とあざ笑った者も居た――。

もっと激しく抵抗すれば逃げれたんじゃないの？と――。

『抵抗しないんですか？』

脳裏にフラッシュバックが起きる。

「あ――」

玲珠にとって敬愛する王妃が立っていて。

王妃の手には短刀が握られ、それが一人の夫人に向けられていた。

『ほら、抵抗してみせてください――出来ないんですか？ どうして？ あなたはさつき自分なら出来るって言ったじゃないですか。夫の為にがむしやりに暴れて逃げだせるって。なのに声すら出ないってどうなんです？ ほら、抵抗して叫んでみてください。ただし叫んだらグサリですけどね、だってあなたの代わりはいるんですし、夫にはあなたの死を知らせなければいいんです。ようは生きていると思わせるだけで良いんですから。生きていたら夫も報復する理由はないですよ？』

それは、あの時の光景。

『出来るんでしょう？ あなたなら、あなた達なら出来るんでしょう？ こうやって脅されても暴れられる。なのにどうして？ どうしてそんな風に怯えているの？ そうね、怖いでしょう？ 怖くて声が出ないでしょう？ それが当然なんですよ。恐ろしくて、声が出なくて、当然指一本動かせない、だって怖いから』

王妃様が、侮辱された元龍姫達とその家族達の為に。

『どうして言えないの？ 「助かって良かった」、「生きていくれただけで良かった」、「頑張って生きてくれたんだね」って。それともあなたは元龍姫だった人達がのうのと生きていたとでも思っていたの？ そんなわけないじゃない。彼らは生きていたの、必死に生きていたの、頑張って生きていたの！ 彼らも、彼らの愛した人達も！！』

涙が、溢れてくる。

元龍姫達を侮辱し続けた者達。

あざ笑い、逃げられなかったのではなく、わざと逃げなかったと言った彼女達。

そんなに大人数居れば逃げられたのと言って、本当は楽しんでいたのでないかとあざ笑っていた。

酷い目に遭わされたと言っているが、本当は王の寵姫として贅沢に暮らしていたのではないかと悪意を持って勘ぐってきた。

そんな女達に、王妃様は怒り狂った。

こんな、自分達の為に。

『男だろうが女だろうが関係ない！　どんなに強くても怖いものはあるの！　あなたに何が分かるの！　あなた達に玲珠達の受けた恐怖なんて分かるはずが無い！　本当に恐ろしい目にあって「なんで抵抗出来なかったの？」なんて聞くあんた達に！　ううん、たとえ最初はそう思っけていても、こうやって自分自身でも恐怖を感じて動けなくなつたにも関わらず、まだ馬鹿な事を口にするあなた達につ』

その後、王妃様は貴族夫人に刃をむけたとして、炎水家により千回の鞭打ちを受けた。

けれど今考えれば、それですんだ方が奇跡だつた。

あのまま王妃様に何の咎もなければ、きっとあの貴族夫人は更に大事を引き起こしていた。

その貴族夫人は、風国とは違う国の出身だつたが、彼女の夫はその国で強い力を持っていた。

そればかりか、他の貴族達の愛人として多くの男達を手玉にとつていた女だ。

もし炎水家が出て行かなければ、ただではすまさなかつただろう。

炎水家――。

神々の住まう十三の世界からなる天界十三世界を統治する天帝夫妻の直属の側近であり、天帝夫妻が直接統治する中央世界以外の残り十二の世界をそれぞれ任された十二王家の一つ。

十二王家は、それぞれの世界にとっての王であり神。

風国のある、天界十三世界の一つである炎水界において、十二王家の一つ――炎水家はまさしく神だつた。

もちろん最初は納得出来なかつた。

けれど、後々になって理解した。

女王様の様に振る舞い、自分が望んで叶わぬ事はないと勘違いしていたあの貴族夫人。

『風国王妃はその罪によって千回の鞭打ちを受け、そなたへの暴言と暴行の報いは受けた。よってこれ以上の追求は不問とする』

しかしその貴族夫人のプライドはそれで収まる筈もなく、その後その女は勝手に動いて自爆した。

馬鹿な女だった。

既に罪を受け、炎水家が不問としたにも関わらず、それでも動いた女。

女は世間から一斉非難を浴びて、この世から消された。

そう、女の事なんてどうでもいい。

問題は王妃様の事だ。

その時、玲珠だけでなく元寵姫達も我が身を呪った。

王妃様は自分達の為に反論してくれた。

自分達が居なければ、王妃様はそんな事はしなかったというのに。

いや、その過去の悪夢を克服さえしていれば――。

『忘れられればいいのにね』

王妃様の言葉が蘇る。

忘れられれば良かった。

『そうすれば、玲珠達はこんなに苦しまずにすんだのにね』

力でも何でも使って、記憶ごと消去すれば……。

しかし当時は神力は使用できず、ただ耐えるしかなかった。

神力の使用が出来ないほど、大規模な大戦によって滅びかけた世界は再生後も不安定だったから。

小さな術一つでも、空間は歪み下手すれば消滅する。

そうして、神でありながら神力の使用が封じられた日々。

それでも、玲珠達は何とか生きてこれた。

それは風国に居て、あの優しい人達に囲まれていたから。
愛する者が側に居たから。

でも――。

『忘れない』

何度、そう願った事か。

忘れた方が良い事もある。

全てが全て、全員が全員悪夢を乗り越えられる強さを持っているわけではない。

中には乗り越えなければならぬ事だってあるが、忘れた方が良
い事だってある。

柚緋の言葉が玲珠の脳裏に何度も木霊する。

生きていく為に乗り越える――それも必要なこと。

生きていく為に忘れる――それもまた必要なこと。

玲珠は柚緋の視線に気づき、ゆっくりと顔を上げた。

にこりと優婉な笑みが白皙の美貌を彩る。

「俺にもあります。そう、玲珠様のものとは比べものにならないかもしれません」

忘れたい過去。
逃げたい過去。

果たして、忘れる事は罪なのだろうか？

忘れるからこそ、生きていける事だってある。

「だから、香奈も忘れたのか？」

「……ええ。ただし、あのペンダントにまつわる記憶は巻き込まれただけにすぎませんが」

「……それは、一体」

「忘れたい記憶。けれど、あいつの場合はそれ以外にも及んでしまった」

取捨選択という言葉がある。

記憶喪失の中には特定の人間だけを忘れたり、特定の記憶だけを忘れたりする事がある。

けれど、香奈の場合は……。

あの時、誰も側に居ることが出来なかった。

一人で、耐えた日々。

覚えていたかった記憶も、あの悪夢と共に葬られた。

そうまでして、ようやく香奈は生き残ることが出来た。

「柚緋……」

玲珠が更に言葉を紡ごうとした時――。

「ああああああああっ！」

眠っていた咲の口から爆発するような絶叫が響いた。

第四十九話 秘密

咲は夫にも秘密な事がある。

それは、一本の電話から始まった。

その夜、夫はたまたま炎水界にある風国に戻っていて、親友の真穂と二人で居た。

真穂の夫も、玲珠と共に祖国に帰っていたからだ。

真穂とは前世からの付き合いであり、咲と同じように前世で夫だった玲珠の親友の妻となり穏やかな日々を過ごしていた。

普段はそれぞれ夫がべつたりしているが、その日は久しぶりに学生時代に戻ったように黒くつろいでいたところに、電話がなったのだ。

電話の相手は神有 柚緋。

風国上層部とは知らぬ仲でなくも、むしろ縁も深いかの神有家の次期当主の子息である彼は、咲達にとってもある意味特別な相手だった。

いわば、親友の甥っ子。

そう——旧姓神有 清奈、現在は神無 清奈となっている高校時代の同級生であり親友の少女を通して知り合っただけ以来、顔を合わせる機会は何度かあった。

「お久しぶりですね、柚緋さん」

ただ、こうして直接電話をかけて来るといふ事は珍しく、少し緊張しながら咲が電話口で話し出す。

柚緋は丁寧な挨拶の言葉を述べたが、その後は直球だった。

『咲さんに頼みがあります』

その頼みという言葉に、咲は『夢見』に関わることかと瞬時に察知した。

咲は『夢見』という力を持つ。

夢で、過去、現在、未来を知る事が出来るのだ。

それは咲の生まれた夢見家特有の能力であり、今では数名しか能力者が存在しない希少な力。

中でも、咲の力は格段に強く、それ故に『ISPM』にも協力を依頼される事が多い。

しかし、今回起きている一件では全く役に立たなかった。

そしてそれは、咲の力をねたんでいる者達にとって格好の材料となつて咲の攻撃は増した。

先日、少々体調不良も加わり体調を酷く崩してしまった際、原因となつた者達への夫の怒りを収めるのは大変だった。

全ては自分の力不足が招いた事。

しかし、咲を溺愛する夫——玲珠はそれを受け入れられなかった。側で、咲の努力を見続けてきたからこそ、玲珠は妻に向けられた不等なまでの罵詈雑言に腹を立てた。

それでも、どうにか説得して納得してもらい一段落した頃に再び『夢見』の件に関わる事があつたとなれば、夫はどうなるか。

けれど、柚緋の話は咲にとって予想外のものだった。

『現在起きている連続無差別殺人事件の犯人の過去を、香奈が見て

います』

それは、咲にとって驚きだった。
自分でさえ出来なかった事が出来た。

力のある能力者であればプライドすら揺るがされる事態だが、過去を見る事が出来たという事だけを言えば咲は慶事だと思った。
それは負け惜しみでなく、純粋に。

自分のプライドよりも、この悲しい事件が一刻も早く終わることを誰よりも祈っていた咲にとって、誰かが重要でなく、出来たかどうかが重要な事だった。

しかし、それを行ったのが香奈という事実言葉に言葉を失う。

神無　香奈は無能力者。

それが、世間一般――いや、能力者世界での一般常識だった。
香奈には何の力も無い。

それは、誰しもが知っていた。
冥界の神を夫にしながら、力なき子を産んだ女として清奈が徹底的に非難されたほどだ。

その香奈が、過去を見た。

つまり、『夢見』かそれに準ずる力を持っているという事。

「それは、『夢見』ですか？ それともサイコメトリー……いえ、私に電話をかけてくるという事は『夢見』ですね」

柚緋の肯定する答えが続くはずだった。

しかし、耳から聞こえる言葉はなかった。

「柚緋さん？」

『咲さんに頼みがある』

しばしの沈黙の後、柚緋はそう切り出した。

『これから話すことは、出来れば咲さん一人の胸にしまっておいて欲しい』

そして語られた真相。

香奈の、本当の能力。

自分の『夢見』と似て非なる力は、『死に関係した』からこそ相手の過去を見る事が出来た。

彼女は『死に関係する』事ならばどんな事だっ て見て、聞いて、理解出来る。

そして『死を与え』、『死を回避』する。

彼女の、能力は。

その日、咲は夫にも言えない秘密を持った。

まだ何も話さないまま他言無用と頼み込む柚緋の話を聞くと決めたのは咲自身で、話を受けると言ったのも咲自身だ。

その代償は黙秘。

柚緋から語られた香奈にまつわる事を心の中に黙秘する。

両親である清奈達ですら知らない真実を。

『香奈の両親に言わないのは、まだ時期ではないからです』

その時期がいつ来るかも分からない。

一生来ないかもしれないし、明日かもしれない。

しかし、香奈が愛する両親すら滅ばしかねない真実を軽々しく口にする事は出来ず、出来れば一生知らないままで居た方が良い。

咲だって本当は知りたくなかった。

知られれば、香奈が殺される可能性が出てくるなんて。

『死』を、忌避する者達に。

そして香奈を守ろうとする者達がそれに巻き込まれる。

柚緋は香奈の事を伝える前に言った。

『本当なら咲さんにも話す気はありませんでした。しかし、既に力が発現し、それが今回の事件で必要なものとなればその力の使い方を学ぶしかありません。ですが、全てを隠したまま咲さんに師事させても、その中できつと咲さんは気づいてしまう』

それが、『夢見』とは似て非なるものだと言うことを。

そして、その力の、真実を。

だからこそ、柚緋は最初に咲に教えたのだ。

ただし、咲には断わる権利を与えた上で、咲は自分の意思でそれを受け入れた。

しかし知ったからといって断わる事はしない。

柚緋から聞かされた真実。

と同時に、今回の事件を解決に導けるかもしれない唯一の存在。双方の被害を少なくしたまま、相手を消滅させずにすむかもしれない。

たとえ地獄に落とされるとしても、少しでもその期間を短くして……。

が、それ以上に咲は聞き捨てならない事を聞いた。
それは、今回の黒幕らしき相手に香奈がちょっかいをかけられた事だ。

力を満足に制御できない、いや、自分にそんな力がある事さえ知らない香奈を強引に引きずり込み、その恐ろしい夢を見させた。
そして取り込ませようとした。

それだけでなく、その地に潜む悪霊達を活性化させ、香奈の親友すらも巻き込もうとした——黒幕。

向こうは遊んでいるだけだと柚緋はその時に感じた事を告げた。
それが、咲にとっては許しがたかった。

相手は成仏出来ず苦しむ悪霊達すらも玩具にしたのだ。

咲は万能者ではない。

出来ることには限りがある。

しかし、その出来る事でならば咲は全力を尽くす。

香奈を守りたい。

咲の子でなくても親友の子。

大切な、友人の子供。

そして、力の根本は違っても、その力を制御する事で香奈が少しでも未来を切り開いていけるならば。

咲は自分の昔を思い出す。

初めて自分の力を知った時、咲も不安にかられたものだ。
ただ自分の時は珍珠が側に居たし——。

その時、咲はふつと後ろに新たな気配を感じた。

——ああ、取り込み中だった？

笑いを含んだ声。

にこにことした笑顔が浮かぶようだった。

とつくの昔に死んでいる筈なのに、今もこうして浮遊霊のように現世を漂っている。

過去に咲の指導霊だった――

『誰か来たみたいですが』

「ええ、ちよつと伯父様が来てまして」

『夜見病院』。

咲が初めて心霊怪奇現象を経験し、また真穂が行方不明となったかの地。

咲が初めて力を発源させて解決し、また清奈達と関わる原因となった場所。

そこに過去に入院していた咲の叔父――夢見 司。

生来の強すぎる力のせいで、中学生ほどで人生が強制終了してしまったお人。

そして、『夜見病院』で過去に起きた事件に纏わる心霊現象で咲を手助けしてくれた。

しかも出会いはなんとその病院。

とつくの昔に廃病院になっていたのに、そこでふらふらと漂っていた叔父がなぜ冥府の官吏に強制的に連行されなかったのかとさえ、それはそれで色々あったらしい。

その後、咲の指導霊をやめてもまだふらふらとしている叔父は、もはや神にも似た存在になってしまっていると本物の神である夫に告げられた。

『もうあそこまdeになつたら、むしろそのまま神になつた方が良いと思う』

そして、今では幾つかの土地神とも親交を深めているという始末だった。

そんな色々とふざけた叔父。

しかし、それは数年前に更にふざけたものになったのは記憶に新しい。

——あ、真穂、あのね、今日もあの子、とっても可愛かったんだ

「あゝ、はいはい。見るだけにしておいてくださいね、犯罪で捕まりますから」

——僕は真剣な恋だよ

「真剣を冗談に変えて頂くと嬉しいです。っていつか、親友の身内がロリコンって指さされるのは嫌です」

呆れる真穂の声に、咲は持っていた受話器に込める力が強まった。

そう——叔父は恋をしている。

三歳児に。

出会った当初は一歳児。

歴史に出てくる某なんとかの宮宜しくせつせと自分好みに仕立て上げるべく、その家に通っている。

またその家が最悪なことに、神社の家で三歳児は強い霊力を持った将来の巫女。

絶対に食われること確定ではないか。

『香奈の事、受け入れてくれて感謝します。何かお礼を』

この万年ふらつき叔父を除霊してくれ、いや、冥府に叩き込んでくれ。

そう言おうかとも思ったが、聞こえてきた声に咲は口を閉じた。

——冥府に行くなら、この前あった冥府のハローワークでの官吏募集に応募しようかな

「柚緋さん、お礼はいらないわ」

咲は涙をのみながら、その後幾つかのやりとりをした後、泣く泣く電話を切った。

そして叔父を怒鳴りつけたのだった。

その後、戻ってきた玲珠は咲の叔父の来訪に苦笑した。

玲珠には香奈が『夢見』の力を持っていて、それが今回の事件解決の鍵となるものの、力の使い方が分からないから先生として教えに行くだけ伝えた。

また、香奈が黒幕からちょっかいをかけられた事があるので、もしもの時には玲珠にも側に居て手助けして欲しいと。

香奈の本当の力の事は伏せたまま、話せる事だけを話시켰た。それを静かに聞き、受け入れた玲珠。

もしかしたら玲珠も何かに気づいていたのかもしれない。しかしそんなそぶりを見せず、ただ笑顔で頷いてくれた。

『安心しろ、咲。俺はお前の味方だ。お前の思うとおりになてくれれば良いし、俺はそれを受け入れる』

誰にも伝えていない。

一番の親友である真穂にも。

ふと、王妃様の顔が浮かんだ。

風国の王妃様――。

けれど、既に風国に行く暇もなく、咲達はすぐさま用意をして神有家へと向かったのだった。

そしてそこで出会った清奈の娘。

大きくなった香奈の姿に感動し、思わず涙ぐんだ。

と同時に、とても優しい娘に育ったこの少女を守りたいと思った。自分の持つ知識の全てを教え、少しでもその力に振り回されないように生きる為の糧となってくれればいい。

しかし同時に、咲の心は暗雲に覆われていた。

『夢見』という力はいろいろな物を見る事が出来るが、感受性や精神感応力が強ければ相手の感情に飲み込まれてしまう危険も孕んでいる。

眠ったまま、夢に囚われて起きなくなってしまう恐れもある。

最悪な場合は、夢からはじき出されて次元の狭間を彷徨う羽目になった者も過去にいたと聞く。

今回の事件を解決するには是非とも『夢見』が必要だ。

しかし、まだ自分の力に気づいたばかりの香奈にそれを行わせる
とすれば、『夢見』の力が同時に併せ持つリスクの可能性がより高
くなると言うこと。

しかも、黒幕にちょっかいをかけられているというのも問題だっ
た。

もちろん香奈の『夢見』の際には咲も同行するつもりではあった。
即座に実践という、修行も何もかもない状態のままの幼い少女を
一人で放り出すほど咲は鬼畜ではない。

だが、今回の件では咲を始めとして犯人の過去を見る事が出来た
物は居なかった。

まるで分厚い緞帳で覆われているように何も見えず、阻まれる。

それは明らかにこちらに過去を見せたくないと思う者の仕業だと思
われた。

それが黒幕に寄るものだと考えるのはわけではない。

だからこそ、咲は不安を感じていた。

香奈が過去を見れたと言うのは、何かが波長にあい、その拒絶の
隙間をふつてぐり抜ける事が出来たという事。

しかし、黒幕がちよっかいを出しているという時点で、それは黒
幕の意思に反した事態だ。

黒幕は拒絶し、でも香奈は入り込んでいる。

だから香奈であればまた入り込める可能性がある。

けれど咲はどうなるか分からない。

香奈にぴったりと寄り添えばそのまま入り込める可能性はある。

『夢見』の力を持つ者同士が共に同じ夢を見る事だつてあるのだ
から。

ただ、こうして拒絶の力が強い場合、いくら咲が香奈の側に寄り
添っても一人引きはがされるかもしれない。

そうなれば、香奈だけがその場に取り残される。
その時、黒幕がどう出るか……。

咲は香奈の手を強く握りしめた。

絶対に手放せない。

もし一人引きはがされそうになった場合は、最悪でも『夢見』を中止してでも香奈を連れて帰る。

プロとしては『夢見』の続行を選択しなければならないが、未熟な香奈一人を残したところできちんと戻ってこれるか分からない。
真実を見ても、伝えられなければどうしようも無い。

時間がない。

けれど、強行して香奈の命が失われれば次はない。

だから咲は、香奈と共に『夢見』を行った時、慎重に事を進めた。
来るだろう拒絶を覚悟し、それでも一縷の望みをかけて共に同じ夢に飛べるように願った。

しかし――。

あれだけ失敗し続けた『夢見』は滞りなく進み、咲は香奈と引離される事もなくその場所に立っていた。

咲の目の前に、見たかったその光景が流れていく。

「……ようやく、来れたのね」

壁に掛かっている時計の秒針が時を刻む。
ポンッと音を立ててトースターからパンが飛び出す。

居間のテレビに映り込むアナウンサーの軽やかな声が響いた。

『おはようございます。7月×日の火曜日のニュースをお知らせします』

香奈が、壁にかかっている日めくりカレンダーを見る。

19××年の7月×日の火曜日——今から三十年前、最後となる
第五の事件当日。

部屋に流れる穏やかな空気は、何処にでもある日常的な朝の光景。
居間で新聞を広げる父親と料理を運んでくる母親の姿は、香奈の家でもよく見られる光景だった。

あまりにありふれすぎていて、あまりに普通過ぎて、
自分の家と同じ。

そんな印象さえ抱くほどに、普通の朝。

そして——。

「おはよう！ お父さん、お母さん！」

中学の制服を着た秋月 響子が、慌ただしく居間へと駆け込んできた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5459t/>

冥姫

2011年10月4日03時17分発行